

東大阪市所在

新上小阪遺跡

—大阪府営東大阪上小阪(第1期)住宅(建て替え)
建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査—

序 文

生駒山地の西に広がる河内平野は、北を流れる淀川と南を流れる大和川がもたらした土砂の堆積によってなりたっています。この地は、大阪湾の奥に位置し、河川の発達などにもなう地の利から古くより開発が行われ、そのために数多くの遺跡が存在しています。

近畿自動車道天理吹田線の建設に伴い、1976年から十年余りにわたって当センターが実施した発掘調査は、河内平野中心部の低湿地帯を南北に貫く一大トレンチとなり、それらの調査によって山賀遺跡、久宝寺遺跡、亀井遺跡など数多くの遺跡の内容が明らかとなりました。これらの遺跡では、地下数メートルという深い所からも弥生時代以降の遺構や遺物が発見されており、河内平野中央部での遺跡の広がりを示唆するものでした。その後、この調査を契機として、天理吹田線周辺地域や池島・福万寺遺跡など、周辺の沖積地でも発掘調査が大規模に実施されるようになりました。

今回報告する新上小阪遺跡は、山賀遺跡の西方約600mに位置しており、西には古墳時代前期の小若江式土器の標識遺跡である小若江遺跡が存在しています。また周辺には上小阪遺跡をはじめとして数多くの遺跡が存在しています。

新上小阪遺跡は、大阪府営新上小阪住宅の建替え事業に伴う大阪府教育委員会の試掘調査によって発見された遺跡で、今回は第一期の高層住宅建設予定地での発掘調査となりました。調査結果は、本文中に詳しく述べられていますが、主として弥生時代中期前半、古墳時代前期、古代の三時期の遺構・遺物が検出されており、予想を上回る成果をあげることができました。また報告書には、事実報告に加え、多くの分析成果も盛り込むことができ、河内平野における考古学情報の一部を提供できたものと思います。

最後になりましたが、調査の過程でお世話になった大阪府建築都市部住宅整備課、大阪府教育委員会文化財保護課をはじめとする関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成15年3月31日

財団法人 大阪府文化財センター
理事長 水野正好

例 言

1. 本書は、大阪府管東大阪上小阪（第1期）住宅（建て替え）建設工事に伴う新上小阪遺跡の埋蔵文化発掘調査報告書である。なお、新上小阪遺跡は大阪府東大阪市新上小阪に所在する。
2. 発掘調査およびそれに伴う整理作業は、財団法人大阪府文化財センター（調査時は財団法人大阪府文化財調査研究センター）が、大阪府建築都市部住宅整備課の委託を受けて実施した。
3. 発掘調査は、財団法人大阪府文化財調査研究センター調査部長井藤 徹、調整課長赤木克視、中部調査事務所長藤田憲司、調査第2係長國乗和雄の指示の下、技師廣瀬時習・市村慎太郎、専門調査員野口 舞が、2001年6月1日から2002年3月29日にわたって実施し、専門調査員鹿野 墨の参加協力を得た。
4. 整理作業および本書作成は、財団法人大阪府文化財センター調査部長玉井 功、調整課長赤木克視、中部調査事務所長藤田憲司、調査第4係長國乗和雄の指示の下、技師市村慎太郎、専門調査員野口舞が、2002年5月31日から2003年3月31日まで中部調査事務所池島分室において実施し、専門調査員鹿野 墨、島内洋二の参加協力を得、2003年3月31日をもって本報告書を刊行した。
5. 木器の保存処理および、樹種鑑定については、中部調査事務所主査山口誠治、同専門調査員仁田恵子が行った。
6. 現地撮影以外の写真関係業務は、中部調査事務所主査片山彰一が担当し、調査補助員米子千智、水取康人の協力を得た。
7. 調査に際しては、珪藻分析、花粉分析、放射性炭素同位体分析等の自然科学分析を株式会社パレオ・ラボに委託した。その成果については、第6章に記してある。
8. 出土した動物遺体については大阪市立大学の安部みき子氏に、貝類については財団法人大阪市文化財協会の池田 研氏に、岩石および赤色顔料については近畿大学の富田克敏氏に、それぞれ鑑定および分析をお願いした。記して感謝の意を表するものである。
9. 発掘調査および遺物整理作業の過程で、次の方々をはじめとする多くの諸氏、諸機関に御指導、御教示を賜った。記して感謝の意を表するものである。（敬称略、団体50音順・団体内50音順）
林 大智（財団法人石川県埋蔵文化財センター）、池田 研・田中清美・趙 哲濟（財団法人大阪市文化財協会）、藤岡 穰（大阪大学）、堀江門也・松岡良憲（大阪府教育委員会）、森村健一（堺市立埋蔵文化財センター）、大脇 潔・高宮いづみ・富田克敏（近畿大学）、金 武重（京畿文化財団附設畿甸文化財研究院）、吉川真司・小原嘉記（京都大学）、辻川哲朗（財団法人滋賀県文化財保護協会）、鋤柄俊夫・松本裕世（同志社大学歴史資料館）、金村浩一・別所秀高・松田順一郎（財団法人東大阪市文化財協会）、太田 理（東大阪市立上小阪中学校）、野口 淳
10. 発掘調査および遺物整理作業の過程では以下の方々の参加協力、教示を得た。（敬称略、50音順）
（発掘調査）黒崎善雄、谷川妙子、福島 緑、山本由紀子、山崎靖恵
（整理作業）植村弘子、奥村宏美、尾越操子、角田亜希乃、黒崎善雄、楠本恭子、田中エミ子、谷川妙子、辻田多江、三阪一徳、山崎靖恵、山本由紀子、山本麻理
秋山浩三・井上智博・江浦 洋・奥村茂輝・駒井正明・島崎久恵・三好孝一・若林邦彦
11. 本調査に関わる遺物・写真・カラスライド・実測図等は、財団法人大阪府文化財センターで保管している。広く利用されることを希望する。

凡 例

1. 平面図は縮尺1/400を原則とし、東半もしくは西半のみの場合1/250としている。なお、遺構密集部分の平面拡大図は、1/150としている。
2. 遺構および断面図の標高は、東京湾平均海面（T.P.± m）を基準とし、小数点第二位のcmの位まで表記している。なお、基本的に+値の場合は省略し、-値の場合のみ記してある。
3. 遺跡発掘調査に伴う地区割りは、調査時点では国土座標の第Ⅵ座標系に基づく表記方法をとっている。なお、本書で用いた北は座標北を基準としている。調査時点で、磁北はそれより西へ6° 26′、真北は東へ0° 14′振っていた。また、2002年に国土座標の改定が行われているが、本文中で使用する座標値は、全て改定前の数値であるので注意されたい。
4. 個別の遺構図は1/40を、遺物出土状況図は1/20をそれぞれ基本としているが、一部必要に応じて変更している。各々のスケールは各図版に示しているので参照されたい。諸遺構のトーンによる表現がある場合については、各図に凡例を設けてあるので参照されたい。また、図中の各遺構は遺構の種類+遺構番号（例：土坑65）での表記を基本とするが、遺構が密集する部分のピットについては一部遺構番号のみで記載している。
5. 本書の遺物実測図の縮尺は、土器・木製品が1/4、石器が2/3、を原則とするが、一部必要に応じて縮尺を変更している。各々のスケールは各図版に図示しているので参照されたい。各法量はcm単位で、石器に関しては小数点第一位まで表記している。なお実測図の断面は、瓦器はトーン、須恵器は黒塗りで表現し、それ以外は白抜きで表現している。また、黒色土器については、黒色部分にトーンを貼付してある。図中で朱色に表現されている部分は、赤色顔料が観察された部分を示す。各遺物は種類に関わらず1からの通し番号とし、写真図版も同一番号で対応する。
6. 本書中の土色・土器の色調表示は農林水産省水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』1996年度版を用いて行った。
7. 第4章第1節に記すように本書ではa層、b層の呼称を使用するが、基本的にaは省略し、例えば4 a層（面）の場合、4層（面）と記す。
8. 遺構以外で掘削した排水用、土層断面観察用の溝のうち、調査区の四周をめぐる主に排水用の溝は側溝と、座標に沿って掘削した主に土層観察用の溝は筋堀と呼称している。
9. 引用文献および参考文献がある場合、第6章を除き、文中に〔 〕表記で執筆者等と発行年、一部は引用ページのみを記し、各章の末尾に詳細を記している。なお、主要遺物の編年観は第3章第2節に記してある文献に従った。
10. 本書の執筆は第6章の第1節から第6節を除き、廣瀬・市村・野口が分担し、執筆分担は目次に示した。なお、本書の編集は野口の補助を得て、市村が行った。

目次

序文
例言
凡例
目次

第1章 調査に至る経緯と調査の経過	・ ・ ・ ・ ・	(市村慎太郎)	1			
第2章 位置と環境	・ ・ ・ ・ ・	(野口 舞・廣瀬時習)	5			
第3章 調査の方法						
第1節 発掘調査の方法	・ ・ ・ ・ ・	(市村)	11			
第2節 整理作業の方法	・ ・ ・ ・ ・	(市村)	12			
第4章 基本層序						
第1節 層と遺構面の基本的認識	・ ・ ・ ・ ・	(廣瀬・市村)	15			
第2節 基本層序と地形変化の概要	・ ・ ・ ・ ・	(廣瀬・市村)	16			
第5章 調査成果						
第1節 近世～中世	・ ・ ・ ・ ・	(市村)	33			
第1面	・ ・ ・ ・ ・	33	第2面	・ ・ ・ ・ ・	37	
第3-1面	・ ・ ・ ・ ・	41	第3-2面	・ ・ ・ ・ ・	47	
第3-3面	・ ・ ・ ・ ・	51	第3-3(-2)面	・ ・ ・ ・ ・	52	
第3-4面	・ ・ ・ ・ ・	54				
第2節 古代～中世前半	・ ・ ・ ・ ・	(市村・廣瀬)	60			
第4面	・ ・ ・ ・ ・	(市村)	60	第4b面	・ ・ ・ ・ ・	78
第3節 古墳時代	・ ・ ・ ・ ・	(市村)	104			
第5-0面	・ ・ ・ ・ ・	104	第5-0b面	・ ・ ・ ・ ・	105	
第5面	・ ・ ・ ・ ・	107	第5b面	・ ・ ・ ・ ・	113	
第4節 弥生時代	・ ・ ・ ・ ・	(野口・廣瀬・市村)	141			
第6面	・ ・ ・ ・ ・	141	第6b面	・ ・ ・ ・ ・	153	
第7面	・ ・ ・ ・ ・	161	第7b面	・ (廣瀬・野口)	178	
第8面	・ (廣瀬・野口)	208	第8b面	・ ・ ・ (野口)	212	
第9面	・ ・ ・ (廣瀬)	217	第9b面	・ ・ ・ (廣瀬)	219	
第10面	・ ・ ・ (廣瀬)	219	第10b面	・ ・ ・ (廣瀬)	219	
第6章 自然科学分析	・ ・ ・ ・ ・		223			
第1節 新上小阪遺跡出土植物遺体について	・ ・ ・ ・ ・	(山口誠治)	224			
第2節 新上小阪遺跡出土の貝類	・ ・ ・ ・ ・	(池田 研 (財)大阪市文化財協会)	228			
第3節 新上小阪遺跡から出土した人骨と動物遺体	・ ・ ・ (安部みき子 大阪市立大学)	230				
第4節 新上小阪遺跡の花粉化石群集	・ ・ ・ ・ ・	(新山雅広 (株)パレオ・ラボ)	233			
第5節 新上小阪遺跡の珪藻化石群集	・ ・ ・ ・ ・	(黒澤一男 (株)パレオ・ラボ)	241			
第6節 放射性炭素年代測定	・ ・ ・ ・ ・	(山形秀樹 (株)パレオ・ラボ)	249			
第7章 まとめ	・ ・ ・ ・ ・	(市村・野口)	251			
付編 基礎データ	・ ・ ・ ・ ・		261			

挿図目次

図1 新上小阪遺跡の範囲と今回の調査地……………3	図37 土坑284・285・286・287・288・289・290・291・292・293・294・ 296・299・301・303・308、ピット302 断面図……………91
図2 新上小阪遺跡周辺の遺跡……………7	図38 土坑298・307・305 断面図……………92
図3 国土座標系とそれに伴う地区……………13	図39 第4b面 出土遺物(1)……………95
図4 調査区割り図……………14	図40 第4b面 出土遺物(2)……………96
図5 X=-150,050ライン断面模式図……………20・21	図41 第4b層 出土遺物(1)……………99
図6 Y=-37,320ライン断面模式図……………22・23	図42 第4b層 出土遺物(2)……………100
図7 X=-150,035ライン断面模式図(1)……………24・25	図43 第5-0面・第5-0b面 平面図……………104
図8 X=-150,035ライン断面模式図(2)……………26・27	図44 第5-0層・第5-0b層 出土遺物……………105
図9 X=-150,035ライン断面模式図(3)……………28・29	図45 第5面 平面図……………106
図10 第1面 平面図……………34	図46 土坑354 平・断面図……………108
図11 井戸11 平・断面図……………35	図47 第5層 出土遺物……………111
図12 第1面・第1層 出土遺物……………36	図48 第5b面 平面図……………112
図13 第2面 平面図……………38	図49 溝382 出土遺物……………113
図14 第2層 出土遺物……………39	図50 溝380・382 断面図……………113
図15 第3-1面 平面図……………40	図51 第5b面 東端遺構集中部分 平面拡大図……………115
図16 土坑32・33・34 平・断面図……………44	図52 溝366・367・368・369・370・371・372・373、落ち 込み410、ピット403 断面図……………116
図17 土坑34 出土木製品……………45	図53 溝368付近上層遺物出土状況図……………118
図18 第3-1層 出土遺物……………45	図54 溝367・368、落ち込み409 出土遺物……………119
図19 第3-2面 平面図……………46	図55 溝376 平・断面図……………123
図20 第3-2層 出土遺物(1)……………49	図56 溝376 出土遺物……………123
図21 第3-2層 出土遺物(2)……………50	図57 溝373、土坑396・437・456・513 出土遺物……………123
図22 第3-3面・第3-3(-2)面 平面図……………52	図58 ピット400、土坑406・412 出土遺物……………124
図23 第3-3層 出土遺物……………53	図59 ピット400 平・断面図……………124
図24 第3-4面 平面図……………54	図60 土坑406 平・断面図……………124
図25 土坑61・62・63・64 平・断面図……………55	図61 土坑412 平面・見通し断面図……………125
図26 第3-4面 土坑64断面図、土坑65平・断面図……………56	図62 土坑437 平・断面図……………126
図27 第3-4層 出土遺物……………58	図63 土坑497 平・断面図……………127
図28 第4面東半 平面図……………60	図64 土坑497 出土遺物……………127
図29 Y=-37,280ライン(一部)断面図……………62	図65 ピット399・421・431・452・457・462・473 平・断面図……………128
図30 土坑127・128 平・断面図……………68	図66 ピット457 出土木製品……………128
図31 第4面 遺構出土遺物……………70	図67 土坑415・419・423・478・493・502・509、 ピット394・408・433・460・461・463・464・465・ 467・480・481・501・504・505 断面図……………130
図32 第4層 出土遺物(1)……………76	
図33 第4層 出土遺物(2)……………77	
図34 第4b面東半 平面図……………80	
図35 土坑252 平・断面図、土坑254 断面図……………86	
図36 第4b面 掘立柱建物 平面図……………90	

図68 土坑415、ピット433 出土遺物	130	図105 溝629 出土遺物	183
図69 土坑466 出土遺物	132	図106 西端遺構集中部分 平面拡大図	186
図70 土坑466 平・断面図	132	図107 土坑633 平・断面図	187
図71 第5b層 出土遺物(1)	137	図108 土坑633 出土遺物(1)	189
図72 第5b層 出土遺物(2)	138	図109 土坑633 出土遺物(2)	190
図73 第6面 平面図	140	図110 土坑633 出土遺物(3)	191
図74 溝535付近土器出土状況	143	図111 ピット640・642・720、土坑657・697・708・719・ 747 平・断面図	192
図75 溝537 出土遺物	145	図112 土坑657・697 出土遺物	192
図76 溝536・539・540 出土遺物	146	図113 土坑658・758、溝617・619 出土遺物	194
図77 溝540 断面図	146	図114 ピット757・796 平・断面図	194
図78 溝540内土器出土状況	147	図115 第7b面 掘立柱建物 平面図	196
図79 高まり522 断面図(Y=-37,280ライン)	148	図116 第7b面 掘立柱建物周辺ピット 全体平面図	197
図80 高まり523 出土遺物	150	図117 第7b面 掘立柱建物周辺ピット 平・断面図	197
図81 第6層 出土遺物	151	図118 第7b面遺構 出土遺物(1)	201
図82 第6b面 平面図	152	図119 第7b面遺構 出土遺物(2)	202
図83 高まり546 出土遺物	153	図120 第7b層 出土遺物(1)	205
図84 高まり547 出土遺物	154	図121 第7b層 出土遺物(2)	206
図85 第6b層 出土遺物(1)	156	図122 第8面西半 平面図	208
図86 第6b層 出土遺物(2)	159	図123 溝837 断面図	209
図87 第6b層 出土遺物(3)	160	図124 土坑842 平・断面図	209
図88 第7面 平面図	162	図125 溝836 出土遺物	210
図89 溝563 出土遺物(1)	163	図126 土坑834 平・断面図	210
図90 溝563 出土遺物(2)	164	図127 第8層 出土遺物	211
図91 溝559、落ち込み561 出土遺物	167	図128 第8b面西半 平面図	212
図92 第7層 遺物集中部 出土遺物(1)	169	図129 土坑867 出土遺物	213
図93 第7層 遺物集中部 出土遺物(2)	170	図130 土坑867 平・立面図	213
図94 高まり553 断面図	170	図131 第8b層 出土遺物	215
図95 高まり553 出土遺物(1)	171	図132 第9面 平面図	216
図96 高まり553 出土遺物(2)	172	図133 第9面 出土遺物	217
図97 第7層 出土遺物(1)	173	図134 土坑881 平・断面図	218
図98 第7層 出土遺物(2)	174	図135 第9層他 出土遺物	218
図99 第7層 出土遺物(3)	175	図136 第9b面・第10面・第10b面 平面図	220
図100 第7層 出土遺物(4)	176	図137 花粉化石分布図	236
図101 第7層 出土遺物(5)	177	図138 珪藻分析試料採取地点	242
図102 第7b面 平面図	180	図139 珪藻化石分布図	244
図103 土坑630遺物出土状況・断面図(断面図中の遺物は 南からの見通し)	181		
図104 土坑630 出土遺物	182		

挿入写真目次

写真1	調査地周辺航空写真(昭和17年)……………8	写真37	土坑35(南から)……………42
写真2	X=-150.050ライン①部分……………20	写真38	土坑32遺物出土状況(南から)……………44
写真3	同②部分……………20	写真39	土坑32・33・34断面(北西から)……………44
写真4	同③部分……………20	写真40	第3-4面溝、土坑65検出状況(東から)……………57
写真5	同④部分……………20	写真41	第3-4面溝群検出状況(東から)……………57
写真6	同⑤部分……………21	写真42	溝59底部耕具痕(東から)……………57
写真7	同⑥部分……………21	写真43	土坑65(南から)……………57
写真8	同⑦部分……………21	写真44	土坑61・62・63・64(北から)……………57
写真9	同⑧部分……………21	写真45	土坑61・63の切りあい(東から)……………57
写真10	Y=-37.320ライン⑨部分……………22	写真46	Y=-37.280ライン断面(西から)……………62
写真11	同⑩部分……………22	写真47	土坑127・128(西から)……………69
写真12	同⑪部分……………22	写真48	第4面遺構検出状況(南から)……………69
写真13	同⑫部分……………22	写真49	溝100断面(東から)……………69
写真14	同⑬部分……………23	写真50	溝97底部耕具痕(南から)……………69
写真15	同⑭部分……………23	写真51	東半東側遺構検出状況(北西から)……………81
写真16	X=-150.035ライン⑮部分……………24	写真52	東半西側遺構検出状況(北西から)……………81
写真17	同⑯部分……………24	写真53	溝207律令土師器出土状況(南から)……………81
写真18	同⑰部分……………24	写真54	溝200土器出土状況(南から)……………81
写真19	同⑱部分……………24	写真55	第4b層中検出耕作痕跡(南から)……………84
写真20	同⑲部分……………25	写真56	第4b面動物歯出土状況(東から)……………84
写真21	同⑳部分……………25	写真57	第4b層中土師器出土状況(南から)……………84
写真22	同㉑部分……………25	写真58	第4b層中須恵器出土状況(南から)……………84
写真23	X=-150.035ライン㉒部分……………26	写真59	第5面直上須恵器出土状況(南から)……………84
写真24	同㉓部分……………26	写真60	第4b層中木製品出土状況(南東から)……………84
写真25	同㉔部分……………26	写真61	土坑252断面(西から)……………87
写真26	同㉕部分……………26	写真62	土坑252(西から)……………87
写真27	同㉖部分……………27	写真63	第5-0面(北西から)……………104
写真28	同㉗部分……………27	写真64	第5-0b面(南東から)……………104
写真29	X=-150.035ライン㉘部分……………28	写真65	第5面擬似畦畔検出状況(北から)……………107
写真30	同㉙部分……………28	写真66	第5面擬似畦畔検出状況(北西から)……………107
写真31	同㉚部分……………28	写真67	土坑354断面(東から)……………108
写真32	同㉛部分……………28	写真68	溝382断面(南から)……………113
写真33	同㉜部分……………29	写真69	溝369北セクション断面(南から)……………121
写真34	同㉝部分……………29	写真70	溝368北セクション断面(南から)……………121
写真35	同㉞部分……………29	写真71	溝369中央セクション断面(南東から)……………121
写真36	土坑36遺物出土状況(西から)……………42	写真72	溝368中央セクション断面(南東から)……………121

写真73	溝370中央セクション断面（南から）	121	写真106	高まり522断面南側上半（西から）	149
写真74	溝370南セクション断面（南東から）	121	写真107	高まり522断面南側下半（北西から）	149
写真75	溝371・372・373断面（東から）	121	写真108	第6b層 土器出土状況（北西から）	155
写真76	溝366断面（南から）	121	写真109	溝563土器出土状況（東から）	165
写真77	土坑406（南から）	124	写真110	高まり553断面（北西から）	170
写真78	土坑412断面上半（南から）	125	写真111	土坑630土器出土状況（東から）	181
写真79	土坑412断面下半（南から）	125	写真112	土坑632（南西から）	181
写真80	土坑437（北から）	126	写真113	土坑633遺物出土状況（北東から）	188
写真81	ピット421（南東から）	129	写真114	土坑633木製品出土状況（東から）	188
写真82	ピット462・431（南から）	129	写真115	ピット640（北から）	193
写真83	ピット452（西から）	129	写真116	ピット642（北西から）	193
写真84	ピット399（南から）	129	写真117	土坑657（南西から）	193
写真85	ピット457（南から）	129	写真118	土坑697（北から）	193
写真86	ピット473（南から）	129	写真119	土坑708（北から）	193
写真87	土坑509（南西から）	131	写真120	土坑719、ピット720（南から）	193
写真88	土坑415（南から）	131	写真121	土坑747（東から）	193
写真89	土坑493（南東から）	131	写真122	ピット757（南から）	194
写真90	土坑478（南東から）	131	写真123	ピット796（南西から）	194
写真91	土坑502（南から）	131	写真124	土坑658（南西から）	195
写真92	ピット467（南から）	131	写真125	土坑705・706断面（北から）	195
写真93	ピット433（南から）	131	写真126	土坑758断面（南から）	195
写真94	ピット461（南東から）	131	写真127	土坑758遺物出土状況（南から）	195
写真95	溝539・540（東から）	141	写真128	溝614・617断面（南から）	195
写真96	溝537（南東から）	141	写真129	ピット712（南から）	195
写真97	第6面土器出土状況（南から）	142	写真130	溝837（南から）	209
写真98	第6面直上土器出土状況（西から）	142	写真131	土坑842（東から）	209
写真99	溝535付近土器出土状況（南東から）	143	写真132	土坑834（北から）	210
写真100	溝540断面（東から）	147	写真133	土坑881（北から）	218
写真101	溝540土器出土状況（南東から）	147	写真134	新上小阪遺跡出土具類	229
写真102	高まり522断面北側上半（南西から）	148	写真135	新上小阪遺跡出土の人骨・動物遺体	231
写真103	高まり522断面中央上半（北西から）	148	写真136	産出した花粉化石1	239
写真104	高まり522断面中央下半（北西から）	148	写真137	産出した花粉化石2	240
写真105	高まり522断面中央下半（北西から）	148	写真138	珪藻化石顕微鏡写真	248

表目次

表1	新上小阪遺跡出土の木製品・自然木	225・226	表4	新上小阪遺跡出土具類一覧	229
表2	新上小阪遺跡出土の種子・植物遺体	226	表5	新上小阪遺跡出土人骨・動物骨・歯	232
表3	出土具類種名一覧	228	表6	花粉化石一覧表	234

表7	珪藻分析試料一覧表	242
表8	珪藻化石産出表	245
表9	放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果	250
表10	遺構の種類・数一覧	261
表11	落ち込み一覧	261
表12	畦畔一覧	262
表13	島畠一覧	262

表14	高まり一覧	262
表15	ピット一覧	263
表16	土坑・井戸一覧	270
表17	溝一覧	274
表18	実測土器観察表	279
表19	実測木製品観察表	296
表20	実測石器観察表	297

写真図版

写真図版1	遺構(1) 第1面
写真図版2	遺構(2) 第2面・第3-1面
写真図版3	遺構(3) 第3-2面
写真図版4	遺構(4) 第3-3面・第3-3(-2)面
写真図版5	遺構(5) 第4面
写真図版6	遺構(6) 第4b面
写真図版7	遺構(7) 第4b面掘立柱建物関連遺構(1)
写真図版8	遺構(8) 第4b面掘立柱建物関連遺構(2)
写真図版9	遺構(9) 第5面
写真図版10	遺構(10) 第5b面
写真図版11	遺構(11) 第6面・第6b面
写真図版12	遺構(12) 第7面
写真図版13	遺構(13) 第7b面(1)
写真図版14	遺構(14) 第7b面(2)
写真図版15	遺構(15) 第7b面(3)・第8面
写真図版16	遺構(16) 第8b面・第9面
写真図版17	土器① 輸入・国産陶磁器・緑釉陶器
写真図版18	土器② 緑釉陶器・製塩土器
写真図版19	土器③ 墨書土器・土師器(古代)
写真図版20	土器④ 土師器・須恵器(古代)
写真図版21	土器⑤ 須恵器(古代)
写真図版22	土器⑥ 須恵器・土師器(古墳時代)
写真図版23	土器⑦ 土師器(古墳時代)

写真図版24	土器⑧ 土師器(古墳時代)・弥生土器(第5b層)
写真図版25	土器⑨ 弥生土器(第6面)
写真図版26	土器⑩ 弥生土器(第6面~第7面)
写真図版27	土器⑪ 弥生土器(第7面遺構)
写真図版28	土器⑫ 弥生土器(第7面~第7層)
写真図版29	土器⑬ 弥生土器(第7層~第7b面)
写真図版30	土器⑭ 弥生土器(第7b面土坑633)
写真図版31	土器⑮ 弥生土器(第7b面土坑633・第7b面遺構)
写真図版32	土器⑯ 弥生土器(第7b面土坑633~第9層)
写真図版33	軒丸瓦・埴・土製品・金属製品
写真図版34	木製品① 第3-1面~第4b面
写真図版35	木製品② 第4b面~第4b層
写真図版36	木製品③ 第4b面~第6b層
写真図版37	木製品④ 第7面~第7b面
写真図版38	木製品⑤ 第7層以下~第9面
写真図版39	石器① 砥石
写真図版40	石器② 磨製石器・石製品・打製石器①-1
写真図版41	石器③ 磨製石器・石製品・打製石器①-2
写真図版42	石器④ 打製石器②-1
写真図版43	石器⑤ 打製石器②-2
写真図版44	石器⑥ 打製石器③-1
写真図版45	石器⑦ 打製石器③-2

第1章 調査に至る経緯と調査の経過

はじめに

今回の調査は、府営東大阪上小阪住宅の建て替え工事に伴う発掘調査および遺物整理事業である。そもそも、今回の建て替え工事以前には、府営住宅部分は周知の遺跡として認知されていなかった。工事に先立って、府建築都市部は府教育委員会に対し、対象地の東、北、西がそれぞれ山賀遺跡、上小阪遺跡、小若江遺跡に囲まれており（図2）、文化財調査の範囲を決めるという理由で、試掘調査を依頼した。これに対し、府教育委員会は平成11年9月9日から9月21日まで、府営東大阪上小阪住宅地内で試掘調査を実施した（調査番号99022）[大阪府教育委員会文化財調査事務所編2000]。その結果、弥生時代から中世の遺跡が発見され、調査地の町名から新たに「新上小阪遺跡」と命名、のち平成13年3月大阪府教育委員会文化財保護課発行の『大阪府文化財地名表』に遺跡番号が東大阪市（コード番号27277）の163番として掲載されている[大阪府教育委員会文化財保護課2001]（図1）。さて、この試掘調査を受けて、府教育委員会は建て替え工事に先立ち発掘調査が必要であるとの回答を府建築都市部に対し行い、府建築都市部は府教育委員会に発掘調査を依頼した。その後、府教育委員会から財団法人大阪府文化財調査研究センター（当時）に調査実施の指示があり、財団法人大阪府文化財調査研究センターは平成13年6月1日から平成14年3月29日までの契約を府建築都市部住宅整備課と締結した。

府営住宅について

日本における公営住宅の正式発足は昭和26年であるが、それ以前から国庫補助による公営住宅建設が行われており、これが戦後の公営住宅の始まりであった。戦後復興期において、公営住宅は日本の集合住宅をリードする花形であり、当該期の住宅として府下では団地設計のモデルとなった大阪市営古市団地（昭和29～30年竣工）が知られる。これら公営住宅は、戦後復興期には近代的な住まいとして人気を集めたが、高度成長期に入り、昭和30年に日本住宅公団が設立されるとともに、低所得者向けの福祉住宅としての位置付けが鮮明になる[小林ほか2001：20-23]。今日においても、府営住宅とは、住宅に困っている低所得者向けの賃貸住宅であり、他の民間賃貸住宅とは異なり、公営住宅法や大阪府営住宅条例などにより入居者資格が定められている。今回の調査地にある上小阪住宅をはじめとして府下には385箇所府営住宅があり、東大阪市内には16箇所府営住宅がある。これらのうち高度経済成長期に建設された府営住宅は築30年を超えている。30年というのは設備類の全面交換が必要な時期であるという[小林ほか2001：188]。このことを反映し、府教委の埋蔵文化財調査原因において、府営住宅の建て替えに伴う調査は、調査全体に占める面積比率で例年トップを占めており、「昭和30年代に建設された木造住宅の建て替えはほぼ完了に向かっているが、引き続き簡易耐火住宅等の建て替えも計画されており、当分中・高層化に伴う調査が続くような情勢」[廣瀬2001]であるとされる。当センターにおいては府営住宅の建て替えが調査事業の主ではないが、過去に行われた茨木市玉櫛遺跡（茨木玉櫛住宅）、同市東奈良遺跡（茨木東奈良住宅）、八尾市志紀遺跡（志紀住宅）や柏原市船橋遺跡（美陵住宅）などの調査は、各府営住宅の老朽化による建て替えに伴う発掘調査である。

今回建て替えの対象となった府営上小阪住宅は、昭和32～33年に経営が開始されたもので、建て替え前の総戸数は374戸である。今回の建て替えは、今後5期にわたる建て替えの第1期にあたり、新たに建設される府営住宅はその1棟分の14階建てで、計167戸の入居が可能になる。そして、5期すべての

建て替えが終了すると、合計774戸の入居が可能になる。

発掘調査の経過

今回の調査地は遺跡の北西隅にあたる（図1）。調査はまず9月1日から鋼矢板打設を開始し、打設の終了した9月17日からは機械掘削を開始した。機械掘削は9月20日で終了し、翌日から矢板際の側溝掘削および、重機では除去し切れなかった攪乱等を除去しながら、第1面の検出にかかり、9月29日には第1面東半の、10月3日には同西半の写真撮影及び平板測量を実施した。その間の10月2日からは側溝に加え、国土座標に沿った筋堀の掘削を開始、その後10月5日までで東半・西半とも第2面の調査を完了し、10月9日には第3-1面東半の、12日には同西半のクレーンによる写真測量（1・2回目）を実施した。なお、10月6日には近畿大学の大脇 潔氏と高宮いづみ氏の来跡があった。東半の第3層細分面の調査は10月19日の第3-2面の写真撮影、及び平板測量で終了し、第4面検出へ移行した。一方、西半第3層細分面の調査は、東半第4面、第4b面の調査と平行しながら、11月5日の第3-4面写真撮影、平板測量で終了した。なお、同日には府立弥生文化博物館の地村邦夫氏、財団法人東大阪市文化財協会の別所秀高氏らの来跡があった。その間、東半では10月25日に第4面の、11月1日には第4b面のクレーンによる写真測量（3・4回目）を実施した。その後、11月2日から6日まで東半は1段目支保工設置工事に入り、その間西半の第4面検出を行った。11月7日には西半の第4面クレーンによる写真撮影（5回目）を行い、西半の1段目支保工設置工事は9日までに完了した。その後、東半の未調査であった第4b面検出遺構を調査し、のち分厚い第4b層除去を行った。その間、11月12日には財団法人東大阪市文化財協会の松田順一郎氏の来跡があり、東半第4b層の砂層の堆積についてご教示を受けた。11月15日には西半第4b面のクレーンによる写真測量（6回目）、のち第4b層除去を行った。11月20日には近畿大学の近藤 潔氏の引率で同大学学生12人の来跡があり、調査中の東半第5面や出土した遺物を見学に供した。11月22日には東半第5面のクレーンによる写真測量（7回目）を行った。なお、同日には近畿大学の富田克敏氏の来跡があり、砂層中の砂礫の種類や供給方向についてご教示を受けた。その後、東半は第5b面検出に入り、西半では第4b層中に部分的に見られた第5-0面の調査を11月27日に行い、翌28日には東半西側の第5b面写真撮影を行った。なお、同日には財団法人滋賀県文化財保護協会の辻川哲朗氏の来跡があった。12月5日には東半東側第5b面と西半第5面のクレーンによる写真測量（8回目）を行い、のち東半東側では第5b面検出未調査分の遺構実測等を行った。12月10日には西半第5b面の写真撮影及び平板測量を行い、のち第5b層の掘削に入った。12月20日には西半第6面のクレーンによる写真測量（9回目）を行い、第6b面検出に移行した。12月24日には東半第6面のクレーンによる写真測量（10回目）と、西半第6b面の写真撮影を行った。翌25日には東半第6b面の写真撮影、さらに26日には西半の一部で検出された第6-2面の写真撮影を行い、東半・西半とも第6b層を掘削し始めた時点で年内の作業を終了した。年明けから東半は2段目の支保工設置工事に入り、西半では第7面検出を行った。1月12日までに東半の支保工は完了し、西半は第7面写真撮影及び平板測量まで終了した。13日からは西半の支保工設置工事に入り、16日に終了、17日には東半第7面の写真撮影を行った。その後、1月中に東半・西半とも第7b面までの調査が完了し、第8面の調査を行わなかった東半では1月29日に第9面のクレーンによる写真測量（11回目）を行った。また、その間の1月26日には財団法人東大阪市文化財協会の松田順一郎氏の来跡があり、西半第7層以下の堆積についてご教示を受けた。1月31日には大阪府教育委員会の堀江門也氏の来跡があった。2月1日には東半第10面の写真撮影及び平板測量を行い、翌2日には東半第

10b面の写真撮影及び平板測量と西半第8面のクレーンによる写真測量（12回目）を行い、全てのクレーンによる写真測量は終了した。2月4日には大韓民国京畿道文化財団附設畿甸文化財研究院の金武重氏の来跡があった。のち、2月5日には西半第8b面の写真撮影及び平板測量が、2月6日までで東半は第11面までの調査を終了し、同日大阪府教育委員会の最終立会を受けた。東半は第11面の調査をもって終了し、埋め戻しに入った。一方、西半は、2月9日には第9面の、12日には第9b面の写真撮影及び平板測量をおこない、14日からは一部深掘りトレンチを掘削した。2月15日には深掘りトレンチ内で検出された第9面の写真撮影を行い、西半の調査はこの面をもって終了した。のち、2月19日からは西半も埋め戻しに入り、途中、支保工の撤去を経て、3月7日までに完了、さらに鋼矢板引き抜き作業が3月18日までに完了した。

整理作業の経過

発掘調査中から終了後にかけて、基礎的な整理作業を行ったが、翌平成14年5月31日付けで大阪府と遺物整理に関する委託契約を締結し、平成15年3月31日まで（財）大阪府文化財センター池島分室において作業を実施するに至った。

整理作業は、発掘調査中に作成した図面の整理、遺物の洗浄・注記・接合・復元、木器実測をまず順次行い、これらは概ね8月中に終了した。なお、これらの作業中の6月14日には、それまでの調査成果をもとに第39回低湿地遺跡研究会にて発表を行い、同研究会参加者の方々からご教示を得た。7月31日には東大阪市立上小阪中学校の太田 理氏の来室があり、遺跡付近北側を通る十三街道についてご教示を得た。8月1日には大阪市立大学の安部みき子氏に出土骨・動物遺体の鑑定を依頼し、11月1日に結果を頂いた。また、8月2日には中部調査事務所保存処理室に実測済み木器の樹種鑑定を依頼した。



図1 新上小阪遺跡の範囲と今回の調査地（S=1/2,500）

同7日には財団法人大阪市文化財協会の池田 研氏に貝類についてご教示を賜り同時に鑑定を依頼、9月2日には結果を頂いた。8月21日には近畿大学の富田克敏氏に出土石材や石器、赤色顔料についてご教示を賜り、同時に岩石の鑑定を依頼、10月31日までに結果を頂いた。8月27日には京都大学吉川真司氏、小原嘉記氏、大阪大学藤岡 穰氏の来室があり、墨書土器の文字や第4b面検出掘立柱建物についてのご教示を得た。また、遺跡の環境復元等を目的とした花粉分析、珪藻分析、放射性炭素同位体測定を、7月15日に株式会社パレオ・ラボに業務委託し、10月25日に結果を頂いた。その結果については、第6章に掲載している。これらの作業と並行し、8月からは遺構図面の版下作成、各層・遺構ごとの遺物選択、遺物実測、トレース、写真図版作成等を本格的に行い、12月までに終了した。なお、個別の実測対象遺物には実測図番号を付加し、同番号を記入したカードを添付した。なお、並行し8月中旬から、順次遺構写真の紙焼き、実測掲載遺物のうち、残存度が良いものや重要と思われるものの写真撮影を中部調査事務所写真室にて実施した。また、実測および写真撮影が終了した木器を9月上旬から順次、保存処理室にて保存処理を実施した。これらの作業中の9月9日には堺市立埋蔵文化財センターの森村健一氏の来室があり、近世の土器などについてご教示を賜った。また、12月中には財団法人石川県埋蔵文化財センターの林 大智氏より、弥生時代中期土器や木製品等についてご教示を得た。その後、本格的な編集作業と並行して、図面や未実測遺物は順次収納し、実測遺物に関しても同封したカードに報告書中の図番号および、写真も掲載されるものについては加えて写真図版番号も書き加え、報告書に準じ検索可能なように収納作業を行った。最終的には、報告書の図版番号、写真図版番号からその個別遺物の検索および、同遺物の登録番号の検索も可能であり、共伴して出土した未実測遺物の検索、閲覧も可能である状態にまでは整理を行った。その後、報告書の校正作業を経て、最終的に平成15年3月31日付けで本報告書を刊行し、本事業に関する全ての作業を終了した。

<参考・引用文献>

大阪府教育委員会文化財調査事務所編1999「大阪府教育委員会文化財調査事務所年報」2 大阪府教育委員会

大阪府教育委員会文化財調査事務所編2000「大阪府教育委員会文化財調査事務所年報」3 大阪府教育委員会

大阪府教育委員会文化財調査事務所編2001「大阪府教育委員会文化財調査事務所年報」4 大阪府教育委員会

大阪府教育委員会文化財調査事務所編2002「大阪府教育委員会文化財調査事務所年報」5 大阪府教育委員会

大阪府教育委員会文化財保護課編2001「大阪府文化財地名表」大阪府教育委員会

小林秀樹ほか1997「日本における集合住宅の普及過程」財団法人日本住宅総合センター

小林秀樹ほか2001「日本における集合住宅の定着過程」財団法人日本住宅総合センター

廣瀬雅信2001「平成11年度における埋蔵文化財調査の概要」『大阪府教育委員会文化財調査事務所年報』4 大阪府教育委員会

第2章 位置と環境

新上小阪遺跡〔図2-1、以下〔 〕内数字図2に対応〕は、河内平野を縦断する近畿自動車道八尾料金所の西北西約600mの、東大阪市西南部の新上小阪に所在する。周辺は北に上小阪遺跡〔9〕、東に山賀遺跡〔10〕、西に小若江遺跡〔11〕と縄文時代晩期から近代に至る各時代の遺跡が密集する地域である。また、遺跡の北側には、大阪と奈良を結ぶ街道の一つであり、大阪市深江で「暗越奈良街道」から分岐する「十三街道」〔A〕が通り、古くから人の往来があったことが窺える。今日では、遺跡北方を近鉄奈良線が、南西を近鉄大阪線が、東方を近畿自動車道および主要地方道大阪中央環状線が通り、金物団地をはじめ中小企業の工場や近畿大学、一般の住宅など、周辺は開発が進んだ地域である。

遺跡の位置する河内平野は、東西を生駒山地・枚方丘陵と上町台地に、南北を羽曳野台地・河内台地と淀川に囲まれた堆積盆地である〔松田2001〕。この河内平野の自然環境変遷については、梶山彦太郎・市原実両氏〔梶山・市原1972〕をはじめとする一連の研究が著名である。近畿自動車道の調査をはじめ、考古学的な発掘調査においては、これらの自然科学的研究の成果を視野に入れた調査が行われてきている。当遺跡周辺は、現在の地形で旧大和川の主流のひとつ、長瀬川右岸の沖積地に位置する。長瀬川沿いには幅200～400m程の微高地がみられるが、これは旧長瀬川により形成された自然堤防の痕跡である。また、地表面には旧長瀬川の氾濫痕跡や氾濫を防ぐための人口堤防が随所に見られ、遺跡の南西に位置する弥刀遺跡〔13〕周辺や南の佐堂遺跡〔22〕、宮町遺跡〔19〕周辺などに分流路跡が認められる〔別所ほか2002〕。当遺跡周辺も分流路などを通じた氾濫の影響を大きく受け、一帯が過去に多くの洪水被害に襲われたことが容易に想像される。

縄文時代には、早期初め（約1万年前）から気候が温暖化し、前期（約5,300年前）には縄文海進により海岸線が後退し、東は生駒山麓、南は八尾市中部、北は高槻市の平野部付近までの範囲で「河内湾」が形成された。山賀遺跡では、人間活動の痕跡は見られないもののT.P. -3.5～-8.5mで当該期の層が確認されている。同層に含まれる動物相から、このあたりが河内湾の湾奥部にあたり、水深もそれほど深くなかったという環境復元がなされている〔西口ほか1984〕。山賀遺跡と当遺跡が近接していることを考えると、当時の自然環境は類似していたものと推定される。

「河内湾」は縄文時代後期～晩期（約3,500～3,000年前）になると、淀川や旧大和川等のもたらした河川による土砂で埋積され、規模を縮小し、海水と淡水の混ざる汽水の「河内潟」に変化したものと推定される。山賀遺跡付近は縄文時代後期頃までの河内潟南岸にあたり、T.P. -0.7m以下で当該期の堆積が見られ、同堆積層中から縄文時代中期末の土器片が出土している〔西口ほか1984〕。

その後、縄文時代晩期～弥生時代前期（約2,800～2,300年前）にかけての時期になると、河内潟の湖岸線は後退したものと考えられている。水位が低下した結果、河内潟の陸化した地表面はヨシ原で覆われ黒色土壌化層が形成される。同様の層は河内平野の各遺跡で確認されており、当遺跡においても確認された。このころ河内潟は上町台地先端の砂嘴の発達により海水が流入しなくなり、淡水の「河内湖」となっていったものと考えられている。また、この時期や、やや以前から、ようやく中河内低地部でも人間の活動痕跡が見られるようになる。池島・福万寺遺跡では、縄文時代後期中頃に形成された黒色土壌化層が見られ、遺構は不明瞭ながら、元住吉山式に位置づけられる深鉢が出土している〔岡本2002〕。

当遺跡周辺での最も古い人間活動の痕跡は、若江北遺跡〔7〕の縄文時代後期前葉頃、福田K2式頃

の深鉢である。この土器は、縄文時代晩期に形成されたとと思われる黒色土壌化層下層のベース層出土ながら現地性が高い [三好・亀井ほか1995]。また、山賀遺跡では、河川や上層に巻き上げられての出土ではあるが、さほど摩滅していない縄文時代晩期、滋賀里Ⅱ式の深鉢や土偶がみられる [石神・陣内編1991]。

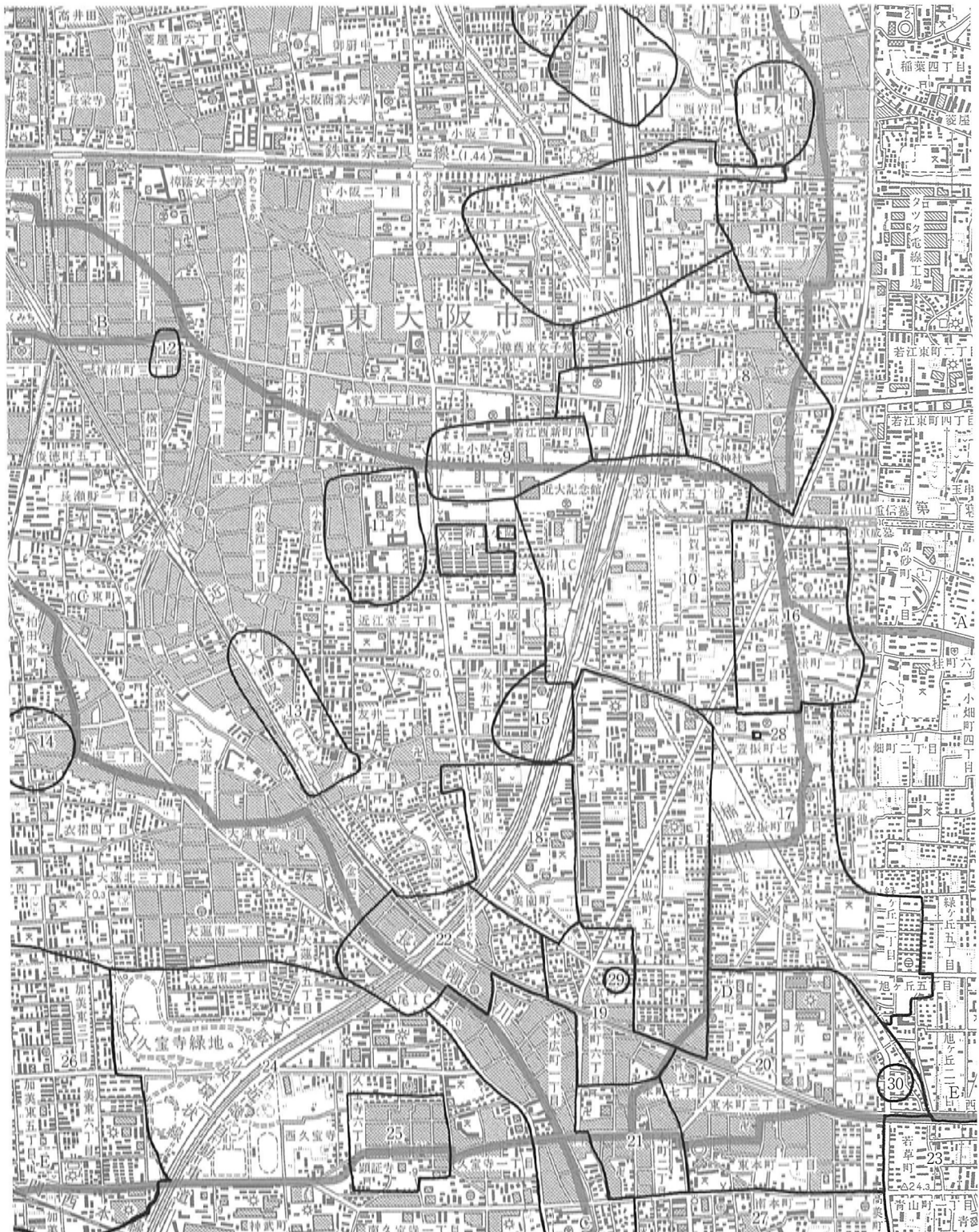
弥生時代～古墳時代前期（約2,300～1,800年前）にかけて、再び「河内湖」の湖面が上昇したものと考えられている。結果、河川の土砂堆積が増加し、氾濫が頻発したものと考えられている。こうした中で、河川により形成された自然堤防上には居住域が、一段低くなった後背湿地には水田が築かれている。

弥生時代前期では、若江北遺跡で、河内平野で最も古い前期前半段階の居住域が検出された [三好・市本1996]。これに続く前期後半は、山賀遺跡、美園遺跡 [18] で大量の遺構・遺物が検出されている他、近年では瓜生堂遺跡 [5] でも当該期の集落が検出されている。特に山賀遺跡では、居住域と大規模な水田域が近接し、その間に8条の大溝と9条の土手を造営するなどの活発な人間活動の痕跡がみられる [森井ほか1983、西口ほか1984]。溝の埋土はブロック土であり、人為的に埋め戻された可能性が考えられるが、評価は定まっていない。なお同様の溝は友井東遺跡 [15] や美園遺跡 [石神・陣内編1991：P20]、志紀遺跡でも見られる [本間・鹿野編2002]。

弥生時代中期では、若江遺跡 [8]、若江北遺跡、美園遺跡、瓜生堂遺跡、萱振遺跡 [17] で居住域が、山賀遺跡、瓜生堂遺跡、巨摩遺跡 [6] などから多数の方形周溝墓がそれぞれ検出された。瓜生堂遺跡は拠点集落として著名であり、集落域とともに墓域（方形周溝墓群）も検出され、大阪湾形銅戈、鋳型、鳥形木製品などの特殊な遺物も出土している。山賀遺跡では中期初頭の方形周溝墓10基や水田跡が検出され、中期後半には居住域、墓域、生産域が確認されているが、いずれの段階の居住域は東側に展開するようである。 [森井ほか1983、西口ほか1984]。また、小若江遺跡（小若江北遺跡・長瀬遺跡）でⅡ様式の土器が出土しており [布施市史編纂委員会1962]、当遺跡との関連が注目される。

弥生時代後期では、巨摩遺跡で方形周溝墓が検出され、主体部より碧玉製管玉やガラス小玉が出土し、河川内より貨泉も出土している [三好・亀井ほか1995、三好・市本1996、畑編1998]。巨摩遺跡では沼状遺構から有鉤銅釧なども出土している [亀井ほか編1996]。当遺跡周辺では、山賀遺跡が生産域と考えられる。また、遺跡北側の上小阪遺跡 [9] では当該期の土器の出土が見られ、東西150m・南北200mの範囲にわたる弥生時代後期中頃の大集落であった可能性が指摘されている [勝田編1976、福永1998]。なお、この時期は河内平野全体で集落景観に大きな変化が見られる時期である。これは先述の河内湖の湖面上昇や、度重なる河川の埋没と氾濫により河川流路が頻繁に移動することが原因と考えられる。結果、中期以前とはかなり景観が変わり、異なる地点に集落が形成される。近畿自動車道関連の調査においても、瓜生堂遺跡から巨摩遺跡にかけての地域以北では沼沢地となり集落が放棄されている状況が明らかとなっている [安田1987]。また、上小阪遺跡第5次調査では、中期末の遺構面を覆う厚さ1mにもおよぶ砂層の堆積が確認されており [松田1997]、弥生時代後期居住域形成の要因はこうした状況によるものと考えられる。

古墳時代前期になると、弥生時代後期に新たに形成された微高地に多くの居住域が、それよりやや低まった箇所にも水田跡が検出されるようになる。この中で、遺跡南東に位置する萱振遺跡、東郷遺跡 [20]、小阪合遺跡 [23]、成法寺遺跡 [27] などの諸遺跡は中田遺跡群と称され、当該期の中心地と目される地域であり、いずれも庄内式初頭に一斉に出現し布留式前半にほぼ一斉に消滅する [山田1994]。当遺跡に近在する諸遺跡の消長では、西岩田遺跡 [3]、瓜生堂遺跡などは類似するが、美園遺跡では出現時期は同様ながら布留式の後半まで継続する。なお、山賀遺跡でも前期の居住域と考えられる遺構が検



- 1 新上小阪遺跡 2 意岐部遺跡 3 西岩田遺跡 4 岩田遺跡 5 瓜生堂遺跡 6 巨摩遺跡 7 若江北遺跡
 8 若江遺跡 9 上小阪遺跡 10 山賀遺跡 11 小若江遺跡 12 横沼遺跡 13 弥刀遺跡 14 衣摺遺跡 15 友井
 東遺跡 16 西郡廃寺遺跡 17 萱振遺跡 18 美園遺跡 19 宮町遺跡 20 東郷遺跡 21 八尾寺内町 22 佐堂
 遺跡 23 小阪合遺跡 24 久宝寺遺跡 25 久宝寺寺内町 26 加美遺跡 27 成法寺遺跡 28 萱振1号墳
 29 穴太廃寺 30 東郷廃寺 A 十三街道 B 俊徳道 C 八尾街道 D 河内街道 E 立石嶺道

図2 新上小阪遺跡周辺の遺跡 (S=1/25,000)



写真1 調査地周辺航空写真（昭和17年撮影）（大阪市許可済、無断転載不可）

出されているが小規模なものである。この他、弥刀遺跡は、詳細は不明ながら庄内式～布留式期の居住域と考えられる〔上野1999、別所ほか2002〕。なお、巨摩遺跡や若江北遺跡などは生産域であったようである。また、墓制では、布留式後半（4世紀末）において、家形埴輪が出土した美園古墳、日本最大の靱型埴輪が出土した萱振1号墳〔28〕などが見られる。

なお、当遺跡に西接する小若江遺跡は布留式土器新段階の標識遺跡である。これは昭和15年に近畿大学の前身である大阪専門学校構内の工事に伴い実施された調査による成果を基本としている。学史的には、坪井清足氏が古墳時代前期の古段階の土器として位置づけたことによって著名になった〔坪井1956、布施市史編纂委員会1962〕が、その後の近畿大学構内の調査でも当該期の様相は不明な点が多い。

古墳時代中期になると西岩田遺跡や瓜生堂遺跡、友井東遺跡で居住域が見られ、巨摩遺跡には5世紀末～6世紀初頭に巨摩1号墳が築かれ、山賀遺跡でも5世紀末の近大山賀古墳が見られる〔山本1989〕。また、古墳時代後期には新家遺跡、西岩田遺跡、友井東遺跡が居住域となり、山賀遺跡では6世紀中頃の山賀古墳が見られる〔森井ほか1983〕。

古代になると、瓜生堂遺跡や美園遺跡で掘立柱建物、土坑、溝などが見られる。美園遺跡では河川から7世紀代の遺物が多量に出土しており、祭祀に関連した様相も見受けられる〔畑編1998〕。また、瓜生堂遺跡では8世紀の掘立柱建物群や落ち込みが検出され、公的施設が存在が推定されている〔藤沢ほか1980〕。また、8世紀には萱振遺跡でも掘立柱建物が検出されている他、周辺でも奈良時代から平安時代前期にかけての瓦や土器の出土が見られる。なお、この地域は難波津と平城京を結ぶ交通の要衝、河内国若江郡に属していた。そのため、早くから古代寺院や郡衙などが造営された。当遺跡は、若江郡の錦織郷に属していたと考えられる。錦織郷内には、若江寺、西郡廢寺が存在し、若江郡内においても中心的な位置をしめていたことがうかがえる。若江寺は、出土遺物から7世紀に創建され、元慶年間（877～885）に文献にその名が登場する。西郡廢寺は、錦織連の氏寺で白鳳時代に創建され、室町時代初頭まで続いた。現在は、天神社境内に西郡廢寺塔心礎が遺存し、7世紀中頃の瓦が出土している。また、瓜生堂遺跡から「若」と記した墨書土器が出土しており、若江郡衙の存在も想定される。また、古代には条里制が施工され、遺跡周辺におけるその起源は奈良時代頃とされるが詳細は不明である。なお、遺跡周辺の旧小阪町大字上小阪には一ノ坪の、大字中小阪には五ノ坪、坪ノ内の地名が見られ、他の字名から若江郡の坪付を東南隅から北方に千鳥式に数えたとされている〔布施市史編纂委員会1962〕。

古代末から中世になると、巨摩遺跡で遺構、遺物が見られる。その時期は11世紀～14世紀を中心とし、11～12世紀には良好な一括遺物が見られる〔畑編1998〕。なお、長瀬川の旧河道が通る佐堂遺跡では平安時代末（10世紀）の築堤の跡が検出され〔阪田1987〕、局地的な河川改修の様子がうかがえる。なお、この時期は荘園が見られる時期であるが、若江郡内には10世紀中頃に成立する醍醐寺領河内五箇庄の一つである若江庄、11世紀後半にはあったとされる岩清水八幡宮領掃部別宮、12世紀中頃にはあったとされる興福寺領若江庄があったとされる〔布施市史編纂委員会1962〕。

詳細な整備時期は不明だが、遺跡周辺には多くの街道が見られる。十三街道は、遺跡の北約1 km地点を大阪から奈良に通る街道、後徳道〔B〕は四天王寺に至る道である。また、河内街道〔D〕は京から南河内の各地域に至る街道である〔大阪府教育委員会編1989〕。

14世紀後半になると、文献によると河内街道と十三街道の交差点にあたる地点に、若江城が築城されたとされる。若江城は、織田信長の石山本願寺攻撃の拠点となったが、石山本願寺攻略後は不用となり、天正9年（1581）頃には破壊されたとされる〔阿部ほか1982〕。関係する遺構は若江遺跡や周辺で検出さ

れている [三好・市本1996]。なお、この時期以降、一帯は生産域になっていたようである [畑編1998]。

江戸時代以降も、この地域では大和川の本流・支流が流下し、その土砂の運搬により天井川が形成された。天井川は大雨のたびに洪水などの自然災害を引き起こし、人々の生活に大きな影響を与えた。しかし、こうしたなかでも、池島・福万寺遺跡では中世以降洪水に対応しながら生産を連綿と継続していた状況が確認されている。また、近世の商品作物栽培が盛んになると、河内は「河内木綿」で知られる、綿の一大生産地となった。若江郡も良質の綿を生産することで知られていた。綿の生産は、周辺では慶長年間（1596～1615）には行われていたようである。宝永元年（1704）の大和川付け替え以降、洪水被害は激減したが、逆に水不足に悩まされることになり、畑作に重きを置くようになった。しかし、低地の排水不良の問題は大きな改善を見ることなく、近代以降も大規模な洪水被害が起り、現在でもこの地域の重要な課題となっている。写真1は昭和17年撮影の遺跡周辺航空写真である。当時は条里制の残る田畑が広がっており、人家の密集する現在の様子からは想像しがたい。戦後から昭和30年代まではこのような光景であったが、大阪中央環状線の開通や市街地化と共に、現在のような景観になっていった。

<参考文献>（五十音順）※上小阪遺跡、山賀遺跡、小若江遺跡の各遺跡報告書については、第7章末（P258）の参考文献参照

赤木克視・村上年生編 1987『河内平野遺跡群の動態Ⅰ』大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター

阿部嗣治・岡村多美子・浪江由美 1982『文献から見た若江城』『若江遺跡発掘調査報告書Ⅰ』（財）東大阪市文化財協会

石神幸子・陣内暢子編 1991『河内平野遺跡群の動態Ⅱ』大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター

上野利明 1999『弥刀遺跡第6次調査』『埋蔵文化財発掘調査概報集—1998年度（2）—』（財）東大阪市文化財協会

大阪府教育委員会編 1989『歴史の道調査報告書第4集 奈良街道』大阪府教育委員会

大阪府の歴史散歩編集委員会 1990『西郡廃寺』『河内木綿』『大阪府の歴史散歩（下）』山川出版社

岡本茂史 2002『V調査成果 3縄紋時代～弥生時代中期』『池島・福万寺遺跡発掘調査概要X XVI』（財）大阪府文化財調査研究センター

梶山彦太郎・市原 実 1972『大阪平野の発達史—¹⁴C年代のデータからみた—』『地質学論集』第7号

金村浩一 1997『若江遺跡第59次調査』『東大阪市埋蔵文化財発掘調査概要—1995年度調査（2）—』（財）東大阪市文化財協会

亀井 聡・溝川陽子・堀 智美編 1996『河内平野遺跡群の動態Ⅲ』大阪府教育委員会・（財）大阪府文化財調査研究センター

駒井正明 2000『第2節 奈良・平安時代の小阪合遺跡とその周辺』『小阪合遺跡』（財）大阪府文化財調査研究センター

阪田育功 1987『佐堂遺跡』『河内平野遺跡群の動態Ⅰ』大阪府教育委員会・（財）大阪府文化財調査研究センター

地学団体研究会大阪支部編著 1999『大地のおいたち』築地書館

坪井清足 1956『岡山県笠岡市高島遺跡調査報告』

畑 暢子編 1998『河内平野遺跡群の動態Ⅳ』大阪府教育委員会・（財）大阪府文化財調査研究センター

藤沢真依ほか 1980『瓜生堂』大阪府教育委員会・（財）大阪府文化財調査研究センター

布施市史編纂委員会 1962『布施市史 第1巻』布施市役所

別所秀高・バリノサーヴェイ株式会社 2002『老人ホーム建設に伴う弥刀遺跡第8次発掘調査概要報告書』（財）東大阪市文化財協会

本間元樹・鹿野 晶編 2002『志紀遺跡（その2・3・5・6）』（財）大阪府文化財調査研究センター

松田順一郎 2001『河内平野沖積平野南部における完新世後半の旧大和川分流路発達と人間活動』『環境と人間社会』埋蔵文化財研究会

三好孝一・市本芳三 1996『巨摩・若江北遺跡発掘調査報告—第5次—』（財）大阪府文化財調査研究センター

三好孝一・亀井 聡ほか 1995『巨摩・若江北遺跡発掘調査報告—第4次—』（財）大阪文化財センター

安田喜憲 1987『河内平野の古環境復原に関する諸問題』『河内平野遺跡群の動態Ⅰ』大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター

山田隆一 1994『古墳時代初頭前後の中河内地域』『弥生文化博物館研究報告3』大阪府立弥生文化博物館

第3章 調査の方法

第1節 発掘調査の方法

今回の調査区は、新上小阪遺跡の北西側にあたり、調査対象面積は1,516m²である。単年度の調査であるが、調査の都合上、調査区を東半と西半に分けて調査を実施した。その区分は、調査開始当初から第2面調査までは、調査区中央部のY=-37,350ライン付近の旧府営住宅のガス管本管による攪乱を境とし、攪乱が概ね消滅した第3-1面調査以降調査終了までは、Y=-37,300ラインを境とした。

調査前の地盤高は標高T.P.4.2m前後であり、調査では、試掘調査で得られた成果を下に、まず旧府営住宅に伴う層や旧作土層等約0.9mを重機により除去し、以下約3.8mを人力にて掘削した。

発掘調査にあたっては、1988年刊行の『(財)大阪文化財センター 遺跡調査基本マニュアル』を参考にした。

まず、調査区の地区割りについては国土座標系第Ⅵ座標系に基づき行い、第Ⅰ区画として1/10,000地形図で府下全域を縦6km・横8kmを一区画として分割する。その際、南西端を基点とし、南北軸A～O・東西軸0～8で表示する。今回の調査地はこの区画上で「G6」に位置する。第Ⅱ区画は、大阪府が発行する1/2,500地形図を利用し、第Ⅰ区画を南北1.5km、東西2.0kmに16分割し、南西端の1から北東端の16までで表示する。調査地はこの区画上で「14」に位置する。第Ⅲ区画は、第Ⅱ区画内を100m単位で区画するもので、南北15・東西20に区分し、北東端を基点として南北軸A～O・東西軸1～20で表示する。調査地はこの区画上で「A12」および「A13」にまたがり位置する。第Ⅳ区画は第Ⅲ区画を10m単位で10等分し、北東端を基点として南北軸a～j・東西軸1～10で表示する(図3)。さらに第Ⅳ区画を5m単位で4区分する第Ⅴ区画や第Ⅳ区画の北東端を基点に必要な桁まで表示する第Ⅵ区画があるが、今回の調査で使用したのは第Ⅳ区画までであり、「A13-b4」等と表示される10m四方の区画の設定までとした。今回の調査地は第Ⅲ・Ⅳ区画上でA12-c6～A13-g4・f5の範囲となる。なお、現地における測量はこの座標を基本に行っているため、本書で示す北はすべて座標北となっている。また、標高については東京湾平均海水面(T.P.)を基準としている。

層と面は、機械掘削終了面をまず第1面とし、その第1面を構成している層を第1層、第1層を除去し検出される面が第2面、第2面を構成している層を第2層、という具合に、第〇層の上面が第〇面を基本とするが、層の堆積状況により一部この規準に合致しない部分がある。また、これらの「層」呼称は掘削および遺物取り上げの単位としてのものであり、各層は断面調査ではさらに細分される。その詳細については、第4章 基本層序に記してある。

検出遺構の測量については、各遺構面の平面図を基本的に縮尺1/100の平板測量により作成したが、主要面と認識し、今後の調査でも対応面の検出が予想される面や遺構が密集して検出された面については、部分的なものも含め8面(第3-1面、第4面、第4b面、第5面、第5b面、第6面、第8面、第9面)を、クレーン撮影による写真測量を実施した。個別遺構図はその遺構に応じて縮尺を設定し、平面図・断面図・立面図等を作成した。なお、遺構番号は検出面や遺構の種類に関わらず1からの通し番号とした。現場で検出した遺構は全てで873基である。遺構の詳細は、第5章中に記してあるが、その一覧表は巻末に掲載している(表10～17)。

土層断面観察用アゼは、試掘調査の結果、条里制に伴う遺構の検出が予想され、今後展開する当遺跡における調査を鑑み、座標に沿って設定した。今回の調査で設定したラインは、X軸では-150,035・150,050の2条、Y軸では-37,280・37,300・37,320・37,340・37,350（X=-150,050以南）の5条であり、縮尺1/20で実測を行った。このうち、本書に掲載しているのはX=-150,035・150,050とY=-37,320であり、調査区を概ね東西に横断している。

遺物の取り上げについては、基本的に先述の10m四方ごとに行ったが、特に必要なものに関しては、座標と標高を求め、出土した位置を国土座標上で把握できるようにしたほか、3次元での記録も行った。遺物登録番号は、取り上げ単位ごとに付与した。なお、取り上げの際には、遺跡名、地区名、層位名、遺構名、出土年月日を記入したラベルを使用した。

なお、調査の各段階では写真撮影を行った。写真は、35mmリバーサル・白黒フィルムを基本とし、遺構面の全景写真、重要な遺構の検出や遺物の出土時には加えて6×7白黒フィルムを、特に重要な遺構・遺物についてはさらに加えて6×7リバーサルフィルムを使用し、メモ写真として35mmカラーフィルムを使用した。

第2節 整理作業の方法

整理作業は、まず現場における作業と並行し、出土遺物に直ちに登録番号を付与し、現場で記入したラベルに追加記入した。その後、登録番号、地区、遺構面、遺構名、層名、出土年月日等の記載による、遺物登録台帳の作成、撮影フィルムの整理、各フィルム登録台帳の作成、遺物の洗浄および注記を行い、発掘調査終了後引き続き同作業を継続した。なお、出土遺物のうち土器に対する注記は遺跡名である新上小阪（SHINKAMIKOSAKA）から略称「SKK」および登録番号を付与し、例えば「SKK-1」のように記した。注記を終えた土器はラベルとともに登録番号ごとに袋詰めしたが、同じ登録番号でも土器以外の遺物（石器・木器・鉄器）については、同じ情報を記入したラベルを別に作成し、各遺物に適した方法で別に保管した。

洗浄および注記を終えた出土遺物は、登録番号ごとに分類を行い、点数を数え、出土遺物確認表を作成し、必要と判断した遺物については、順次接合、復元を行った。実測対象遺物は、土器の場合、原則的に口縁部（あるいは底部）1/6以上残存するものとしたが、特に重要と認められたものや、出土遺物が少ない層についてはその限りではない。木製品の場合、明らかに製品と認められたものや加工痕跡が認められるものを主に実測対象とした。石器や石製品の場合、点数が少ないこともあり、剥片も含めて極力図化につとめた。金属製品は、明らかに最近のものを除くと1点のみの出土でありこれを図化した。

なお、撮影フィルムについては、先述の紙媒体による台帳作成後、35mm白黒・リバーサル、6×7白黒等で撮影されていることもあり、同一の写真がいずれのフィルムで撮影されているか、どの遺構の写真が撮影されているのかの検索を容易にするために、パソコンにてExcelの検索台帳を作成した。

また、発掘調査の際に採取した土壌サンプルの自然科学分析として珪藻分析、花粉分析、¹⁴C年代測定を株式会社パレオ・ラボに委託、実施した。まず珪藻・花粉分析は、第5章で詳述するように弥生時代中期から古代までの複数の遺構面において、調査区の東西で生産域と居住域といった環境の差異が確認されたことから、両者の珪藻分析による環境復元のデータを得るため、そして重ねて生産域の花粉分析により栽培物の検証を行うために行った。年代測定は弥生時代中期前半の複数の遺構面が検出された

ことから、その各層による年代的差異や実年代を伺うために行った。この他、同じく発掘調査の際に出土し調査段階で認識していた資料や、整理過程で新たに認識した資料のうち、動物遺体については大阪市立大学の安部みき子氏に、貝類については財団法人大阪市文化財協会の池田 研氏に、岩石および赤色顔料については近畿大学の富田克敏氏に、木材・木製品の樹種鑑定、植物資料については当センター保存処理室の山口誠治に鑑定を依頼した。これらの成果は第5章中および第6章に掲載している。

なお、整理作業を進める上での主要な遺物の器種、時期等の判断には以下の文献を使用した。また、これ以外にも参考とした文献については各章の章末に記してある（敬称略）。

弥生土器 寺沢 薫・森井貞雄 1989「2 各地域の様式編年 1 河内地域」 寺沢 薫・森岡秀人編
『弥生土器の様式と編年 近畿 I』木耳社

古墳時代の土器 田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店

注 美紀 1999「古墳時代中・後期の土師器に関する一考察」『国家形成期の考古学』
大阪大学考古学研究室

古代の土器 古代の土器研究会編 1992『古代の土器 1 都城の土器集成』
古代の土器研究会編 1993『古代の土器 2 都城の土器集成 II』
古代の土器研究会編 1994『古代の土器 3 都城の土器集成 III』

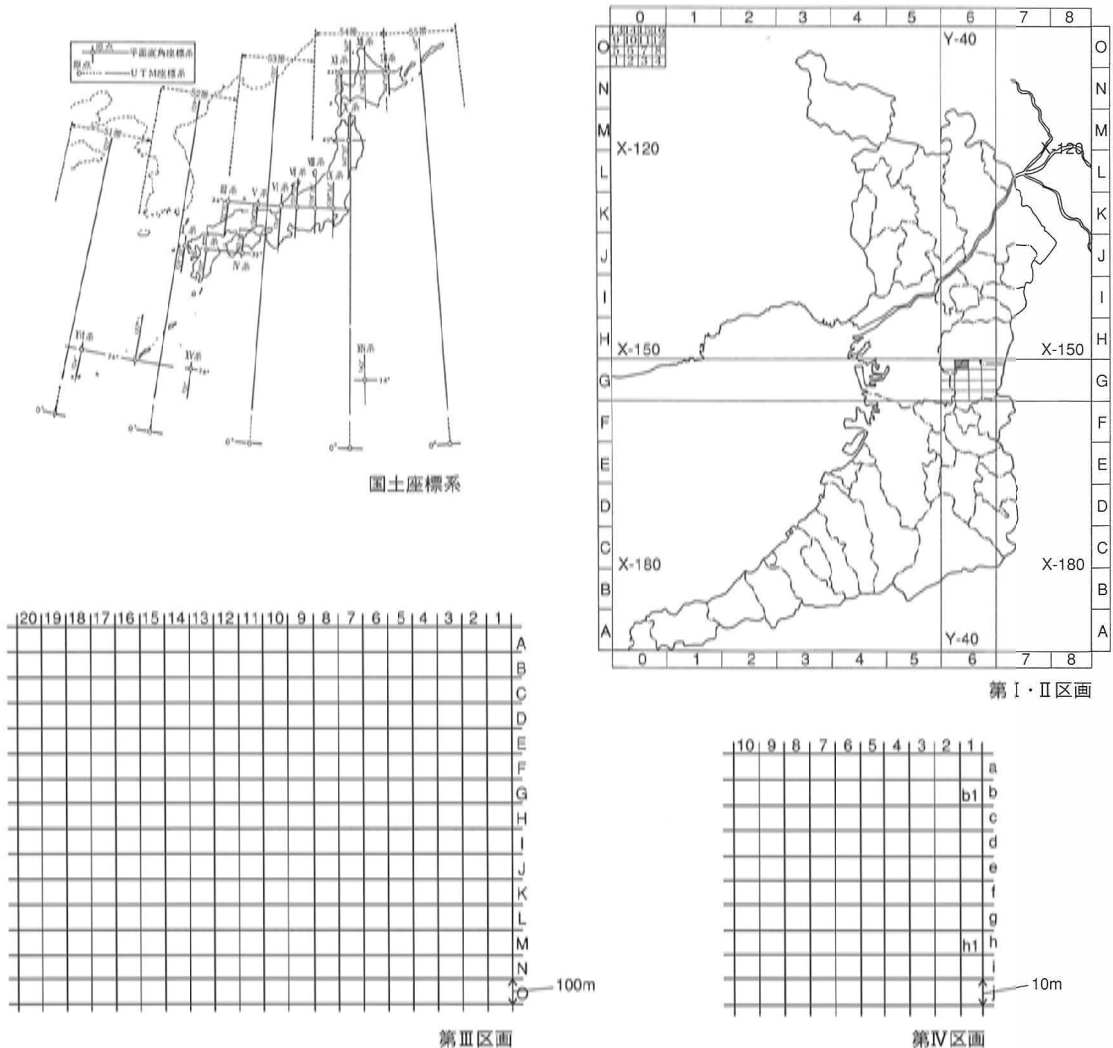


図3 国土座標系とそれに伴う地区

古代の土器研究会編 1996『古代の土器4 煮炊具(近畿編)』

佐藤 隆 1992「平安時代における長原遺跡の動向」『長原遺跡発掘調査報告V』財団法人
大阪市文化財協会

緑釉陶器 平尾雅幸 1990「第V章 考察 2 右京三条三坊の平安時代の遺物の検討 A 9世紀代の
土器類 緑釉陶器」『平安京右京三条三坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第10冊 財
団法人 京都市埋蔵文化財研究所

平尾雅幸 1994「緑釉陶器の変質と波及」『古代の土器研究会第3回シンポジウム 古代の
土器研究—律令的土器様式の西・東3 施釉陶器』古代の土器研究会編

製塩土器 広瀬和雄 1978「第1篇 小島東遺跡」『岬町遺跡群発掘調査概要』大阪府教育委員会
積山 洋 1994「律令制期の製塩土器と塩の流通」『ヒストリア』141号 大阪歴史学会

中世の土器 中世土器研究会編 1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

木製品 奈良国立文化財研究所編 1984『木器集成図録 近畿古代編』奈良国立文化財研究所史料
27冊
奈良国立文化財研究所編 1993『木器集成図録 近畿原始編』奈良国立文化財研究所史料
36冊

石器 平井 勝 1991『弥生時代の石器』考古学ライブラリー64 ニュー・サイエンス社

松山 聡・佐伯公子・溝川陽子 1993「第IV章 遺物 第3節 石器」『河内平野遺跡群の
動態VI』大阪府教育委員会・財団法人 大阪文化財センター

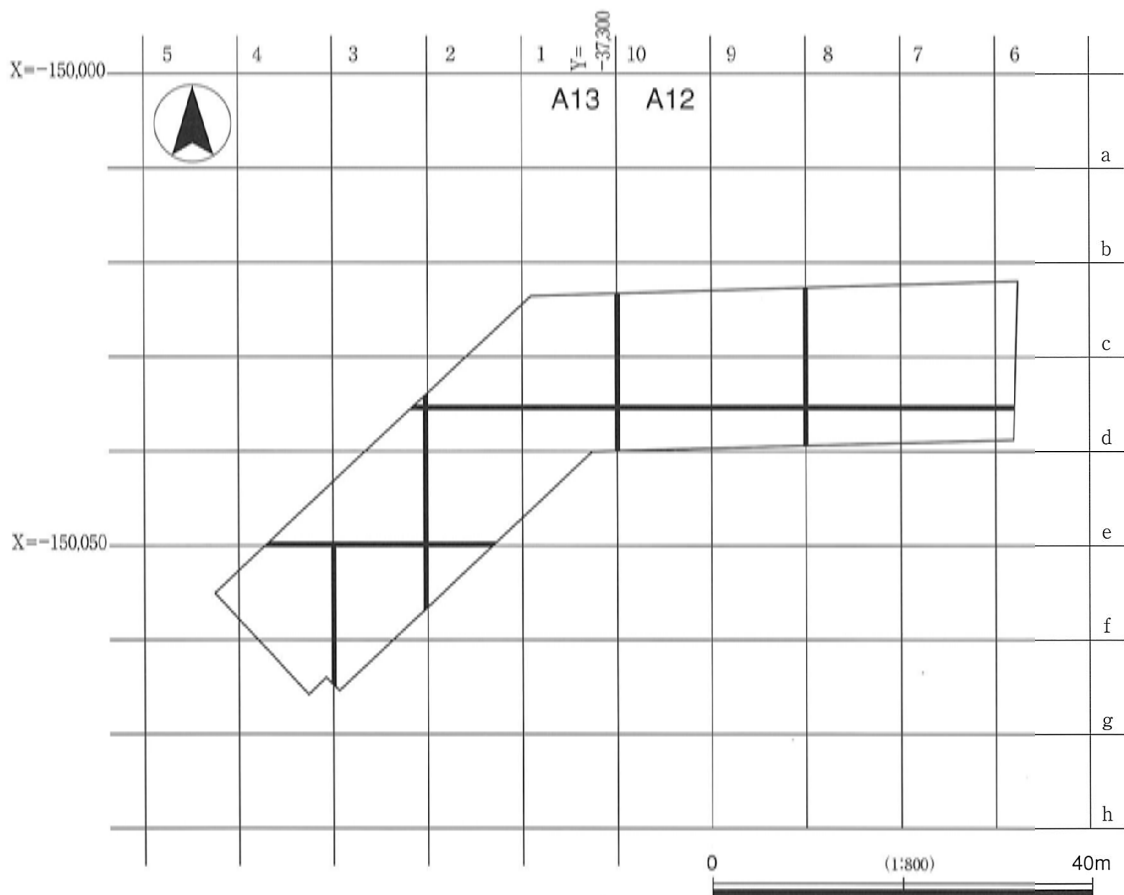


図4 調査区割り図 (S=1/800)

第4章 基本層序

第1節 層と遺構面の基本的認識

今回の調査は、第1章でも記したように、当遺跡における初めての本格的な発掘調査である。また、今後も展開する予定である周辺地域調査を視野に入れ、出来るだけ詳細に分層を行い、その堆積状況や土地利用の変遷、周辺への各層の展開・広がりを推定し、提示するよう心がけた。

当遺跡の調査にあたっては、他のいわゆる低湿地遺跡における調査方法を援用しており、特に池島・福万寺遺跡で行われている層序認識 [井上1998など] については、その多くを参考とした。現代では、大規模な機械化が進み、河川の護岸工事が行われた結果、地表面が洪水などにより供給された土砂で埋没してしまうという機会は減った。しかし、それ以前の極めて最近まで、河川などからの水成堆積物による地表面の埋没、水成堆積物上部の安定、攪拌等による土壌化による地表面の形成、再びその上部への水成堆積物の供給・埋没のサイクルを基本的に繰り返してきた。また、これらの自然の営力以外にも、旧地表面が機能している段階の人為的な盛土や土坑及び溝の形成が行われ、これらが遺構として確認される。これらのうち凸状遺構である盛土による地表面の埋没も見られるが、現代以前は部分的な埋没に留まることがほとんどであろう。現代においては、機械化の発達によりこれらがいずれも大規模に行われており、盛土も土坑も大規模であり、本調査区でも最上部で自然堆積層と同様の規模で、調査区一帯に亘り盛土層（客土）による旧地表面の埋没が確認された。

なお、当調査では、これらの確認される各層のうち、土壌化層や盛土などの人為的攪拌層を「a層」、その下層に位置し、攪拌の及んでいない自然堆積層を「b層」と呼称している。このうち、a層上面は自然条件や人為的行為により削平を受けることがあるものの、概ね旧地表面であるといえ、当然調査の対象となる。a層は、その母材となったb層の質的様相を反映しながら、同時に、層中にa層上面の旧地表面が機能している段階に供給された、面を埋没させるほどではない堆積物や、他所から人為的に持ち込まれたものなどを含む。また、a層上面から掘削された凹状遺構は、例えばそれが特にピットなどの比較的小規模な遺構であると、a層上面が長期間機能した結果、凹状遺構掘削以降のa層の攪拌・土壌化により本来の掘り込み面では確認されなくなることが多い。このことから、b層上面の調査（以下ではb面調査と称する）はa層上面の調査のみでは確認できない、旧地表面機能時ながら最終的な景観にはあられない様相を知る上で非常に有効な調査となる。今回の調査でも第5面と第5b面の調査で景観に大きな差が見られていることから、b面調査の有効性は追認されているといえる。また、a層はb層の質的様相を反映するのみならず、堆積の様相も反映する。当然、a層上面段階の旧地表面機能段階に、b層まで及ぶ加工はなされるのだが、さらにb層の粒度などを検討することにより、基本的な旧地形の起伏を知る上でもb面の調査は有効である。

また、後述する各層は質の変化やa・b層の状況により細分し、機械掘削後最初の層を第1層と呼称し、以下、第2層…となる。なお、基本的に各層の上面が同一番号の面である（つまり第5層の上面が第5面ということ）。さらに、各層は層が見られる範囲や層の質的類似性や景観・時期的類似性から第3-1層、第3-2層のように枝番を付して呼称する場合もある。

第2節 基本層序と地形変化の概要

本調査区では、第3章の調査の方法で記したように、国土座標に則して土層断面観察用のアゼを残したのだが、調査区の形状の都合上、東西で調査区を横断する断面が存在しない。また、調査地の条里地割の都合上から、西半では南北方向の断面図を提示する必要がある。これらから、本報告では東西方向の $X=-150,035 \cdot 150,050$ ライン、南北方向の $Y=-37,320$ ラインを縮小編纂し図5～9に掲載した。以下、各層の概要を記述する。

第1層は、灰白色～灰色(5Y7/1～6/1)細～中砂を基本とし、粗砂～細礫が混じる。第1層は砂礫をより多く含む第1-1層と、それよりは砂礫を多くは含まないものの、後述する第2層よりも砂礫を多く含む第1-2層に細分が可能であったが、第1-1層が確認できたのは、機械掘削の都合上ごく一部のみである。近世後半の層である。

第2層は、オリブ黄色～灰オリブ色(5Y6/3～6/2)シルト～極細砂を基本とし、第1層よりも基本的に細粒である。東半では極粗砂～細礫が多く混じるが、西半では僅かにとどまる。また、一部では第3面の島島肩部にすりつく形で、第2層の母材となった第2b層のシルト～細砂の堆積が見られた。近世後半の層である。

第3層は、粘質シルト～極細砂を基本とし、東半では2層に、西半では4層に細分が可能であった。これは、第4面段階に西半が低かったことに起因し、当然低まり部分を中心に洪水が襲った結果、基本的には調査区西半ほど粗い。ただし、低いといっても西へのなだらかな傾斜であり、大きな起伏は見られない。なお、第3層細分各層ではb層がほとんど見られない。一部、島島の芯や西半の各土壌化層間に見られるが、第4層以前の分厚いb層に比べると、確実に薄い堆積である。

第3-1層は灰黄色～にぶい黄色(2.5Y6/2～6/4)粘質シルト～極細砂で、粗～極粗砂が混じる。混じる砂は上下の各層より少なく、西半は東半に比べやや粘質である。第3-2層は暗灰黄色～黄褐色(2.5Y5/2～5/4)粘質シルト～極細砂で、粗～極粗砂が混じる。全体的に第3-1層よりも砂を多く含む、色調はやや暗い。なお、南西部の一部ではオリブ灰色(10Y5/2)中砂～細礫が多く混じるシルト～極細砂部分も見られた。第3-3層は暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト～極細砂で、極細～粗砂が混じる。第3-3層は調査区西南端部で部分的に上下に分層され、上部は粗砂～小礫を主体とし、下部は粗砂混シルト～小礫である。第3-4層は灰オリブ色(7.5Y5/2)シルトで粗～極粗砂が混じる。

第3-3層や第3-4層は東側へ向かい、第4面に繋がる層であり、東側で第4面が機能している段階に西側にのみ堆積した層である。面の繋がりから見ると、これらの2層は第4層呼称としたほうがよいかもしれないが、層相を見ると第4層とは異なり第3層に類似する。また、検出される遺構も、第3面に連なるものである。このことから、これらの2層の帰属を第3層とし、それぞれ第3-3層、第3-4層と呼称した。

また、第3層以上の各層は、層中にb層がほとんど見られないという点で共通する。第3層の時期は中世と認識しており、中世から近世には、大規模な洪水等による被害があまりなかったものと考えられる。

第4層は、にぶい黄褐色～灰黄褐色(10YR5/4～4/2)粘質シルトを基本とし、東半では粗砂～細礫が混じるが、西半では粗粒の砂はほとんど混じらない。また、中央部以東では、層中に土器を多く含む。この相違は、第4b層最上部の質的相違が影響している。**第4b層**は、灰黄色～黄灰色(2.5Y7/2～5/1)

粗砂～細礫を主体とする上部と、灰色～暗青灰色（7.5Y5/1～5B4/1）粘質シルト・粘土～細砂を主体とする下部に大きく分けられる。まず、湿地性の堆積物と思われる第4 b層下部が東半東側第5面の微高地部分を除く箇所に堆積し、その後調査区のほぼ中央部及び、調査区西半西側に粗粒の第4 b層上部の堆積が同下部の堆積を挟み、見られる。この部分が第5面段階で他所よりも目立って低かったということもないのだが、最も砂の堆積が厚い部分であり、結果として微高地となった第4面では掘立柱建物が検出された。さらに、最終的には再び湿地性の堆積物がとくに低まり部分で見られ、第4面が形成されるが、微高地以東は第5面段階の微高地が基本的に存続し、同以西は低まりを呈する。古代～中世前半の層である。

第4 b層～第5層間には、調査区西端部の一部において第5-0層、およびその母材となった第5-0 b層が見られた。第5-0層は、調査区西端～Y=-37.330ライン付近以西に見られる層で、暗青灰色（5B4/1）粘土～シルト。第5-0 b層は、第5面廃絶後に堆積した比較的細粒の堆積物であるが、最上部には中～極粗砂が見られ、第5-0層が見られない部分では第4 b層の最下部に見られる層に対応すると思われる。本来は、第5-0層はある程度の広がりを見せていたものと考えられるが、第4 b層下部の粗粒の堆積物により削平されてしまったと考えられる。

第5層は、暗オリーブ褐色～黒色（2.5Y3/3～5Y2/1・N2/）粘土～シルトを主体とする層である。西半から東半西側では薄い黒色粘土層で粘性が強く、東半東側では第5 b層によって形成された微高地上に形成された層で、下層の砂を巻き上げ砂が多く混じる。第5 b層は、西半西側の第6面で高まりが検出された以西では、オリーブ黒色（5Y3/1～2/2）の暗色系の色調で細粒の堆積物を主とする。唯一、第6面で溝が検出された部分では、この溝を埋没させたシルト～極粗砂の粗粒の堆積物が見られるが、急激に側方変化し、周辺は先述の細粒の堆積物となる。また、この氾濫堆積層で完全には溝は埋没しておらず、その上層には周辺と同様に細粒の堆積物が見られる。一方、東半から西半東側では第6面から第5面まで第5 b層の分厚い堆積が見られる。第6面廃絶後、しばらくは細粒のシルト～極細砂の堆積が見られるが、その後急激に粗粒の堆積物に変化する。これは、第6面段階の東側高まりすぐ東側の低地部を最終的に襲ったもので、その厚さは2.5mにわたる。この堆積物は東側にのみならず、高まりを超えた西側にも厚く堆積している。ただし、東側への堆積が主であり、高まりを形成し、また西側よりも粗粒であり、この部分の第5層は砂を多く含む。一方、高まり以西は第6面西側の高まりまでの第6面段階の低地部をほぼ完全に埋めている。最終的にさらにその低まりが残った部分に細粒の堆積物がたまり第5層が形成される。第5層は古墳時代の層である。

第6層は、暗オリーブ灰色～オリーブ黒色（2.5GY3/1～10Y3/1）シルト層で、西半では第6 b層の極細～細砂が顕著に混じる。なお、調査区東半東側では炭化物が含まれるとともに、下層の第7層を巻き込んでいると思われ、検出段階では第7層は見られなかった。第6 b層は、灰色～明黄褐色（10Y4/1～2.5Y6/6）シルト～極粗砂を主とする層である。東半では高まり中に比較的厚い第6 b層が見られた。この盛土中の第6 b層は分層が非常に困難であり、層中には小規模な砂層が複数枚見られたが、ほとんど連続しない。なお、この高まり以東は第5 b層の氾濫堆積層により、不明な部分を挟み第7層が見られない箇所となる。一方、この高まり以西は急激に低まり第7層からの厚みが薄い部分となり、東半西側の小規模な高まりまで明瞭な第6 b層の堆積が見られない。この小規模な高まり以西はもともと第7面の低まり部分にシルト等が堆積しており、その途中で局地的ではあるが、上方粗粒化するシルト～細礫の堆積が見られる。この低まり以西の再び第6 b層がほとんど見られない部分を挟み、第6面の

高まりが存在する。この高まりは第6 b層の堆積により形成されたものであるが、第7面段階で特に低かった箇所ではなく、第7面段階の高まり周辺に堆積している層である。この高まり周辺の粗粒の堆積物から考えると、先述の、急激に低まり第6 b層がほとんど見られない箇所はやや奇異な感がある。しかし、第6 b層の堆積後、西側の高まりの肩部が整形され、さらに東側の高まりを形成する際に、この粗粒の堆積物が側方変化した層を盛り上げたために削平された結果、第6 b層が見られないものと考えられる。なお第6層～第8層は弥生時代中期前半頃の層である。

第7層は、青黒色～黒色(5BG2/1～N2/)粘土～シルトで極細～細砂を多く含む層である。粘性の強い土壌化層で、層中に植物遺体を含み、一部では層下部に集中している。東半東側では先述のとおり、第7層は独立しては見られず、第6層と同一層と考えられる。**第7 b層**は、暗オリーブ灰～暗青灰色(5GY4/1～5B4/1)シルト～極細砂を主とする氾濫堆積層である。調査区中央部東側では、植物遺体を多く含む褐灰色～灰褐色(7.5YR5/1～4/2)の有機物層が横方向に見られた。ただし、部分的にそれよりも粗粒の氾濫堆積層が見られる。まず、西半では第8面段階に低まっていた部分に第8層やその直上の粘土～シルト層を抉るようにして中～極粗砂の堆積が見られる。この砂は比較的局地的な堆積で周辺に向かい細粒化する。また、東側東端部分に細～極粗砂の堆積が見られるが、西側に向かい明瞭な粗粒の堆積物は見られなくなる。これら2つの砂層は、調査区の西端と東端とに分かれていることもあり前後関係は不明であるが、ほぼ同時期の堆積と考えられる。なお、これらの砂層の上下には粘土～シルト層が見られる。

第8層は、灰色～オリーブ黒色(5Y4/1～3/1)粘質シルト層で、西半では極細砂を主に含む粘性の強い土壌化層である。西半は地形的にも高く、下層の氾濫堆積物を攪拌しているため非常に砂質である。東半は、地形的にもやや低く、湿地化していたためか、部分的に植物遺体を含む黒味を帯びたラミナの見られる有機物層として見られる。調査段階にはラミナが見られたため、安定した旧地表面としての認識はなかったのだが、西半との下層の堆積状況の検討、対応関係から、この層が西半の第8層に対応すると判断された。**第8 b層**は、オリーブ黒色～黒色(5Y3/1～5Y2/1)粘土～シルトを主とする。調査区東半～中央部は、粘性の強い植物遺体を含む層であり、層中には弱い土壌化層が2層程度見られる。調査区西半の第9面段階で低まっていた部分には、最下部にラミナの見られない淡い澱んだ粘土～シルト主体の層が堆積しており、その上層に細～粗砂の、西側ほどやや粗粒の堆積物が見られ、西側ほど厚く堆積し、周辺に向かい細粒化する。砂層の堆積により高まった部分以外にはその後、先述の粘土～シルトの氾濫堆積層が調査地一帯に堆積し、その後第8層が形成される。

第9層は、黒色(7.5Y2/1～10Y2/1)粘土～シルトの土壌化層で砂がほとんど混じらず、調査区東半東側でのみ見られた。中央部以西では上面の遺構により層が分断され、繋がりが不明確ではあるが、東半東側の第9層よりも明らかに黒味が強い。東半東側では第9層の直下に第10層が見られ、第9 b層は第9層中に巻き上げられた状況でしか見られない。おそらく第9層の母材となった層はその堆積が薄く、その供給範囲も東側のみであったと考えられる。堆積がなかったか、あるいは非常に薄かった他の部分では第10層上面が継続して使用されたのであろう。

記述がやや複雑にはなるが、西半で第9 b層と調査時に認識した層は、東半東側で第9 b層と認識した第9層中に見られた層とは異なり、第10層の母材となった層であることから第10 b層として捉え、第10層にて記述することにする。また、そのb層上面に形成されたa層も、層相からは第10層といえるが、その上面は調査段階では上層から順々に層を除去していった結果、第9面と認識した。先述の

とおり、面の繋がりからではなく層の様相から判断する第9層は、調査区の東端に見られるのみであり、層序を記載する本章では、東端以外で第9面を構成する層として認識した層を、層相から第10層と考え以下で記載することとする。なお、第9層は弥生時代前期～中期前半頃の層である。

第10層は、黒色(N2/)シルト質粘土層で、強く黒色を呈する。下部に向かうほど色調が淡く漸移的にb層に変化する。調査区東半の中央付近Y=-37,280ライン付近では土壌化の弱い部分が見られたほか、層中に酸化鉄が見られる部分もあった。母材となった第10b層は、青灰色(5B5/1)シルト質粘土層を主とする。第10層との層境は不明瞭で、植物根茎跡などいわゆる生痕による凹凸が激しい。なお、調査区中央部以西では、このシルト質粘土層上部に砂層が見られ、調査区中央部ではオリーブ黄色～灰色(5Y6/3～5/1)粗砂～細礫の、さらに西ではオリーブ黄色～オリーブ黒色(7.5Y6/3～3/2)中砂～小礫を主体とする。遺物の出土は見られないが、層の様相は池島・福万寺遺跡の第4黒色粘土層に類似し、縄文時代晩期～弥生時代前期相当層と考えられる。

第11層は、掘削深度の都合上、調査区の東半で部分的に見られたのみで、第10層同様に強く黒色を呈する黒色(N2/)シルト質粘土層である。確認された範囲内では、10～20cm程のレベル差が見られた。また、確認された範囲内ではあるが、層中には粗粒の砂が含まれなかったことから、この層の母材となった第11b層は、東半の第8層以下で見られたようなシルトから細砂を主とする層であったと考えられる。また、西半では一部で深掘りを実施したにも関わらず第11層は確認されず、第9b層の下層には砂層と黒色の有機物層が見られたのみである。このことから、第11層は西へ向かい下がっていくものと考えられる。遺物の出土は見られないが、層の様相は池島・福万寺遺跡の第5黒色粘土層や長原遺跡の第9C層に類似し、縄文時代後期相当層と考えられる。

以上、当遺跡の層序を見てきたが、大きく3つの段階に分けてまとめておきたい。第1は上部の第1～3層で砂質であることを基本とする。調査区東半はシルトが多いが、西半は若干砂質が多く粗い土壌化層となっている。地形的にも、平坦化が前段階までにある程度達成されており、また、明瞭に大規模な砂層は見られない。なお、平坦な地形と関係があると思われるが、いずれの面でも調査区の全域で耕作に関する遺構が検出されている。なお、第3層は粘質であり第4層にやや類似し、下層からの層相の変化は漸移的であり、堆積環境の変化も漸移的であったと考えられる。第2は第4層～8b層の各層で、粘質シルトの土壌化層と分厚い氾濫堆積物が交互に堆積している。この段階は分厚い氾濫堆積物とその上部の土壌化層という低湿地遺跡調査における典型的な状況が見られる。地形の変化がダイナミックな時期であり、氾濫堆積物による地形の逆転も見られる段階であるが、最終的には第4面で地表面の平坦化がある程度達成される。なお、第8層および第8b層は西半がこの段階区分に合致するような分厚い氾濫堆積物が見られるが、東半ではそのような分厚いb層の堆積は見られない。その意味では、第8層段階は移行期的様相であり、第7b層から第4層が典型的様相であるといえる。第3は第9層以下の各層で湿地性の堆積物が主となる段階である。ただし、第10b層にはやや粗粒の堆積物も見られる。それ以前の段階で低まっていた部分には、その低まりを埋めるような堆積があるものの、基本的に堆積のスピードは遅いものであったと考えられる。

<参考文献>

井上智博1998「IV. 遺構面の認識と基本層序」岡本茂史編『池島・福万寺遺跡 発掘調査概要』XXI 財団法人大阪府文化財調査研究センター

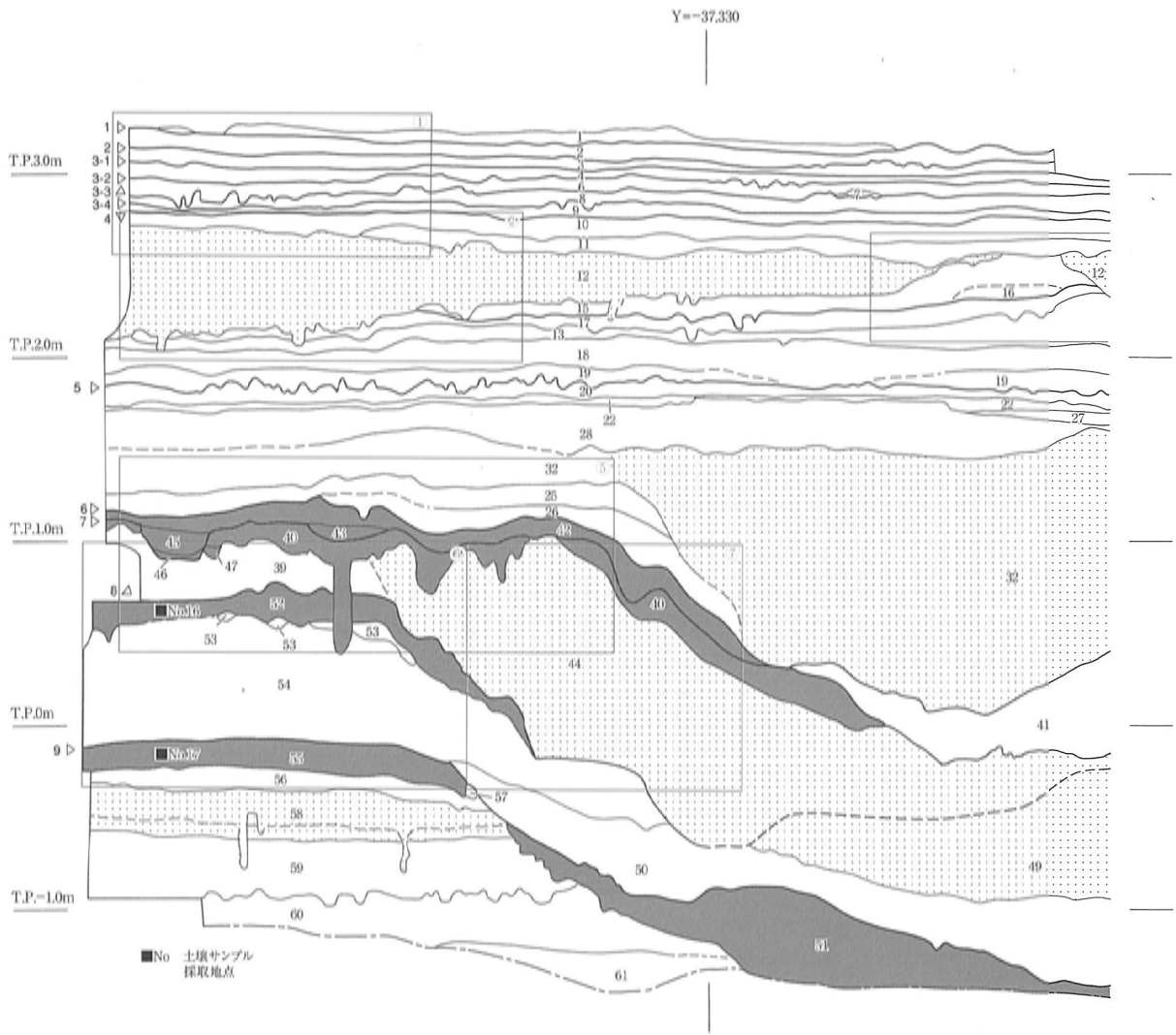


図5 X=-150,050 ライン断面

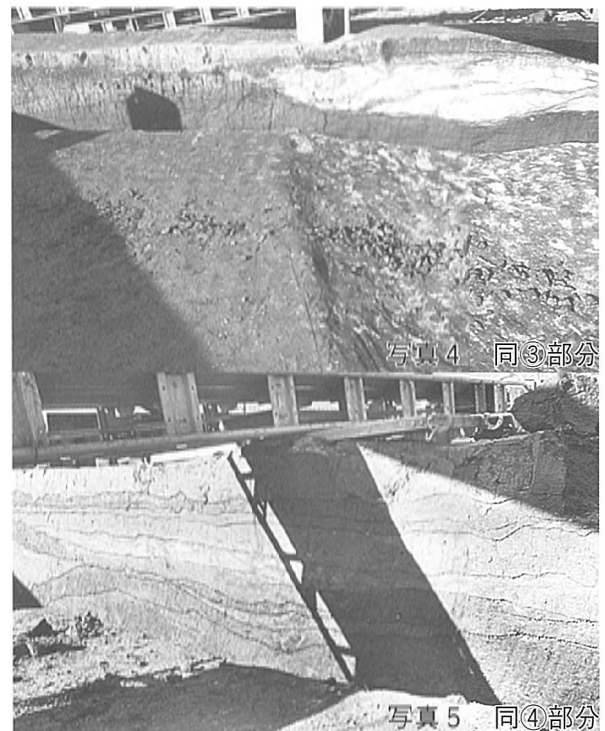
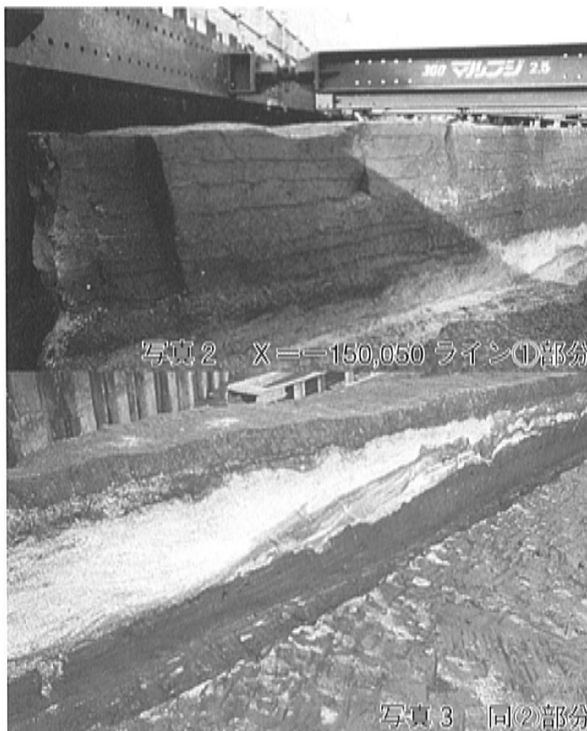
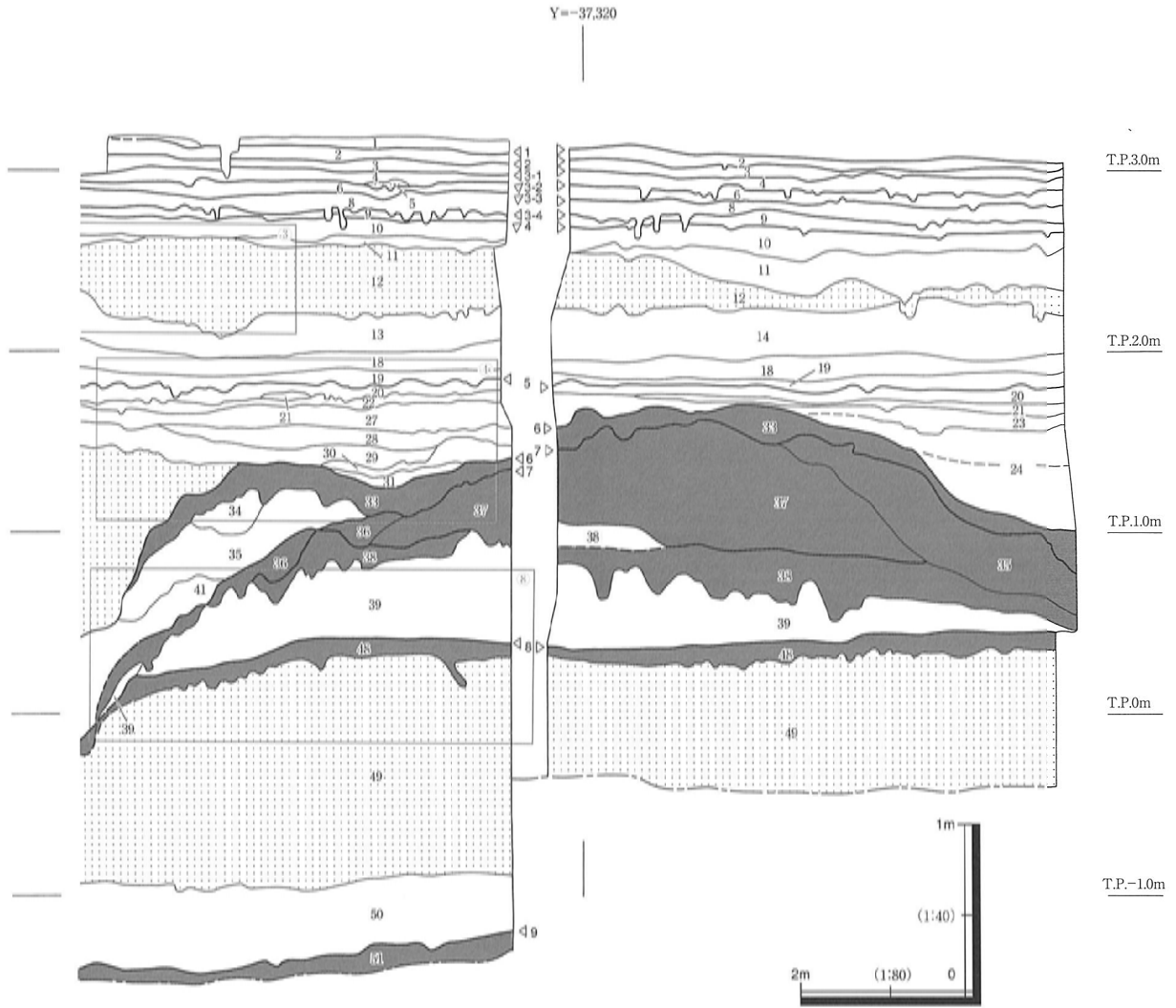
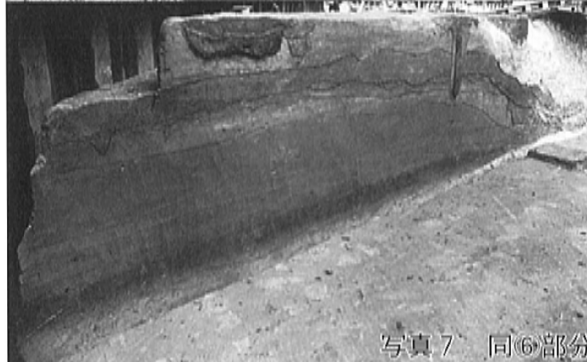


写真3 同②部分

写真5 同④部分



模式図 (縦 S=1/40、横 S=1/80)



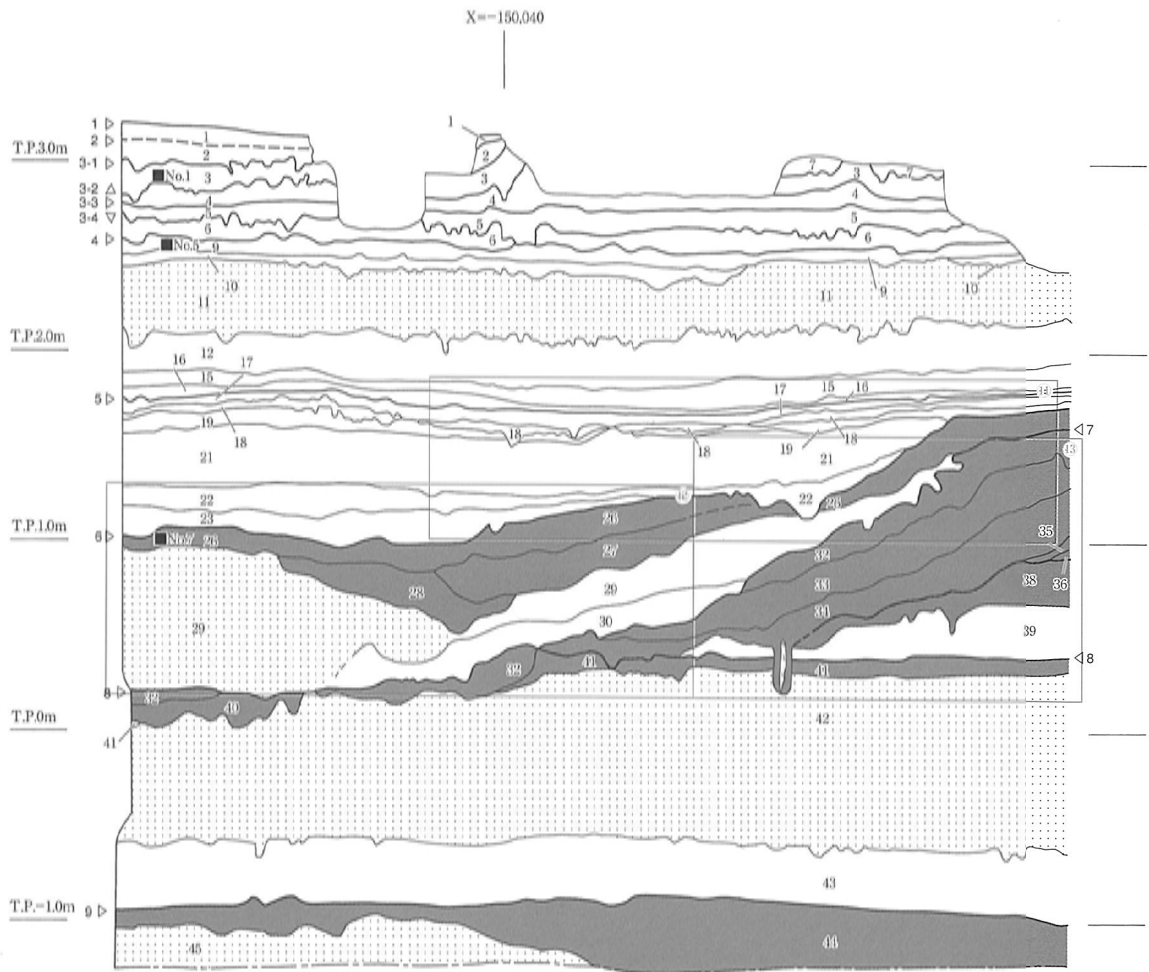
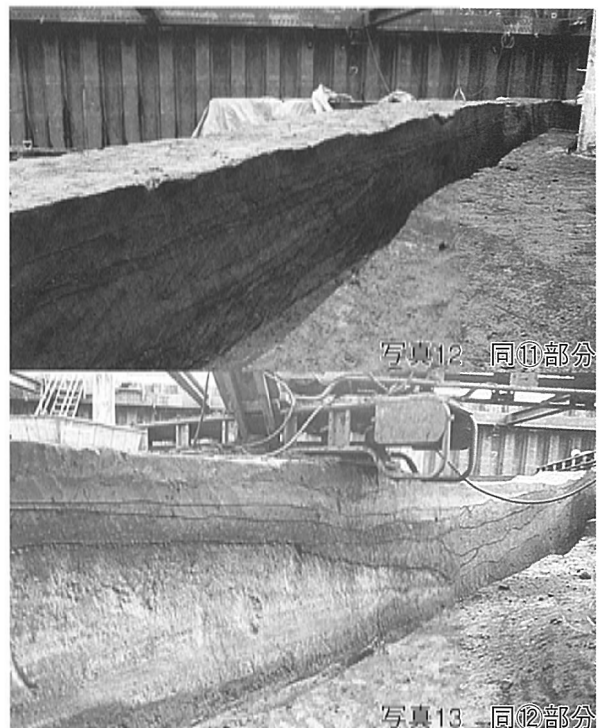
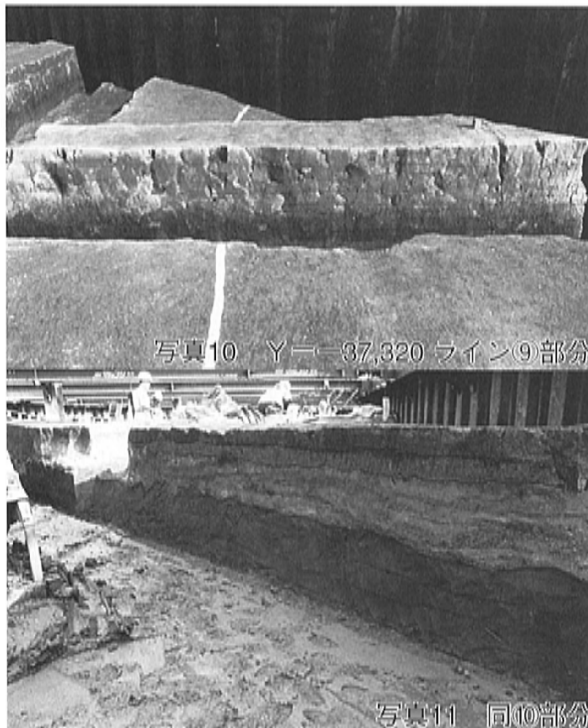
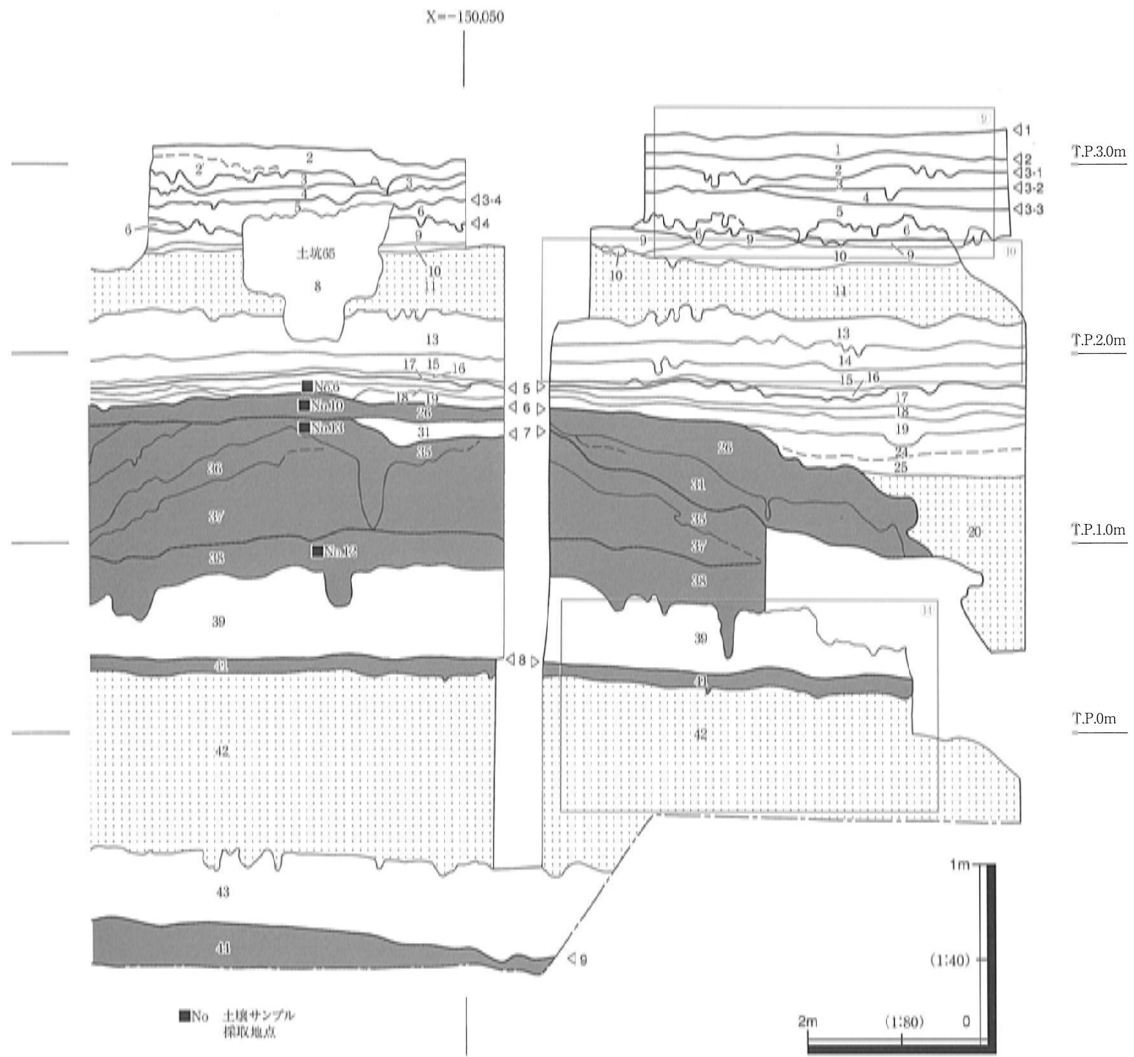
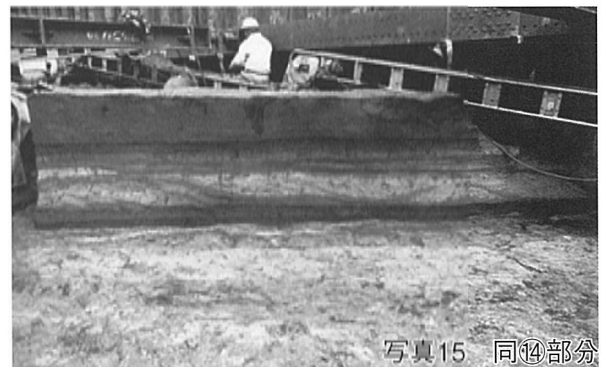


図6 Y=-37,320 ライン断面





模式図 (縦 S=1/40、横 S=1/80)



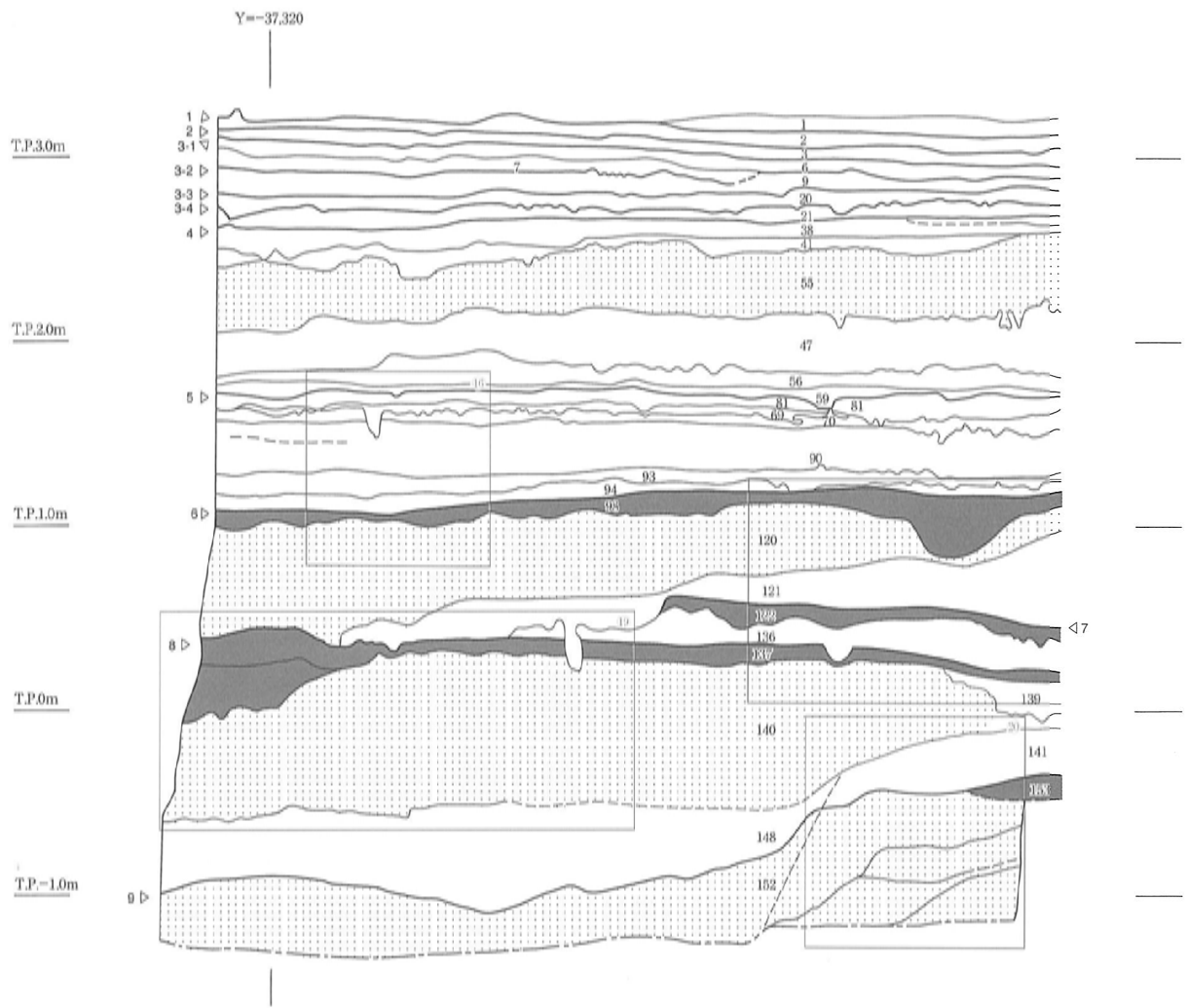


図7 X=-150,035 ライン断面



写真16 X=-150,035 ライン⑬部分

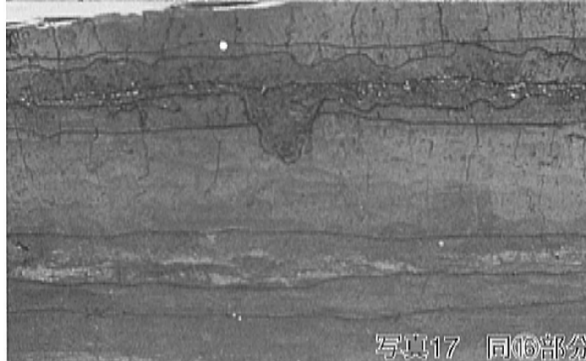


写真17 同⑬部分

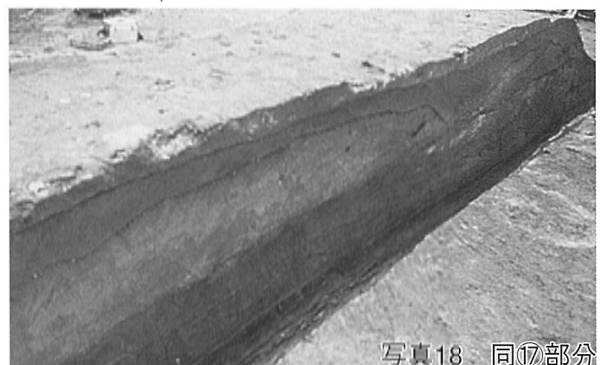
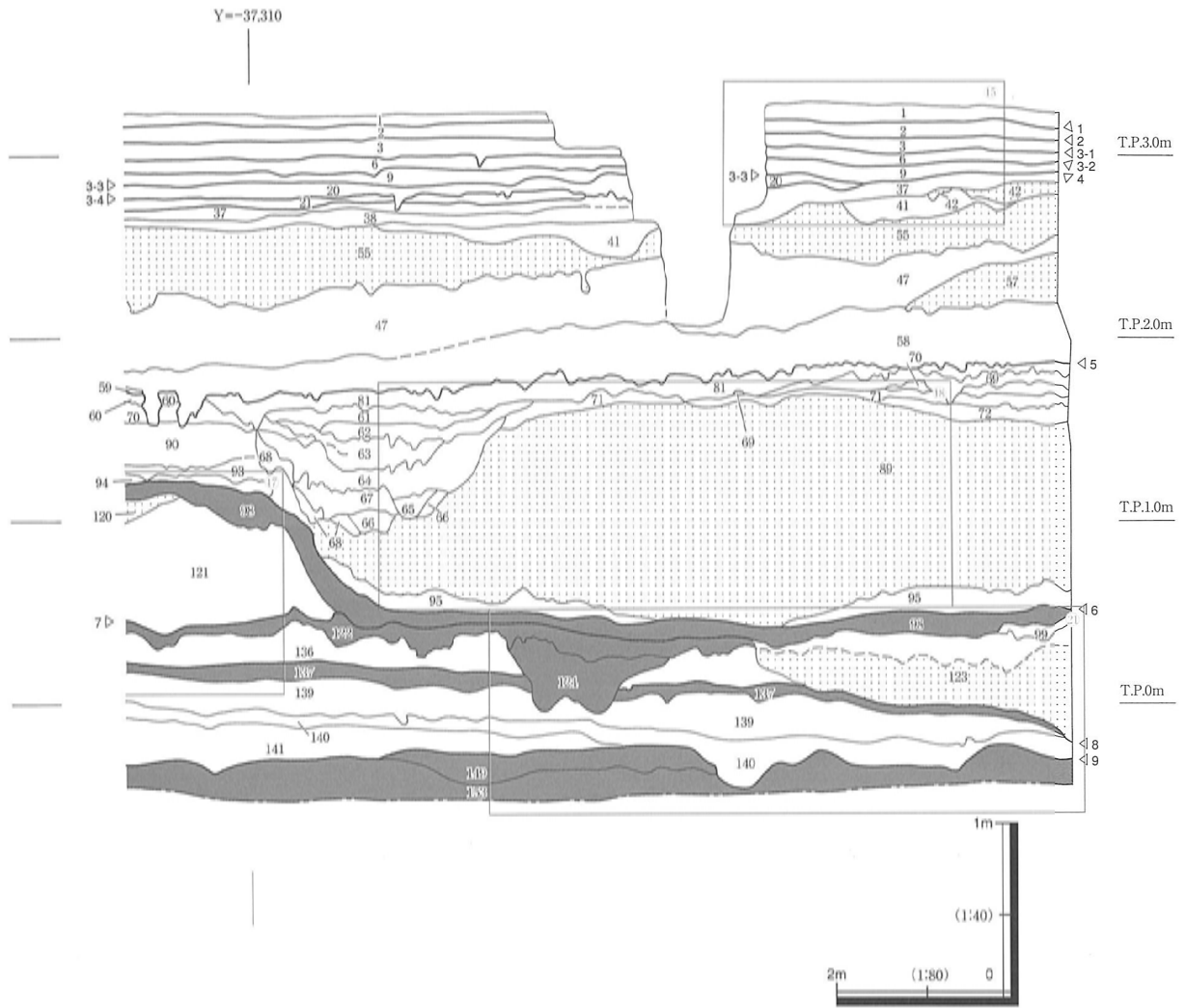


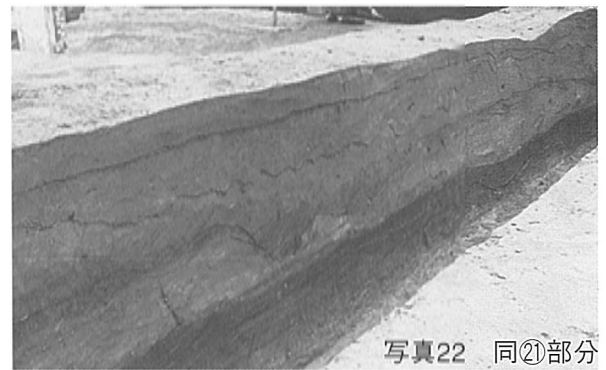
写真18 同⑭部分



写真19 同⑭部分



模式図(1) (縦 S=1/40、横 S=1/80)



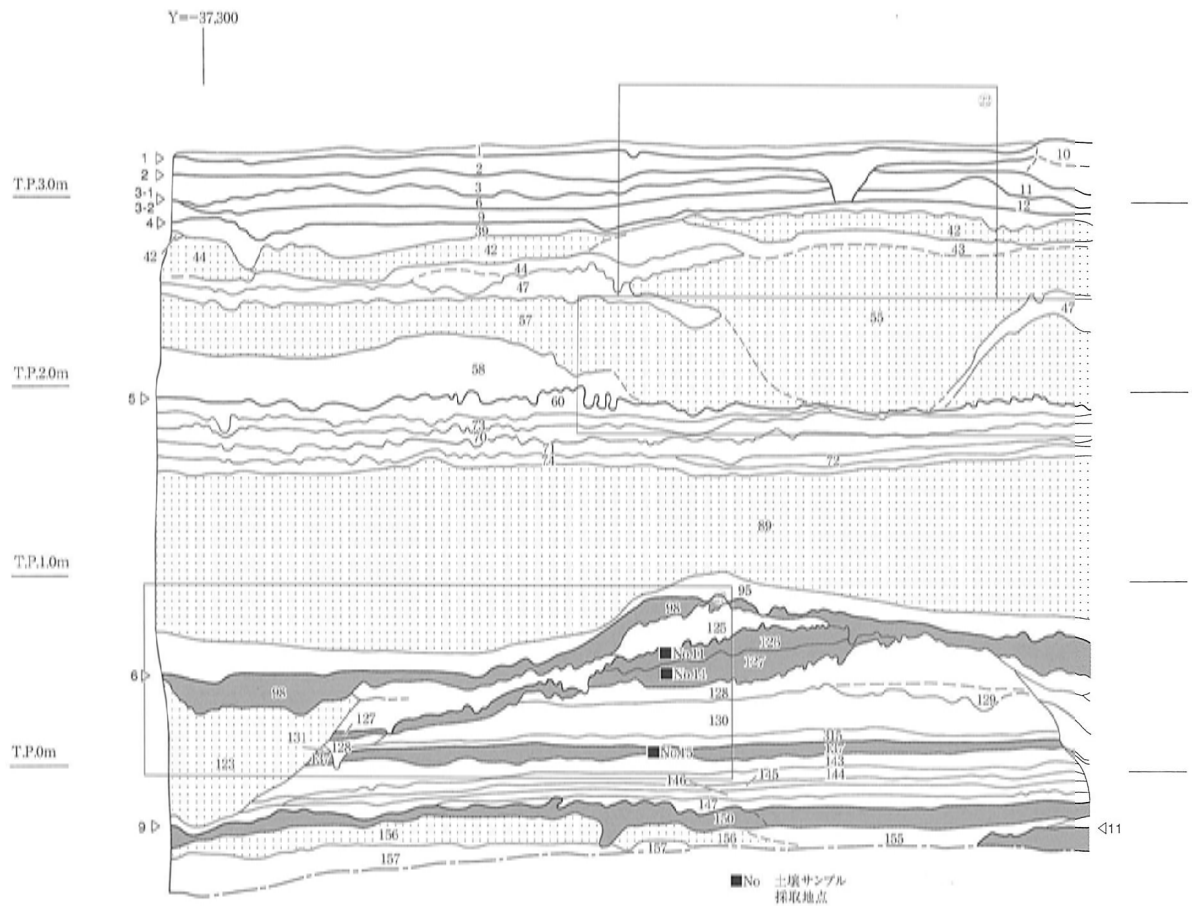
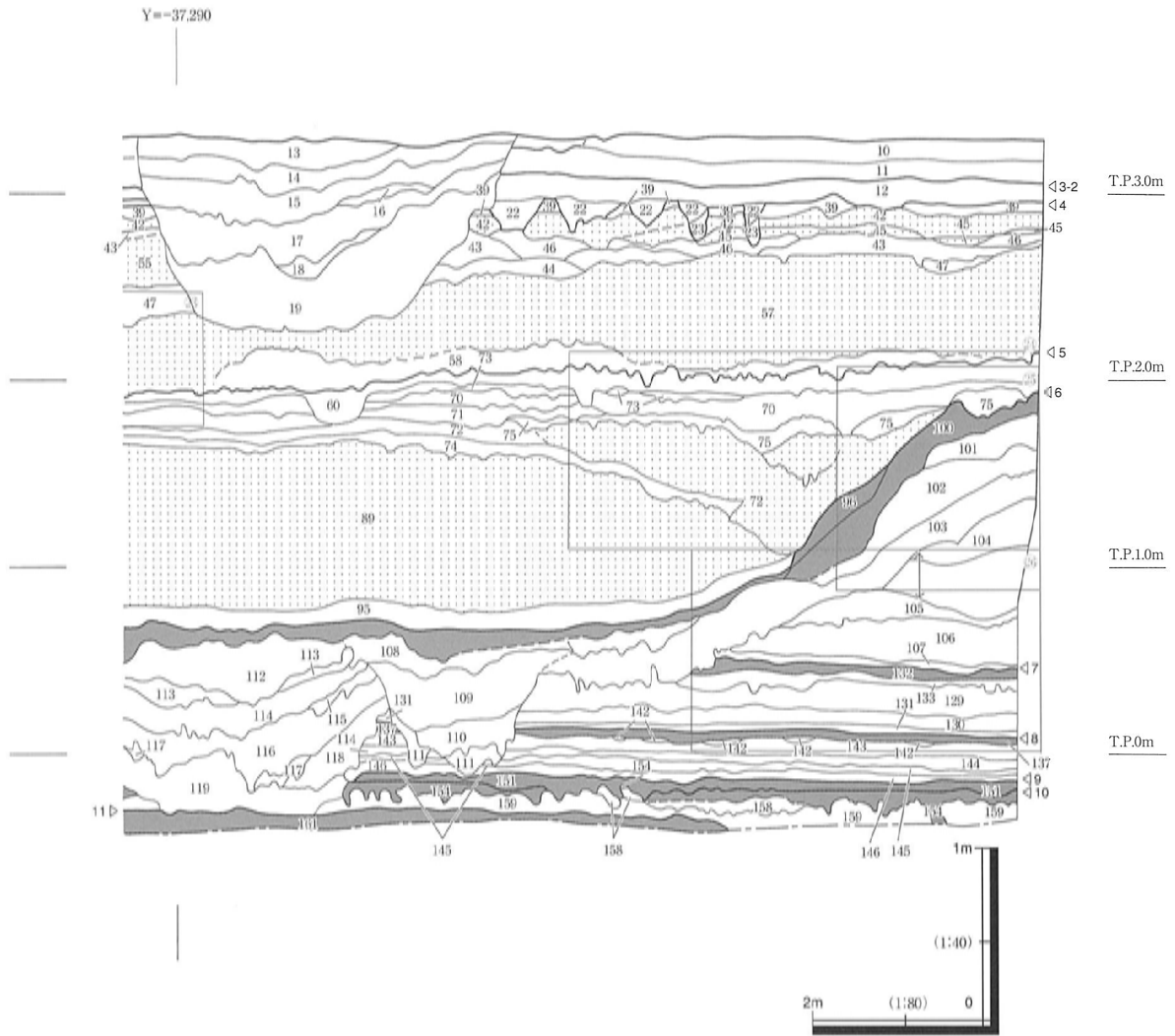
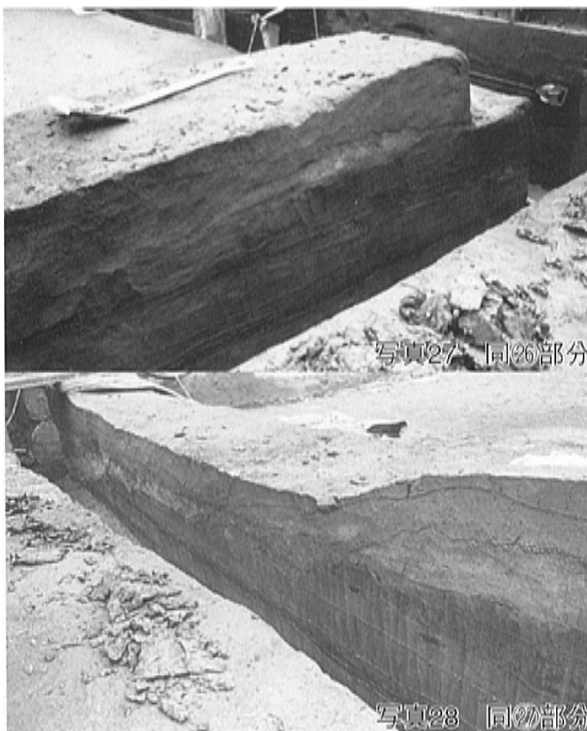


図8 X=-150,035 ライン断面





模式図(2) (縦 S=1/40、横 S=1/80)



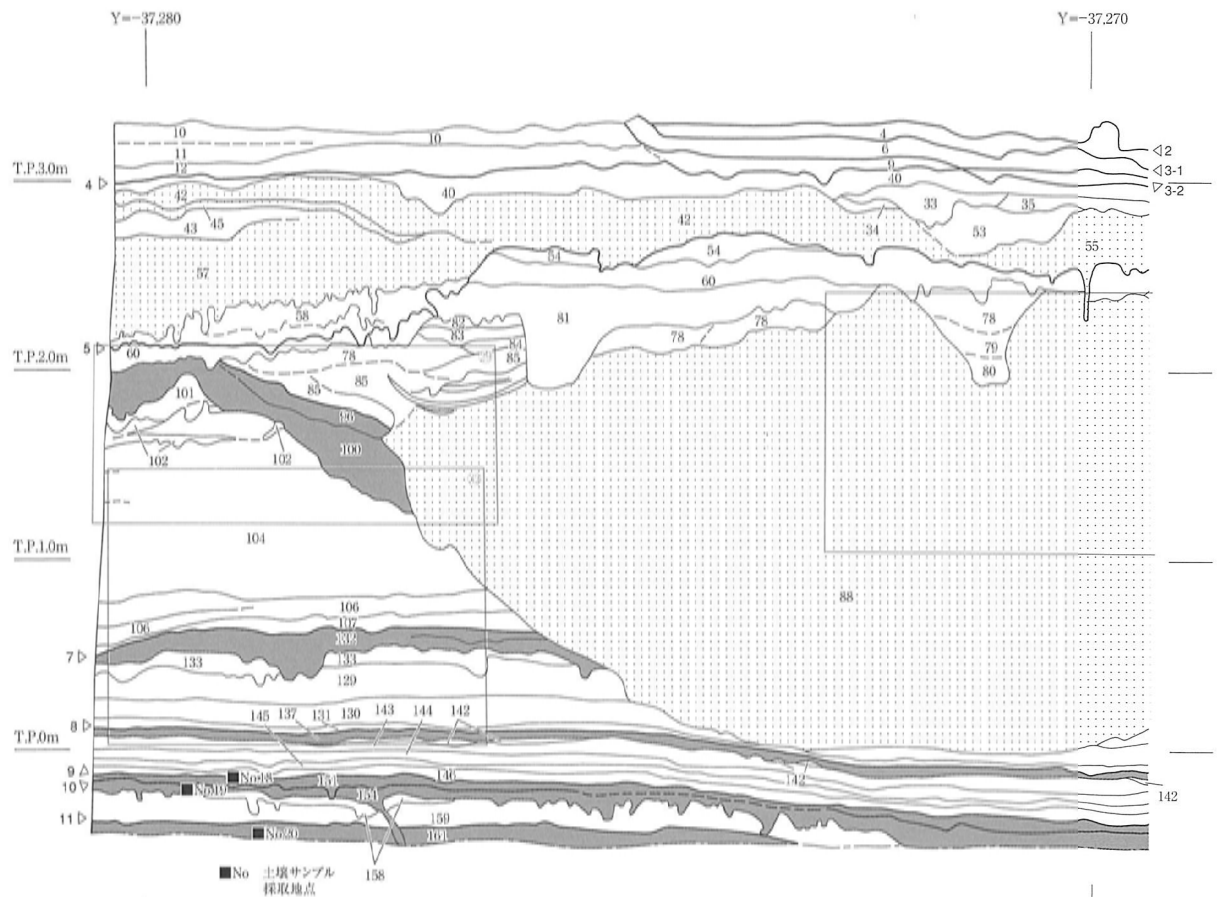
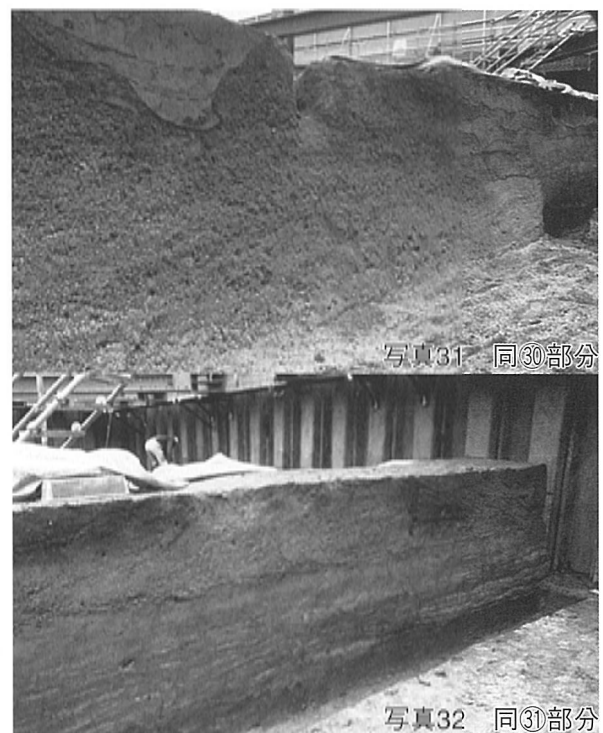
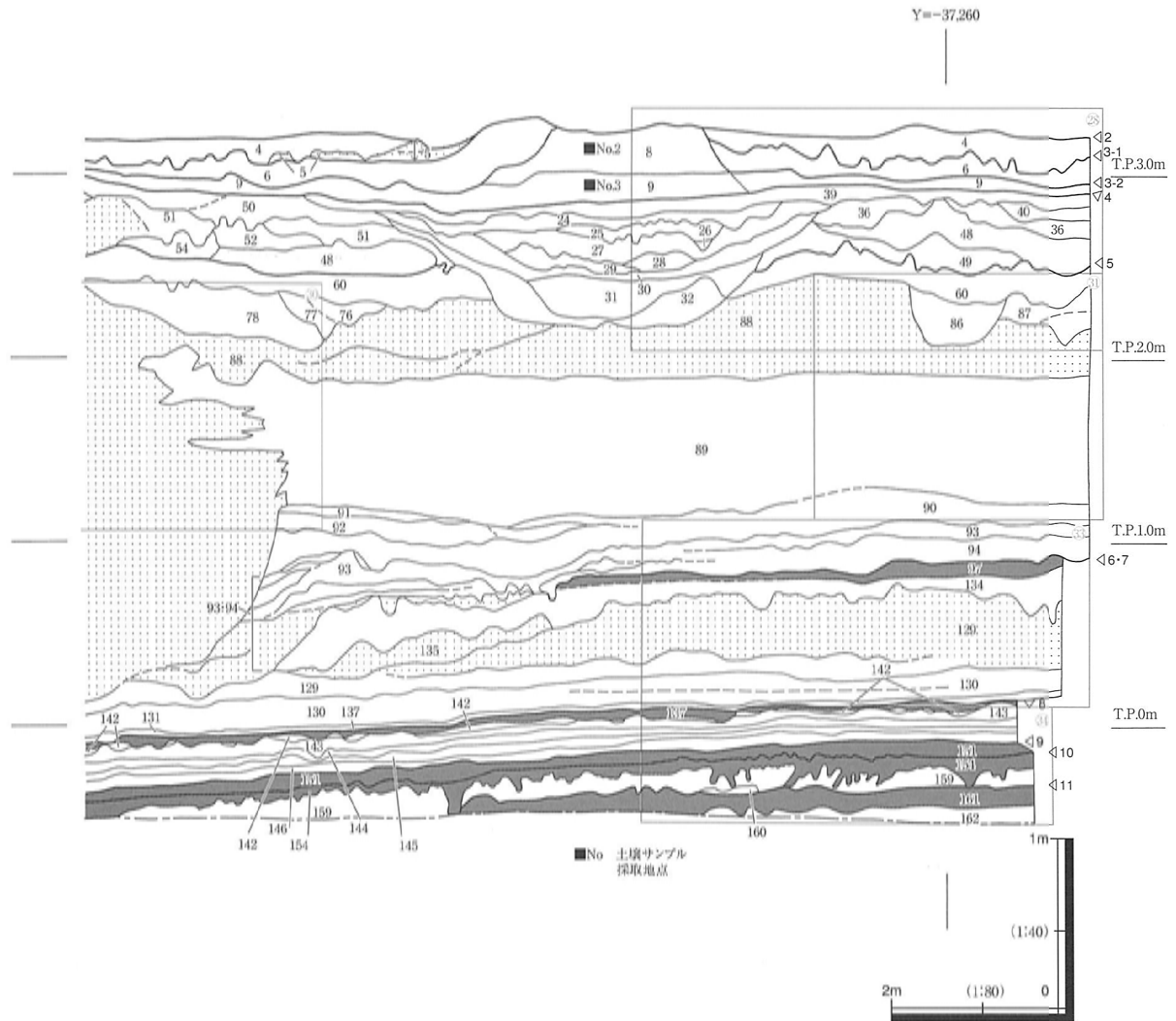


図9 X=-150,035 ライン断面





模式図 (3) (縦 S=1/40、横 S=1/80)



図5 X=-150.050ライン断面注記一覧

1 5Y6/3	灰	シルト～極細砂	極粗砂～小礫含む	機械掘削除去層
2 5Y6/3～4/1	にぶい黄～黄灰	中砂～粗砂シルト	砂あまり含まない	1層
3 5Y6/3～6/2	オリープ黄～灰オリープ	シルト～極細砂	極粗砂～小礫僅かに含む	2層
4 2.5Y6/2	灰黄	シルト～極細砂	粗砂～極粗砂含む 粘性束より強い	3～1層
5 2.5Y7/4	浅黄	粗砂～極細砂		3～1層
6 10Y5/2	オリープ灰	シルト～極細砂	中砂～小礫が多く含む調整区 南西部の第3～2層	3～2層
7 2.5Y7/4	浅黄	中砂～極粗砂		3～2 b層
8 2.5Y5/2	暗灰黄	シルト～極細砂	極細砂～粗砂含む 西半に広がる部分的な層	3～3層
9 7.5Y5/2	灰オリープ	シルト	極細砂～粗砂含む 西半に広がる部分的な層	3～4層
10 10YR4/2	灰黄褐	シルト	極細砂～粗砂を含む 東ほど土器を多く含む	4層
11 2.5Y6/2～5Y6/2	灰黄～灰オリープ	粘土～極細砂	第4 a層下部に見られるシルト質の氾濫堆積物 第4層の母材となったものでやや土壌化した部分が見られる	4 b層最上部
12 2.5Y7/1～6/4	灰白～にぶい黄	粗砂～極粗砂	第4 b層氾濫堆積物上部	4 b層上部
13 7.5Y5/1～4/1	灰	粘土～シルト	極細砂を含む互層状の堆積	4 b (5-0 b) 層
14 7.5Y5/1～4/1	灰	極細砂～細砂	13に続く層であるが、砂質	4 b層
15 5B4/1	暗青灰	粘土～シルト	有機物を多く含むラミナの見られない堆積層	4 b層
16 5B4/1	暗青灰	粘土～シルト	有機物を多く含む	4 b層
17 5B4/1	暗青灰	粘土～シルト	有機物を多く含むやや攪拌されたような土壌化層	5-0層
18 5Y3/1	オリープ黒	粘土～シルト	僅かに極細砂～細砂を含む自然堆積層	4 b (5-0 b) 層
19 5G1.7/1	緑黒	粘土～シルト	第5層上部に部分的に見られる黒い有機物層	4 b (5-0 b) 層
20 2.5Y3/3	暗オリープ褐	粘土～シルト	極粗砂含む ところにより粘性強くなる	5①層
21 10YR5/4	にぶい黄褐	極粗砂	第5-①層下部の砂層、僅かに所々見られる	5②層
22 N2/	黒	粘土		5③層
23 N2/	黒	粘土～極細砂	部分的に粗砂含む	5③層
24 2.5GY4/1～3/1	暗オリープ灰	粘土～極細砂	第6面を覆う氾濫堆積層、砂	6面溝536埋土
25 7.5Y3/2	オリープ黒	シルト～細砂	細砂にシルトを含む やや土壌化	5 b層
26 5Y3/1～2/2	オリープ黒	粘土～シルト	有機物を含む第6層上部のラミナ見られる層	5 b層
27 7.5Y5/1	灰	シルト～極粗砂	やや粘性の強い土壌化層	5 b層
28 7.5Y6/2～4/1	灰オリープ～灰	極粗砂	一部に粗砂～極粗砂含む	5 b層
29 5Y3/1～2/2	オリープ黒	シルト～極粗砂	やや土壌化	5 b層
30 2.5Y3/1	黒褐	細砂～中砂	ややシルト含む	5 b層
31 5Y3/1～2/2	オリープ黒	粘土～シルト	有機物を含んだ第6層上部のラミナの見られる層	5 b層
32 7.5Y7/1～3/1	灰白～オリープ黒	シルト～極粗砂	第6面溝537最終堆積	5 b層
33 10Y3/1	オリープ黒	粘土～シルト	下層の極粗砂を巻き上げてかなり砂質	6層
34 5Y7/4～6/6	浅黄～オリープ	極粗砂		5 b層
35 10Y3/1	オリープ黒	粘土～シルト	第6面溝より523	6層
36 5Y3/1	オリープ黒	極細砂～細砂	シルト含む 第7面溝より553盛土	7層
37 10GY5/1～5BG2/1	緑灰～青黒	粘土～シルト	細砂～中砂含む 有機物・土器片など多数 第7面溝より553盛土 第7層を盛り上げたもの	7層
38 10GY5/1～5BG2/1	緑灰～青黒	粘土～シルト	細砂含む 有機物・土器多数含む 土壌化激しい	7層
39 5GY4/1	暗オリープ灰	粘土～シルト	粘土・シルト・有機物の互層	7 b層
40 N2/	黒	シルト～極細砂	粘性の強い土壌化層	7層
41 7.5Y6/3～2/1	オリープ黄～黒	極細砂～中砂	粘土～シルトをブロック状に含む	6 b層
42 10G2/1	緑黒	シルト～極粗砂	下層を攪拌しているため砂質が強い	6層
43 5Y7/3	浅黄	極細砂	上部に極粗砂が若干見られる	6 b層
44 10Y4/1	灰	シルト～極粗砂	側面及び下部が粗粒な傾向が強い	7 b層
45 10Y2/1	黒	シルト～極粗砂	第7面検出の遺構埋土 炭化物を含む	遺構埋土
46 7.5Y3/1～2/1	オリープ黒～黒	シルト～細砂	第7面検出の遺構埋土 炭化物を含む	遺構埋土
47 5Y2/1	黒	シルト～細砂	第7面検出の遺構埋土 炭化物を含む	遺構埋土
48 5Y3/1	オリープ黒	シルト～極細砂	粘性の強いシルト	8層
49 10YR3/2～2/1	黒褐～黒	粘土～シルト	極粗砂・有機物などを多く含む	7層
50 5Y3/1～10GY2/1	オリープ黒～緑黒	粘土～シルト	極粗砂・有機物を含むが、ラミナの暗い層	8 b層
51 2.5GY2/1	黒	シルト～極細砂	やや土壌化している	10層
52 7.5Y7/1～3/1	灰白～オリープ黒	シルト～粗砂	シルト・中砂・粗砂の互層	8層
53 7.5Y7/1～3/1	灰白～オリープ黒	極粗砂	第8層下部に僅かに部分的に見られる層	8 b層
54 2.5Y2/1	黒	シルト～極細砂	第8、10層間のやや土壌化したような層	8 b層
55 5Y2/1	黒	粘土～シルト	粘性強い	10層
56 2.5GY3/1	暗オリープ灰	極粗砂	土壌化している	10 b層
57 2.5GY2/1	黒	シルト～極粗砂	51のブロック状のもの	10層
58 2.5Y7/4～6/3	浅黄～にぶい黄色	シルト～極細砂	部分的に中砂を僅かに含む	10 b層
59 5Y3/1	オリープ黒	粘土～シルト	極粗砂・有機物含む	10 b層
60 2.5Y4/1	黄灰	粘土～シルト	ラミナ見られない	10 b層
61 10Y6/1～4/1	灰	シルト～細砂		10 b層

図6 Y=-37.320ライン断面注記一覧

1 5Y6/3～4/1	オリープ黄～灰	中砂～粗砂シルト	砂あまり含まない	1層
2 5Y6/3～6/2	オリープ黄～灰オリープ	シルト～極細砂	極粗砂～小礫僅かに含む	2層
3 2.5Y6/2	灰黄	シルト～極細砂	粗砂～極粗砂含む 粘性束より強い	3～1層
4 2.5Y5/2	暗灰黄	シルト～極細砂	中砂～極粗砂多く含む	3～2層
5 2.5Y5/2	暗灰黄	シルト～極細砂	極細砂～粗砂含む 西半に広がる部分的な層	3～3層
6 7.5Y5/2	灰オリープ	シルト	粗砂～極粗砂含む 西半に広がる部分的な層	3～4層
7 2.5Y7/3	浅黄	シルト～細砂	第3-1面地呼両側にすりついた氾濫堆積物	2 b層
8 10Y4/1・7.5Y4/1	灰褐色・灰色	中砂～粗砂・シルト	2層に分離される遺構埋土	土坑65
9 10YR4/2	灰黄褐	シルト	粗砂～極粗砂含む 東ほど土器を多く含む	4層
10 2.5Y6/2～5Y6/2	灰黄～灰オリープ	粘土～極細砂	第4 a層下部に見られるシルト質の氾濫堆積物 上部やや土壌化	4 b層最上部
11 2.5Y7/1～6/4	灰白～にぶい黄	粗砂主体～極粗砂	第4 b層氾濫堆積物上部	4 b層上部
12 7.5Y5/1～4/1	灰	粘土～シルト	極細砂を含む互層状の堆積	4 b層
13 7.5Y5/1～4/1	灰	極細砂～細砂	12に続く層であるが、砂質	4 b層
14 7.5Y5/1～4/1	灰	粘土～シルト	極細砂を部分的に含む やや土壌化した層	4 b層
15 5Y3/1	オリープ黒	粘土～シルト	僅かに極細砂～細砂を含む自然堆積層	4 b (5-0 b) 層
16 5G1.7/1	緑黒	粘土～シルト	第5層上部に部分的に見られる黒い有機物層	4 b (5-0 b) 層
17 2.5Y3/3	暗オリープ褐	粘土～シルト	極粗砂含む ところにより粘性強くなる	5①層
18 10YR5/4	にぶい黄褐	極粗砂	第5①層下部の砂層 僅かに所々見られる	5②層
19 N2/	黒	粘土		5③層
20 2.5GY4/1～3/1	暗オリープ灰	粘土～極細砂	第6面溝537埋土	5 b層
21 2.5GY4/1～3/1	暗オリープ灰	粘土～極細砂	第6面を覆う砂層 粘土～シルト主体	5 b層
22 7.5Y3/2	オリープ黒	シルト～細砂	細砂にシルト含む やや土壌化している	5 b層
23 5Y3/1～2/2	オリープ黒	粘土～シルト	有機物を含む第6層上部のラミナ見られる層	5 b層
24 7.5Y5/1	灰	シルト～極細砂	やや粘性の強い土壌化した層	5 b層
25 7.5Y6/2～4/1	灰オリープ～灰	極粗砂	一部に粗砂～極粗砂含む 21と同じ堆積層か?	5 b層
26 10Y3/1	オリープ黒	粘土～シルト	下層の極粗砂を巻き込んでかなり砂質	6層
27 5Y6/3	オリープ黄	シルト～細砂		6 b層
28 5Y4/1	灰	シルト～細砂	下層を攪拌し中砂～粗砂を含む 第6層下部の強い土壌化層	6 b層

29 5Y7/4~6/6	浅黄~オリーブ	極細砂	粗砂~極粗砂含む 第7面を覆う泥炭堆積物	6 b層
30 5BG4/1	暗青灰	シルト~極細砂	第7面上の泥炭堆積物	6 b層
31 5Y7/4~6/6	浅黄~オリーブ	極細砂	第7層上部の堆積物	6 b層
32 10Y3/1	オリーブ黒	粘土~シルト	第7面高まり553盛土	7層
33 5G2/1	緑黒	シルト~極細砂~細砂	第7面高まり553盛土	7層
34 10BG3/1	暗青灰	粘土~シルト	細砂含む	7層
35 10BG3/1~5Y6/2	暗青灰~灰オリーブ	細砂~粗砂	第7面高まり553盛土	7層
36 5Y3/1	オリーブ黒	極細砂~細砂	シルト含む 第7面高まり553盛土	7層
37 10GY5/1~5BG2/1	緑灰~青黒	粘土~シルト	細砂~中砂含む 有機物・土器片など多数 第7面高まり553盛土 第7層を盛り上げたもの	7層
38 10GY5/1~5BG2/1	緑灰~青黒	粘土~シルト	細砂含む 有機物・土器多数含む 土壌化激しい	7層
39 5GY4/1	暗オリーブ灰	粘土~シルト	粘土・シルト・有機物の互層	7 b層
40 5Y4/1	灰	粘土~シルト		土坑891埋土
41 5Y3/1	オリーブ黒	シルト~極細砂	粘性の強いシルト	8層
42 10YR3/2~2/1	黒褐~黒	粘土~シルト	極細砂・有機物などを多く含む	8 b層
43 5Y3/1~10GY2/1	オリーブ黒~緑黒	粘土~シルト	極細砂・有機物を含むが、ラミナもみえない暗い層	8 b層
44 25GY2/1	黒	シルト~極細砂	やや土壌化	10層
45 7.5Y7/1~3/1	灰白~オリーブ黒	中砂~粗砂	シルト・中砂・粗砂の互層	10 b層
図7・8・9 X=-150,035ライン断面注記一覧				
1 5Y6/3~4/1	オリーブ黄~灰	中砂~粗砂混砂質シルト	砂あまり含まない	機械掘削除去層
2 5Y5/1	灰	中砂~極粗砂混粘質シルト		1層
3 5Y5/1	灰	中砂~極粗砂混粘質シルト		2層
4 5Y6/3~6/2	オリーブ黄~灰オリーブ	極細砂~細砂混砂質シルト	砂礫多量に含む	2層
5 5Y6/1~5/3	灰~灰オリーブ	極細砂~細砂	ラミナ見られる	2 b層
6 2.5Y6/4~6/2	灰黄~にぶい黄	極細砂~粗砂混シルト	砂は部分的に含む程度で第2層の影響による 西ほど細かい	3~1層
7 2.5Y6/2	灰黄	シルト~極細砂	第3~1層の下面遺構・溝埋土	溝50埋土
8 2.5Y6/4~6/2	にぶい黄~灰黄	粗砂混粘質シルト	第3面島島19の盛土	3面島島19盛土
9 2.5Y6/2~5/4	黄褐~暗灰黄	極細砂~粗砂混粘質シルト	第4層を巻き上げているため、6より砂多く含む 6より暗い色調 西ほど細かい	3面島島20盛土
10 2.5Y6/4~6/2	にぶい黄~灰黄	粗砂~粗砂	6に類似するが、6より多量に含む 下部は極粗砂~細砂混粘質シルト	3面島島20盛土
11 2.5Y6/2~4/3	灰黄~オリーブ褐	粗砂~砂礫混砂質シルト		3面島島20盛土
12 2.5Y6/2~5/4	灰黄~黄褐	粗砂~細砂混粘質シルト	11より若干土壌化	3面島島20盛土
13 10YR5/2~4/3	灰黄褐~にぶい黄褐	粗砂~極粗砂混砂質シルト	下部より色調濃く砂質	土坑33
14 10YR5/3~3/3	にぶい黄褐~暗褐	粗砂~極粗砂混粘質シルト	13より砂多く含む	土坑33
15 2.5Y5/1	黄灰	粗砂~極粗砂混砂質シルト	14より砂質	土坑33
16 2.5Y6/1~4/1	黄灰	粗砂~極粗砂	ラミナ見られる 図16-21の一部対応	土坑33
17 5Y6/3~4/1	オリーブ黄~灰	粗砂~極粗砂混粘質シルト	図16-21対応	土坑33
18 5B4/1	暗青灰	粘質シルト	中砂~粗砂僅かに含む 図16-22対応	土坑33
19 5Y4/1	灰	粗砂~極粗砂混粘質シルト	ブロック多く含む 図16-22対応	土坑33
20 2.5Y5/2	暗灰黄	シルト~極細砂	極細砂~粗砂含む 西半に広がる部分的な層	3~3層
21 7.5Y5/2	灰オリーブ	シルト	粗砂~極粗砂含む 西半に広がる部分的な層	3~4層
22 10YR5/4	にぶい黄褐	粗砂~細砂混粘質シルト	39に似るがより砂質	4面遺構埋土
23 2.5Y4/3~4/1	オリーブ褐~黄灰	中砂~粗砂混砂質シルト		4面遺構埋土
24 7.5YR4/1~3/1	褐灰~黒褐	粗砂~極粗砂混粘質シルト	図35-1対応	土坑254埋土
25 10YR5/1~3/2	褐灰~黒褐	粗砂~極粗砂混粘質シルト	図35-1対応	土坑254埋土
26 10YR3/1~2/1	黒褐~黒	粗砂~極粗砂混粘質シルト	図35-1対応	土坑254埋土
27 10YR4/3~2/1	にぶい黄褐~黒	粗砂~極粗砂混粘質シルト	図35-1対応	土坑254埋土
28 10YR5/1~4/1	褐灰	粗砂~極粗砂混粘質シルト	図35-1対応	土坑254埋土
29 10YR4/6~3/4	褐~暗褐	粗砂~極粗砂混粘質シルト	図35-1対応	土坑254埋土
30 10YR4/6~4/1	褐~褐灰	極粗砂~細砂混粘質シルト	図35-6対応	土坑254埋土
31 N4~5PB4/1	灰~暗青灰	粗砂~極粗砂混粘質シルト	図37=7対応	土坑254埋土
32 2.5Y5/1	黄灰	極粗砂~細砂混粘質シルト	図35=7対応	土坑254埋土
33 2.5Y4/1	黄灰	粗砂混粘質シルト		4 b層
34 2.5Y5/6~5/3	黄褐	粗砂混粘質シルト		4 b層
35 5Y5/1	灰	細砂~中砂混粘質シルト		4 b層
36 10YR4/4~2.5Y6/1	灰黄~褐	粗砂~細砂混粘質シルト	砂礫多量に含む	土坑253・254埋土
37 10YR5/4~5/2	にぶい黄褐~灰黄褐	シルト~極細砂	中砂~細砂含む (39が両側へ傾斜した層)	4層
38 10YR4/2	灰黄褐	シルト	極細砂~粗砂を含む 東ほど土器を多く含む	4層
39 10YR5/6~5/4	黄褐~にぶい黄褐	粗砂~細砂混粘質シルト	砂礫多い	4層
40 10YR4/2~4/1	灰黄褐~褐灰	粗砂~細砂混粘質シルト		土坑253埋土
41 2.5Y6/2~5Y6/2	灰黄~灰オリーブ	粘土~極細砂	第4 a層下部に見られるシルト質の洪水堆積物 第4層の母材となったものでやや土壌化した部分が見られる 西半で見られる層	4 b層最上部
42 2.5Y3/3	暗オリーブ褐	極粗砂~細砂	シルトブロック含む 全体的にやや土壌化	4 b層
43 5PB5/1~4/1・N4/	青灰~暗青灰・灰	中砂~極粗砂粘質シルト	第4 b層中の弱い土壌化層	4 b層
44 5Y6/3~4/1	オリーブ黄~灰	細砂~粗砂		4 b層
45 10YR2/3~3/4	黒褐~暗褐	中砂~粗砂	42下部に見られる砂層で赤っぽい色の部分	4 b層
46 2.5Y6/1~4/6	黄灰~オリーブ褐	細砂混シルト		4 b層
47 5Y3/1~N4/	オリーブ黒~灰	シルト~細砂	一部第5層のブロックを筋状に含む	4 b層
48 7.5YR4/4~3/1	褐~黒褐	粗砂~細砂混粘質シルト	非常に硬質、砂礫全体的に含む 土器を多く含む	4 b層
49 7.5YR4/6~5/6	褐~明褐	粗砂~細砂混粘質シルト	48は土壌化しているが、49は土壌化していない 同様に硬質	4 b層
50 10YR4/4~4/2	灰黄褐~褐	粗砂~細砂混粘質シルト		4 b層
51 10YR4/3~2.5Y5/1	にぶい黄褐~黄灰	粗砂~極粗砂混粘質シルト		4 b層
52 10YR4/1	褐灰	粗砂~極粗砂混粘質シルト		4 b層
53 N7/~6/	灰白~灰	極細砂~中砂		4 b層
54 2.5Y5/1	黄灰	粗砂~極粗砂混粘質シルト	砂あまり含まない 第5層直上に見られる粘質の層 第5層ほど砂含まない 土壌化は弱い	5層
55 2.5Y4/6~4/2	オリーブ褐~暗黄褐	粗砂~細砂	僅かに極細砂~細砂を含む自然堆積層	4 b層
56 5Y3/1	オリーブ黒	粘土~シルト		4 b (5-0b)層
57 2.5Y8/1~6/4	灰白~オリーブ黄	シルト~細砂		4 b層
58 2.5Y3/1	黒褐	シルト~極細砂	植物遺体含む ラミナ見られる	4 b層
59 7.5GY2/1	緑黒	粘土~シルト	第5層上部に部分的に見られる黒い有機物層	4 b層
60 2.5Y3/1	黒褐	中砂~極粗砂混シルト	土壌化層 砂は全体的に含む	5層
61 2.5Y4/3	オリーブ褐	シルト~極細砂	中砂を含む	溝382埋土
62 2.5Y5/1~4/2	暗灰黄~黄灰	極細砂~細砂	やや土壌化した砂質土 部分的にシルト凍強い	溝382埋土
63 5Y3/1	オリーブ黒	シルト~細砂	僅かに中砂含む 僅かに粘性強い	溝382埋土
64 2.5Y3/3	暗オリーブ褐	粘土~シルト	極細砂・有機物などを多く含む	溝382埋土
65 5Y3/2	オリーブ黒	シルト~極細砂	粘性強い ラミナ見える	溝382埋土
66 2.5Y4/1	黄灰	砂	ブロック状にシルトを含む 下部の砂層がかき混ぜられたもの	溝382埋土
67 2.5Y3/1	黒褐	シルト	細砂~極粗砂を多く含む 有機物あり	溝382埋土
68 5Y3/2	オリーブ黒	シルト~極細砂	粘性強い ラミナ見える (挟まれた下層の砂層?)	溝382埋土
69 10YR5/4	にぶい黄褐	極粗砂	第5層下部の砂層 僅かに所々に見られる	5②層
70 5Y2/1~N2/	黒	粗砂ブロック混(5G5/1緑灰)		5③層
71 10BG5/1	青灰	粘質シルト		5③層
72 5Y7/4~5/1	浅黄~灰	中砂~粗砂混粘質シルト		5 b層
		シルト~細砂		5 b層

73	5Y6/2~4/1	灰オリーブ~灰	粗砂~細礫混粘質シルト		5 b層
74	2.5Y4/1~3/1	黄灰~黒褐	中砂~粗砂混粘質シルト	ラミナ見られる 炭化物横方向に見られる	5 b層
75	5Y6/2~3/2	オリーブ黒~灰オリーブ	シルトプロット混礫~粗砂		5 b層
76	N4/	灰	粗砂混粘質シルト		5 b層
77	N4/	灰	粗砂混粘質シルト	上層より砂少なく、土壌化弱い	5 b層
78	10G5/1	緑灰	極細砂		5 b層
79	10G5/1	緑灰	極細砂	凹に堆積した層で、ラミナ見られる	5 b層
80	10G5/1	緑灰	シルト~極細砂	凹に堆積した層で、ラミナ見られる	5 b層
81	2.5Y3/3~5Y2/1	暗オリーブ褐~黒	粗砂~極粗砂混シルト	粘性強い	5層
82	N4/	灰	粘質シルト		5 b層
83	5Y2/1	黒	砂混粘質シルト	土壌化層	5 b層
84	5B5/1~N4/	青灰~灰	粘質シルト		5 b層
85	5G4/1~N3/	暗緑灰~暗灰	粗砂混粘質シルト		5 b層
86	N3/~5Y2/1	暗灰~黒	粗砂~細礫混粘質シルト	粘性強い	5 b層
87	10Y6/1~5/1	灰	中砂~粗砂混粘質シルト	下部弱く土壌化し砂少ない	5 b層
88	7.5Y5/1	灰	中砂~細礫	上方細粒化	5 b層
89	2.5Y4/1~7.5Y4/1	黄灰~灰	粘土~極細砂	第6面を覆う洪水砂堆積物	5 b層
90	2.5GY4/1~3/1	暗オリーブ灰	粘土~極細砂	第6面を覆う砂層 粘土~シルト主体	5 b層
91	5Y3/1	オリーブ黒	シルト	植物遺体含む	5 b層
92	5Y4/1~3/1	灰~オリーブ黒	粗砂~極粗砂混粘質シルト		5 b層
93	7.5Y4/1~3/1	灰~オリーブ黒	粘質シルト	砂あまり含まない 弱く土壌化 灰多い 94と一連の堆積	5 b層
94	7.5Y4/1	灰	粘質シルト	砂あまり含まない あまり土壌化していない 93と一連の堆積	5 b層
95	10YR3/1	黒褐	粘質シルト	植物遺体多く含む 東端では粗砂~礫混	5 b層
96	10YR3/1	黒褐	中砂~粗砂混粘質シルト		6 a層
97	N4/~2/	灰~黒	中砂~粗砂混粘質シルト	灰多い 全体的に砂質	6・7 a層
98	10Y3/1	オリーブ黒	粘土~シルト	下層の極細砂を巻き込んでかなり砂質	6 a層
99	7.5Y3/2	オリーブ黒	シルト~中砂	第5・7層層間の土壌化した層	6 a層
100	5Y6/4~N8/	オリーブ黄~灰	中砂~粗砂混粘質シルト	101より砂多く含む	高まり522盛土
101	N8/~4/	灰	中砂~粗砂混粘質シルト	100と類似 土壌化あまりしていない	高まり522盛土
102	5Y6/4~6/3	オリーブ黄	粘質シルトプロットN8/灰		
			極粗砂~中砂		高まり522盛土
103	N8/~4/	灰	中砂~粗砂混粘質シルト	101より土壌化強い	高まり522盛土
104	5B4/1~N3/	暗青灰~暗灰	粗砂~極粗砂混粘質シルト	粘質シルトプロット混極粗砂見られる	高まり522盛土
105	2.5Y8/1~6/1	灰白~黄灰	極細砂~極粗砂		高まり522盛土
106	5Y4/1~N5/~4/	灰	粘質シルト		5 b層
107	N4/~5PB5/1~5Y3/1	灰~青灰~オリーブ黒	粘質シルト	互層状 105に似るが青っぽい部分もあり、植物遺体を含む	5 b層
108	5Y4/1	灰	粗砂~極粗砂混粘質シルト		溝558埋土
109	5Y4/1~3/1	灰~オリーブ黒	粗砂~極粗砂混粘質シルト	上層より砂少なく粘質	溝558埋土
110	5Y5/1~4/1	灰	粗砂~極粗砂混粘質シルト	プロット状にシルト等あり	溝558埋土
111	5Y4/1~7.5Y4/1	灰	粘質シルト	砂ほとんど含まない	溝558埋土
112	5Y5/1~3/2・5Y6/6~6/4	灰~オリーブ黒・オリーブ黄	極粗砂混粘質シルト		溝498埋土
113	5Y5/1~3/2	灰~オリーブ黒	シルト~細砂	植物遺体多く含む	溝559埋土
114	5Y3/1	オリーブ黒	極細~細砂混シルト	植物遺体を多く含む	溝559埋土
115	5Y6/1~5G6/1	灰~緑灰	極細~細砂混シルト	基本的に非土壌化層	溝559埋土
116	5Y4/1	灰	砂混粘質シルト	砂壁か含むのみ 115よりも土壌化弱い 植物遺体含むが115よりは少ない	溝559埋土
117	7.5Y6/1	灰	極細砂		溝559埋土
118	5Y6/1~4/1	灰	極細砂~細砂混シルト		溝559埋土
119	5Y5/1~4/1	灰	砂混粘質シルト	上層より粘質 下層を巻き上げ黒色の部分あり 植物遺体含む	溝559埋土
120	5Y7/4~6/6	浅黄~オリーブ	極細砂	粗砂~極粗砂含む	6 b層
121	5G3/1~7.5GY4/1	暗緑灰	粘土~シルト	有機物を含む互層状堆積と下部の極細砂~細砂含む層	6 b層
122	5GY4/1	暗オリーブ灰	粘土~シルト	極細砂を含む 炭化物は東ほど目立つ	7 a層
123	5Y3/2	オリーブ黒	シルト~極細砂	第7~第8層間の氾濫による堆積か?かなり土壌化している	遺構埋土
124	10Y3/2	オリーブ黒	シルト~極細砂	掻き混ぜられている 遺構埋土	7 b面遺構埋土
125	5Y7/3~5/1	浅黄~灰	細砂~中砂		6 b層
126	5Y4/1	灰	極細砂~細砂混粘質シルト		5 a層
127	5Y5/1~5Y3/1	灰~オリーブ黒	粘質シルト		7 a層
128	5G6/1~5Y4/4	緑灰~暗オリーブ	極細砂混粘質シルト		7 b層
129	5G6/1~4/1	緑灰~暗緑灰	シルト~極細砂	基本的に極細砂主体	7 b層
130	N8/~5B4/1	灰~暗青灰	シルト~極細砂	基本的にシルト主体	7 b層
131	7.5YR4/2~5/1	灰褐~褐灰	粘質シルト	植物遺体を横方向に含む 茶色っぽい有機物層 自然堆積層	7 b層
132	5PB5/1~N4/	青灰~灰	中砂混粘質シルト	色調は107に似る 植物遺体を多く含む	7層
133	5Y6/4~5/1	オリーブ黄~灰	極細砂	粗砂~極粗砂含む	7 b層
134	N4/~5/	灰	中砂~粗砂混粘質シルト	上部に砂多く見られる 上部は上層の影響で弱く土壌化	7 b層
135	7.5Y6/1	灰	細砂~極細砂		7 b層
136	5GY4/1	暗オリーブ灰	粘土~シルト	粘土・シルト・有機物の互層	7 b層
137	5Y4/1~3/1	オリーブ灰~黒	粘質シルト	東は植物遺体を含む有機物層	8層
138	5Y4/1	灰	粘土~シルト	植物遺体を横方向に含む 黒っぽい有機物層	土坑891埋土
139	10Y6/1~3/1	灰~オリーブ黒	シルト~極細砂	互層状堆積、ラミナ見える	8 b層
140	10YR3/2~2/1	黒褐~黒	極細~細砂	極細砂・有機物などを多く含む	8 b層
141	10Y2/1	黒	粘土~シルト	シルト~極細砂を含む 土壌化層	8 b層
142	5G6/1~4/1	緑灰~暗緑灰	シルト質粘土		8 b層
143	5Y3/1	オリーブ黒	シルト質粘土	植物遺体含む 自然堆積物層	8 b層
144	5Y2/1	黒	シルト質粘土	植物遺体含む 自然堆積物層	8 b層
145	5Y4/1	灰	シルト質粘土	土壌化やや弱い	8 b層
146	5Y4/1	灰	シルト質粘土	下部に5G6/1・5Y2/1小プロット含む部分あり 植物の根によるものか?	8 b層
147	5Y6/2~3/2	灰オリーブ~オリーブ黒	粗砂~極粗砂混粘質シルト		8 b層
148	5Y3/1~10Y2/1	オリーブ黒~緑黒	粘土~シルト	極細砂・有機物を含むが、ラミナも見えない暗い層	8 b層
149	10Y2/1	黒	粘土~シルト	粗砂~極粗砂を含む	9層
150	5Y2/1	黒	粗砂~極粗砂混粘質シルト	他の第9層とは異なり強く黒色を呈する 砂を多く含む	9層・10層
151	7.5Y2/1	黒	シルト質粘土		9層
152	2.5GY2/1	黒	シルト~極細砂		9層
153	7.5Y6/3~3/2	オリーブ黄~オリーブ黒	中砂~小礫	やや土壌化	9 b層
154	N2/	黒	シルト質粘土	上部やや土壌化	9 b層
155	5Y4/1	灰	粗砂混粘質シルト~極細礫	炭酸鉄部分的にあり	10層
156	5Y6/3~5/1	オリーブ黄~灰	粗砂~細礫		9 b層
157	5Y3/2	オリーブ黒	シルト質粘土	第11層相当の可能性あるが、色調は他の第11層より淡い	11層?
158	N4/	灰	シルト質粘土	154直下に部分的に存在する土壌化の弱い層	10層下部
159	5B5/1	青灰	シルト質粘土	154もしくは158との層境は不明瞭	10 b層
160	N4/	灰	シルト質粘土	161上部に部分的にある土壌化の弱い部分	10 b層
161	N2/	黒	シルト質粘土		11層
162	N6/~5B5/1	灰~青灰	シルト質粘土	161との層境不明瞭な部分多い	11 b層

第5章 調査成果

当遺跡周辺は市街地化が進んでおり、現状では条里制の坪単位などもまったく不明であるものの、調査区の東西、南北に道路が通っており、その間の幅が100m強であることから、条里制の1坪にあたる可能性が考えられた。なお、布施市史の「若江・渋川郡の条里想定図」[布施市史編纂委員会1962]ではそのような復元がなされており、昭和17年の航空写真(写真1)からも想定は妥当であろう。今回の調査は、新上小阪遺跡における初めての本格的な調査であり、今後数次にわたり展開する予定の当遺跡における各調査に対する基本的データの提示を最大の目標として調査を行った。

なお、大阪府教育委員会によって行われた試掘調査では、6面の遺構面(弥生時代後期～室町時代)が確認され、さらに下層では弥生時代前期・中期の2面の遺構面が想定され、計8面の遺構面の検出が予想されていた。この試掘成果および、周辺各遺跡(上小阪遺跡・山賀遺跡・小若江遺跡など、詳しくは第2章参照)の発掘調査成果を基に調査を実施した。以下、その成果について記す。

第1節 近世～中世

第1面から第3面は、中世から近世までの遺構面である。基本的に条里制に伴う耕作に関する遺構が検出された。

第1面(図10) 旧府営住宅の造成土や近世の作土層などを重機により約0.9m除去し検出されるのが、機械掘削停止面である第1面であるが、この段階で既に第1層から第3層までの各層が部分部分で露出していた。結果として、第1面は必ずしも第1層上面ではないが、第1面当時の景観の想定は、各層の残存状況から可能である。また、旧府営住宅の諸施設による攪乱が随所に見られ、もともと第1面直上にb層が見られないこともあり、遺構面の残存状況は不良であった。第1層は粗砂～細礫が混じる細～中砂を基本とする。第1面では、島島および水田畦畔・溝が検出された。なお、調査区中央のY=37.305部分にある幅2m強の攪乱を境に地割りが異なり、東側では南北方向、西側では東西方向である。この状況は、昭和17年(写真1)および23年などに撮影された航空写真[藤田・西森1991:図版1]でも確認できる。なお、検出面のレベルはT.P.3.06～3.65mであるが、先述のとおりこれが第1面の旧地表面レベルではない。第1層残存部分は水田部分のみであるが、そのレベルはT.P.3.20～3.40m程度である。第4章で記したように第1層は第1-1層・第1-2層に細分が可能だったが、第1-1層が確認できたのはごく一部のみである。

島島 計6基検出されたが、明らかなレベル差としては確認されておらず、第1面検出段階の色調や土質の差と断面観察による下面の島島の状況から判断したものである。いずれも島島上では第1層は残存しておらず、第2層や第3層が露出している。これらの各島島は第3面の島島を踏襲したもので、本来、この部分の第1層は盛り上がっていたと思われる。まず、東端で検出された**島島1**は、東西幅約2.9mで、島島上の西側の一部では第2層もしくは第2b層が、その他の多くの部分では第3層が露出していた。東半中央で検出された**島島2**は、東西幅約21.2mで、島島上東・西側では第2層が、中央部では第3層が露出していた。調査区東半で検出された2つの島島は、いずれも北から若干東に振っている。北西端で検出された**島島3**は、その南端部分が調査区内にかかったのみであり、北側に広がるものである。北側境では第3層が、南側では第2層が露出していた。南北攪乱を挟んだ東側には続かないよ

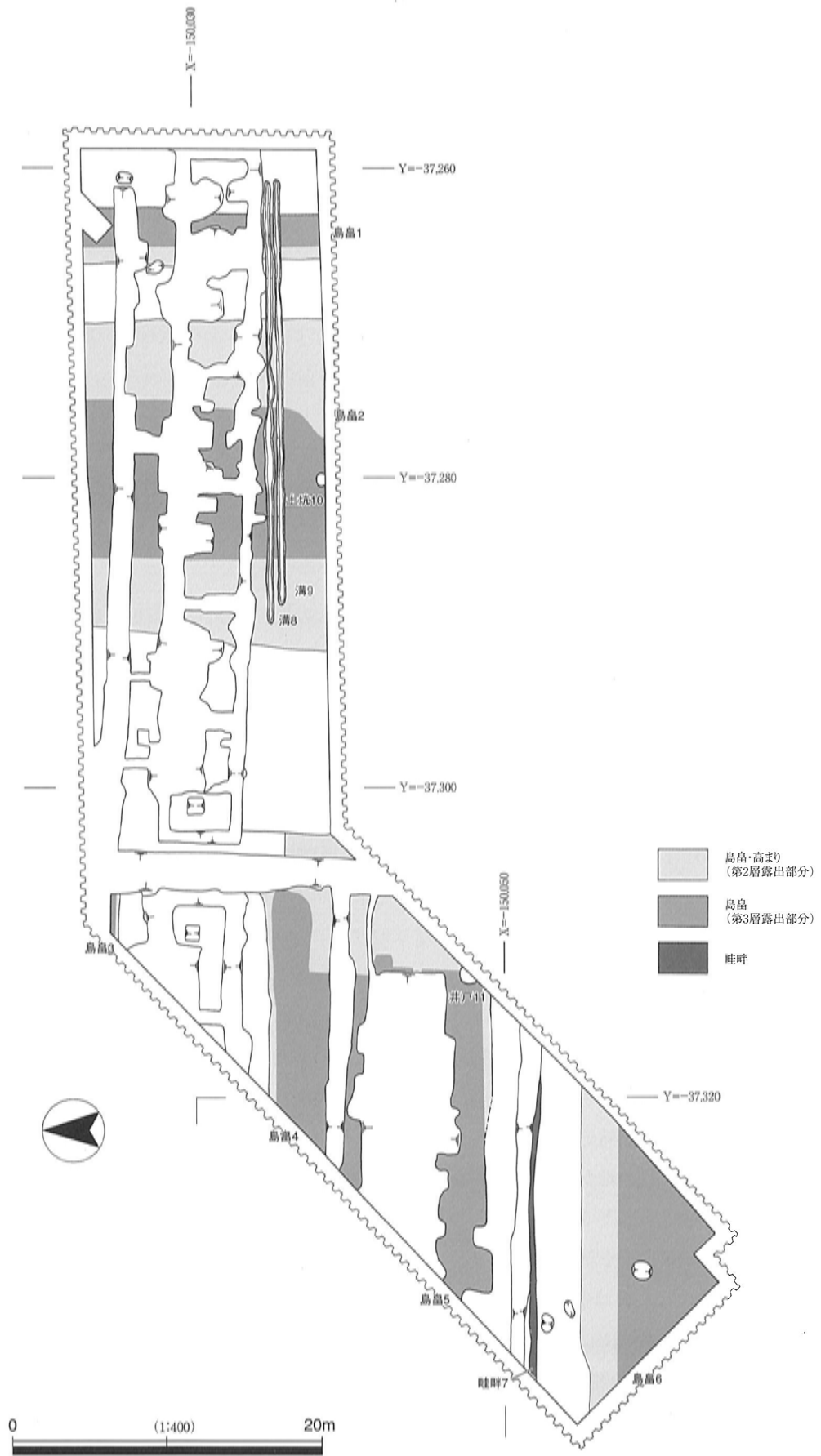
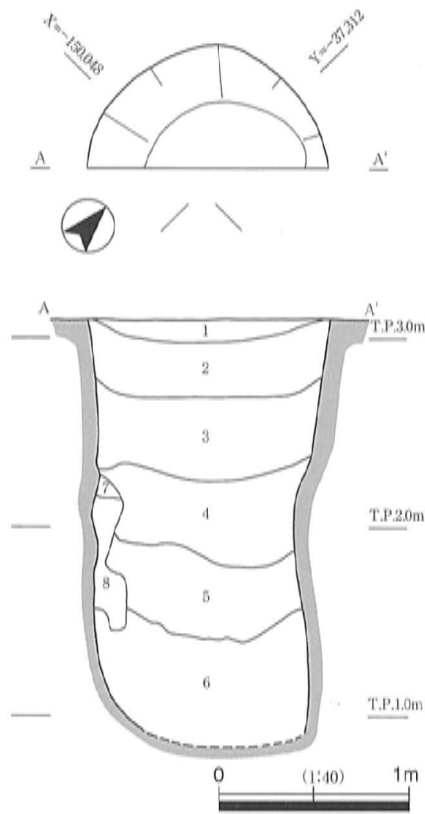


图10 第1面 平面图 (S=1/400)



- 1 75Y4/2 灰～オリーブ色 中～粗砂 やや粘性あり
- 2 25GY3/1 暗オリーブ灰色 シルト～極細砂
- 3 25YR4/6 赤褐色のマンガン (φ1cm程度) が混じる
- 4 5GY4/1 暗オリーブ灰色 シルト (+極細～細砂)
(極粗砂～小礫をわずかに含む)
- 5 25GY4/1 暗オリーブ灰色 シルト+極細～細砂
- 6 5GY4/1 暗オリーブ灰色 シルト+極細～細砂
- 7 10GY4/1 暗緑灰色 シルト+極細～中砂
- 8 (5BG3/1 暗青灰色 粘土ブロック見られる)
- 9 5GY4/1 暗オリーブ灰色 シルト～極細砂 (4b層の貫入)
- 10 5GY4/1 暗オリーブ灰色 粘土～極細砂 (5～5b層の貫入)

図11 井戸11 平・断面図 (S=1/40)

うである。島島4は、その南端が攪乱にあたり正確な規模は不明であるが南北幅3.8m。この島島上でも第2・3層の露出が見られたが、露出状況が他の島島と異なり、第3層が東側に突出すように見られた。攪乱を挟んだ南側の島島5は、正確な規模は不明であるが南北幅約9.4m。島島南側の水田との境は凸凹しており直線的ではない。なお、島島4と5は幅1.0mほどの攪乱をはさんでいるのみで、第2面以降この部分は水田面であるものの、第1面段階では第2面段階の島島15と16を統合拡大して一つの島島としていた可能性も考えられた。しかし、攪乱中に僅かに残存していた第1層の残存レベル等の検討から、この部分が第1面段階にも水田であったと考え、島島を二分して考えた。調査区南西端の島島6は、さらに南に広がるものである。調査区内で検出された部分だけでも幅8.8mを測る。

なお、調査区中央の攪乱東側は、同西側に比べると約10cm高まっており、面の色調も島島部分と類似する。しかし、東側からは徐々に高まっている部分であり、明瞭な高まりではない。下層の第2面ではこの部分で弱い高まりが検出されているが、第1面検出当初は攪乱による酸化等の変色であると考え、その高まりを踏襲するものか、単なる下面の地形の反映であるかは、その後の断面観察からも判断できなかった。この部分は、地割りの変換点にあたり、何らかの明瞭な南北施設が存在するのかもしれないが、攪乱があることも災いし、第1面では明確には検出されなかった。また、攪乱を挟んだ西側の島島との関係であるが、第1面段階の島島上面が削平されており旧地表面のレベルを知りえないことからレベルの比較ができず、高まり自体の形状も良好に確認できなかったことから島島4との関係は不明瞭である。しかし、島島4の北肩のラインをそのまま東側に延長しても、この高まりの北肩には一致しないため、両者は別の遺構であると考えておく。また、この高まりは図10では遺構のように表現し、検出された位置も地割りの変換点付近と興味深い。明瞭な盛土は見られず、人為的な盛土遺構であると積極的に判断する材料が欠ける。これらから、この高まりは第2面の地形の反映であると考えておきたい。ただし、この部分は一坪内のほぼ中央にあたることから、この部分が土地区画画面上大きな意味を持つ部分であったことはおそらく確かであろう。この地割りについては下面の状況を記述する段階で再び詳述する。なお、この攪乱は他の攪乱と異なり、底部が平坦であり、掘削後砂を敷き、その上に板、コンクリート管の順に附設されており、下水道の本管であると思われる。

水田 各島島間は水田面であったと考えられる。遺構面を検出した段階で島島部分が黄褐色系であったのに対し、水田部分は暗緑灰色系と色調が明瞭に異なった。水田部分には第1層が残存する。まず、調査区東半の南北地割り部分では概ね北が高く南が低く、僅かながら西側が高く東側が低い。なお、島島1・2間では北側の一部で第1-1層の残存が見られた。一方、調査区西半の東西地割り部分は、攪乱が極めて多く地形の傾斜は不明瞭であるが、島島5・6間では、一部第2層の露出する部分が、南北

約0.6m幅で見られた。盛り上がりとしては検出されなかったが、位置的にも両島畠の中間部分であることから、本来は第1面の畦畔がこの部分にあったと考えられる（畦畔7）。他の水田部分でも畦畔は確認されなかったが、レベルや下面での検出状況から考えると、本来は畦畔が存在したものと思われる。

土坑 島畠6上南端では楕円形の土坑10が検出された。側溝に切られるものの、残存長軸0.8m、短軸約0.6m、深さ0.18mで、暗オリーブ灰色（5GY4/1）中～粗砂混じり粘質シルトを埋土とする。遺物の出土はない。土坑10検出部分は第3層露出箇所であり、正確な掘り込み面は上部が削平されており不明であるが、埋土が第3層に類似することから検出面と矛盾せず、第3層堆積後の掘削である。また、残存していた限りでの埋土の観察では、明瞭な第1層や第2層は見られなかったことから、第3面機能段階の遺構の可能性が高い。なお、土坑は浅いものの、掘削箇所は第3面段階では島畠の南端付近にあたり、また島畠のほぼ中央にもあたる。ピットは単独で見られ、掘削位置にも何らかの意図があった可能性も考えられるが、遺物の出土もなくその意図は不明である。

井戸 島畠5東端では、側溝に南東側を切られるものの、推定円形で素掘りの井戸11（図11）が検出された。直径1.3m、深さ約2.3m。埋土はシルト～極細砂で、比較的均質であり府営住宅建設直前といったごく最近の埋め戻しではない。また、断面南西側には埋没後の第4b層の貫入が見られる（7・8層）。埋土中からは、時期不明の土師器片が1点出土しているのみである。井戸11検出部分は第3層露出箇所であり、本来の掘り込み面は不明である。詳細な断面の検討も怠ったのだが、基本的に第1層に類似する細粒の砂を埋土とすることから、第1面のある段階の遺構であると考えられる。

溝 東半で2条検出された。いずれも上層から掘削された遺構である。溝8は、幅0.2～0.6m、深さ3～8cm、長さ約28.6mで、黒褐色（2.5Y3/2）シルト～細砂を埋土とし、東側では極粗砂が混じる部分が見られる。出土遺物はない。溝9は、幅0.4～0.6m、深さ約7～12cm、長さ約27.4mで、オリーブ黒色（5Y3/2）細砂を埋土とし、シルトブロックや中砂が混じる部分が見られる。内面に布目痕が残存する土師質の瓦小片が1点出土している。地割り、景観を無視していることから、府営住宅施設に伴うものの可能性も考えられる。

出土遺物（図12） 第1層からは、いずれも小片ながら、概数で磁器30点（うち染付26点）、陶器

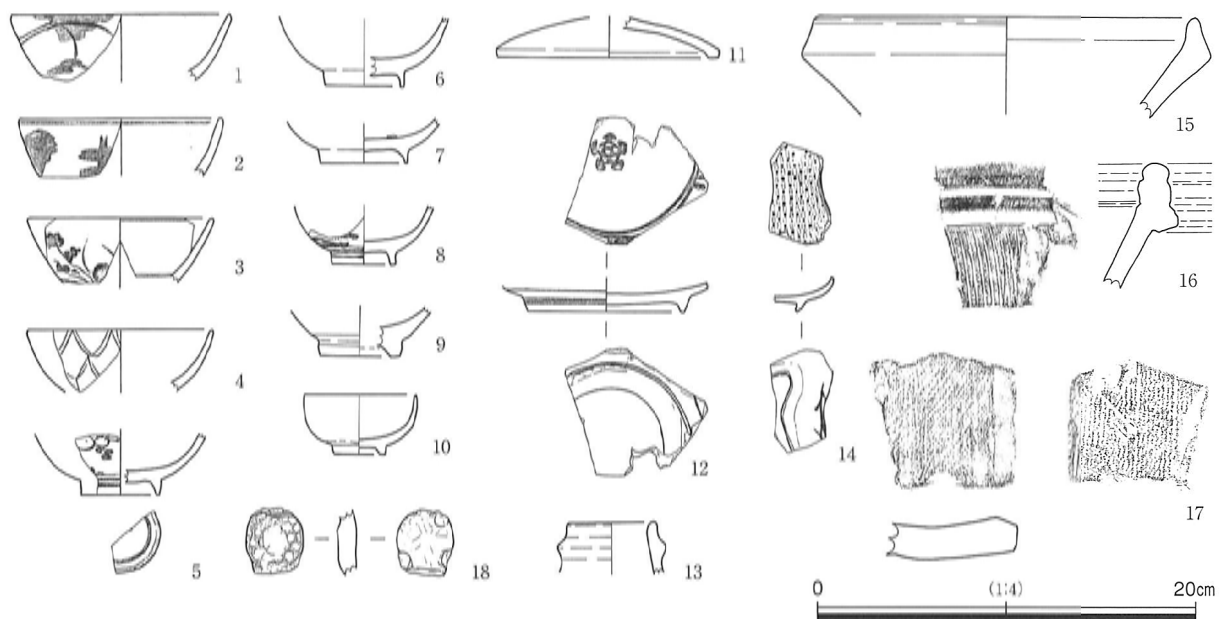


図12 第1面・第1層 出土遺物

34点、瓦質土器12点、瓦器3点、須恵器53点、土師器82点、瓦20点、土製品1点の計約235点の遺物が出土した。

1～5・8は波佐見焼染付碗。1～3・8には草花文を施し、4には二重網目文が見られる。いずれも18世紀。6・7は波佐見焼白磁碗で、18世紀。9は唐津焼天目茶碗で、内面には釉が見られる。17世紀後半。10・11は京信楽系陶器で10は小坏、11は蓋。11は外面にのみ釉が見られる。いずれも18世紀。なお、京信楽系陶器片は第1層から計3点出土している。12は伊万里焼皿。内面にはプリントによる五弁花文が見られ、底部にはハリの痕跡が見られる。13は瀬戸灰釉梅瓶で、13世紀。14は伊万里焼変形皿で、内面にはプリントによる文様が見られる。19世紀。15は瓦質土器の捏鉢で、胎土は在地のものと思われる。15世紀。16は堺焼播鉢。白神編年Ⅱ型式〔白神1992〕で、19世紀。なお、堺焼播鉢片は第1層から計4点出土している。17は焼成軟の平瓦。凹面には布目が、凸面には縄目が残存し、両面ともに斜め方向の線が見られる。中世後期。18は亀の土製品で頭部や尾が欠落する。成形技法は、型成形+手捻りの型合わせ、上下合わせ（安芸分類Ⅲ類②ロ〔安芸2000〕）で、胴体部は型、頭・手足は手捻りで貼り付けられて成形されたものと考えられるが、手捻り部分は多くが欠落している。今回の調査で出土した土人形はこの1点のみである。18世紀。

時期 当面を覆う層からの資料はないものの、第1層出土遺物を第1面が機能していた段階を示す遺物と捉え、第1層出土遺物の時期から18～19世紀と考えられる。

第2面 (図13) 第1面検出段階において水田部分に残存していた第1層を除去し検出される面である。結果として、水田部分が下がり、島島が目立つようになる程度で、景観に大きな変化はない。第2層は、シルト～極細砂を基本とし、東半では砂礫が多く混じる。この面では、第1面同様島島、畦畔、小溝が検出された。また、第1面を検出した際の攪乱の多くは残存しており、やはり面の残存度は不良である。第1面で記したように、既に第3層まで露出している部分があり、第2面検出段階で第2層が比較的良好に残存していたのは、水田部分と島島の肩部分である。島島上面でも第2層が残存している部分は見られたが、第1面検出段階で削平を受けており、旧地表面段階の高さは知りえない。しかし、島島の下場は比較的良好に検出されたため、幅については概ね規模が把握できた。面の高さは、第2層残存部分のみでT.P.3.05～3.33mである。

島島 計6基検出された。第1面でも記したように、これらの島島は第3面の島島を踏襲するものであり、肩部に第2層がすりつく。各島島は肩部の第1層を除去し検出されたものである。島島12は、第1面島島1に踏襲されるもので、東西幅約4.2mと、上面より幅広であるが、第1面は上部を削平されており本来は第1面も第2面の島島と同規模であった可能性も考えられる。このことは、第2面の各島島について言える。また、東側の肩では第3-1面の直上に第2b層の堆積が見られ、第3-1面から第2面への島島の拡張が第2b層の砂層を芯にして行われたことが窺える。島島の拡張においては、同様の手法がとられた可能性が考えられるが、他の島島では拡張の際に芯として使用した肩部のb層の堆積は見られなかった。島島13は、第1面島島2に踏襲されるもので、東西幅約20.2m。島島14は、第1面島島3同様、島島の南端が若干検出された程度である。島島15は第1面島島4に踏襲されるもので、北側一部が東側に突出する。規模は第1面とほぼ同じで約4.0m。島島16は第1面島島5に踏襲されるもので、南側の一部が若干東側へ突出する。また、第1面では検出されなかったこの島島の北東端の盛り上がりは比較的良好に確認され、さらに北端部分が痕跡的ではあるが確認された。南北幅は約

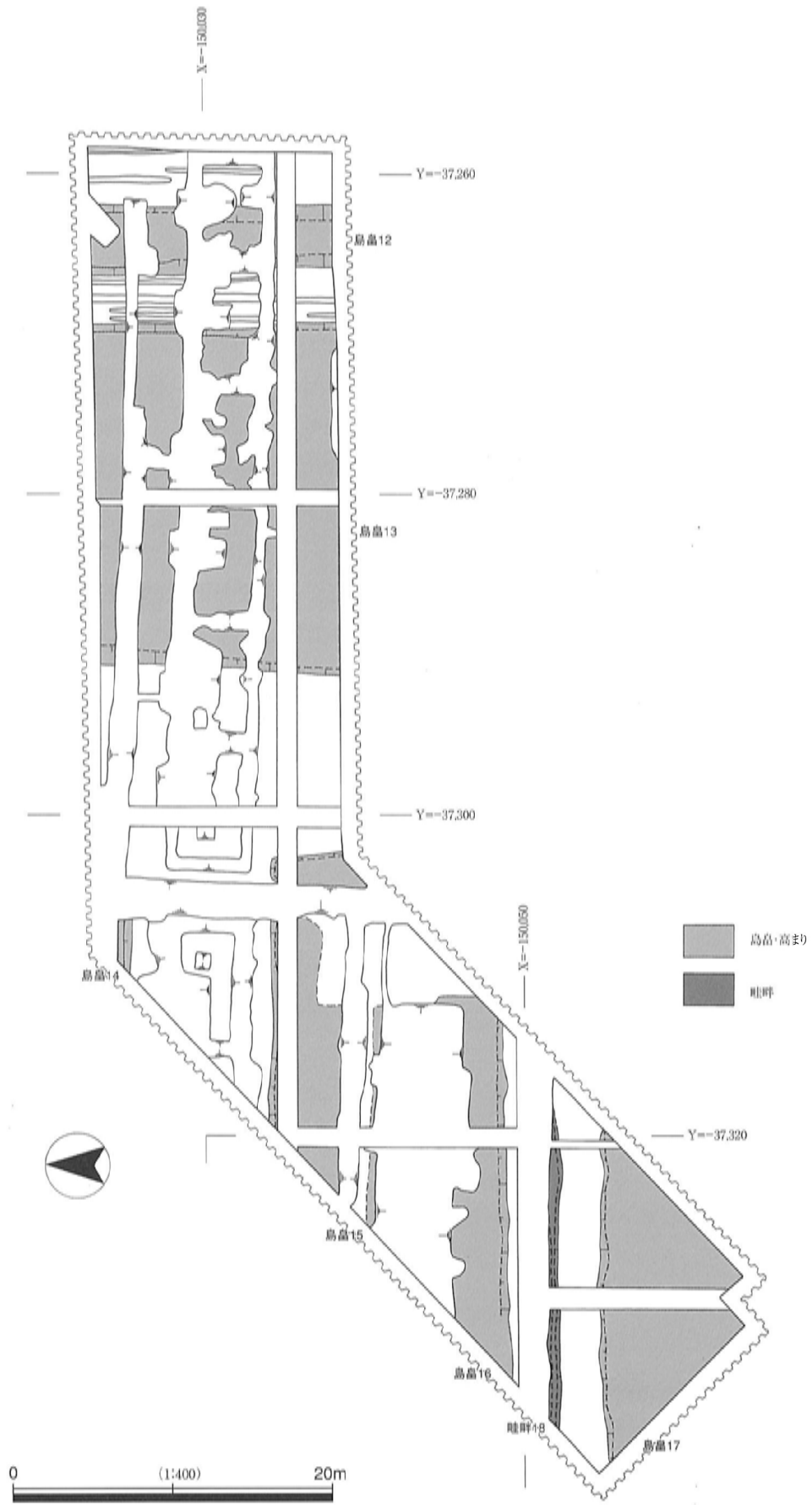


图13 第2面 平面图 (S=1/400)

8.3m。なお、島島16は一部東側に突出する形状や、島島15との間隔の狭さ、下面の島島の検出状況から、2つの島島である可能性も考えられる。しかし、攪乱により詳細が検証不可能であったため、1つの島島と考えておく。島島17は第1面島島6に踏襲されるもので、幅約9.3m。

また、調査区中央の南北攪乱南東側では小規模な島島状の弱い高まりが確認されている。第1面でも記したとおり、この部分は土の色調が黄褐色を呈し、水田部分とは異なるものの、その高さはほとんどない。この高まりの北端が、第1面とは異なり、ちょうど西側の島島15の北端と一致することから島島の延長の可能性も考えたが、島島15の東への突出形状とは一致せず、その突出がちょうど攪乱部分で収束傾向であること、盛り上がりも攪乱際で収束し西側へ拡大しているようには検出されなかったことから、それぞれは別個の遺構であると判断した。ただし、攪乱際であり後世の変色により誤認した可能性も考えられ、正確に遺構が検出されたとは言い切れない。性格は不明。

水田 第1面同様、各島島間は水田であったと考えられる。島島16・17間では第1面段階で第2層が帯状に確認され、第1面畦畔11に踏襲される畦畔18が検出された。第1面同様、他の水田想定部分では畦畔の検出は見られない。

なお、各水田面のレベルおよび地形の傾斜は、まず調査区東半が、島島12以東の区画はT.P.3.12～3.19mとほぼ平坦、島島12・13間はT.P.3.22～3.25mとほぼ平坦、島島13以東はT.P.3.20～3.27mでやや北側が高い。一方、調査区西半は、島島14・15間はT.P.3.13～3.21mと東側がやや高く、島島15・16間はT.P.3.11～3.20m、島島16・畦畔18間はT.P.3.05～3.13m。いずれも水田部分の残存度が悪く一定の傾斜は看取されず、正確な傾斜は不明である。畦畔18・島島17間はT.P.3.05～3.21mと西側が高い。大まかな傾向として調査区中央部分の水田が高く、東西に向かい低まっていくようである。

小溝 一部の水田部分では小溝群が検出されている。調査区東端島島12以東では3条の小溝が検出された。また、島島12・13間の水田面上では小溝が計4条検出された。いずれも類似した規模であり、幅0.2m、深さ5～7cm、それぞれの溝の間隔は0.6m～1.5mである。埋土は、第1層に類似する灰色(7.5Y4/1)細～中砂である。このことから、これらは第1層の下面遺構であり、第1面段階の遺構と考えられる。これらの溝は耕作に伴うものと考えられ、島島間で耕作を行っていた傍証となろう。

また、島島13南端部分でも小溝が検出されている。溝の南肩は側溝に切られ検出されなかったが、残存幅0.3～0.5m、深さ約5cm。この溝を検出した部分は第1面段階から掘削していない部分であり本来は第1面で検出されるべきであった遺構であるが、第2面精査段階で検出されたので、第2面平面図に記載している。なお、島島に伴わないため、攪乱ケバで表現している。埋土は、第2層と第3層が混じりあった灰色(5Y5/1)粗砂混じり粘質シルト。島島上であり島島部分の第1層が残存していないため、正確な掘り込み面は不明であるが、掘削は第2面以降のある段階と考えられる。

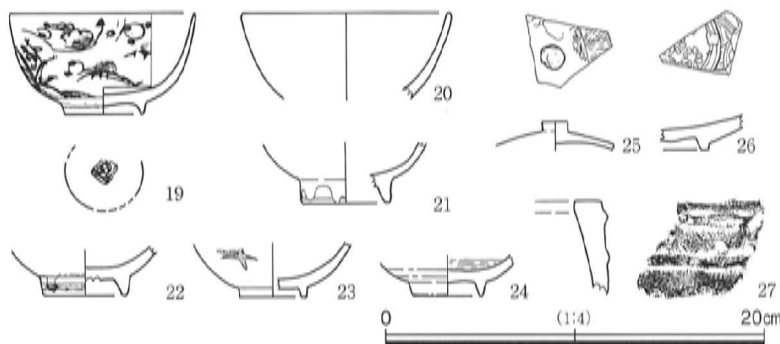


図14 第2層 出土遺物

出土遺物 (図14) 第2層からは、いずれも小片ながら概数で磁器24点、陶器20点、瓦質土器9点、瓦器7点、須恵器29点、土師器93点、瓦8点の計約190点の遺物が出土した。

19～22は波佐見焼。19は染付碗で、高台裏銘が見られるが

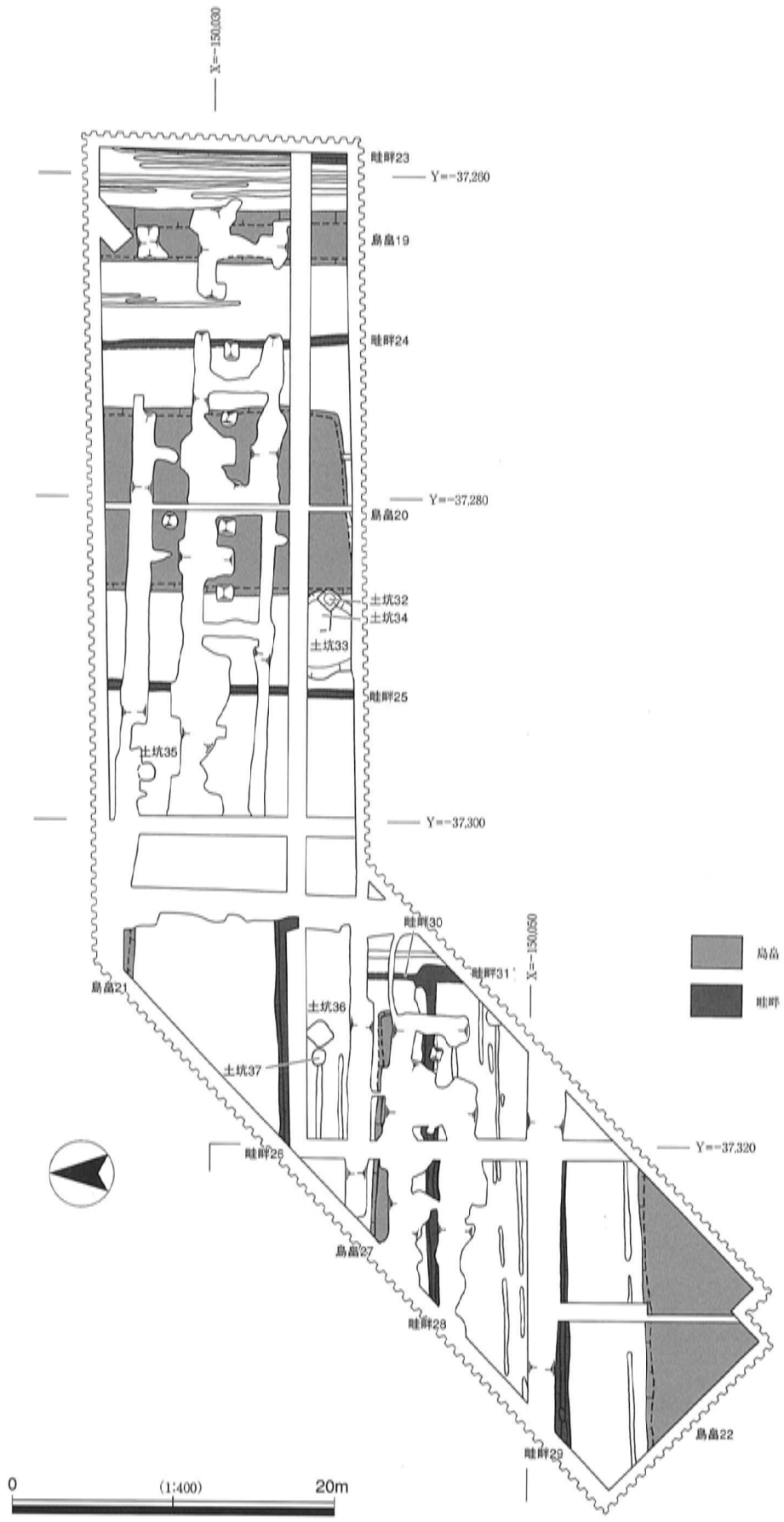


图15 第3-1面 平面图 (S=1/400)

判読不可能であった。**20**は白磁碗。**21**は青磁碗。いずれも18世紀。**22**は白磁碗。脚部に1条のコバルトによる圏線が見られるが施釉が十分ではなく黒色を呈する。17世紀後半。**23**は京信楽系鉄絵小碗で、18世紀。**24**は唐津焼肥前系刷毛目碗。内面には釉によるバームクーヘン状の左巻き文様が見られる。18世紀。**25**は京信楽系陶器土瓶蓋。19世紀。**26**は肥前三島手碗で、胎土目積の痕跡が見られる。17世紀。**27**は瓦質土器火舎で、凸帯間にはスタンプ文が見られる。16世紀。

時期 第2層出土遺物は、時期的には第1層出土遺物と大差ないが、若干古い様相の遺物が見られる。第1層の層厚は薄く、第1面機能段階の耕作により、遺物が混入する可能性は大いにありうる。このことから、第1層と重複する時期を除き、後述する第3－1層の遺物の時期を鑑みれば、第2面の時期は、17～18世紀頃と考えられる。

第3層について 今回の調査では第4章でも記したように、第3層が東半では2層に、西半では4層に細分された。第3層は粘質シルト～極細砂を基本とし、上層の第2層が粗砂～礫の混じるシルト～極細砂であるのとは層相を異にする。また、下層の第4層は基本的に粘質シルトであり、第3層の層相と類似するものの、第3層よりも明らかに多くの砂礫が混じり、東半では筋堀掘削段階から遺物が多く出土した。そこで、その両者の間の粘質シルトを基本とする層を第3層と認識し、細分し調査を行った。

第3－1面 (図15) 第2面段階で水田部分および鳥島の際部分に見られた第2層を除去し検出されるのが第3－1面である。第2面に比べ、鳥島の減少や規模の縮小が見られ、第2面から第1面への景観変化よりも、第3－1面から第2面へは景観に変化が見られる。なお、攪乱は残存しており、面の遺存状況はやや不良である。また、第2面までとは異なり、第3－1面検出段階で露出しているのは広義の第3層のみであるが、鳥島の上部は、既に機械掘削の段階で第3層がプライマリーな状況では残存していない可能性が高く、正確な旧地表面については知りえない。残存している限りでの面の高さは、T.P.2.99～3.60m。調査区東半では、鳥島20を境に東と西へ地形が下がっており、調査区西半では南(南西)から北(北東)へ地形が下がっている。当面では、鳥島、畦畔、小溝、土坑が検出された。

鳥島 確実に鳥島といえるものは4基検出された。**鳥島19**は、第2面鳥島12に踏襲されるもので幅3.2～3.4mと、第2面よりもやや規模が縮小している。**鳥島20**は、第2面鳥島13に踏襲されるものであるが、幅10.3～11mと第2面の約1/2の規模である。第3－1面から第2面にかけて、東西の両肩に大規模な盛土を施している。その拡大の範囲は、後述する当面で検出された畦畔24から畦畔25の間である。また、当面では鳥島の南端が確認され、当面以降南側へも拡大していることも確認された。また、先述のように、この鳥島を境に東と西へ地形が下がっている。上面で第3層までの各層が露出している状況ではわからなかったが、地形的にもこの大規模な鳥島は大きな区画の意味を持っていた可能性が考えられる。この地形や大規模な鳥島については、下面の第4面の影響を受けている可能性が考えられるため、第4面の項で詳述する。**鳥島21**は、第2面鳥島14に踏襲されるものであり、第3－1面から第2面へは調査区の範囲内では南側へ若干の拡大が見られる。**鳥島22**は、第2面鳥島17に踏襲されるもので第3－1面から第2面へは調査区の範囲内では北側への拡大が見られる。鳥島21の南約16.0mでは**鳥島27**が検出された。南肩を攪乱に切られるが、残存幅約1.2m、高さ0.14～0.25m。東肩も検出されており、畦畔26・30・28に囲まれた水田内に築かれた鳥島であることがわかる。第2面鳥島16の北肩にあたり、当面以降、後述する畦畔28も含めて南側へ鳥島を拡大させていく。

水田 上面では各鳥島間の水田面部分で、畦畔は良好に検出されなかったが、当面では比較的良好に

検出された。調査区東端、島島19東側の水田で検出されたのが**畦畔23**である。側溝に東側を切られるが、幅約0.3m、高さ約1～6cm。座標北から2°程東へ傾く。畦畔23・島島19間の水田は、T.P.2.99～3.06mでほぼ平坦。島島19・20間のほぼ中央では**畦畔24**が検出された。西肩の大部分が第2層下面遺構の小溝により攪乱を受けるが、幅0.5～0.8m、高さ5～7cm。畦畔23からの距離は約11m。ほぼ南北方向であるが、調査区の範囲内ではやや蛇行しながら若干西へ傾く。島島19・畦畔24間の水田は、T.P.3.07～3.12mで、南北でのレベル差はさほどなく平坦。面の直上には部分的ながら第2b層の堆積が見られた。畦畔24・島島20間の水田は、T.P.3.15～3.25mで、畦畔24から島島20に向けて高まっていた。島島20西側の水田では**畦畔25**が検出された。幅0.5～0.7m、高さ3～6cm。座標北から2°程東へ傾く。畦畔24からの距離は約22.0m。島島20・畦畔25間の水田はT.P.3.12～3.30mで、畦畔25から島島20に向けて高まっていた。

このように調査区東半の南北方向地割り部分では、各畦畔間の距離が11.0mを基本としていることが想定されるが、畦畔25から東へ11.0mの部分（Y=-37,303）は、第2面では盛り上がり確認されたが、当面では顕著な遺構は検出されておらず、他所よりもレベルが高いということもない。なお、畦畔25西側の水田域はT.P.3.06～3.16mで、北に向かいやや高まる。

次に、調査区西半であるが、北から東西方向、南北方向の順で見ることとする。**畦畔26**は島島21の南端から約10.0mの部分にある。南肩は筋堀に切られているが、幅0.55～0.7m、高さ2～8cm。座標東から北へ約2°傾く。第2面検出島島15の北肩部分にあたる。畦畔にしてはやや幅広だが、後述する当面検出の各畦畔間の距離を考慮して、畦畔と認定した。当面以降は、この畦畔を芯にして島島が形成されている。島島21・畦畔26間の水田は、T.P.2.98～3.05mでほぼ平坦だが、東側がやや高く西側がやや低い。畦畔26・島島27間の水田は、T.P.2.95～3.00mでほぼ平坦。畦畔26の南約9.0mでは**畦畔28**が検出された。攪乱に切られる部分もあるが、幅0.6～1.0m、高さ約0.1m。座標東から北へ約1°傾く。東で畦畔30・31に接続する。第2面島島16の中心付近にあたる。島島27・畦畔28間の水田は、攪乱が多く面が遺存している部分が少ないが、およそT.P.2.94～3.00m。畦畔28の南約8.0mでは**畦畔29**が検出された。畦畔の西端付近では水口が検出された。北側の大半を攪乱に切られるが、幅約1.1m、高さ5～12cm。座標東から北へ約2°傾く。第2面畦畔18の直下にあたる。畦畔28・29間の水田は、T.P.2.95～3.01mで比較的平坦。畦畔29・島島22間は、T.P.3.09～3.26mで、畦畔29から島島22に向かい高まる。北東が低く南西が高い。**畦畔30**は、南北方向の畦畔であり南端で畦畔28に接続する。幅約0.3m、高さ約5cm。攪乱以北では検出されなかったが、畦畔を挟んだ東西のレベルを考慮すると本

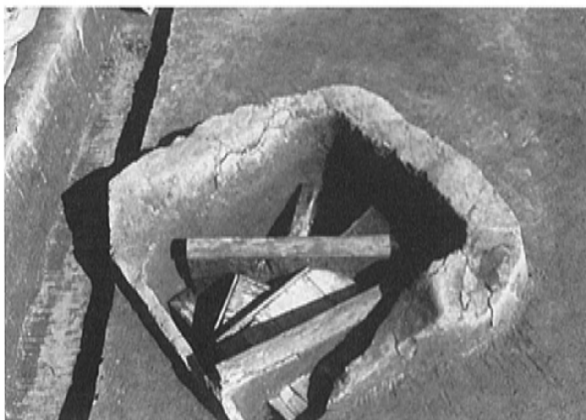


写真36 土坑36 遺物出土状況（西から）



写真37 土坑35（南から）

来は畦畔26に接続していた可能性が考えられる。畦畔31は畦畔28に接続する南北方向の畦畔で、西肩は良好に検出されなかった。幅約1.1m、高さ約6cmで、幅広である。なお、畦畔30・31東側の水田はT.P.2.99～3.05mで、北東がやや高い。

このように調査区西半の東西方向地割り部分では、各畦畔間の距離が約8.0mを基本としていることが想定される。また、地割りが変化する調査区中央部付近で畦畔30・31のような南北方向の畦畔も検出されており、島島21にしても、畦畔26にしても攪乱以東では延長が検出されていない。調査区中央部で遺構の検出はないが、上面同様この部分に何らかの土地区画上の意味があったものと思われる。

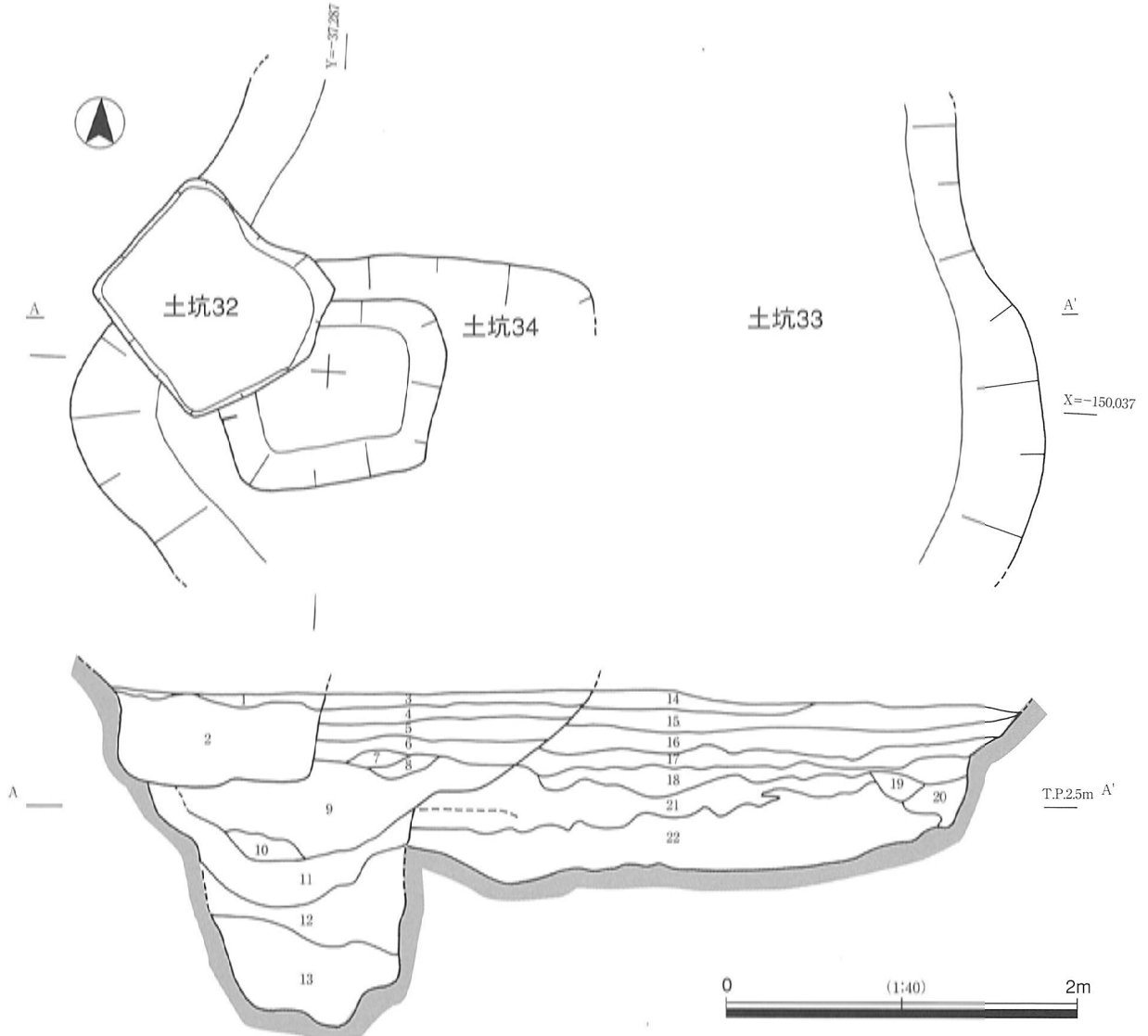
土坑 島島20西南部分で土坑32・33・34が重なって検出された(図16、写真39)。いずれも上層からの掘り込みで、当面に伴う遺構ではない。土坑32(写真38)は、長軸1.0m、短軸0.9mの隅丸方形の土坑で、深さは検出段階で0.6m。埋土は、最上部に0.1m弱、褐色(10YR4/4)シルト～細砂が見られる以外は、黒色(7.5Y2/1)・暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)の攪拌されたシルト。土坑からは木杵、木材、ワイヤー、染付、須恵器、土師器が出土した。土坑内への遺物の廃棄順は、まず南北・東西の土坑の長さとはほぼ同一の木材をX状にワイヤーで結びつけ底部に置き、さらに木材、木杵を複数置くというものである。出土遺物にワイヤーが見られることからその時期が現代であることは明らかである。本来は第1面で検出すべきであり、周辺に比べ鉄分の沈着が見られ赤っぽい部分であったものの、第1・2層と土坑の埋土が類似していたため見落としていたものである。なお、出土した木杵はコンクリートを流し込む際に使用されたものと考えられ、府営住宅建設後に埋められたものの可能性が考えられる。この部分は、府営住宅棟や諸施設の攪乱が見られない部分であり、上部に構造物がない部分に土坑を掘削し廃棄されたものであろう。土坑33は、土坑32・34に切られ、南北が側溝・筋堀に切られるため、正確な規模は不明だが、平面プランは不整形円形を呈す。長軸は5.4m、残存短軸は約2.6m、深さ1.2m。埋土は、上層が砂混じり粘質シルトで、上部ほどマンガンの沈着が顕著で黄褐色を呈し、下部ほど粘質で灰色を呈する。中間には薄い砂層を挟み、下層は灰色の粘質シルト。当面で検出されたが、X=-150,035ラインの土層断面観察用アゼで確認したところ、第1面段階には掘り込まれていることが明らかになった(図8)。土坑からは、外面平行タタキの須恵器甕片2点、土師器坏・羽釜、古式土師器等の小片が11点出土しているが、いずれも時期を示すような資料ではない。土坑34は、土坑32に切られ、土坑33を切る。土坑33の埋土断面観察のために残したアゼ(写真39)で確認されたものであり、平面での検出は底部の一部でのみしかされておらず、全体の規模については不明である。ただし、アゼ北側では断面が見られたものの、同南側では見られなかったことからこの部分が土坑の南辺と考えられ、土坑南辺の長さは約2.6mと推定される。また、底部の形状から、隅丸方形の土坑であったと推定され、土坑の北への広がりX=-150,035ラインのメイン断面には見られなかったことから2m以下と推定できる。深さは1.9m。埋土はシルト～細粒の砂を基本とする。掘削深度や、掘り抜いている層が第5b層の砂層であることから素掘りの井戸の可能性も考えられる。切りあい関係から第1面段階には既に掘り込まれていた土坑である。土坑からは、瓦質土器片1点、須恵器片6点、土師器片31点、瓦片2点、木製品2点が出土している。木製品のうち1点(図17-28、写真図版39)は「一七」?の墨書が見られる他、墨書の書かれた裏面では釘穴が、側面ではそれよりも大きい杓穴がそれぞれ見られ、何かの部材の一部と考えられる。樹種はスギ。なお、もう一点は加工痕が認められなかったことから図化していないが、樹種はマツ科である(第6章第1節参照)。遺物から時期は知りえないが、掘り込み推定面が第1面であることから近世後半の可能性が考えられる。なお、これらの土坑の切りあい関係から、掘



写真38 土坑32 遺物出土状況 (南から)



写真39 土坑32・33・34断面 (北西から)



土坑32埋土

- 1 10YR4/4 褐色シルト～細砂
- 2 75Y2/1 黒色シルト+25GY3/1 暗オリーブ灰色シルト

土坑34埋土

- 3 10YR4/2 灰黄褐色 粗砂混シルト 粘性弱 (Mn沈着)
- 4 10YR4/2～4/3 灰黄褐色～にぶい褐色 シルト 粘性弱。細砂混。3より粗砂の量が少ないが全体は砂っぽい
- 5 5Y5/1～4/1 灰色 細砂混じりシルト 3・4に比べ粘性強。
- 6 10Y4/1 灰色 シルト+中粒砂 しまり強
- 7 75GY4/1 暗緑灰色 シルト+細～中粒砂
- 8 10Y3/2 オリーブ黒色 シルト～粘土 粘性非常に強。

一部に薄いラミナ

- 9 5GY3/1 暗オリーブ灰色 粗砂混じりシルト 下部にのみラミナが見られる。
- 10 10Y4/1 灰色 粗砂混じりシルトと75Y5/2 灰オリーブ色 中砂の互相。ラミナ
- 11 25GY3/1 暗オリーブ灰色 粗砂混じりシルト
- 12 25Y7/3 浅黄色 細砂
- 13 N5/ 灰色 シルト+砂 (細砂) 14・15の混じったもの

土坑33埋土

- 14 10YR4/3 にぶい黄褐色 粗砂混じり粘質シルト (Mn沈着)
- 15 25Y5/1～4/1 黄灰色 粗砂混じり粘質シルト (14より砂少)

- 16 25Y5/1 黄灰色 粗砂混じり粘質シルト (上層より粘質)
- 17 5Y5/2 灰オリーブ色・5B5/1 青灰色 粗砂混じり粘質シルト
- 18 10YR3/1 黒褐色 粗砂混じり粘質シルト (第5層)+5B5/1 青灰色 粘質シルト (第4層下部) のブロック混 中～粗砂
- 19 25Y6/3 にぶい黄色・10YR4/4 褐色 中～粗砂
- 20 25Y4/1 黄灰色 中～粗砂混じり粘質シルト (砂上部に多い、17に類似)
- 21 N4/ 灰色 中～粗砂混じり粘質シルト (18より砂多)
- 22 5Y4/1 灰色 粘質シルト (砂僅かに混じるのみ) (炭酸鉄有り)

図16 土坑32・33・34 平・断面図 (S=1/40)

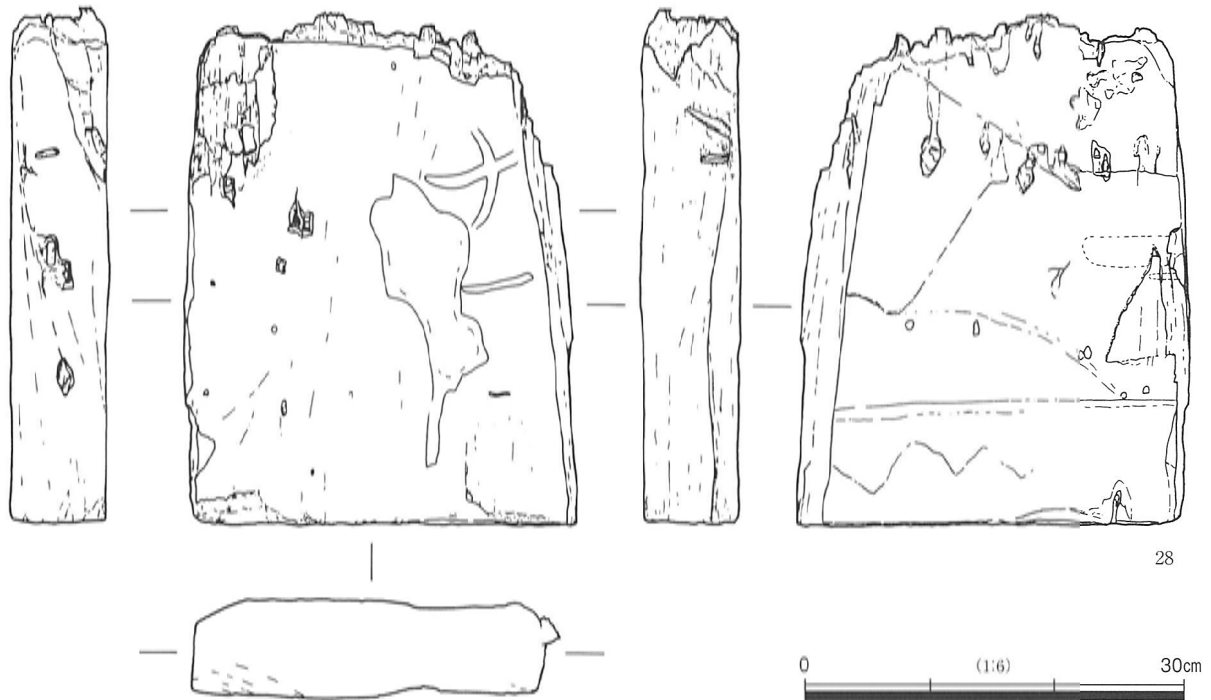


図17 土坑34 出土木製品 (S=1/6)

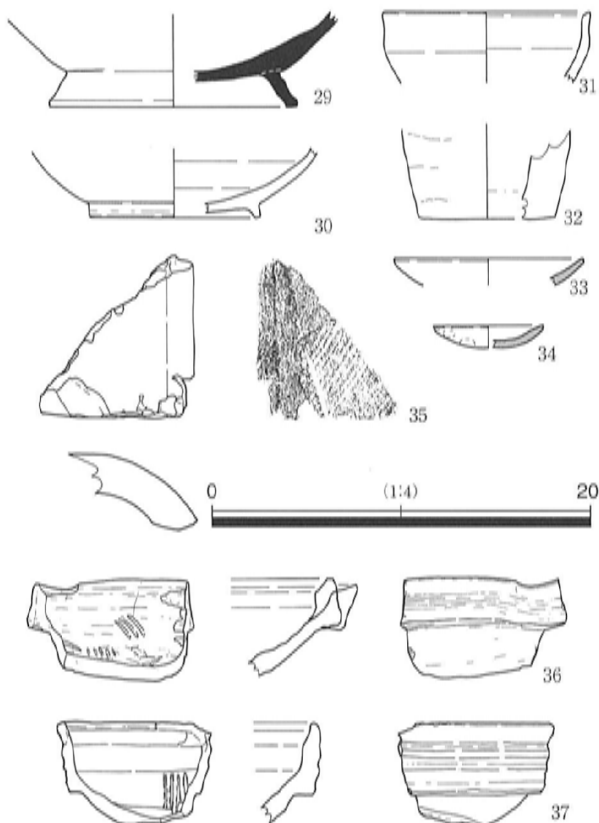


図18 第3-1層 出土遺物

直径0.8～1.0mの円形の土坑で、深さは0.25m。埋土は最上部に僅かににぶい黄褐色(10YR5/4)細砂が皿状に見られる以外は灰オリーブ色(7.5Y4/2・5Y4/2)シルト～細砂で、上部には砂礫が混じる。埋土最上部の状況から上部が削平されたものと考えられ、本来の掘り込み面は上面であろう。出土遺物はない。

削の順番は土坑33→34→32の順である。

畦畔25西側の水田区画北側では土坑35(写真37)が検出された。北側を攪乱に切られるものの、直径0.9～1.2mの円形の土坑で、深さは0.31m。埋土は、暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)中～粗砂混じりオリーブ黒色(10Y3/2)シルト。砂を多く含む第4層を掘り抜いているため砂が多く混じるが、全体的にはやや砂質なシルトであり、層相は第2層に類似する。このことから、本来の掘り込み面は第2面段階であると思われる。土坑からは、須恵器甕片1点、土師器片3点が出土している。

畦畔26南側では土坑36・37が近接して検出された。土坑36(写真36)は土坑32と同じ性格を有する土坑で、同様な規模、掘削方位、掘削深度であり、二者の関係はほぼ東西である。出土遺物やその廃棄方法もほぼ同一であり、第1面で検出されたが、当面で調査を行った。土坑32同様の木材やワイヤー以外、出土遺物はない。土坑37は

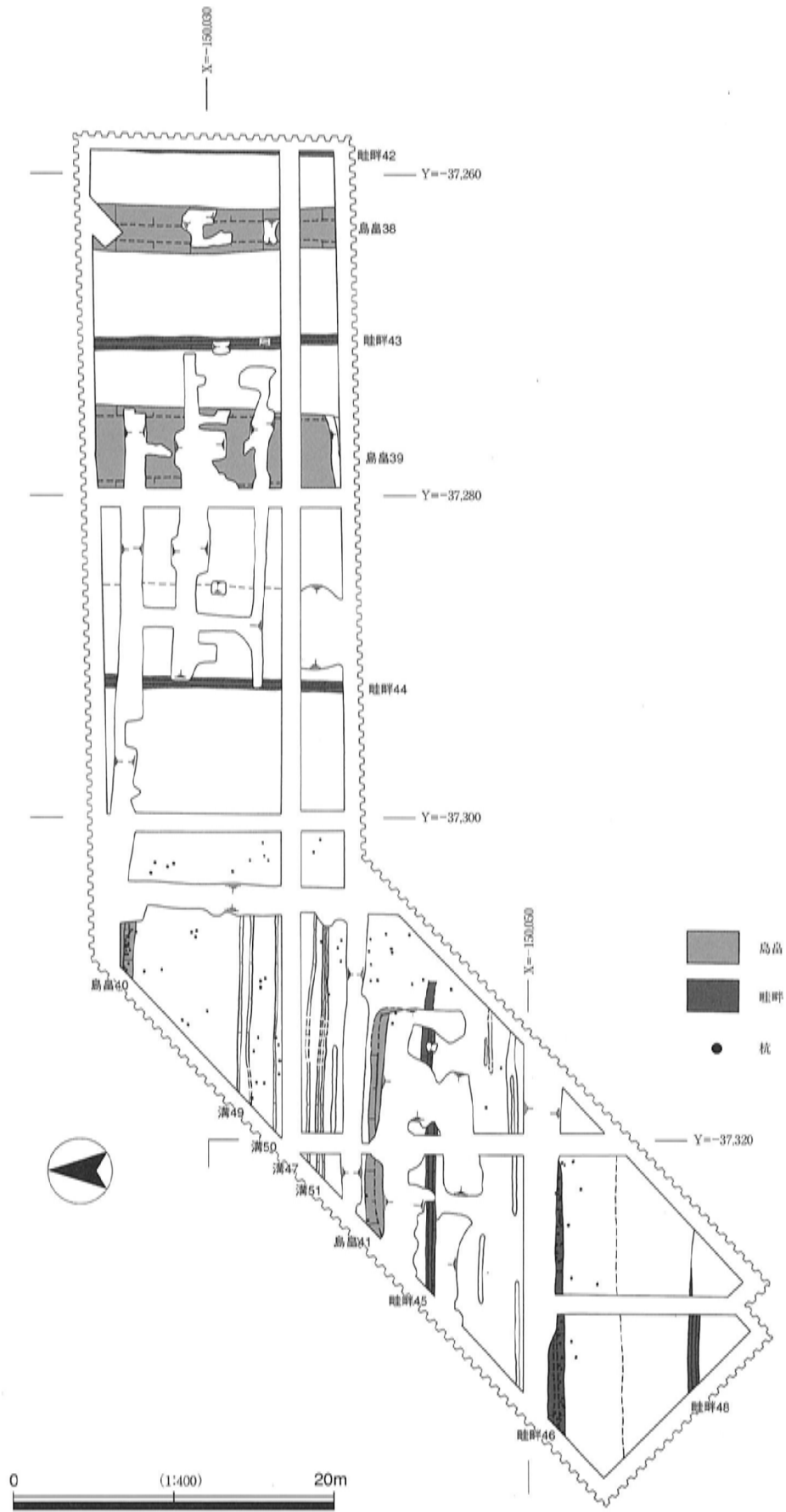


图19 第3-2面 平面图 (S=1/400)

出土遺物 (図18) 第3-1層からはいずれも破片の概数で、磁器20点、陶器17点、瓦質土器17点、瓦器19点、黒色土器2点、須恵器73点、土師器253点、瓦10点の計約411点の遺物が出土した。

29は須恵器台付壺。丁寧なつくりで、金属器模倣と考えられる。奈良時代後半で混入品。30は緑釉陶器碗。焼成は良好で須恵質だが、釉は内面に部分的に残存するのみ。脚部は削り出でて、平尾雅幸氏による脚部分類 [平尾1990] ではI Bbに該当するものと考えられ、同じく平尾氏の第三段階 (平安京Ⅱ期古～Ⅱ期新) [平尾1994] に該当するものと考えられる。9世紀後半～10世紀初頭。下層からの巻き上げであるが、緑釉陶器が出土することは重要であり、下層出土の緑釉陶器とともに後述する。なお、須恵質のものは極めて少なく、図化しえたのはこの資料のみである。31は波佐見焼青磁碗。18世紀で、混入品。32は土師器不明製品。33は瓦器皿で14世紀。この他にも瓦器は一定量見られ、小片が多く全体的な形状をうかがえる資料は少ないものの、外面のミガキがほとんど見られない資料や脚部が退化したものがほとんどである。34は土師器皿。いわゆるへそ皿だが、底部の突出は顕著ではない。器厚4mmと厚手で、胎土は白色を呈する。14～15世紀。35は丸瓦。凸面はナデ調整だが、凹面には布目痕が残る。14～15世紀。36・37は備前焼播鉢。36は一部に斜め方向の播目が見られ、16世紀末。37はそれよりもやや古相を呈し、16世紀第3四半期。

時期 第2層出土遺物の時期は、一部16世紀の瓦質土器 (図14-27) を含むものの、17～18世紀を中心とする。第3-1層出土遺物中には31のようにその時期に該当する遺物もあるが、図化以外にも少数であり上層からの混入と考えられる。これを除くと第3-1層出土遺物は14～16世紀の時期幅を有し、一部含まれるより古い段階の資料 (29・30) を下層からの巻き上げと判断すれば、当面の時期は14～16世紀頃と考えられる。

第3-2面 (図19) 第3-1層の粘質シルトを除去し検出されるのが、全体的に粗～極粗砂が多く混じる層で構成される第3-2面である。第3-1面に比べさらに島畠の減少が見られる。面の高さは、T.P.2.89～3.58m。地形の傾斜は第3-1面と同様であり、東半では島畠39から東と西へ下り、西半では南 (調査区南西端) から北 (同北西) に下がっている。島畠、畦畔、小溝が検出され、西半では杭が多く見られた。

島畠 4基検出された。島畠38は第3-1面島畠19に踏襲されるもので、第3-2面から第3-1面へはおもに西側肩に盛土が施され拡張している。島畠の最上部は上面までと同一である。幅2.5～3.0m。島畠39は第3-1面島畠20に踏襲されるものである。第3-1面では調査区南端で島畠の南端部分が検出されたが、当面ではその第3-1面段階の攪乱により不明である。当面の島畠南端部分の様相は不明ではあるが、当面から第1面にかけて調査区外南への島畠の拡大がなされている。東西の規模については、調査時点ではY=-37,279～280ライン付近に見られた若干の地層の質や色の違いから、第3-2面段階の島畠の西端をこの部分に想定し、調査を実施し、島畠39として検出した (図19のトーン部分)。しかし、第3-1層と想定して除去した第3-1面島畠20の西側部分の色調や質の差は不明瞭で、畦畔43・44間における島畠の位置を考えるとやや不自然であり、本来の島畠39の形状は第3-1面の島畠20と大差はなかった可能性も考えられる (図19のY=-37,285ラインの点線部分)。しかし、畦畔の間隔からは、畦畔43・44間で畦畔が筋掘部分西側でもう1条検出されても良い。筋掘際で検出を誤認した可能性を考えれば、島畠39の形状は検出状況でよいものと考えられる。島畠40は第3-1面島畠21に踏襲されるもので、規模に大きな変化は見られない。南肩部分では集中的な杭の打設が見られ、島畠の検

出範囲は狭いものの、約20本の杭が密に打ち込まれている。特にこの島畠の肩部が他の島畠に比べ砂質ということはないのだが、肩部の補強の意図があったと考えられる。島畠41は第3-1面島畠27に踏襲されるもので、上面同様南肩は攪乱に切られる。規模に大きな変化は見られない。

水田 調査区東端では畦畔42が検出された。第3-1面畦畔23の直下にあたる。上面よりも若干西に位置が変わっている。畦畔42から西へ約11.0mの部分では畦畔43が検出された。第3-1面畦畔24の直下にあたる。畦畔43から西へ約22.0mの部分では畦畔44が検出された。第3-1面畦畔25の直下にあたる。このように、東半の各畦畔は上面とほぼ同位置に築かれている。一方西半では、まず第3-1面畦畔28の直下では畦畔45が検出された。同じく第3-1面畦畔29直下では畦畔46が検出された。他に畦畔では見られないものの、当畦畔には多くの杭の打ち込みが見られた。また、この部分は他の畦畔よりも新しい段階まで見られることから、この畦畔が土地区画やや大きな意味合いを持っていたものと考えられる。これら以外に、上面では畦畔が検出されなかった部分で新たに検出されたものとして畦畔48が挙げられる。畦畔48は、第3-1面島畠22の下層で検出されたもので、畦畔46から南へ約8.0mの位置にあたるが、東側では良好に検出されなかった。

溝 島畠40・41間では溝が4条検出されている。いずれも皿状の浅い落ち込みである。北から、溝49は幅0.7~0.9m、深さ1~4cm。溝50は南肩を側溝に切られる。幅0.2~0.6m、深さ2~5cm。第3-1面で畦畔26が検出された直下にあたる。溝47は北肩を側溝に切られる。幅0.5~0.9m、深さ2~8cm。溝51は幅0.3~0.5m、深さ1~7cm。いずれからも出土遺物はない。これらの各溝は、いずれも第3-1層を埋土とする下面遺構である。やや規模に差は見られるが、類似した規模であり、底部に耕作具による痕跡が見られるということもないが、第3-1面段階の耕作に伴う痕跡であろう。

他にも、畦畔45・46間の水田部分では小溝が検出された。この溝は島畠40-41間で見られた溝とは異なり、幅0.2~0.3m、深さ3cm程度の細く浅い溝である。埋土は第3-1層であり、他の溝と同様の下面遺構である。

出土遺物 (図20・21) 第3-2層からは破片の概数で、陶器13点、瓦質土器9点、瓦器60点、黒色土器22点、須恵器497点、土師器1458点、瓦23点、製塩土器4点、金属製品1点、不明土製品8点、土製品1点、石製品・自然石8点の計約2104点の遺物が出土した。そのほとんどの95%が東半からの出土である。

38は白磁碗。白磁碗玉縁IV-2(大宰府編年白磁碗IV 1 a) [中世土器研究会編1995] で、12世紀後半。39・40は緑釉陶器。39は比較的硬質な胎土で、口縁端部が弱く外反する。40は軟質な胎土。脚部は削り出しで、30同様平尾分類のI B bに該当するものと考えられる。釉の残存はいずれも不良だが、釉の色調は類似する淡緑色である。9世紀の所産で下層からの混入。41は黒色土器A類坏。体部外面ヘラケズリ手法を用いているが、内面のミガキは摩滅により良好に観察されなかった。9~10世紀。42は土師器皿。全体的に摩滅が著しく調整は不明瞭だが、口縁部のみナデで、褐色系の色調であることから伊野分類 [中世土器研究会編1995] のAbタイプの小規格に相当すると考えられる。12世紀中頃。43は瓦器皿。全体的に焼成不良であるが、内面に僅かながら暗文が見られる。13世紀。44は黒色土器B類坏。焼成は不良で暗文は良好に観察されなかったが、しっかりした脚部を有する。10~11世紀。45・46は瓦器碗。いずれも摩滅によりミガキや暗文は見られないが、脚部は逆台形を呈する。尾上II-2期頃 [中世土器研究会編1995] で12世紀前半。47・48は土師器。いずれも摩滅が著しく調整は不明であるが、脚部は貼り付け。47は台付皿、48は碗か。11世紀か。49は須恵器坏B蓋。8世紀後半。50・

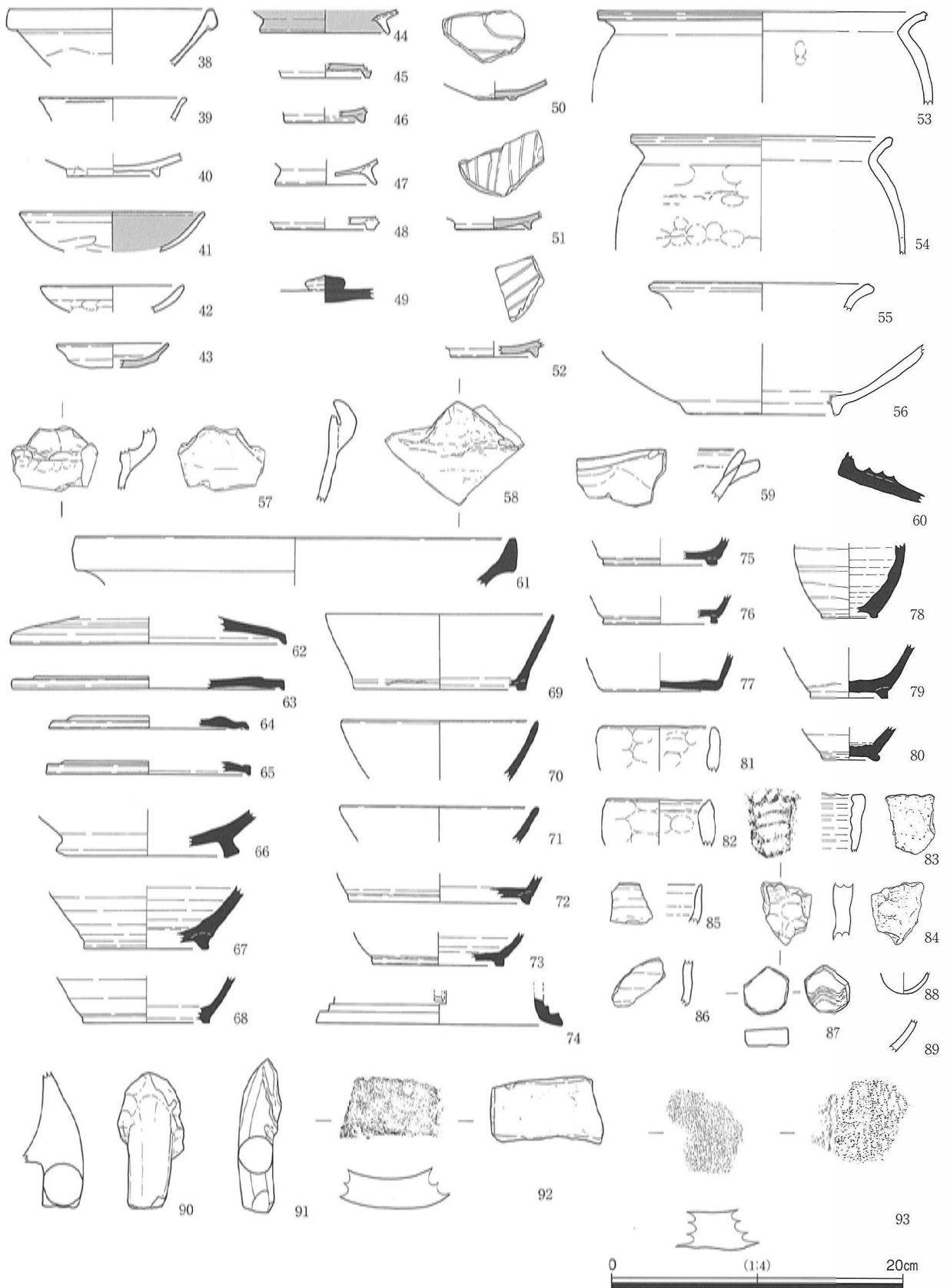


図20 第3-2層 出土遺物(1)

51・52は瓦器碗。50は脚部が退化しているが、内面に暗文が僅かに見られる。13世紀中頃（尾上Ⅳ-1期）。51・52は逆台形の脚部を有し、内面には平行暗文が見られる。12世紀後半（尾上Ⅱ-3期頃）。53～55は土師器甕。口径にバリエーションがあり、口縁部がやや外反するタイプ（53・55）と直線的な

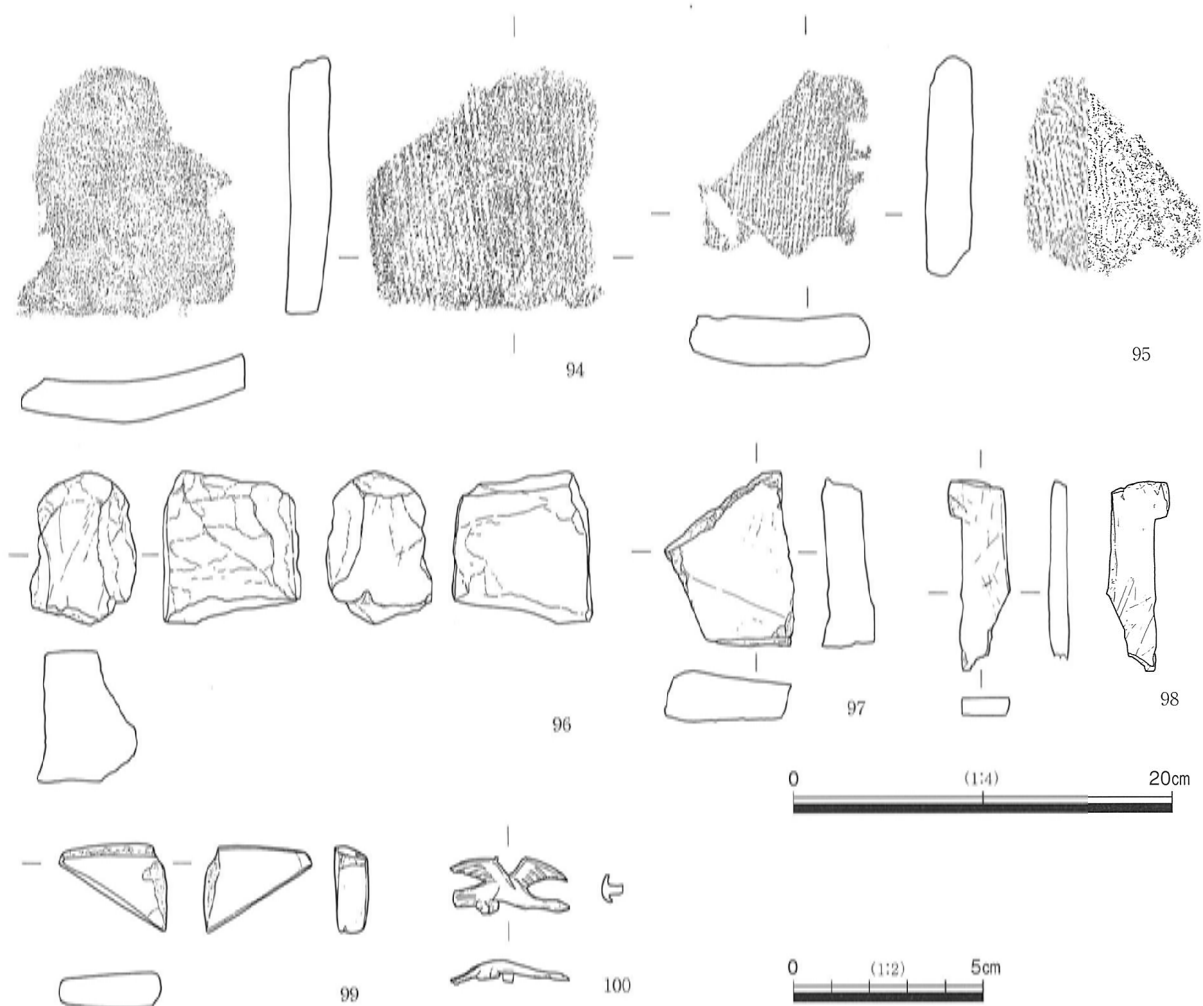


図21 第3-2層 出土遺物(2)

タイプ(54)とに分かれるが、口縁部が短く、口縁端部に凹線状の調整が見られる点で共通する。肩部以下が残存する53・54は口縁部～頸部下までをヨコナデする以下は指頭圧痕が見られる。いずれも9世紀。56は土師器坏B。9世紀。57・58は土師器甕B把手。9世紀。59は土師器鉢?口縁部片口部分。9世紀か。60は須恵器平瓶。9世紀。61は東播系須恵器捏鉢。口縁部が特に上部に拡張する。13世紀頃。62～65は須恵器坏B蓋。口縁部はA形態(62)とB形態(63～65)とがある。8世紀。66・67・73は須恵器壺。8～9世紀か。68～72は須恵器坏。68・69・72は坏B。8世紀後半。74は須恵器圈脚円面硯縦長方形の透かしを有するが、小片の為、何方かは不明。8～9世紀か。75・76は須恵器坏Bもしくは壺。8世紀後半。77は須恵器坏A。8世紀。78・80は須恵器壺M。79は壺L?で8世紀後半か。81～84は製塩土器。81は初痕跡が見られ、82には胎土中に赤彩粒が目立ち、いずれも指頭圧痕が顕著である。83は内面が凹凸を呈する。紀伊産。84は外面に接合痕が目立つ。いずれも8世紀。85～89は混入。85は唐津焼碗で、残存部分外面の下部僅かを除き緑色の釉を施す。17世紀。86は施釉陶器。近世。87は須恵器転用土製円板。近世。88は懷石料理などで用いられるつぼつぼ。16～17世紀。89は波佐見焼碗小片。18世紀。90・91は瓦質土器三足足鍋。14世紀。92～95は平瓦。92は摩滅著しいが、凹面には僅かに布目が残存する。13世紀頃か。他はいずれも、凹面に布目、凸面には縄目が残存する。92・93とも焼成がやや軟である。94の焼成は良好だが土師質の色調で、95は瓦質焼成である。いずれも古代。96～98は砥石。96はアルコース砂岩製で、2面に擦痕が見られる。97は流紋岩製で、1面が非常に平滑であり若干擦痕が

見られる。98はシルト岩製で、欠損部分が多いものの、残存する面はいずれも平滑であり擦痕が見られる。なお、98は側溝中からの出土であり、帰属層位はやや不確定である。他にも砥石が若干量ながら見られ、いずれも東半からの出土である。しかし、後述する第4層からもやはり一定量の砥石が出土していることから、これらは下層からの巻き上げで、当層に伴うものではないと考えられる。99は不明石製品。当初石帯の破片かと推定したが、一部欠落するものの、いずれの面も平滑であり形状は概ねこのようなものであったと考えられ、その可能性はないものと考えられる。石材は褐鉄鉱と赤鉄鉱の混じった石で、常磁性体で顔料としての使用があるらしく、顔料用の石材の可能性が考えられるという（富田克敏氏のご教示による）。おそらく第4層からの巻き上げであると思われる。これ1点のみの出土であるが、下層から比較的多くの砥石が出土していることとの関係性が若干考えられ興味深い。100は目貫で鳥が翼を広げて飛翔する状況を模したもの。雁もしくは鶴と考えられるが、羽が二重に表現されず足が短いことから雁の可能性が高い。この目貫は刀の外側につける指表さしおろての分ぶんで、銅合金（おそらく赤銅）製。また、目貫と刀につける部分である足が一体成形である鑄目貫で、容彫かたちほりだが、羽の部分は毛彫。江戸後期で混入だが、江戸後期にはこの程度の目貫は比較的流通していたという（三好考一氏のご教示による）。

時期 以上のように、第3－2層からは明らかに上層からの混入である17世紀以降の遺物を除くと、8～13世紀頃までの遺物が見られる。量的には古代の遺物が多いが、これらは後述する東半に見られる下層高まり部分からの巻き上げ資料である。下層と重複する時期を除き、下層からの巻き上げ資料が少ない西半資料の時期等から、東半・西半を含めた第3－2層に本来含まれる時期は13世紀頃であると考えられ、東半・西半を含めた当面の時期を13世紀頃と想定しておく。

第3－3面 (図22) 西半で、第3－2層の粗～極粗砂が多く混じる粘質シルトを除去し検出されるのが、全体的に極細～粗砂が混じるシルト～極細砂層で構成される第3－3面である。面の高さは、T.P.2.72～2.95m。地形の傾斜は東側の東半との境目部分と南端部分が高く、X=-150,045ライン西端付近が低い。第3－2面では島畠及び溝、ピットが検出された。

島畠 第3－2面で畦畔46が検出された下部では島畠52が検出された。筋堀に切られるものの、幅5m、高さ1～9cmで、大きく削平される。この部分は、下層の芯となる砂を巻き上げており粗～極粗砂が多く混じる。

溝 調査区北側では溝53・54が検出された。溝53は第3－2層を埋土とし、幅0.5m、深さ3～6cm。第3－2層の下面遺構。溝54は第3－1層を埋土とし、幅約0.4～1.0m、僅かにくぼむ程度で検出された。第3－1層下面遺構。いずれからも出土遺物はない。なお、溝53の北側ではこれらの溝よりも幅が狭い小溝が東西方向、南北方向に複数条検出された。各溝の幅は0.2mで、検出段階で深さはほとんどなかった。いずれも埋土は第3－1層から第3－3層までの各層で、第3－1層下面遺構。

また、図では表現していないが、第3－2面で島畠41が検出された部分の下部（Y=-37,320以西、X=-150,040ライン付近）では同様の小溝が検出されており、この段階にはこの部分に島畠はなかったものと考えられる。

そのほか、島畠52以南でも第3－2層を埋土とする小溝が多く検出された。溝の幅は0.1～0.2m。埋土である第3－2層と第3－3層とが類似するため、良好には検出されず痕跡程度での検出である。特に等間隔に掘削されている状況ではなかった。

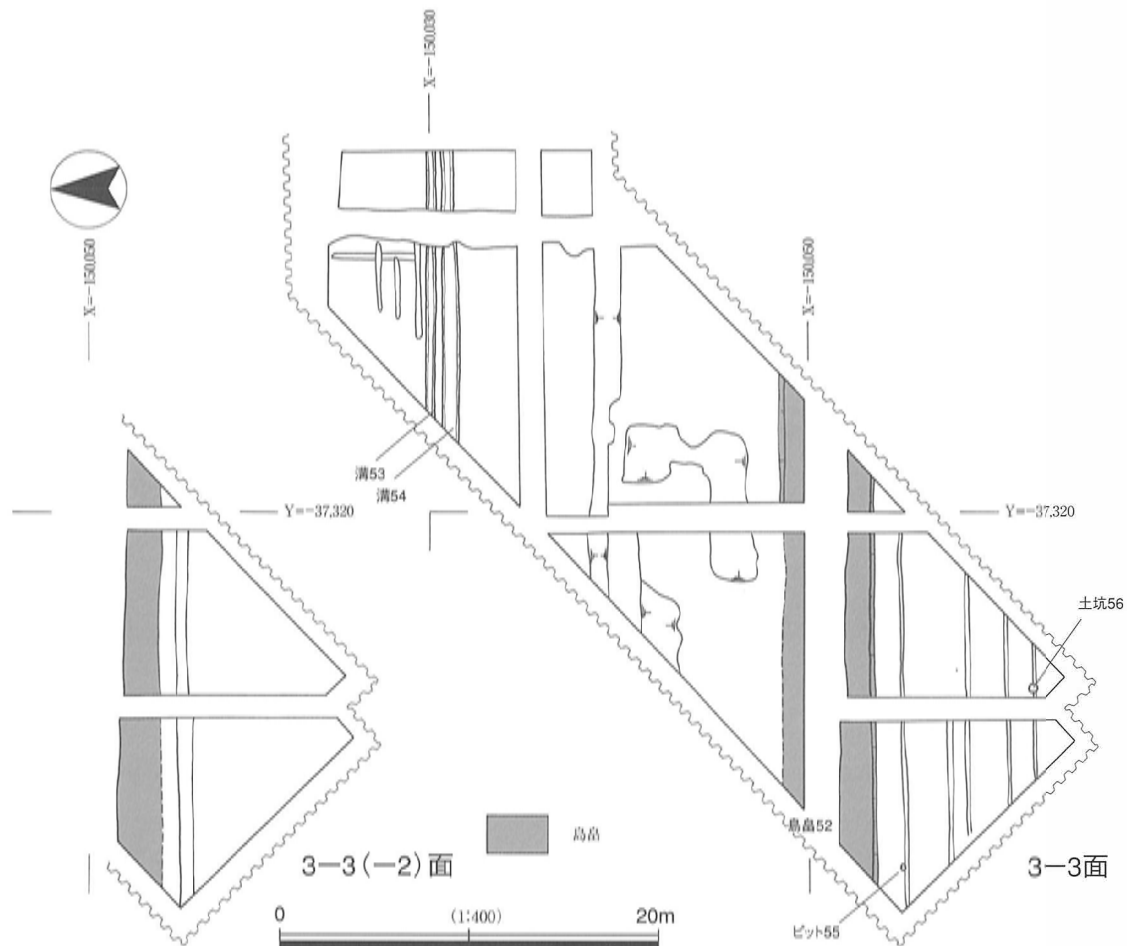


図22 第3-3面・第3-3(-2)面 平面図 (S=1/400)

土坑 鳥島52以南では土坑56が検出された。直径0.5m、深さ0.15m。第3-2層を埋土とする下面遺構である。この土坑からは、瓦器碗の小片が3点出土している。外面にはミガキが見られず、内面に僅かにミガキがみられることから、13世紀前半の所産と考えられる。小片の出土のみであり、土器埋納遺構ではないと思われる。

このように、当面に伴う遺構として検出されたのは鳥島52のみで、他の遺構はいずれも上面からの掘削である。また、畦畔は検出されなかったが、層は攪拌を受けており、耕作は行われていたと考えられる。

第3-3(-2)面 (図22) 調査区西南端の一部 (X=-150.050以南) で確認できた面で、第3-3層よりもやや粘質な層の上面である。面の高さは、T.P.2.82~2.95mで、北側のX=-150.050ライン際がやや高い。第3-3面で鳥島52が検出された部分は、鳥島の作土を除去した結果、その芯となる砂が露出し、この部分が南側よりやや高まっている。なお、砂は僅かに残存するのみで断面にもほとんど見られず、プライマリーなb層が一面に露出しているような状況ではなかった。また、この砂層は第3-3b層であり、本来はこの上部に盛土があったものの、第3-2面段階の耕作で攪拌され鳥島部分の分層が困難となったものであろう。また、その南側では第3-3層を埋土とする下面遺構の溝が検出された。溝は幅約0.7mで、深さは5cm弱。

出土遺物 (図23) 第3-3層は先述のように2層に細分されたが、第3-3(-2)層から出土した遺物は図化可能遺物がないため、両層から出土した遺物の概要についてここでまとめておく。なお、

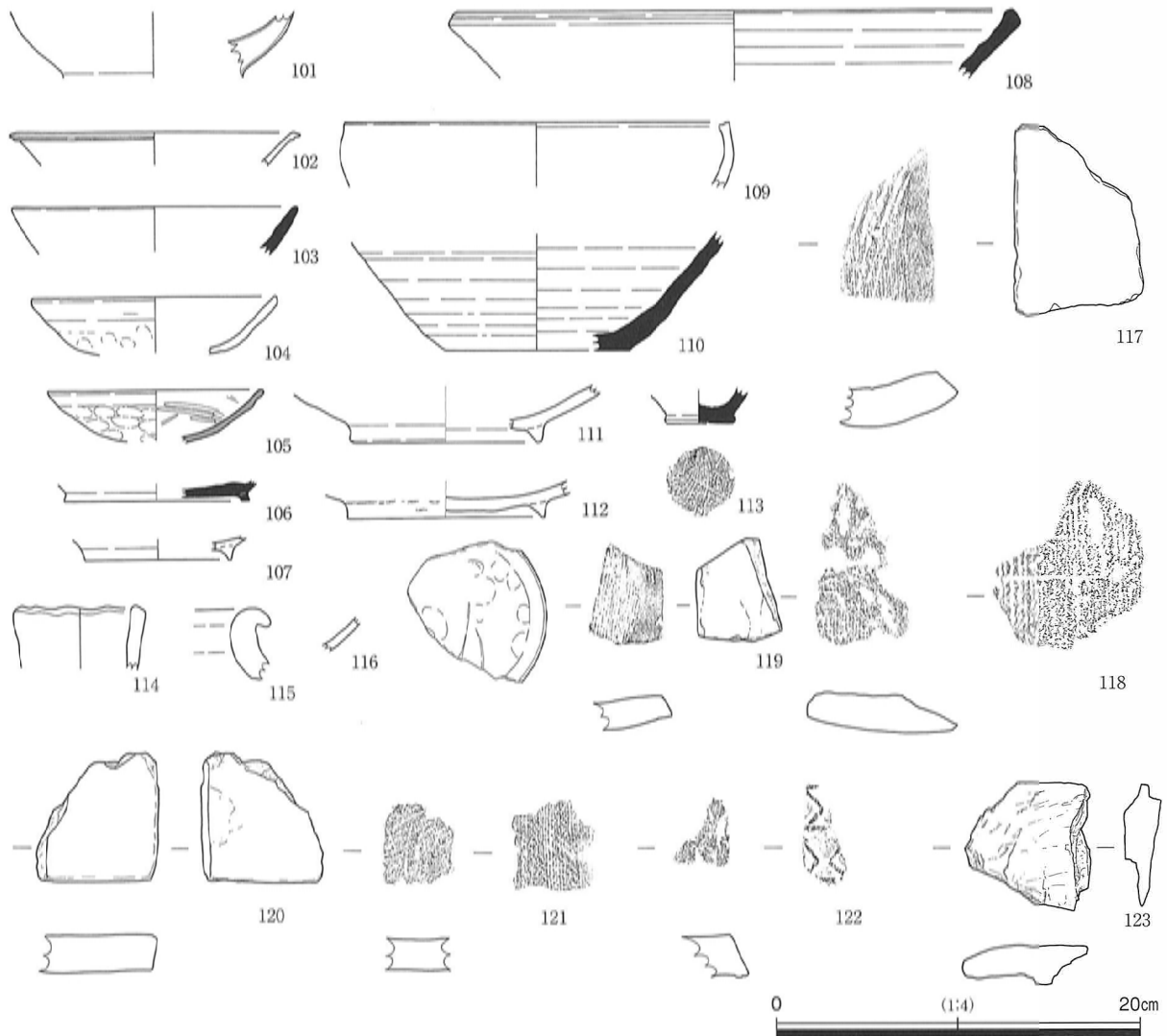


図23 第3-3層 出土遺物

いずれも破片の概数である。まず、第3-3層からは磁器が2点、陶器が1点、瓦質土器が1点、瓦器が28点、黒色土器（A類）が1点、須恵器104点、土師器242点、瓦12点、石2点の計約393点の遺物が出土した。また、第3-3（-2）層からは黒色土器B類が2点、須恵器が11点、土師器が7点、瓦が1点の計約21点の遺物が出土した。

101は龍泉窯系の青磁碗。15世紀後半で混入。102は輸入白磁碗Ⅷ3 [中世土器研究会編1995]。12世紀後半～13世紀前半。103は須恵器坏。8～9世紀前半。104は土師器碗。二次焼成を受け、器面は荒れるが、口縁部以下の外面には指頭圧痕が見られる。105は瓦器碗。焼成が悪く、黒色を呈さないが、内面に僅かに暗文が見られる。13世紀後半。106は須恵器坏B。焼成不良で、白色を呈する。9世紀前半か。107は土師器碗。脚部は断面三角形の貼り付け。9世紀前後か。108は須恵器鉢。口縁部は玉縁状を呈する。11世紀頃か。109は土師器鉢。摩滅が著しい。8世紀。110は須恵器鉢。111・112は土師器坏B。112の底部外面にはヘラ記号が見られる。8世紀。113は須恵器壺M。底部には糸切り痕が明瞭に見られる。8世紀後半～9世紀。114は製塩土器。8世紀。115は土師器甕。116は灰釉陶器か。外面にはほとんど釉は残存しないが、内面にはやや緑色がかった釉が施されている。117～122は平瓦。117は凹面に布目のち斜め方向の線が見られ、凸面はナデ調整。118の凹面は布目だが側縁付近には見られず、凸面はナデ。119は凹面布目、凸面縄目。120は焼成不良で調整も不明。121の凹面は布目、凸面は縄目

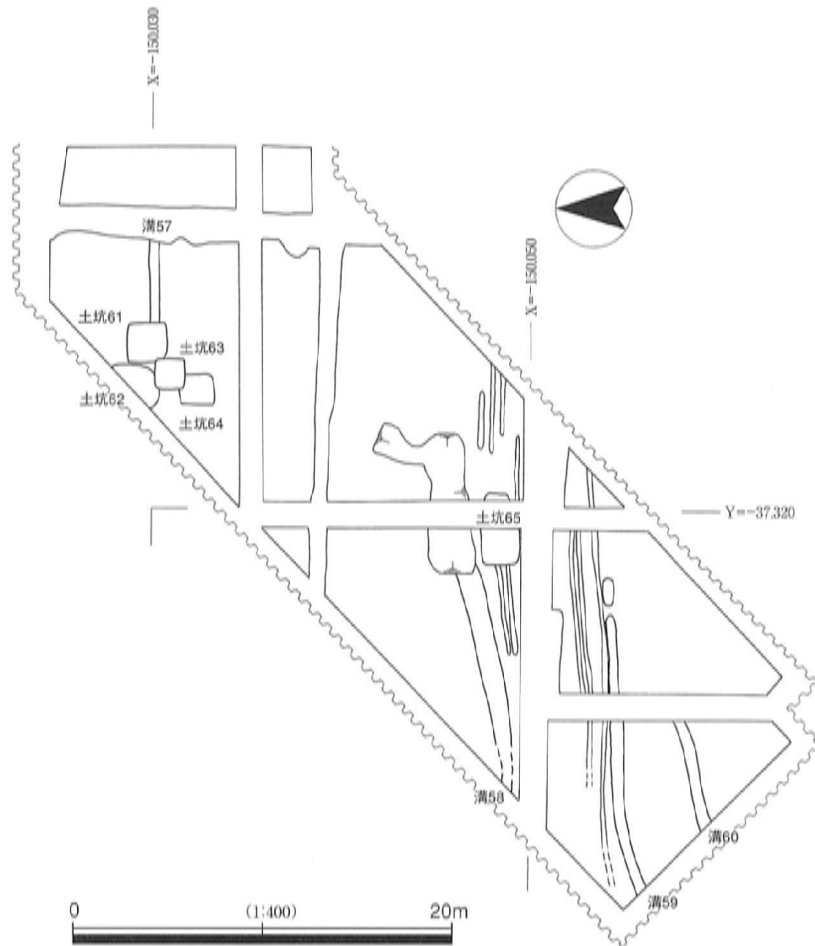


図24 第3-4面 平面図 (S=1/400)

のちナデ調整。122は凹面に布目、凸面にはスタンプ文が見られる。123は砥石。シルト岩製で、1面のみやや凸凹であるものの滑らかであり、擦痕が多く見られる。

時期 以上の第3-3層出土遺物は、混入と考えられる15世紀の資料を除いても、8世紀から13世紀頃までの多岐にわたる。しかし、図化しえなかった多くの瓦器破片の特徴にも、今回の層中で出土した新しい時期に相当する13世紀前半のものが多い。このことから、当面の時期を第3-2面とほとんど時期差は無いものの、13世紀前半と想定しておく。

第3-4面 (図24) 極細～粗砂が混じるシルト～極細砂層である第3-3層を除去し検出されるのが、第3-3層よりやや色調が明るく、粗～極粗砂が混じるシルト層上面である第3-4面である。第3-3面同様、西半のみで見られた面である。面の高さはT.P.2.69～2.95mで、東半との境界部が最も高い他、調査区南西側も高く、上面同様X=-150,040ライン西端付近が最も低い。溝、土坑が検出された。

溝 調査区北側のX=-150,030ラインでは溝57が検出された。第3-3層を埋土とする下面遺構である。幅0.5m、深さ5～8cm。西側で、後述する土坑61を切っており、掘削は土坑よりも新しい。溝の底部は皿状で、顕著な痕跡は見られなかったが、耕作に関する遺構であろう。遺物の出土はない。

また、調査区南側のX=-150,460以南では複数条の溝が検出された (写真40・41)。いずれの溝も東西方向から北東-南西方向に3～10°程振る。これらのうち、番号を付加しているのは幅広の溝のみで

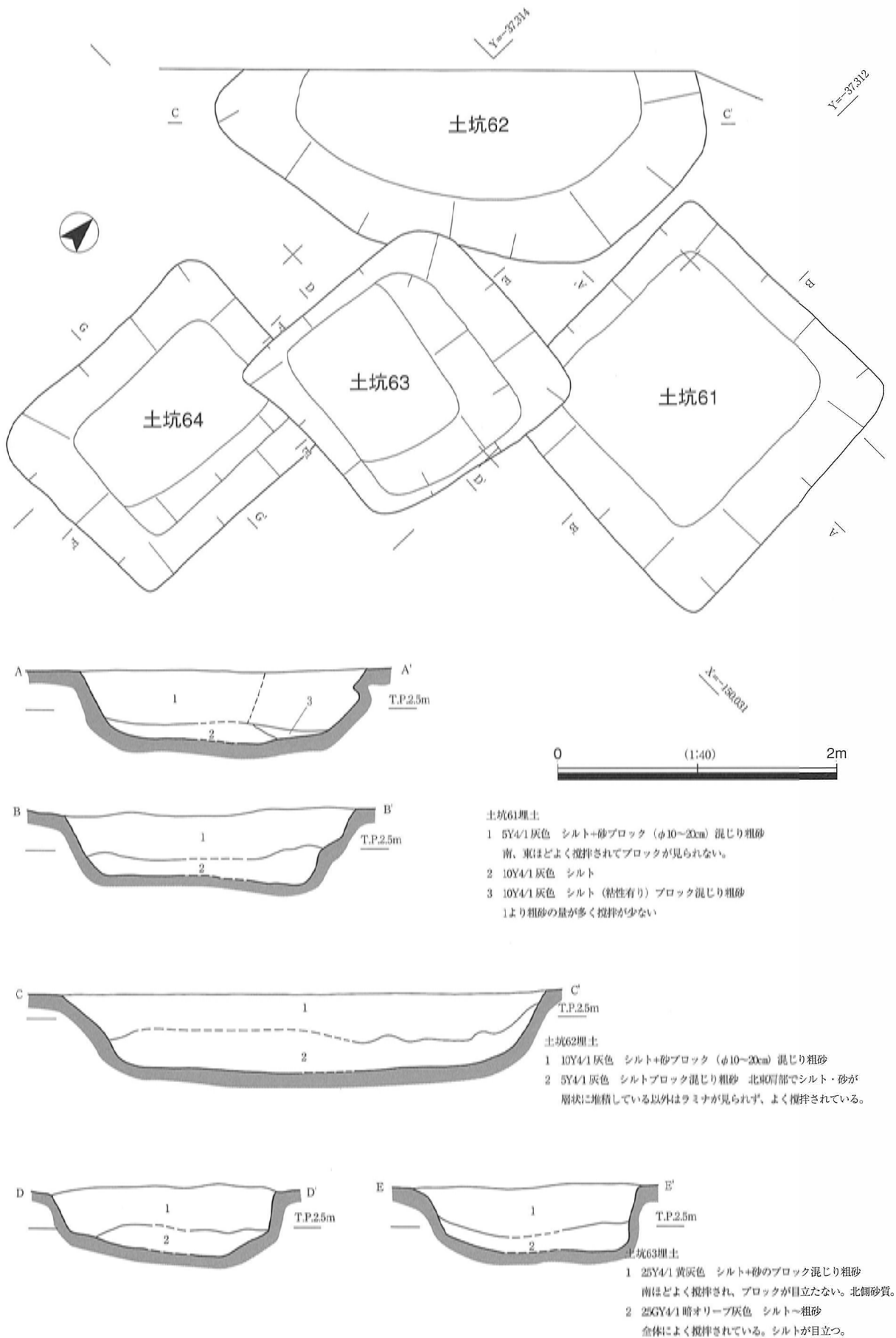


図25 土坑61・62・63・64 平・断面図 (S=1/40)

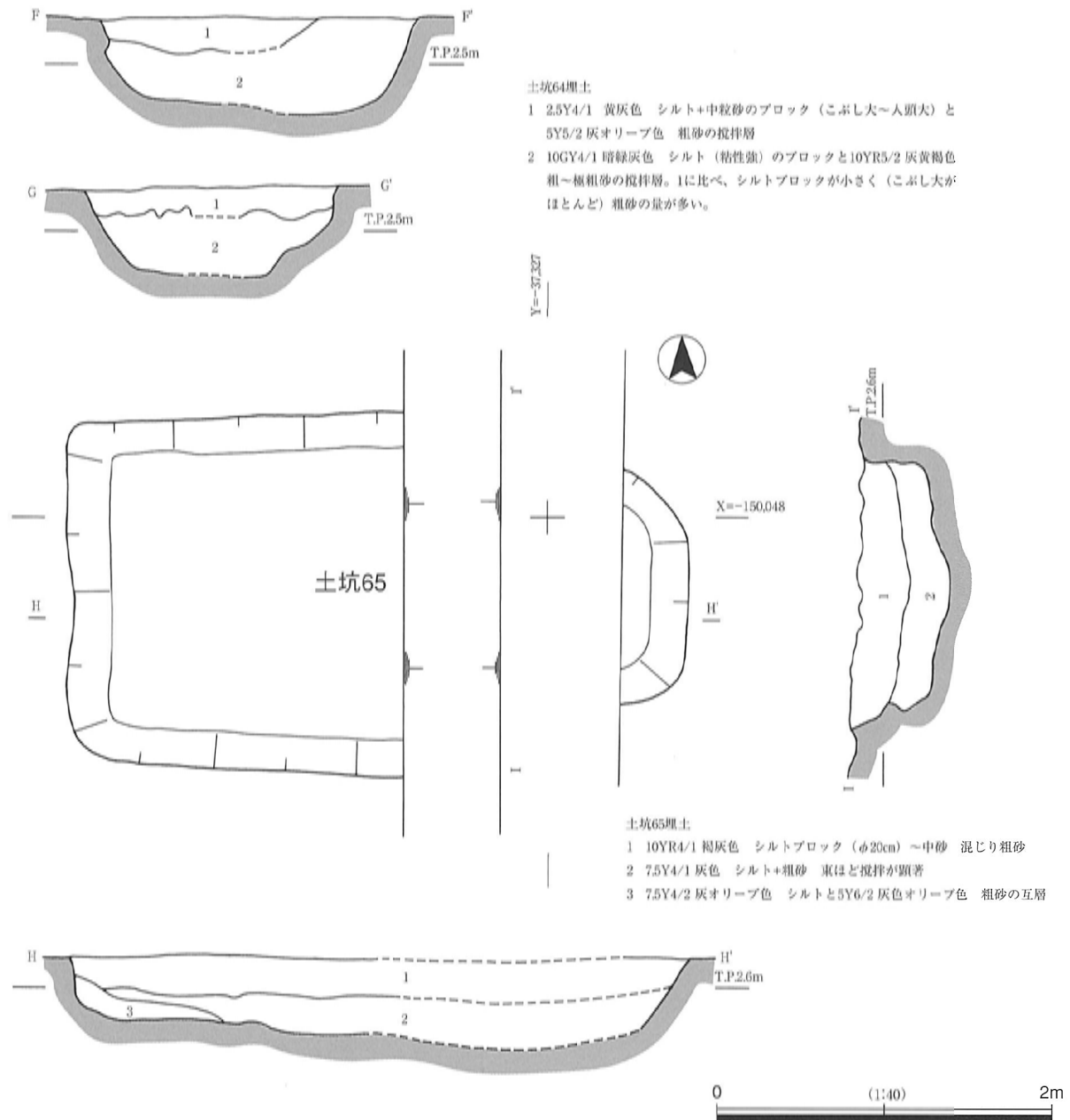


図26 第3-4面 土坑64 断面、土坑65 平・断面図 (S=1/40)

ある。溝58はY=-37.320以西に見られ、幅0.6~0.9m。これのみ、やや他の溝と埋土を異にし、粗砂を多く含むシルトのブロックを埋土とする。溝底部は凸凹しており、砂の落ち込みが多く見られた。耕作に伴う遺構であろう。溝59 (写真42) は、幅0.4~0.6m。第3-3層を埋土とし、底部には不定円形の埋土の落ち込みが概ね3列にわたり見られた。佐藤の耕作痕の特徴 [佐藤2000] の多くが当てはまり、耕作痕跡であろう。溝60は、幅0.6m。第3-3層を埋土とする。溝の底部は皿状で、顕著な痕跡は見られなかったが、耕作に関する遺構であろう。いずれも痕跡程度の検出で、出土遺物はない。これら以外にも、溝58・59間には4条の細めの溝が検出された。幅は0.1~0.25m程度。埋土はいずれも第3-3層である。なお、溝58の南側に見られる2~3条の溝は、後述する土坑65埋没後に掘削されたものである (写真40)。これらの小溝は浅く、痕跡で検出された部分も多い。いずれからも出土遺物はない。

溝はいずれも何らかの耕作に伴うものであることは容易に推定できるが、すべての溝が同一の意図、目的を持って掘削されたものではないことも、埋土の状況の差異や底部形態などから推定される。検出段階では溝58を除きいずれも類似した埋土であった。しかし、類似した埋土中でも底部に凹凸が見られたのは溝59のみで、これ以外に底部に明瞭な凹凸の見られた溝はない。詳細な観察を怠ったため本来はあったのかもしれないが、いずれにせよ明瞭ではない。なお、土坑との関係については後述する。

土坑 調査区北側では4つの土坑（土坑61～64）が重なって検出された（図25、写真44）。いずれも概ね類似した規模、埋土であった。検出されたのは当面であるが、当面を検出するために第3～3層を掘削していた途中段階から土坑が見え始めていたので、土坑の掘削時期は、第3～3面のある段階というこ



写真40 第3～4面溝、土坑65検出状況（東から）

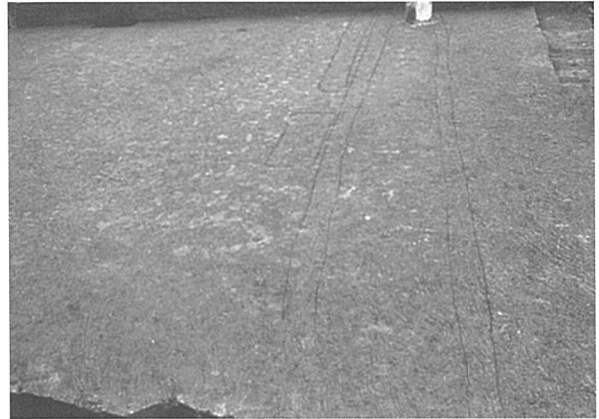


写真41 第3～4面溝群検出状況（東から）



写真42 溝59底部耕具痕（東から）



写真43 土坑65（南から）



写真44 土坑61・62・63・64（北から）



写真45 土坑61・63の切り合い（東から）

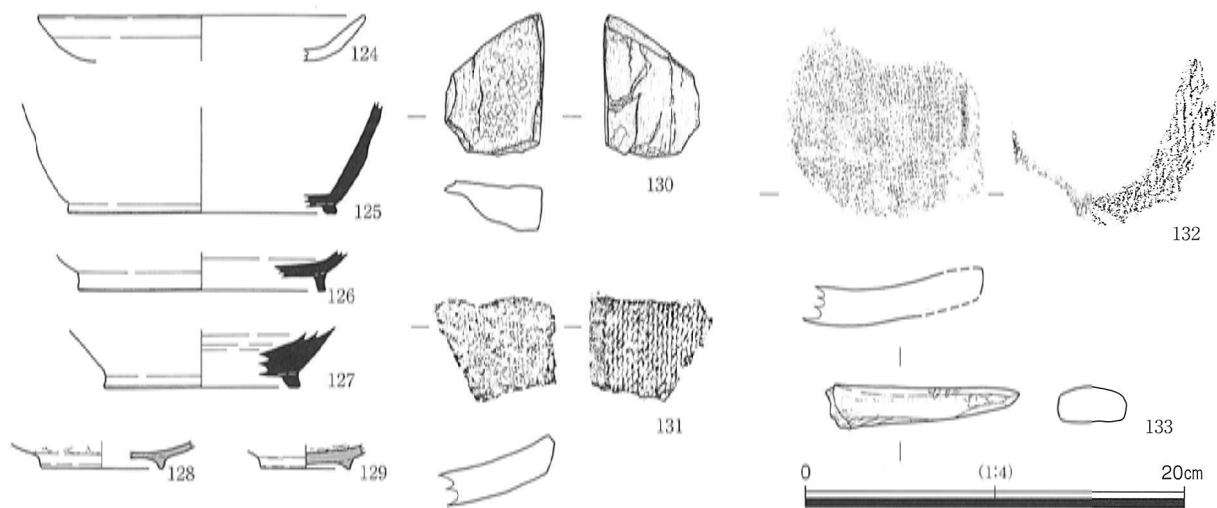


図27 第3-4層 出土遺物

とになろう。土坑61(図25)は隅丸方形の土坑で、長軸、短軸とも2.1m、深さ0.54m。土坑62とは極めて近接するが切り合い関係はなく、土坑63に切られる(写真45)。埋土は灰色(5Y4/1、10Y4/1)シルトと砂のブロックが粗砂中に混じり、下部ほど粗砂の量が多い。遺物は土師器が3点と須恵器が1点出土しているが、いずれも小片であり、時期は不明である。土坑62(図25)は、北西を側溝に切られ、この土坑群の中で唯一形状が異なり楕円形に近い形状である。長軸約2.5m、短軸2.2m、深さ0.56m。土坑63に切られる。埋土は灰色(5Y4/1、10Y4/1)シルトと砂のブロックが粗砂中に混じる。出土遺物はない。土坑63(図25)は隅丸方形の土坑で、長軸、短軸1.6m、深さ0.51m。この土坑群のいずれの土坑も切る。埋土は灰色(2.5Y4/1、2.5GY4/1)シルトと砂のブロックが粗砂中に混じり、下部は攪拌をより受け、シルトが目立つ。出土遺物はない。土坑64(図25・26)は長方形の土坑で、長軸1.9m、短軸1.6m、深さ0.57m。土坑63に切られる。埋土は(2.5Y4/1、10Y4/1)シルトと砂のブロックが粗砂中に混じるが、ブロックが顕著な部分と、よく攪拌されておりブロックが見られない部分とがある。また、下部ほど粗砂の量が多く、ブロックが目立たない。出土遺物はない。

なお、各土坑の新旧関係であるが、土坑63が最も新しいことは明らかであるが、それ以外に切り合い関係はなく、新旧関係を探るのはやや困難である。なお、土坑61と土坑63は極めて近接するにもかかわらず、切り合い関係がないことからこの2つの土坑は、ほぼ同時か極めて近い時期の掘削であると考えられる。また、多少の前後関係はあるが、全体の形状が知りえない土坑62を除き、いずれも類似した規模、平面形態であることから大きな時期差はないものと考えられる。また、各土坑は下層第4b層の砂層まで掘削されている。当面の直上に洪水堆積層が明瞭に存在しないので、池島・福万寺遺跡の第1b面で検出される土坑の一部のような、洪水直後の土壌回復と洪水堆積物の埋積を目的とした土坑[江浦・長原1995]とは性格を異にする。類似する土坑としては、山賀遺跡第9次調査[松田1996]で検出された矩形もしくは不整楕円形の中世(室町時代?)土取り用土坑がある。この土坑を土取りとする根拠として「掘削されたプライマリーな堆積物は下位の砂礫と泥質堆積物で、これらを混合すると、いわゆる「砂土」でもなく「重粘土」でもない畑作に適した土がえられると考えられる[33]」ことを挙げている。当調査区の土坑も、同様に第4b層の粘土~極細砂や粗~極粗砂を掘削しており、平面形が土坑62を除き異なるものの、同様の意図をもった土取り用の土坑であろう。

また、小溝群が集中し検出された部分では土坑65(図26、写真43)が検出された。筋堀に切られるものの、長軸3.8m、短軸2.1m、深さ0.48m。先述の土坑群とはやや規模を異にするが、掘削されて

いる層は同様であり、同様に土取り用の土坑であろう。出土遺物はない。

なお、土坑と溝の関係についてであるが、切り合い関係があるものについては、すべて溝が土坑を切っている。これは、土壌を改良するための砂を得るための土坑が掘削され、土を埋め戻し、掘削した砂を周辺の土壌と混ぜ、その後耕作が行われ溝が掘削されたという手順を示しているものと考えられる。また、溝58底部に見られる砂はこの掘削した砂を混ぜた痕跡を示しているのかもしれない。

出土遺物 (図27) 第3－4層からは破片の概数で、瓦器が36点、黒色土器が4点、須恵器が105点、土師器が154点、瓦が5点、製塩土器が1点の計約305点の遺物が出土した。

124は土師器皿。125は須恵器坏B。8世紀後半。126・127は須恵器壺。128・129は瓦器碗。128は高台断面が台形だが、内面の暗文は良好には見られない。12世紀前半(尾上Ⅱ－1期頃)。129は内面には僅かに暗文が見られる。高台の断面は三角形を呈する。12世紀後半(尾上Ⅱ－3期)。130は砥石。1面に敲打痕が見られる。131・132は平瓦。133は土師器把手。

時期 以上のように、第3－4層からは8～12世紀の遺物が出土している。下層からの巻き上げである古代の土器を除くと、図化した2点の瓦器や、図化し得なかったものの、高台が断面三角形ながらも明瞭に残存する瓦器の時期から当層に含まれる遺物の時期は12世紀と考えられ、第3－4面の時期を12世紀後半と想定しておく。

小結

以上が、近世～中世の成果であり、性格不明の遺構を除けば、ほとんど全てが耕作に関するものであった。基本層序でも述べたように、この段階の堆積は薄く上層の影響を受け、必ずしも遺構の残存は良好ではなかった。しかし大まかながら、島島の時期を追うごとの拡大という従来の成果を追認することができた。その中で、調査区東半に見られる大きな島島は正確な調査ができなかったきらいはあるものの、途中(第3－1面)から水田畦畔による1町単位の区画を無視し構築されており興味深い。また、調査区の東西で地割りが異なることも興味深い。これには下面以来の影響があるものと思われ、次節で後述する。

なお、花粉分析の結果では、全体的に花粉化石の産出は不良ながら、まず島島部分でソバ栽培が行われていた可能性が指摘されている上、作土中に水田雑草が見られることから水田作土を盛土していた可能性も考えられ興味深い。また、水田部分では水田稲作と共にナタネなどの栽培も行われていた可能性が指摘されている(第6章第3節参照)。

なお、以下の面では東西・南北方向を志向する溝は多く掘削されるものの、中世の面で畦畔が見られた部分に、同様に水田を暗示する畦畔は見られない。これらの溝も条里制に伴うものと考えられるが、基本的に水田を志向する条里制において、その当初から畦畔が築かれないことは興味深い。次節で記すが、古代に見られた若干特殊な遺構に規制されていた可能性も考えられる。昭和17年の航空写真でも、調査区東半部分から北にかけて地割りの乱れが見られる(写真1)。このような条里制施工当初に水田畦畔が見られない状況は、当調査区部分の特殊性である可能性が高いと現状では推定しておく。

また、混入が多いものの、比較的多くの遺物も出土した。顔料と思われる石(図21-99)はその中でも特に興味深い遺物の一つである。本節で上げた資料の多くは下層からの巻き上げではあるが、緑釉陶器をはじめとする8～9世紀頃の遺物が多く見られたことは、古代の当調査区の性格を考える上で重要な遺物と言え、これらを含めた上で、次節で後述する。

第2節 古代～中世前半

第4面および第4層の土壤化層を除去し、検出される第4b面が古代を中心とする遺構面である。調査区東半が微高地となり、この部分

でのみ遺構が検出され、西半での遺構の検出は皆無である。

第4面 (図28) 東半では第3-2層を、西半では第3-4層をそれぞれ除去し検出されるのが、粘質シルトで構成される第4面であり、東半では第4層に多くの砂礫が混じる。面の高さは、T.P.2.61~3.18m。西半中央部が最も低く、そこから南西へは緩やかに高まるが、東側へは比較的急激に高まる。東半は微高地になっており、溝、土坑、ピットなど多くの遺構が検出されたが、西半では遺構の検出はない。面上からは石の出土が見られたが、特に規則性は見られなかった。

溝 調査区東半では計57条の溝が検出された。とくに、第3-2面で鳥島39が検出された部分では、規則的に複数回に亘り掘削された溝が多く検出された。溝の埋土は大きく5種類(A~E類)に分けることができ、さらに掘削箇所による差異が見られ細分されるが、基本的に5類型、および若干の細分で記載する。細かい色調、質については、表17を参照されたい。なお、いずれも第4層よりもやや粘質であり、第4層と同様の砂質シルトでもややシルト質、粘質である。以下で簡単に、埋土が5種類のいずれかを記した上で、各溝について記す。

A類：色調は褐色系。褐色・褐灰色など面の色調と類似する1類と、に

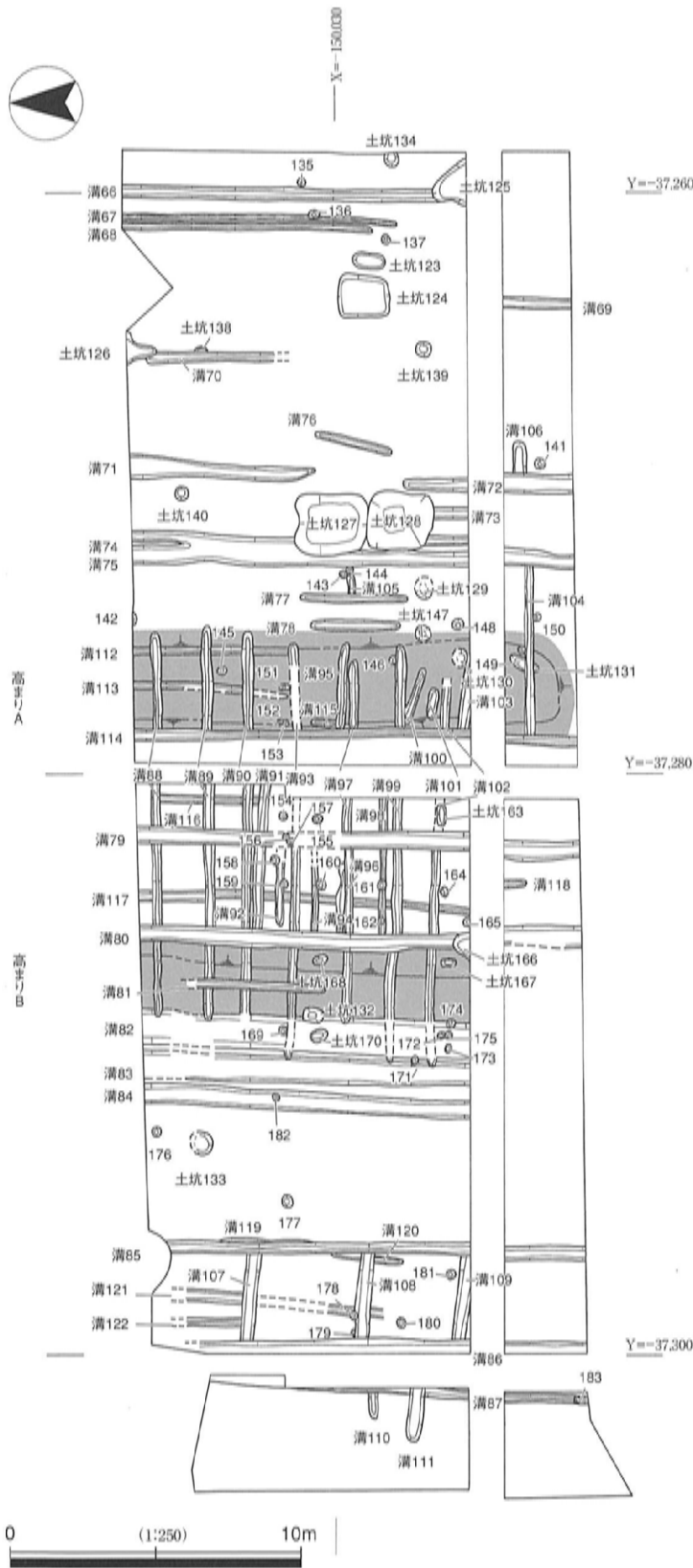


図28 第4面東半 平面図 (S=1/250)

ぶい黄褐色の2類に細分される。埋土は粗砂混じり砂質シルトで、1・2類とも同一。混じる砂は第4b層の巻き上げと考えられる。溝は浅いものが多く、調査区内で連続しないものが多い。

B類：色調は灰黄色・黒褐色。埋土は粗～極粗砂混じり粘質シルトで、やや砂質。D類の溝と同じ箇所での検出ではあるが、検出段階において不明瞭であり、途切れがちで連続しない。

C類：色調は黄灰色。埋土は砂混じり粘質シルト。溝の掘削は比較的等間隔で3.5～4.0mと、D類に似るが、溝の形状がやや幅広で深く、溝の間隔も広いので別類とした。A類を切り、E類に切られる。

D類：色調は褐灰色か黒褐色で、面よりも暗く検出は比較的容易。埋土は粘質シルト～砂質シルトで、埋土上部には粗～極粗砂が多く混じるが、下部にはあまり混じらない。溝の掘削は比較的等間隔で、ほぼ1.5～2.0m間隔に掘削されている。検出箇所は第3面で鳥壘が検出された箇所にほぼ一致する。

E類：色調は黄灰・褐灰・褐色などバリエーションがある。埋土は、明らかに第3層に類似する粘質シルトであり、そのなかでも若干砂質な1類と粗～極粗砂が混じるものの粘質な2類とに細分される。すべての溝の中で最も検出が容易であり、幅広のものが多い。

溝66は幅0.3～0.5m、深さ5～7cm。南側を土坑125に切られるが、埋土は類似し、比較的近い時期の掘削であろう。粗砂混じり砂質シルトを埋土とするが、色調が第4層と似る褐色～褐灰色(A-1類)で、やや検出しにくかった。須恵器片2点(甕他)、土師器片11点が出土した。いずれも小片で時期を窺えるような資料はない。

溝67は幅0.2～0.3m、深さ3～5cm。南側へ浅くなり、X=-150,032以南では見られない。溝66同様、粗砂混じり砂質シルトを埋土とするが、色調はにぶい黄褐色(A-2類)であり、近接する溝66よりやや検出は容易であった。出土遺物はない。

溝68は幅0.2～0.4m、深さ1～3cm。溝67とほぼ接して検出され、規模なども類似する。南側ほど浅くなり、X=-150,031以南では見られない。埋土はA-2類。出土遺物はない。

溝69は幅0.3m、深さ2～4cm。筋堀以南でのみ検出された。埋土はA-1類。出土遺物はない。

溝70は北側を土坑126に、南側を攪乱に切られ、幅0.2～0.4m、深さ2～5cm。埋土はA-2類。出土遺物はない。

溝71は幅0.5～0.8mとやや幅広。深さは北側で深く0.12mだが、南へ浅くなりX=-150,030以南では見られない。埋土はA-2類。出土遺物はない。

溝72は幅0.2～0.7m。深さは南側で深く9cmだが、北側へ浅くなりX=-150,032以北では見られない。埋土はA-1類。なお、溝71と72は埋土が若干異なるものの、ほぼ延長線上にあることから、同一の溝の可能性が考えられる。摩滅した土師器片が1点出土しているのみであり、時期不明。

溝73は幅0.4m、深さ5cm。北側は土坑128に、南側は筋堀に切られ、部分的に検出されたのみ。埋土はA-1類。出土遺物はない。

溝74と75は接して検出され、大部分で同一の溝となっている。**溝74**は幅0.3～0.4m、深さ5～8cm。**溝75**は幅0.5～0.7m、深さ1～16cm。埋土はいずれも黄灰色の粗砂混じり粘質シルトで、やや砂質である(E-1類)。溝74からは遺物の出土はないが、溝75からは瓦器片1点、須恵器片1点、土師器片2点が出土している。瓦器片は小片ではあるが、口縁部付近の破片で外面にはミガキが見られず、内面に3条の暗文が見られるのみであることから、13世紀前半(尾上II-3期以降)の所産であると思われる。

溝76は幅0.3m、深さ2～4cm。埋土はA-1類。この溝は周辺の南北方向溝と軸が異なり、東にやや振っている(N-15°-E)。出土遺物はない。

溝77は幅0.3m、深さ5～7cm。埋土はA-2類。出土遺物はない。

溝78は幅0.3m、深さ1～3cm。埋土はA-1類。土師器片18点と製塩土器と思われる小片1点が出土している。1点のみ図化可能だった(図31)。136は土師器甕。外反する口縁で、端部はやや外方に摘み上部に不明瞭ながら弱く面をもつ。口縁La形態で、8世紀頃か。これ以外は時期不明。

溝79は幅0.5～0.7m、深さ3～5cm。埋土はE-1類。律令土師器片7点が出土しているが、詳細な時期は不明。

溝80は幅0.6～0.7m、深さ2～9cm。埋土は粗粒の砂が混じりやや粘質な、褐灰色・褐色の粗～極粗砂混じり粘質シルト(E-2類)。黒色土器A類片5点、須恵器片5点、土師器片77点、製塩土器片4点が出土した。須恵器片は生焼け気味の、色調が褐色のものを含む。3点が図化できた(図31)。137は土師器坏A。外面は口縁部がナデである以外はケズリ(c手法?)。8世紀後半前後(平安京I中頃)。140は土師器碗。外面下半は指頭圧痕で、口縁部のナデは不明瞭。9世紀後半(佐藤平安II期中)か。162は黒色土器A類碗。9～10世紀。

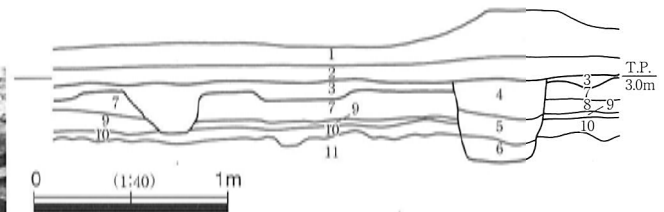
溝81は幅0.2～0.3m、深さ1～4cm。埋土はA-2類。溝82は幅0.8～1.3m、深さ4～13cm。埋土はE-2類。溝83は幅0.8～1.1m、深さ4～15cm。埋土はE-2類。溝84は幅0.6～0.7m、深さ2～6cm。埋土はE-2類。いずれからも出土遺物はない。

溝85は幅0.3～0.6m、深さ6～9cm。埋土はE-2類。須恵器片6点、土師器片21点が出土した。律令土器と思われる破片が多い。3点が図化できた(図31)。151は須恵器坏B蓋。160は須恵器壺M。いずれも8世紀。164は土師器把手。

溝86は西側が土層断面観察用アゼにかかるが、幅0.4m以上。深さ8cm。埋土はE-2類。破片ながらも比較的多数の土器が出土し、摩滅した瓦器片2点、須恵器片5点(甕2・蓋坏3)、土師器片25点、製塩土器と思われる破片2点が出土し、うち6点が図化できた(図31)。144は土師器碗か。口縁端部を短く外方に摘む。外面は摩滅が著しいが指頭圧痕が若干見られる。10世紀前半か。145は土師器碗。外面には指頭圧痕が見られる。10世紀前半(佐藤平安II期中)か。147は土師器皿C。底部外面には指頭圧痕が見られるが、全体的に摩滅が著しく調整は不明。9世紀後半か。150は須恵器坏B蓋。端部などシャープさはない。8世紀。163は土師器高坏。外面はヘラケズリによるメントリで、幅は狭く断面九角形を呈する。10世紀か。166は製塩土器。著しく摩滅しているが、内面に横方向の窪みがありナデの痕跡であろう。また、口縁端部には若干面をもつ。積山5a類[横山1994、以下の製塩土器分類も同



写真46 Y=-37,280 ライン断面(西から)



- 1 25Y4/3 オリーブ褐色～6.2 灰黄色 粗～細礫混粘質シルト(第3面島高)
- 2 25Y5/4 黄褐色～6.2 灰黄色 粗～細礫混粘質シルト(第3面島高)
- 3 10YR5/4 にぶい黄褐色～5.6 黄褐色 粗～細礫混粘質シルト(第4層)
- 4 25Y4/1 灰灰色～3.1 黒褐色 中～極粗砂混粘質シルト(第4面遺構埋土)
- 5 N3/ 暗灰色 中～粗砂混粘質シルト(粘性強)(第4面遺構埋土)
- 6 SPB5/1 青灰色 ブロック(10・11の)混中～粗砂(写真では分層していない)(第4面遺構埋土)
- 7 25Y3/3 暗オリーブ褐色 極粗砂～細礫(シルトブロック混)(第4層)
- 8 10YR3/4 暗褐色～2.3 黒褐色 中～粗砂(第4層)
- 9 N7/ 灰白色 シルト～極細砂(第4層)
- 10 SPB5/1 青灰色～4.1 暗青灰色 中～粗砂混粘質シルト(全体的に弱く土壌化)(第4層)
- 11 N7/ 灰白色 細～中砂(第4層)

図29 Y=-37,280ライン(一部)断面図(S=1/40)

書に拠る]か。8世紀前半。

溝87は東側の一部が筋堀に切られ、幅0.3m、深さ2cmだが、北側に向かい浅くなる。埋土はE-2類。破片ながらも比較的多数の土器が出土し、瓦器片4点、黒色土器A類片1点、須恵器片4点、土師器片39点、製塩土器片1点が出土した。瓦器はいずれも摩滅しているが、脚部断面が三角形の破片が見られ、13世紀初頭前後（尾上Ⅲ-2期）の所産。須恵器は生焼けの褐色を呈する破片がある。土師器は8世紀後半～9世紀後半頃と思われる多角形の高坏脚柱部片、口縁部が外反する律令土師器坏A口縁部片などがあり、多くは律令期の遺物と思われる。製塩土器片には内面に布目の痕跡がわずかに見られる。積山6類で8世紀。いずれも小片で図化は不可能だった。

溝88は幅0.3～0.5m、深さ4～19cm。埋土は褐灰色・黒褐色砂質シルト～粘質シルト（D類）。須恵器片2点、土師器片6点が出土した。いずれも小片で図化は不可能であり、詳細な時期は不明である。

溝89は幅0.2～0.4m、深さ3～15cm。埋土はD類。黒色土器A類片1点、須恵器片3点、土師器片20点が出土した。土師器の多くは律令期のものであるが、いずれも小片で図化は不可能であった。詳細な時期は不明だが10世紀頃か。

溝90は幅0.2～0.4m、深さ3～17cm。埋土はD類。須恵器片1点、土師器片12点が出土した他、性格不明だが土の塊状土製品の出土も見られる。いずれも小片で図化は不可能であり、詳細な時期は不明。

溝91は幅0.3～0.4m、深さ6～8cm。埋土は灰黄色・黒褐色の粗～極粗砂混じり粘質シルトだが、やや砂質（B類）。検出箇所は埋土D類とした先述の溝88～90同様であるが、D類の溝よりも検出段階において不明瞭であった。黒色土器A類片2点、須恵器片3点（坏・甕）、土師器片22点、製塩土器と思われる土器片2点が出土した。土師器の多くは律令期の所産と思われるが、詳細な時期は不明。そのうち1点甕口縁部片があり、口縁端部は素口縁で、内面頸部下が明瞭に段をなし、ケズリ調整の痕跡と思われるが砂粒の動きは見られず、外面調整も不明である。また製塩土器のうち、1点は胎土灰白色で、外面には指頭圧痕が、内面にはナデと思われる調整がそれぞれ見られる。器厚約8mm。おそらく8世紀の所産。ただし、いずれも小片で図化は不可能だった。

溝92は幅0.3m、深さ5cm。埋土はB類。ピット159に切られる。土師器片6点が出土した。羽釜の鏝部や、律令土師器坏片等が見られるが、小片で詳細な時期は不明。

溝93は幅0.3m、深さ5～15cm。埋土はD類。大部分を攪乱に切られるが、溝の長さは他のD類溝とはほぼ同様である。黒色土器A類片1点、須恵器片3点、土師器片21点が出土した。いずれも小片で詳細な時期は不明だが10世紀頃か。

溝94は幅0.3m、深さ1cm。痕跡で検出されたのみである。埋土はB類。出土遺物はない。

溝95は幅0.3m、深さ5～13cm。埋土はB類。黒色土器A類片1点、須恵器片6点、土師器片71点が出土した。土師器の多くは律令期の所産であり、口縁端部が外反し、丸く肥厚する坏片や、脚断面三角形の坏片（9世紀か）などが見られる。また、製塩土器と思われる破片も見られるが判然としない。いずれも小片で図化は不可能だった。

溝96は幅0.1～0.3m、深さ1cm。埋土はB類。溝97に切られる。出土遺物はない。

溝97は幅0.2～0.4m、深さ4～20cm。埋土はD類。溝底部では、円形や半月形を呈する埋土の落ち込みが見られた（写真50）。黒色土器A類片4点、須恵器片7点（甕・坏）、土師器片82点が出土した。土師器片には口縁端部が弱く外反しながら丸く肥厚し、端部内面最上部に弱い沈線が見られるものや、脚部断面が三角形を呈する坏片などが見られる。そのうち3点が図化できた（図31）。142は土師器碗

もしくは皿。外面には指頭圧痕が見られる。145と類似する。10世紀後半か。143は土師器碗Cか。口縁部が強い横ナデである以外の調整は不明瞭。8世紀後半。157は土師器坏B。9世紀後半か。

溝98は幅0.1～0.3m、深さ3～9cm。埋土はB類。ピット161・162に切られる。黒色土器A類片1点、須恵器片1点（坏A）、土師器片24点、製塩土器片2点が出土した。土師器片のうち1点は断面三角形の脚部片。製塩土器のうち1点は、色調黄橙色で内面には細かい布の痕跡が明瞭に残り、厚さ約9mm。積山6類でおそらく8世紀。そのうち2点が図化できた（図31）。152は須恵器坏A。8世紀。156は土師器坏B。9世紀後半か。

溝99は幅0.2～0.3m、深さ6～10cm。埋土はD類。ピット146を切る。黒色土器A類片5点、須恵器片5点、土師器片94点、瓦片1点、製塩土器片2点が出土し、うち2点が図化できた（図31）。158は土師器台付皿か。11世紀。170は平瓦。凹面は布目が残存し、数条の幅2mm程度の窪みが見られる。凸面はナデ。図化した以外に、土師器には口縁端部が弱く外反し、端部がやや丸く肥厚する坏や、端部に面をもつ坏片なども見られ、製塩土器は内面に細かい布の痕跡を持つもの（積山6類）と、粗い痕跡を持つものがある。

溝100は東側が攪乱に切られるが、幅0.3m、深さ0.18m。埋土は2層に細分でき、上層が暗灰黄色砂混じり砂質シルト、下層が黒色粘質シルトで、第4層のブロックが混じる（写真49）。この溝は周辺の東西方向溝に比べ南へ振っている（E-15°-S）。黒色土器A類片2点、土師器片18点が出土した他、土の塊状土製品？の出土も見られ、うち1点のみが図化できた（図31）。159は土師器坏B。脚部は156・157よりもしっかりしている。9世紀か。

溝101は東側が攪乱に切られるが、幅0.3m、深さ0.11m。埋土は溝91と同様（B類）。土師器片6点（坏・甕など）が出土した。土師器の内1点は製塩土器とも考えられる。

溝102は幅0.2～0.4m、深さ4～13cm。埋土はD類。土師器8点が出土した。口縁端部一段ナデの皿と思われる破片が多く見られるが、いずれも小片で時期不明。

溝103は幅0.3m、深さ9～15cm。埋土はB類。黒色土器A類片1点、土師器片5点が出土し、うち1点が図化できた（図31）。155は黒色土器A類坏。9世紀頃。

溝104は幅0.2～0.4m、深さ7～14cm。埋土はD類。黒色土器A類片5点、須恵器片4点（甕など）、土師器片17点（坏・羽釜など）の他、自然石の出土も見られた。黒色土器には脚部断面三角形のものが1点あった。9～10世紀か。

溝105は幅0.3m、深さ8～9cm。埋土はD類。溝の深さや延長のつながりなどを考慮すると、溝97の東延長にほぼあたること、溝97底部高とほぼ同一であること、南側の溝104の溝検出範囲と類似することから、この溝は西側で検出された溝97延長の可能性が考えられる。なお、西側で溝77にほぼ接するが、明確な前後関係は不明であるものの、周辺各溝埋土の比較検討から溝77が古く、溝105が新しいと考えられる。須恵器片（甕）、土師器片（坏）がそれぞれ1点ずつ出土しているが、時期不明。

溝106は幅0.5m、深さ6cm。埋土はA-1類である。なお、西側で溝72に切られるが、埋土は同様であり、掘削の時期差はさほどないものと考えられる。出土遺物はない。

溝107は幅0.5m、深さ6～13cm。埋土は黄灰色砂混じり粘質シルト（C類）。出土遺物はない。

溝108は幅0.5～0.6m、深さ0.14～0.21m。埋土はC類。須恵器片3点、土師器片25点、製塩土器片3点が出土した。土師器片には断面三角形の脚部をもつ坏片が1点見られた。そのうち2点が図化できた（図31）。138は律令土師器坏Cか。外面は細かいミガキで、底部外面を削り（b手法）、内面には

連弧・斜放射暗文が見られる。8世紀前半。**165**は製塩土器。器厚1cm弱。外面は荒れており調整不明だが、内面には指頭圧痕が横方向に列状に見られ、押さえながら横方にナデたものと考えられる。また、口縁端部には若干の面をもつ。積山4類か。8世紀。

溝109は南側一部が土層断面観察用アゼにかかるが、幅0.3～0.5m、深さ9～12cm。埋土はC類。出土遺物はない。

溝110は幅0.3m、深さ3cm。埋土はC類。出土遺物はない。

溝111は幅0.6m、深さ1～3cm。埋土はC類。土師器片が6点出土した。いずれも小片で、時期不明。

溝112は幅0.3m、深さ3～17cm。埋土は、褐灰色・黒褐色の粗～極粗砂混じり砂質シルト（A-1類）。南側ほど不明瞭になり、X=-150,029以南では見られない。須恵器片1点、土師器片3点が出土した。いずれも小片であり、時期は不明。

溝113は幅0.2～0.3m、深さ4～7cm。埋土はA-1類。溝112に平行して検出され、同様に南側ほど不明瞭である。出土遺物はない。

溝114は幅0.3～0.4m、深さ3～20cm。埋土は溝74同様、やや砂質である（E-1類）。黒色土器A類片2点、須恵器片1点、土師器片27点、製塩土器片1点が出土し、うち2点が図化できた（図31）。**141**は土師器皿。口縁部を強くヨコナデし、外反する。底部は指頭圧痕が見られる。10世紀か。**168**は製塩土器。内面に布目が残存する。全体の器形は窺い知れないが、積山6類。8世紀。

溝115は幅0.2m、深さ5cm。埋土はA-1類。出土遺物はない。

溝116は幅0.2m、深さ4～5cm。埋土は褐色の砂混じり砂質シルト（A-1類）。黒色土器A類片4点、土師器片10点が出土しているが、いずれも小片で時期不明。

溝117は幅0.3m、深さ3～9cm。埋土はA-1類。須恵器片1点、土師器片7点（律令土師器坏）が出土したが、いずれも小片で時期不明。

溝118は幅0.3m、深さ7～8cm。埋土はA-1類。須恵器片1点、土師器片4点（律令土師器坏）が出土したが、いずれも小片で時期不明。

溝119は大部分を溝85に切られ規模は不明であるが、残存幅は0.1m、深さは2cm。埋土はA-1類。出土遺物はない。

溝120は溝85と溝108に切られるが、幅0.2m、深さ4～5cm。埋土はA-1類。須恵器片1点（甕）、土師器片1点が出土したが、時期不明。

溝121は溝107・108に切られるが、幅0.2～0.5m、深さ3～5cm。埋土はA-1類。須恵器片1点、土師器片3点が出土し、1点のみ図化できた（図31）。**154**は須恵器壺。焼成良好で比較的丁寧なつくり。

溝122は溝107に切られるが、幅0.2m、深さ3～5cm。埋土はA-1類。出土遺物はない。

溝について 当初に記したように、溝の埋土は大きくA～Dの5種類に区分された。遺構から見る掘削順はA→B・C・D→Eへの順であるが、BとC類、CとD類には切りあいがなく前後関係は不明である。ただし、C類とD類とは幅の差異はあるものの、等間隔であるという点で、性格は類似する。

また、溝からの遺物の出土は基本的に少なく、計23条（第4面溝全ての40%）の溝からは遺物の出土はない。また、遺物の出土があったとしても小片ばかりで、図化できた資料は38点にしか過ぎず、完形品は皆無である。以下で、各溝の類ごとの特徴を、遺物を混じえて記す。

埋土A類の溝について 溝66～73・76～78・81・106・112・113・116～122の22条が該当する。な

お、溝81は切りあいを誤っているものと思われる。A類の溝はいずれも遺物の出土が少なく、A-2類とした溝からの遺物の出土は皆無である。溝116から黒色土器A類が出土していることを除くと、いずれの溝からも土師器と須恵器のみの出土である。図化し得た遺物（図31）も136（溝78出土）の土師器甕と154（溝121出土）の須恵器壺のみであり、根拠が薄弱ではあるが、埋土A類の各溝の掘削時期は8世紀代に収まるものと推定しておく。ただし、全ての溝が同時期かという問題については、全ての溝の規則性は薄弱であり、切りあう遺構どうしの遺物からの判断が出来ない。このため、今回は同時期ととりあえず推定しておく。

埋土B類の溝について 溝91・92・94～96・98・101・103の8条が該当する。掘削されている箇所は埋土D類の溝と類似するが、連続して検出されないことは先述のとおりである。各溝は連続性に乏しいが、比較的等間隔に掘削されており、同時期の掘削であると判断しておきたい。掘削部位の第4層包含層からの出土遺物が多いこともあるが、掘削深度が浅かった溝94・96を除き、いずれの溝からも遺物の出土が見られた。遺物の時期は、概ね8世紀から9世紀の範囲である。埋土A類を切る以外に切る遺構はなく、他の切られる遺構からもこの時期は妥当であろう。

埋土C類の溝について 溝107～109の3条が該当する。調査区中央部分で検出された溝であり、等間隔の掘削であり、同時期の掘削と考えておく。遺物の出土が見られたのは溝108のみで、図31-137の土師器坏Aからは8世紀中頃の可能性が考えられる。なお、この溝の掘削箇所は上面で地割りの変化点にあたる。埋土D類をはじめ多くの溝が掘削されている東半中央部では、上面で高まり（島島）が検出された部分にあたり、これを敷衍できるのであれば、この部分にも高まりがあった可能性は考えられ、埋土D類同様の意図を持った溝の可能性が考えられる。高まりの存否については埋土E類の部分でもさらに補うこととする。

埋土D類の溝について 溝88～90・93・97・99・102・104・105の9条が該当する。このD類の溝は、第3-2面や第3-1面の島島上範囲内から西へやや逸脱するが、概ね島島直下で検出されている東西方向の溝で、等間隔の掘削である。この部分は第4面段階でも高まっている部分にあたる。検出範囲内では、第4面で島島状の高まりが確認された2箇所を横断するように掘削されており、高まりが2つに分割される以前の掘削である。遺物の時期はおおまかに9世紀から11世紀であり、これが溝の掘削時期に近いものであり、このうち高まりが分割されたものと考えられる。また、掘削の意図であるが、等間隔の高まり上への掘削状況から、水田よりも畑作に伴う溝の可能性が考えられる。

埋土E類の溝について 溝74・75・79・80・82～87・114の11条が該当する。溝74は第3面島島20・39の東肩にあたり、溝114は第3-2面島島39、第4面高まりAの西肩にあたる。また、溝80は第3-1面の島島の西肩にあたり、溝82は高まりBの西肩にあたる。このように、埋土E類とした溝の多くは上面の遺構に関連するものが多いと想定できる。また、出土する遺物においても、溝75・87は当面検出全ての溝のうちで瓦器が出土している溝である。また、いずれの溝も検出段階で深度は浅い。これらから、埋土E類の溝は上面の時期に極めて近い段階の掘削であると考えられ、その時期は瓦器の存在から13世紀前半と考えておく。つまり、西半の第3-3面もしくは第3-4面段階に属する遺構の可能性が考えられる。なお、調査区東半西端で検出された溝85～87の溝も、他の溝の成果を援用すれば、上面の高まりの両肩に伴う溝の可能性が考えられ、埋土C類の溝で述べたように、この部分に上面段階に高まりがあった可能性も考えられる。

その他の溝について 溝100は、この面で検出した溝の中で唯一埋土が複層で、溝の傾きが異なった。

この溝と同一の傾きを持つ溝は検出されなかったが、東側でほぼ直角の関係にある溝76が検出された。両者の関係は不明であるが、傾きが直角の関係にあることから、類似した時期の掘削の可能性が考えられる。溝76は埋土A類であり、第4面で検出された溝の中では最も古い段階であり、およそ埋土A類の溝と同時期の掘削であると推定しておく。

以上の出土遺物から推定される溝の掘削順および時期は、埋土A（8世紀）→C（8世紀中頃?）→B（8～9世紀）→D（9～11世紀）→E（13世紀前半）ということになり、切りあいからの想定を補強できたといえる。ただし、これが妥当かは高まりについて記してから再び考察する。

高まり 第3-2面鳥島39部分では第3-2層土壌化層を除去して鳥島状の高まりA・Bが検出された。高まりAは、西肩を溝114に切られるが幅約3.7m、高さ0.1m。高まりBは東肩を溝80に、西肩を溝82に切れ、南側を第3-1面土坑により大きく攪乱を受けるが、幅約3.7m、高さ0.1～0.2m。高まりを切る溝は、先述のとおり当面で最も新しい段階とした埋土E類の溝である。先述のとおり、埋土D類の溝は高まりA・Bに関係なく両者を跨ぐように、ほぼ同様の深さで掘削されており、この溝の掘削は高まりAとBの形成以前と考えられる。なお、この溝から高まりAとBが同一の高まりであった時期の存在が推定され、それ以後の段階に削り出された結果、第4面では二つの高まりとして認識されたものと考えられる。一方、埋土E類の溝は、高まりのちょうど肩部下部を破壊しており、高まり以後であるといえる。両者から出土している遺物は、時期が判別できる資料が少ないが、埋土E類溝出土遺物に、13世紀前半と思われる新しい段階の瓦器が比較的安定して含まれ、埋土D類溝出土遺物に黒色土器A類が含まれることから、高まりが削り出されて二つになった時期は、11世紀以降13世紀前半以前と考えられるが、さらに細かい時期は後述する。なお、その削り出された土砂は第3-2面の鳥島盛土として使用されたものと考えられる。断面観察では盛土の状況は確認されなかったが、さほど分厚い盛土でもなく、さらに第3-2面段階の耕作が行われた結果、不明瞭になり確認されなかったものと考えられる。

また、高まりAとBが同一の高まりであった段階の後半には、埋土D類の溝が掘削されているが、それ以前に各埋土の溝も高まり上に見られる。これらの溝の遺物の時期から、8世紀段階にはこの高まりが形成されていたものと考えられる。なお、この高まりが盛土によるものか、自然地形かについては、断面観察では判別できなかったが、第4b面でもこの部分は若干ながら高いことから、自然地形の可能性が高いものと考えられる。この高まりの性格については、後述する。

土坑 土坑は21基検出された。溝同様埋土が数種類に区分できたので簡単に例示し、本文中ではこの区分に従い記す。溝同様、埋土の詳細については表16を参照されたい。

I類：色調が褐色を主とし、埋土中に第5層のブロックを多く含む砂質シルト。

II類：色調が褐灰色～黒褐色。粗砂混じりの砂質シルトで、粘性がややある。

III類：色調が褐灰色～黒褐色。砂質シルトで、粗砂がほとんど混じらず、極細砂がブロック状に混じる。

IV類：色調が黄灰色～黒褐色。粗～極粗砂混じりの砂質シルトで、周辺の第4層より砂多く混じり、色調が淡い部分。特に砂礫が多いものはIV-2類とする。

V類：色調が褐灰色～暗褐色。粗～極粗砂混じり砂質シルト。

VI類：明らかに3層に類似する粘質シルト。

土坑123は、長楕円形の土坑で、長軸1.1m、短軸0.5m、深さ6cm。浅い落ち込みで、埋土はI類。土坑からは時期不明の土師器小片5点が出土しているのみである。

土坑124は、隅丸方形の土坑で、長辺1.7m、短辺1.4m、深さ5cm。浅い落ち込みで、埋土はI類。

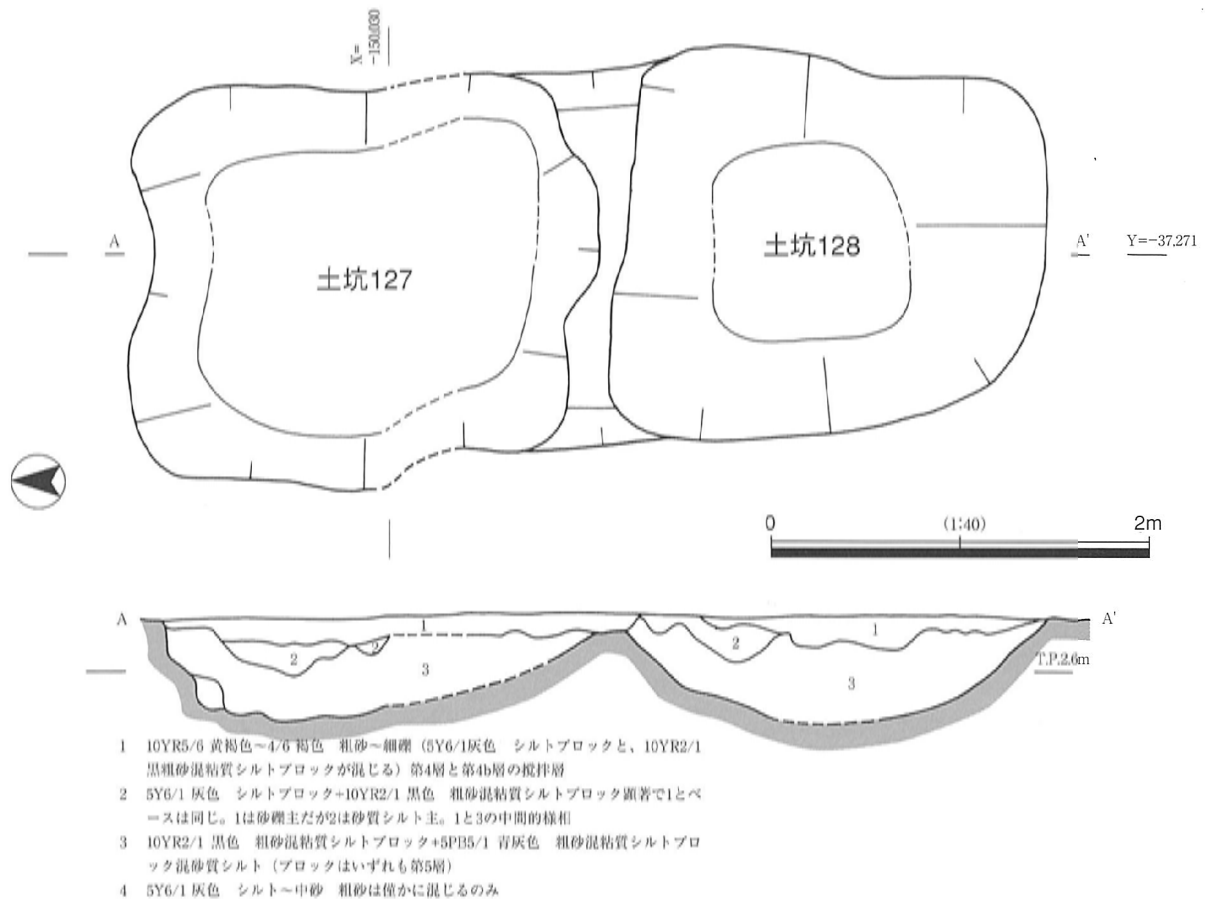


図30 土坑127・128 平・断面図 (S=1/40)

土坑からは須恵器甕小片1点、律令土師器を含む土師器小片11点、製塩土器小片1点が出土している。そのうち2点が図化できた(図31)。149は土師器鉢。口縁部が内湾し、端部は凹線状を呈する。8世紀後半か。167は製塩土器。外面に特に調整は見られないが、内面には横方向の窪みが見られる。積山5類か。8世紀。

土坑123と124は埋土がほぼ同一であり、規模は異なるものの近接し掘削されていることから、ほぼ同一の時期であると考えられる。このことから、土坑123から遺物の出土はないものの8世紀の可能性が高い。

土坑125は不整形の土坑で、南側を筋堀に切られ、溝66を切っている。そのため正確な規模は不明だが、東西幅1.5m程度、南北幅1.3m以上2.3m以下。深さは3～7cm。浅い落ち込みであり、埋土は北側に接する溝66(埋土A類)に類似するが、土坑のほうがややシルト質である。土坑からは摩滅した瓦質土器小片2点と、土師器小片4点が出土している。溝66を切るものの、埋土が類似することから8世紀代の可能性が考えられる。瓦質土器は混入と思われる。

土坑126は不整形の土坑。北側を側溝に切られ、溝70を切っており、正確な規模は不明だが、東西幅1.0m、南北幅1.15m、深さ5cm。埋土はII類。律令土師器の坏片を含む土師器小片3点が出土している。埋土A類とした溝70を切ることから、時期として8世紀以降が考えられる。

土坑127と128はほぼ接して検出され、当初は同一の土坑と考えていたが、掘削を進めた結果、2つの土坑であると判断した。土坑127(図30、写真47)は東西幅1.7～2.1m、南北幅2.3m、深さ0.55m。土坑128(図30、写真47)は東西幅2.2m、南北幅2.4m、深さ0.7m。いずれも底部は皿状で、埋土は類似し、大きく3層に分けられる。下層は、青灰色の砂質シルトで、20cm大の第5層の黒色ブ

ロックが多く混じる。特に土坑127はブロックが北側に集中する傾向が見られた。中層は砂質シルト層、上層は砂礫層で、上・中層には第4b層や第5層のブロックが見られ、埋土Ⅰ類に相当するが、ブロックの大きさは上層ほど小さい。この2つの土坑はいずれも方形の類似した規模であり、深さも類似する。また、第5b層まで掘り抜いており、この砂の獲得が土坑掘削の目的であった可能性も考えられる。規模や埋土などが類似する西半第3-4面検出土坑61~64も、同様に砂層を掘り抜いており、砂の獲得を目的とした土坑であると推定したが、これらもブロックを含む。ただし、掘り抜いている第5層じたいの色調が異なり、東半は極めて黒っぽい濃い色調であるのに対し、西半はそれほど濃い色調ではない。また、埋土には自然堆積層が見られないことから、掘削後短期間での埋没が予想される。これらから、やや埋土の状況に差は見られるものの、それは掘削地点による掘り抜いた土壌化層の差異であり、第3-4面検出土坑群と同様の目的をもった、土取り用の土坑と考えられ、これらの土坑の掘削時期も13世紀前半頃の可能性が考えられる。なお、遺物の出土であるが、土坑127からは遺物の出土はなく、土坑128からは時期不明の土師器小片が1点出土したのみであり、土坑出土遺物からは時期を窺えないが、土坑に切られる溝75から瓦器片が出土していることから13世紀前半の時期は妥当であろう。

土坑129は東側を攪乱で切られるものの、復元長軸0.8m、短軸0.65mの楕円形の土坑。深さ6cm。埋土はⅡ類。図31-161は須恵器坏。口縁端部の小片で、外方に摘む。これ以外には黒色土器A類の薄手の小片1点が出土しているのみである。時期は10世紀か。

土坑130は北側を攪乱に、南側を溝103に切られるものの、長軸0.7m、復元短軸0.5m、深さ0.19mの楕円形の土坑。埋土はⅡ類。須恵器1点、土師器9点が出土している。土師器には口縁部一段ナデで



写真47 土坑127・128 (西から)

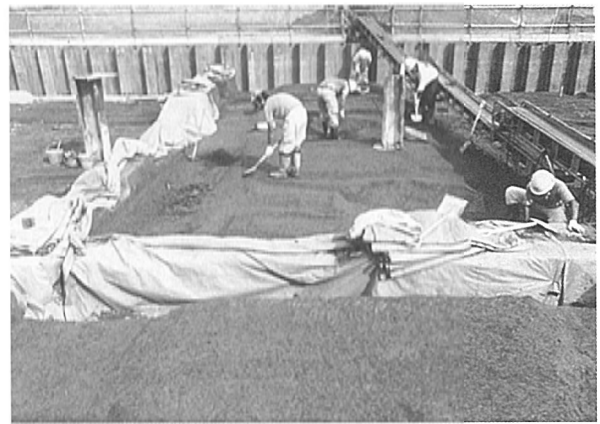


写真48 第4面遺構検出状況 (南から)

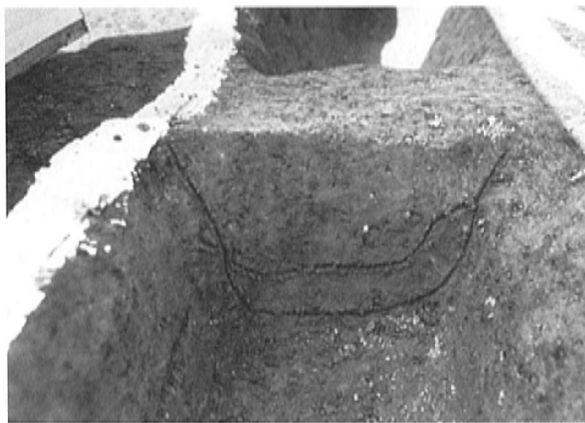


写真49 溝100断面 (東から)

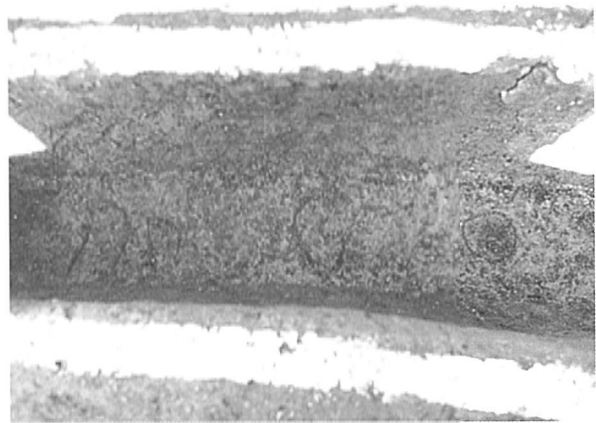


写真50 溝97底部耕具痕 (南から)

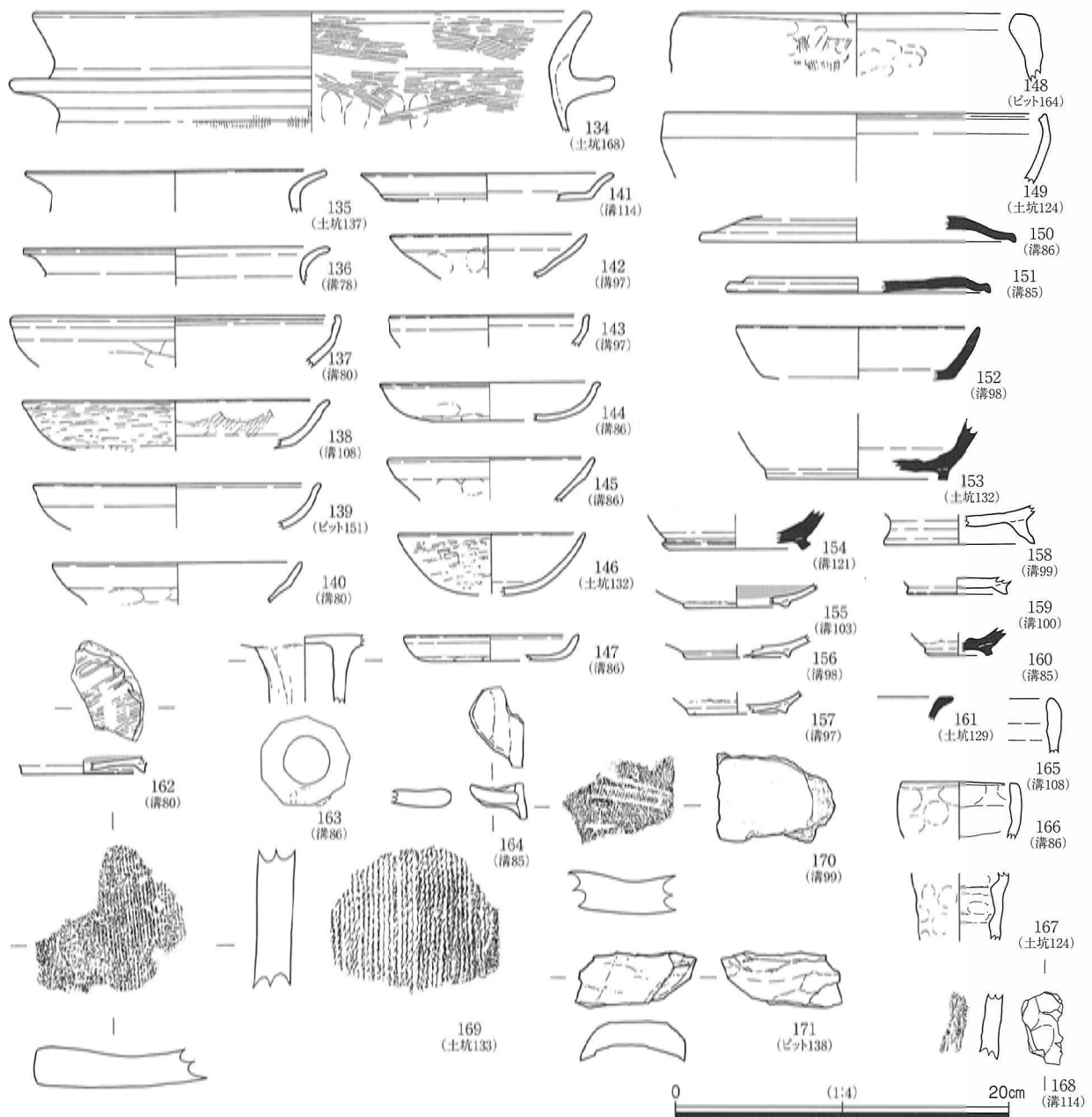


図31 第4面 遺構出土遺物

色調黄橙色・黄褐色の皿の破片2点が見られるが、溝103に切られることを考えると混入と考えられる。

土坑131は中央を溝104に切られる、長軸1.1m、短軸0.5m、深さ0.2mの楕円形の土坑。埋土はⅡ類だが、最下部には炭を含む。須恵器2点、土師器7点が出土している。埋土D類の溝104に切られることから10世紀以前の掘削と考えられる。

土坑132は溝82肩部で溝掘削後に検出された楕円形の土坑。長軸0.9m、短軸0.5m、深さ0.25m。埋土はⅣ類。須恵器2点、土師器11点が出土している。うち2点が図化できた(図31)。146は土師器碗A。丁寧なつくりで、外面はミガキ。8世紀後半。153は須恵器壺。比較的粗いつくり。

土坑133は北側を攪乱に切られるものの、長軸0.8m、短軸0.7m、深さ0.21mの円形の土坑。埋土はⅣ類。図31-169は平瓦。凹面には布目、凸面には縄目が残存する。この他、黒色土器A類の薄手の小片1点と、土師器9点が出土している。時期は10世紀か。

土坑134は東側を側溝に切られるが、復元直径約0.6m、深さ7cmの円形で、皿状の浅い落ち込み。埋土はⅥ類。第3層の下面遺構である。出土遺物はない。

土坑138は溝70に西側を切られるが、直径約0.5mの円形と推定でき、深さ約1cmの浅い落ち込み。埋土は溝埋土A類に似るがやや色調が濃く、暗褐色粗砂混じり砂質シルト。図31-171は砥石。泥質ホルンヘルズ製。一面に研磨面があり、擦痕が見られる。時期不明の土師器片が3点、砥石1点が出土した。埋土A類の溝70に切られることから8世紀代の可能性が考えられる。

土坑139は直径0.5m、深さ5cmの円形で、皿状の浅い落ち込み。埋土は、黄灰・黄褐色粗砂混じり粘質シルト。出土遺物はない。埋土がⅥ類に似ており、第3面段階の掘削と思われる。

土坑140は直径0.5m、深さ13cmの円形で、皿状の落ち込み。埋土はⅢ類。出土遺物はない。

土坑147は攪乱の落ち際に検出された直径0.5m。検出面からの深さは8cmだが、周辺の面の高さから推定すると、0.19mほどの深さが本来はあったものと考えられる。埋土はⅡ類。時期不明の土師器小片が10点出土した。

土坑163は長軸0.75m、短軸0.3m、深さ0.12m。埋土はⅡ類。土師器片が25点出土した。溝102の延長にあたるものの、溝が良好に検出されなかった箇所であり、切りあいは不明瞭である。

土坑166は南側が土層断面観察用アゼにかかるが、長軸0.6m以上1.6m以下、短軸1.0mの楕円形と推定される。深さは7cm。埋土はⅣ類。溝80を切る。律令土師器片3点が出土した。うち1点は坏A口縁部片で、端部が内側に丸く肥厚するが、端部の外反があまり見られない。埋土E類の溝80を切ることから13世紀以降の掘削の可能性が考えられる。

土坑167は長軸0.6m、短軸0.4m、深さ9cmの楕円形。埋土はⅤ類。土師器片5点が出土した。

土坑168は長軸0.55m、短軸0.35m、深さ0.19mのやや楕円形。埋土はⅤ類。須恵器片1点、土師器片5点、製塩土器片1点が出土し、うち1点が図化できた(図31)。134は土師器羽釜で8世紀後半頃。

土坑170は長軸0.65m、短軸0.4m、深さ0.11mの楕円形。埋土はⅣ類。出土遺物はない。溝82掘削後の検出。

ピット ピットは40基検出された。調査区東半中央部にやや集中する傾向が見られる。埋土は土坑と同じ区分で記述する。詳細は表15を参照されたい。

ピット135は溝66に接し検出され、直径0.2m、深さ5cmの円形。埋土はⅥ類。第3層の下面遺構である。出土遺物はない。

ピット136は溝67を切る、長軸0.4m、短軸0.3m、深さ7cmの南北にやや長い円形で、埋土はⅥ類。第3層の下面遺構である。出土遺物はない。

ピット137は直径0.4m、深さ6cmの円形。埋土は、溝の埋土A-1類としたものに類似する粗砂混じり砂質シルトで、第4層に類似する。土師器片2点が出土し、うち1点が図化できた(図31)。135は土師器甕。口縁部が大きく開き、端部は若干肥厚する。口縁G④形態か。摩滅が著しく調整は不明瞭だが、口縁内面は横ハケと思われる。体部内面は残存部分ではケズリは見られない。8世紀か。

ピット141は直径0.3m、深さ0.13mの円形。埋土は、近接する溝72・106と同様で、褐色・褐灰色砂質シルト(A類)。出土遺物はない。埋土からは8世紀の可能性が考えられる。

ピット142は北側を側溝で切られるが復元径0.4m、深さ5cmの円形。埋土Ⅱ類。出土遺物はない。

ピット143は直径0.3m、深さ7cmの円形。埋土はⅡ類。出土遺物はない。

ピット144はピット143に切られる、直径0.2m、深さ6cmの円形。ピット143に切られるものの埋

土はほぼ同じⅡ類であり、掘削時期に大きな差はないものと考えられる。出土遺物はない。

ピット145は長軸0.4m、短軸0.3m、深さ3cmの円形。埋土はⅡ類。出土遺物はない。

ピット146は溝99に切られる、長軸0.4m、短軸約0.3m、深さ7cmの円形。埋土はⅡ類。時期不明の土師器の薄片1点が出土した。溝99が11世紀の可能性が考えられることから、それ以前であろう。

ピット148は直径0.3m、深さ7cmの円形。埋土はⅢ類。出土遺物はない。

ピット149は溝104を切る、直径0.2m、深さ0.14mの円形。埋土はⅡ類。遺物の出土はない。溝104は10世紀と考えられることから、それ以降であろう。

ピット150は直径0.2m、深さ約0.1mの円形。埋土はⅢ類。出土遺物はない。

ピット151は南側を攪乱に切られるが、長軸0.45m、短軸0.2m、深さ0.24mの楕円形の土坑である。埋土はⅡ類。須恵器片1点、土師器片1点が出土し、うち1点が図化できた(図31)。139は律令土師器坏Cか。摩滅が著しく調整は不明瞭だが、口縁端部内面に弱く面をもち、若干外反する。8世紀後半か。

ピット152は直径0.2m、深さ8cmの円形。埋土はⅡ類。出土遺物はない。

ピット153は直径0.2m、深さ8cmの円形。埋土はⅡ類。出土遺物はない。

ピット154は直径0.3m、深さ0.1mの円形。埋土はⅣ-2類で、ピットが掘り込まれた部分の第4層は、砂礫を多く含むので他の部分のピットより多くの砂礫が混じる。出土遺物はない。

ピット155は長軸0.4m、短軸約0.3m、深さ6cmのやや楕円形。埋土はⅣ-2類。口縁部が短く外反し内外面とも強い横ナデを施し、外傾的端面を持つ土師器甕口縁部1点が出土した。

ピット156は直径0.3m、深さ9cmの円形。溝79を切る。埋土はⅣ-2類。土師器片1点が出土した。

ピット157は直径0.3m、深さ0.1mの円形。溝79を切る。埋土はⅣ-2類。出土遺物はない。ピット156・157は溝79掘削後の検出である。

ピット158は直径0.3m、深さ5cmの円形。溝92を切る。埋土はⅤ類。土師器片2点が出土した。

ピット159は直径0.3m、深さ0.11mの円形。溝92を切る。埋土はⅤ類。土師器片5点が出土した。ピット158・159は埋土B類の溝92を切ることから9世紀以降の時期が考えられる。

ピット160は直径0.4m、深さ0.11mの円形。溝94を切る。埋土はⅤ類。土師器片8点が出土し、2点はての字状口縁の土師皿である。口径は不明だが、厚さ2mmと薄く、胎土は白色。10世紀後半から11世紀初頭の所産。埋土B類の溝94の時期は8~9世紀と考えており、時期は妥当であろう。

ピット161は直径0.2m、深さ9cmの円形。溝98を切る。埋土はⅤ類。出土遺物はない。

ピット162は直径0.2m、深さ約3cmの円形。溝98を切る。埋土はⅣ類。出土遺物はない。埋土B類の溝98は8~9世紀と考えられ、ピット161・162の時期はそれ以降であろう。

ピット164は直径0.4m、深さ0.14mの円形。埋土はⅤ類。須恵器片2点、土師器片18点が出土した。土師器片には、高台断面が退化した三角形の破片のほか、律令土師器片が多く見られた。図31-148は土師器羽釜か。非常に粗製なつくりで、口縁端部などに二次焼成を受ける。12世紀か。

ピット165は南側が土層断面観察用アゼにかかるが、復元径約0.4m、深さ6cmの円形。埋土はⅤ類。出土遺物はない。

ピット169は直径0.3m、深さ9cmの円形。埋土はⅣ類。出土遺物はない。

ピット171は長軸0.35m、短軸0.25m、深さ5cmの円形。埋土はⅣ類。出土遺物はない。

ピット172は直径0.3m、深さ0.12mの円形。埋土はⅣ類。出土遺物はない。

ピット173は直径0.2m、深さ0.13mの円形。ピット172に切られるが、埋土は同様のⅣ類。出土遺物は

ない。

ピット174は直径0.3m、深さ7cmの円形。埋土はⅣ類。時期不明の土師器小片1点が出土したのみ。

ピット175は直径0.4m、深さ2cmの円形。埋土は極細砂ブロック混じり黒色粘質シルト。出土遺物はない。周辺で検出されたピット172・173・174とは異なり明らかに溝埋没後の掘削である。

ピット176は直径0.4m、深さ9cmの円形。埋土はⅣ類。土師器片4点が出土した。

ピット177は直径0.45m、深さ0.19mの円形。埋土はⅣ類。須恵器片2点、土師器片8点が出土した。須恵器は生焼けの小片と、鉢の注口部。また、土師器片には外面に指頭圧痕が見られる坏?片が1点見られた。10世紀頃か。

ピット178は直径0.3m、深さ0.15mの円形。溝108・121を切る。埋土はⅣ類。須恵器片1点、土師器片1点が出土した。土師器片は口縁端部内面に斜めに面をもち、弱く外反する坏片と思われるが、時期不明。溝108は埋土C類、溝121は埋土A類であり、時期は8世紀以降であろう。

ピット179は溝108に切られるが、復元径約0.2m、深さ3cmの円形。埋土はⅣ類。出土遺物はない。溝108は埋土C類であり、時期は8世紀以前と思われる。

ピット180は直径0.3m、深さ0.22mの円形。埋土はⅣ類。須恵器片1点が出土した。

ピット181は直径0.4m、深さ約1cmの円形。埋土はⅣ類。出土遺物はない。

ピット182は直径0.2m、深さ9cmの円形。溝84掘削後の検出。埋土はⅣ類。出土遺物はない。溝84は埋土E類であり、13世紀以前の掘削であろう。

ピット183は直径0.2m、深さ4cmの円形。溝87掘削後に検出された。埋土はⅣ類。土師器片4点が出土した。溝87は埋土E類であり、13世紀以前の掘削であろう。

土坑・ピットの埋土について 当調査において、土坑とピットは基本的にその大きさからのみの区分であり、土坑だからといってすべての土坑が同じ性格を有するのではなく、それはピットにおいても同様である。ここでは、土坑とピットの埋土及び各形態（平面形や深さ）から当面の土坑・ピットについて若干整理しておく。

埋土Ⅰ類の土坑について 土坑123・124・127・128が該当する。土坑127・128は単層ではないが、埋土のいずれの層でも第5層のブロックが観察できるのでⅠ類としておく。その土坑127・128は第5層を掘り抜いており、そのブロックが埋土中に入ることも首肯できるが、土坑123・124については第5層まで深度が達していないにもかかわらずブロックが混じることから、土坑127・128との関連が窺える。土坑127・128は第5b層の砂の獲得を目的として掘削された土坑と推定したが、その際余った土が埋め戻されたものが土坑123・124であるのかもしれない。なお、これらの土坑の時期は13世紀前半であると考えられ、西半の第3-3面に並行する段階である。

埋土Ⅱ類の土坑について 土坑126・129・130・131・147・163、ピット142・143・144・145・146・149・151～153が該当する。この埋土の遺構がほぼ同時期だとすれば、溝埋土A類を切り、同D類に切られるものが見られることから、9～10世紀の時間幅を与えることができる。しかし、切りあいを誤った可能性はあるものの、同じⅣ類でありながら逆の切りあいも見られ、埋土から時期を判断するのは困難と言える。

埋土Ⅲ類の土坑について 土坑140、ピット148・150が該当する。いずれも浅い落ち込みであり、遺物の出土もない。土坑140は周囲に関連性がありそうな土坑・ピットはない。ピット148・150は両者が南北に近い位置関係にあるが、ややずれ、この2つのピットを基準として関連性のありそうな遺構は見

当たらず、切りあいも見られない。これらから、Ⅲ類とした土坑・ピットの掘削意図や時期は不明としかいえない。

埋土Ⅳ類の土坑について 土坑132・133・166・170、ピット154～157・162・169～174・176～183が該当する。このⅣ類の遺構は調査区東半の西側に集中する傾向が見られる。遺構のいくつかはE類とした溝を切っているが、溝埋土との判別が困難で、溝掘削後に検出されたものもある。また、遺構の深度はさまざまであり、同一の目的で掘削されたものではないようであり、ピットが1箇所集中するものも見られるが、その意図は不明である。埋土Ⅱ類同様、切りあいを誤った可能性はあるものの、同じⅣ類でありながら切りあいの違いが見られ、埋土から時期を判断するのは困難と言える。

埋土Ⅴ類の土坑について 土坑167・168、ピット158～161・164・165が該当する。これらのうち、土坑167・168、ピット160・161・164は等間隔に並び、ピット161に対応する遺構がないものの、1間(2.5m)×2間(4.5m)の**掘立柱建物**になる可能性がある。ただし、いずれの土坑・ピットともに深さ0.1m程度と浅く、柱痕や柱材の残存も見られないことから、もし掘立柱建物であったとしても仮小屋的な小規模(床面積11.25㎡)で短期間のものであったと考えられる。なお、時期であるが、土坑168からは8世紀後半、ピット160からは11世紀初頭、ピット164からは12世紀かと思われる遺物が、それぞれ出土している。また、遺構の切りあいからも9世紀以降の可能性が考えられる。これらから、12世紀頃の可能性が考えられる。また、これを掘立柱建物と評価すれば、高まりAとBが同一の高まりであった段階の掘削と考えられ、高まりが削り出された時期を12世紀以降と考えることができよう。

なお、Ⅱ類からⅤ類までは類似しており、埋土の違いは時期の違いよりも、掘削箇所の下層を含めた層相の差異に起因する可能性が高い。よって、掘立柱建物に伴う遺構群の可能性のあるⅤ類を除き、埋土からの時期判断は避けておくことにする。

埋土Ⅵ類の土坑について 土坑134・(139)、ピット135・136が該当する。土坑139は類似することからⅥ類に含めてある。いずれからも遺物の出土がなく詳細な時期は不明であるが、埋土が第3層に類似し、下面遺構であることから、第3面のある段階の掘り込みであると考えられ、第4面検出の土坑・ピットの中ではもっとも新しい段階に掘削された土坑であろう。

それ以外の土坑について 土坑125(A類)・138(A類)、ピット137(A類)・141(A類)・175が該当する。ピット175は周辺のピットより粘質であり埋土Ⅵ類に類似し、第3面段階の遺構の可能性が考えられる。それ以外の遺構は溝埋土A類と類似し、同時期の可能性が考えられる。

以上、切りあいから埋土による時期判別が出来なかった埋土Ⅱ～Ⅳ類の溝を除き、埋土Ⅰ類・Ⅵ類は上面段階(13世紀頃)に伴う遺構であると判断でき、掘立柱建物に伴う遺構群の可能性のあるⅤ類は12世紀頃の可能性が考えられた。また、Ⅴ類はB類とした溝を切ることから、それ以降つまり9世紀以降の時期が考えられ妥当である。なお、切りあいはないものの、時期的にはD類とした溝よりも新しいと考えられる。

なお、遺構が全く検出されなかった調査区西半であるが、遺構面は凹凸があり、水田を造営するには不適切な土地であったと考えられる。第4面段階では、耕作地ではなく、湿地であったのであろう。

出土遺物(図32・33) 第4層からは破片の概数で、陶器1点、瓦器85点、黒色土器A類49点、同B類2点、須恵器577点、土師器1807点、瓦31点、埴1点、製塩土器19点、石17点、動物歯1点の計約2590点の遺物が出土した。西半では遺構の検出は見られなかったが、遺物は全体の3割ほどが出土している。

172～188、193～195は土師器。172は甕。口縁部が大きく開き、端部は摘み上げ、強いナデにより凹線状を呈する。外面は斜めハケ、内面は横ハケで、いずれも深い。8世紀。173・174は羽釜。173は全体的に摩滅が著しいが、内面には横ハケの痕跡が見られる。174も調整が不明瞭だが、ナデの痕跡が見られる。いずれも類似した赤味を帯びた胎土。8世紀～9世紀前半。175は坏A。外面上部はカキ目状のナデ、下部は無調整（f手法）。内面は煤化している。口縁端部は若干肥厚する。9世紀。176は碗。外面には指頭圧痕が見られ、口縁から内面はナデ（e手法）。9世紀。177は皿。外面は口縁部のみ横ナデで、内面はナデ（e手法）。178は碗。口縁部のみナデ（e手法）9世紀。179は皿。口縁部を強く横ナデし、若干ての字状を呈する。口縁はやや内湾気味。9世紀後半。180は皿。口縁部ナデで、底部は無調整（e手法）。10世紀。181は皿。口縁端部は弱く外反し、内側には若干面をもつ。11世紀か。182は坏A。口縁部A形態。8世紀後半。183は大型の皿。口縁端部は凹線状を呈する。古代。184は坏B。8世紀後半。185～188は碗。186・188は内面二次焼成を受け煤化。187の脚部は極めて小さい。193～195は甕。193は口縁部が短く、外面は口縁部のみナデ、内面はナデ。頸部内面は比較的シャープである。194は外反する口縁で、外面の調整は193同様口縁部のみナデ。195は外反する口縁で、端部付近をさらに外反させる。いずれも8世紀。

189・190は黒色土器碗。189の脚部は極めて小さい。10世紀か。191は瓦器碗。12世紀前半。第4層から瓦器は計85点出土しているがいずれも小片で、図化できた破片はこの1点のみである。

192は緑釉陶器。全体的に摩滅が著しい。内面は釉が比較的良好に残存するが、外面は底部と体部の境界部分に残存するのみ。底部は平尾分類のIA類。9世紀。

196～216は須恵器。196は甕。口縁部にヘラ記号が見られる。197は皿。底部は無調整。口縁端部は外側に斜めの面をもち、凹線状を呈する。9世紀後半。198は壺。199～201は坏B。199・200は焼成不良。いずれも8世紀後半。202は壺。203は坏。204は碗か。205・206は壺。206は焼成不良で摩滅著しい。207は坏B。8世紀後半か。208は鉢。12世紀後半。209は蓋。全体的に鈍い作り。焼成不良で、色調は赤味を帯びる。210・211は坏B蓋。211はやや焼成不良。8世紀。212は壺A蓋。8世紀前半。213は平瓶。9世紀前半。214・215は壺K。216は鉢。9世紀。

217～220は製塩土器。217は口縁端部が肥厚し、内面はナデで指頭圧痕が見られる。積山5類か。8世紀。218は調整不明瞭ながら外面には指頭圧痕が見られる。219は外面タタキ、内面ナデ。積山3類。8世紀。220は外面ナデで指頭圧痕が見られ、内面には布目が見られる。積山6類。8世紀。

221は瓦転用の土製円板。222～230は瓦。222は複弁七弁蓮華文軒丸瓦。平城宮6284型式を祖型とする青谷式（河内国分寺式）。中房には1+6の蓮子を配し、複弁七弁の蓮華文を内区として、外区には珠文帯、外縁には残りが悪くほとんど確認されないが、鋸齒文を施す。同型式の軒丸瓦については、[古閑2000]で整理されており、南河内を中心に分布するという。セットとなる軒平瓦の出土は当遺跡においてはみられないものの、周辺においては、東郷廃寺で出土が見られる[駒井2000a]。当遺跡にもっとも近接する著名な寺院は若江寺となるが、若江寺では同型式の瓦は見られない。なお、駒井氏の整理[駒井2000a]に拠れば、周辺一帯でも奈良時代～平安時代前期の瓦が単体で出土する遺跡・地点が多く見られる。当遺跡例もその単体で出土する例の一つといえる。なお、出土地区が、後述する第4b面で掘立柱建物が見られる地区であり、その関連が想定され、これについては本節末で後述する。なお、時期は8世紀中頃以降だが平安京でも見られ、正確な時期は限定しがたい。223は丸瓦。凸面は摩滅により調整不明だが、凹面には若干布目が残存し、二次焼成を受ける。色調は赤味を帯びる。224～229は

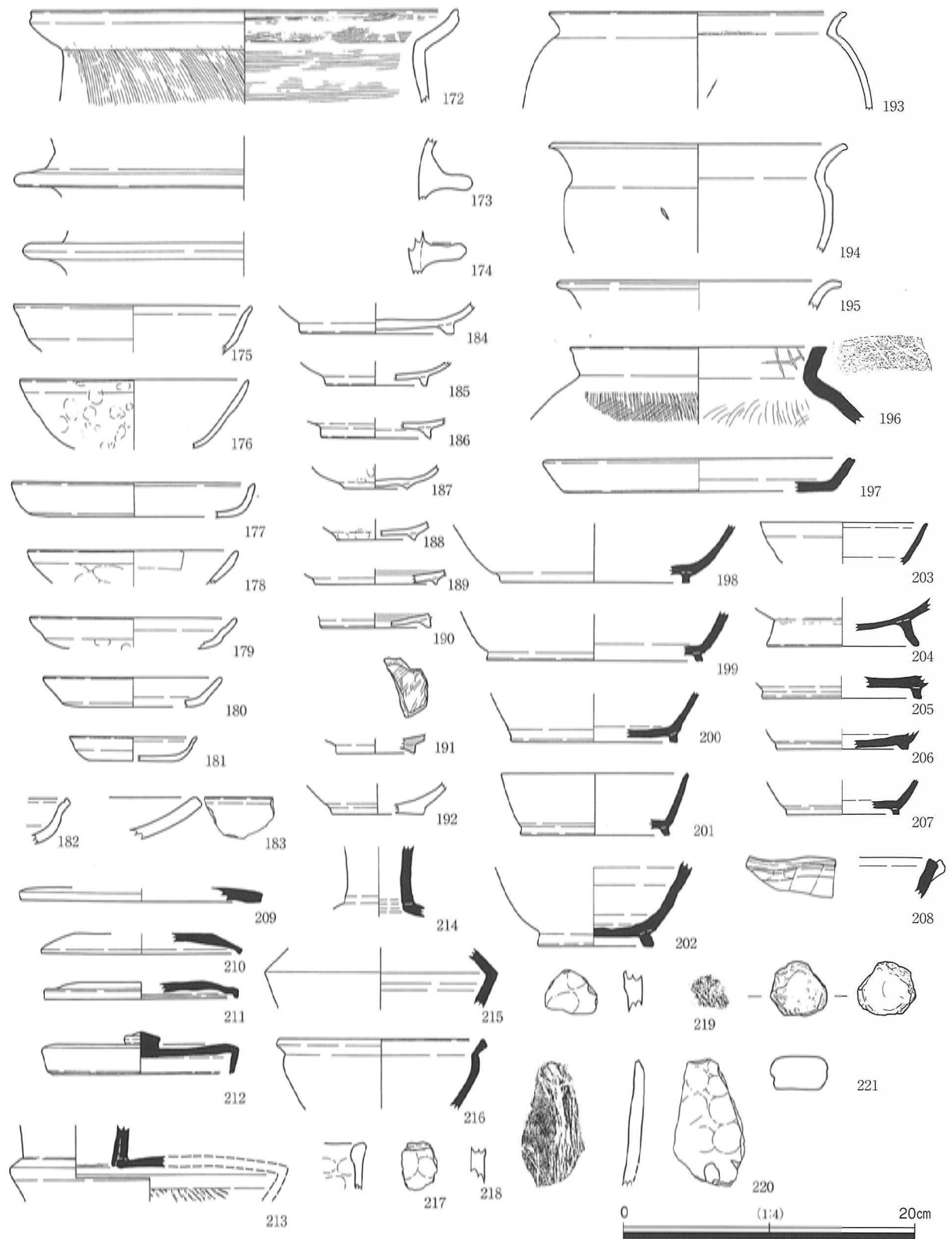


図32 第4層 出土遺物 (1)

平瓦。224の凸面は縄目、凹面はナデ。焼成は良好。225は摩滅が著しいが、凸面には縄目が、凹面には布目のちハケが見られる。226～229は凸面に縄目が、凹面に布目が見られる。226は色調が土師質。230は軒瓦と思われる。凹面には布目が一部残存するが、ケズリが見られ、凸面もナデと思われるが砂粒の動きが見られる。231は土師質の埴。小片で幅は不明であるが、厚さは約6.5cm。土師質の埴は長

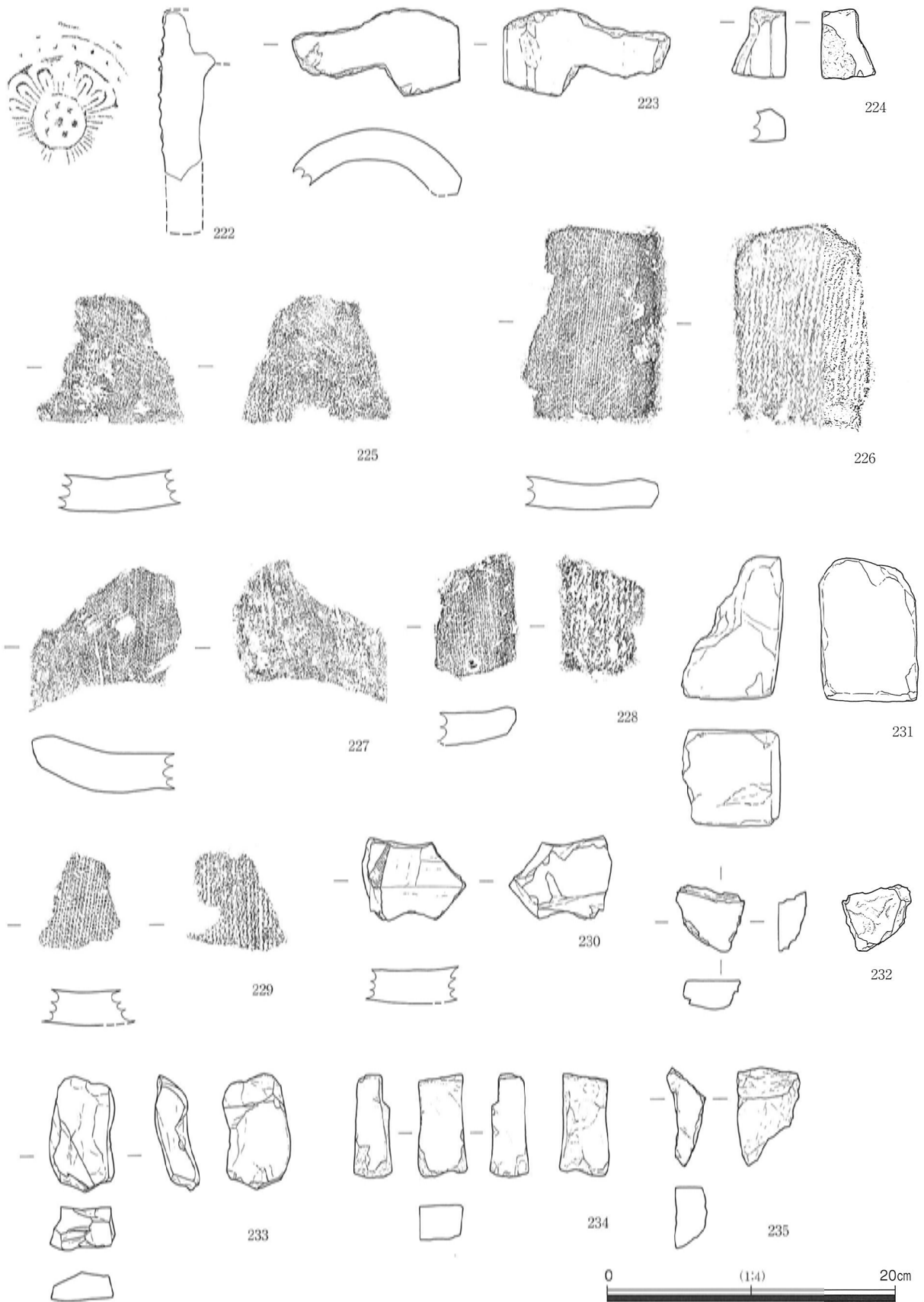


図33 第4層 出土遺物 (2)

原・瓜破遺跡（長原遺跡西地区1983年度調査）〔京嶋1992 a〕で平安時代の柱穴（SB14）からの出土があり、他にも同遺跡からの出土が見られる〔京嶋1992 b〕。それらの厚さは、瓦質のものも含め、5.76

cm、6 cm、7 cmなどが見られ、当資料も厚さが類似する。これらの類例を参考にすると、当資料は包含層中からの出土ではあるが、掘立柱建物の根石のような使用をなされていた可能性が考えられる。

232は安山岩製の砥石。1面のみ研磨面が残存する。**233**は流紋岩製の砥石。少なくとも3面の研磨面が見られるが、それ以外にも研磨したかのような面が見られるが平坦ではない。**234**は流紋岩製の砥石。4面ともに研磨面が見られる。**235**は流紋岩。1面に研磨されたかのような面が見られるが、砥石であるかは不明。なお動物歯（歯1、写真56）はウマと鑑定されている（表5参照）。

時期 第4層から出土した遺物は8世紀から12世紀までにおよぶ。また、第4面の遺構から出土した遺物も同様の時期幅をもつ。このことから、当面が地表面であった時期は8世紀から13世紀までと推定される。ただし、遺物量をもっとも豊富な時期は8世紀から9世紀であり、この段階には非耕作域であった可能性が高い。これについては、第4b面のやや特異な遺構群が該当するものと思われ、後述する。また、第4面東半は西半の第3-3・3-4面と重複するが、出土遺物はそれを裏付けていると言える。

第4b面（図34） 第4層を除去し検出されるのが第4b面である。第4面同様、西半では基本的に遺構の検出はないが、第4面の遺構検出範囲の西端が第4b面ではやや西側に範囲を拡大している。第4b面の高さは、東半がT.P.2.80～2.95m、西半がT.P.2.58～2.79m。遺構は溝、土坑、ピット等が検出され、溝は調査区東半東側に集中する傾向が見られ、同西側では掘立柱建物が見られる。溝と掘立柱建物は切りあいもあり、同時期ではないが、基本的に掘立柱建物付近には溝は少ない。全ての遺構は下面遺構であるため、当然この面に伴うものではなく、上面のある段階に掘削されたものである。

溝 計69条検出された。なお、溝の埋土はいずれも類似するものの、大きく4種類に分類できた。なお、溝の埋土の差は掘削箇所の第4b層の状況に左右されるものと思われる。以下では埋土はこの分類で記述する。詳細については表17を参照されたい。

A類：色調は褐灰色～黒褐色で、明瞭に黒色を呈する砂混じり粘質シルト。

B類：色調は褐灰色～灰黄褐色の砂混じり砂質シルトで、茶色っぽく、砂質。

C類：色調は黄灰色の粗～極粗砂混じり砂質シルトで、灰色っぽく、ややシルト質か粘質。

D類：色調は褐灰色～黒褐色の砂質シルトで、C類に類似し灰色っぽい、砂がほとんど混じらない。

溝184～196は東西方向の溝。

溝184は東側を攪乱に切られるが、幅0.4m、深さ7cm。埋土A類。出土遺物は、須恵器片3点。うち1点が図化できた（図39）。**273**は坏B。脚部への屈曲部分が坏部下半に若干残存する。9世紀。

溝185は幅0.4～0.5m、深さ6～12cmで、東がやや低い。埋土A類。埋土同様の溝442と、埋土B類の溝199・200を切る。出土遺物はいずれも破片で、須恵器3点（甕・坏B蓋・坏H）、土師器10点（壺・甕・坏など）。時期不明のものが多いが、須恵器坏B蓋は9世紀。なお、土師器のうち1点は製塩土器の可能性もある。図39-258の壺Aは溝200出土遺物と接合されたものであり、本来は溝200に伴うものと考えられるため、後述する。

溝186は幅0.7～0.9m、深さ9cm。埋土A類。埋土A類の中ではこの溝がもっとも幅広い。切りあいは溝185と同様。出土遺物はいずれも破片で、須恵器9点、土師器28点、瓦1点、製塩土器5点。うち3点が図化でき（図39）、**255**は土師器碗C。8世紀後半～9世紀初頭頃か。**257**は土師器甕。頸部から体部上半と思われ、外面に線刻が見られる。8世紀頃か。**264**は製塩土器。外面指頭圧痕、内面布目痕。

積山6類。8世紀。

溝187は幅0.5m、深さ0.15m。埋土A類。溝198・199を切る。出土遺物は土師器片2点、製塩土器1点。いずれも古代であろうが、詳細な時期は不明。

以上の溝184～187は、いずれも埋土、溝の幅や検出長などが類似する。調査区東端部分で検出された溝であるが、この部分では南北→東西の順に掘削されている。また、これらの溝埋土は類区分でも記したように、強く黒色を呈し、検出が容易であった。これらの溝はおそらく関連性があるものと考えられるが、その掘削意図も含め不明である。ただし、土坑252以北でのみ見られる点はそれらの並存関係も含め示唆的であるといえる。土坑252埋土最上部と溝の埋土とは類似し、遺物の時期も似ることから、同時並存の可能性も考えられる。

溝188は幅0.3m、深さ9cm。埋土B類。土坑251に切られるが、溝199との前後関係は埋土が同様であり、詳細な観察を怠ったため不明である。出土遺物はない。

溝189は幅0.5m、深さ7～9cmで、東側がやや低い。埋土B類。溝201・202・203・204・206を切り、溝200・207に切られる。出土遺物はいずれも破片で、須恵器2点（坏H・壺）、土師器2点（坏）。うち1点が図化でき（図39）、278は須恵器壺。

溝190は幅0.4m、深さ9cmで、西側がやや低い。埋土B類。溝197・199に切られる。出土遺物はない。

溝191は幅0.5m、深さ4cm。埋土C類。埋土は同様の溝203に切られる。出土遺物は土師器片2点。うち1点は壺口縁部片で、端部に強い横ナデを施した面をもち、やや摘み上げる。

溝192は幅0.4m、深さ6cm。埋土C類。溝206を切る。出土遺物はない。

溝193は幅0.2m、深さ2cm。埋土C類。同様の埋土の溝202・203間で検出され、それらの溝に切られる。出土遺物はない。

溝194は幅0.4m、深さ7cm。埋土C類。ピット256に切られ、溝202・203・204・206を切る。西端は徐々に浅くなり、上面の土坑128に切られる。出土遺物はない。

溝195は幅0.3～0.5m、深さ5～8cmで、東側がやや低い。埋土C類。同様の埋土の溝203・204・206・207・211を切る。出土遺物は須恵器1点、土師器5点。須恵器はMT85頃の坏であり混入。土師器は小片で古代の所産であろうが、時期不明。

溝196は幅0.2～0.4m、深さ2～6cmで、東側がやや低い。埋土C類。出土遺物は須恵器壺胴部片。肩が張り稜をなす破片で、壺Kか。溝197～226はいずれも南北方向の溝。

溝197は幅0.3～0.6m、深さ5～10cmだが、底面のレベルはほぼ同じ。埋土B類。調査区東端で検出された溝で、溝190を切る。出土遺物はいずれも破片で、須恵器2点、土師器2点。うち1点が図化でき（図39）、268は壺?の把手で、断面形は長楕円形。小片で器種は不明。他の破片は、須恵器甕、土師器羽釜・甕。いずれも時期不明。

溝198は幅0.3m、深さ8cm。埋土B類。溝187と土坑252の間でのみ検出され、両者に切られる。出土遺物はない。

溝199は幅0.2～0.6m、深さ5～12cmで、北側がやや低い。埋土B類。溝188との切りあいは不明だが溝184～187に切られる。出土遺物はいずれも破片で、須恵器2点、土師器2点。うち2点が図化でき（図39）、244は土師器皿A。272は須恵器坏B。いずれも8世紀後半。

溝200は幅0.3～0.4m、深さ5～8cmだが、底面のレベルはほぼ同じ。埋土B類。溝184～186に切られる。出土遺物はいずれも破片で、土師器17点。うち1点が図化でき（図39）、258は土師器把手付短頸

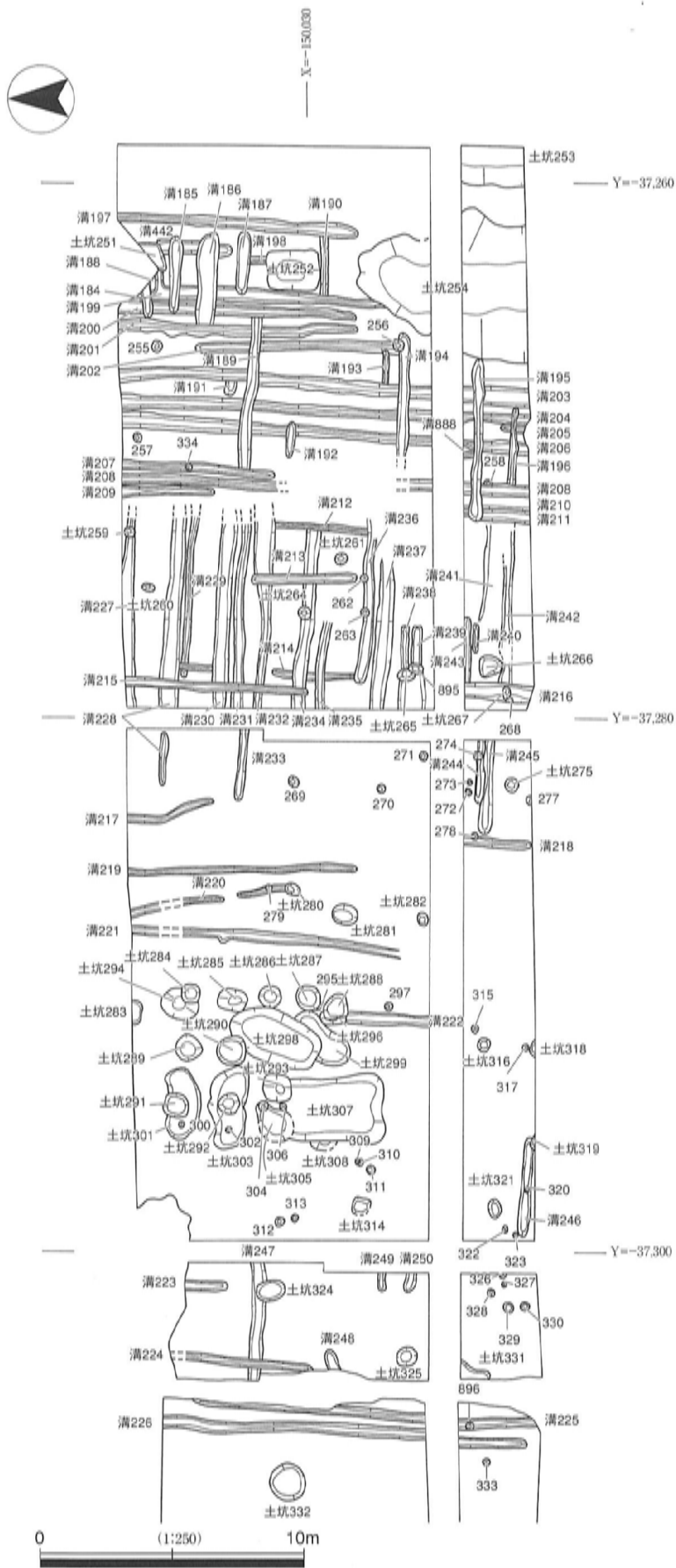


図34 第4b面東半 平面図 (S=1/250)

壺(壺A)(写真54)。把手の端部を欠き、内面は剥落のため調整が不明だが、外面は丁寧な横ミガキ。8世紀。このようなやや特異な遺物が出土することは、本遺跡の性格を考える上で重要と考えられ、他の遺物と合わせて後述する。

溝201は幅0.3~0.4m、深さ4~12cmで、北側がやや低い。埋土B類。溝186を切り、溝189に切られるが、この溝は第4面溝70と同一と考えられ、切りあいを誤認した可能性が考えられる。出土遺物はいずれも破片で、須恵器1点(甕)、土師器16点(坏A他)、製塩土器1点。うち2点が図化でき(図39)、261は不明土師器製品。口縁端部は上に面をもち、内側に内傾する面をもつ。内外面ナデで、外面には指頭圧痕が多く残る。267は製塩土器。外面太目のタタキ、内面はナデ。積山分類3類。8世紀。

溝202は幅0.3~0.4m、深さ7~11cm。埋土C類。溝189・193・194に切られる。出土遺物はない。

溝203は幅0.3~0.7m、深さ5~11cm。埋土C類。溝189・193~195に切られる。出土遺物はいずれも破片で、須恵器3点(甕・坏B蓋・坏H)、土師器4点(坏・甕)。うち1点が図化でき(図39)、270は須恵器坏B蓋。8世紀中頃。

溝204は幅0.3~0.5m、深さ0.4~0.9m。埋土C類。溝189・193~196に切られる。出土遺物はいずれも破片で、須恵器4点(甕・坏B蓋・平瓶・長頸壺)、土師器3点(坏・甕)。うち2点が図化でき(図

39・40)、269は須恵器坏B蓋。8世紀後半。282は長頸壺。8世紀か。

溝205は幅0.1～0.2m、深さ5cm。埋土C類。溝196に切られ、溝204を切る。出土遺物はない。

溝206は幅0.2～0.6m、深さ4～10cm。埋土C類。溝189・192・194・195に切られる。出土遺物はいずれも破片で、須恵器1点、土師器4点。うち1点が図化でき(図39)、277は須恵器壺底部。

溝207は幅0.4～0.6m、深さ5～7cm。埋土C類。溝189を切る。図39-239は当遺構掘削中に出土したものであるが、周辺を再検討した結果、別のピットに伴うことが明らかになった(写真53)。ただし、このピットに遺構番号を付すのを失念したため、ここで報告する。239は土師器坏A。口縁端部を強く外反させる。内面には暗文は見られない。8世紀後半。

溝208は幅0.3m、深さ2～5cm。埋土C類。途中上面の遺構に切られる。出土遺物はいずれも破片で、須恵器2点(壺・坏B蓋)、土師器16点、製塩土器3点。8世紀頃だが詳細な時期は不明。

溝209は幅0.2～0.3m、深さ2～5cm。埋土C類。出土遺物はない。

溝210は幅0.5～0.6m、深さ8～9cm。埋土C類。溝195・208に切られる。出土遺物はいずれも破片で、須恵器5点(甕・壺・坏)、土師器6点、黒雲母片岩製の不明石製品1点(図40-286)。いずれも時期不明。

溝211は幅0.2～0.4m、深さ4～15cm。埋土C類。溝195に切られる。出土遺物はない。

溝211以東は、第4面では溝をはじめとする遺構の密度が粗であった部分である。溝203・204・206など一部等間隔に見られる溝もあるが、多くに規則性は認められない。これらの溝の多くは、詳細な掘削意図は不明ながら、第4面段階の耕作痕跡であると考えられる。



写真51 東半東側遺構検出状況(北西から)



写真52 東半西側遺構検出状況(北西から)



写真53 溝207 律令土師器出土状況(南から)



写真54 溝200 土器出土状況(南から)

溝212は幅0.3m、深さ6～14cm。埋土D類。出土遺物は土師器片4点。うち1点が図化でき(図39)、241は土師器壊か。

溝213は幅0.4m、深さ3～6cm。埋土D類。溝232・234を切る。出土遺物はない。

溝214は幅0.2～0.3m、深さ1～3cm。埋土D類。溝234～236に切られる。出土遺物はない。

溝215は幅0.1～0.4m、深さ3～6cm。埋土D類。溝227・228・230～232・234を切る。出土遺物は、土師器片(壊か)2点。時期不明。

溝216は幅0.6m、深さ4～5cm。埋土D類。溝242・243を切る。出土遺物はない。

溝212～216の各溝が検出された部分は、基本的に南北を基調とする溝が多く検出された箇所、切りあいの誤認の可能性もあるものの、東西方向の溝に切られるものと切るものとの両者がある。このことから、これらの各溝は同時期の掘削でもなく、同一の掘削意図でもないように思われる。

溝217は途中で屈曲するが南北方向を基調とする溝で、幅0.3m、深さ4～5cm。埋土C類。出土遺物は、土師器片2点のみ。いずれも胎土精良でおそらく壊片。時期不明。

溝218は幅0.2～0.3m、深さ3～13cm。埋土C類。出土遺物はない。

溝219は幅0.2～0.3m、深さ3～5cm。埋土C類。出土遺物はない。

溝220はやや東に傾くが、南北方向を基調とする溝で、幅0.3m、深さ3～7cm。埋土C類。出土遺物は土師器片2点。片方には暗文が見られる。8世紀前半か。

溝221はやや西に傾くが、南北方向を基調とする溝で、幅0.3～0.5m、深さ5～11cm。埋土C類。出土遺物はいずれも破片で、須恵器2点(甕・壊)、土師器3点、製塩土器1点。土師器は壊と思われる破片が2点、胎土が粗い甕の可能性のある破片が2点である。製塩土器は内面ナデ。8世紀か。

溝222は幅0.4～0.5m、深さ3～5cm。埋土C類。出土遺物はない。

溝223は幅0.3m、深さ3～7cm。埋土C類。出土遺物はない。

溝224は幅0.4m、深さ1～5cm。埋土C類。やや西に傾く。溝247を切る。南端が攪乱にあたり、概ねその部分で溝の末端と確認したが、本来は南に連続していた可能性もある。出土遺物はいずれも破片で、須恵器1点、土師器2点。時期不明。

溝225は北半東側を攪乱に切られるが幅0.4m、深さ3～9cm。埋土C類。出土遺物はいずれも破片で、須恵器9点、土師器2点、瓦1点、製塩土器1点。うち2点が図化でき(図39)、276は須恵器壺。283は丸瓦。凹面には布目がみられ、凸面の大部分は剥落している。

溝226は幅0.4m、深さ5～10cm。埋土C類。出土遺物はいずれも破片で、須恵器6点、土師器15点。時期不明。

溝224～226までの各溝は平行して検出されており、第4面でも埋土E類とした溝が、比較的密に検出された箇所である。これらも、その上面の溝と同様の意味合いを持った溝であると考えられる。

溝227～247は東西方向の溝。

溝227は幅0.5m、深さ5～8cm。埋土D類。溝215に切られる。出土遺物は土師器片(壊A・甕)7点。壊は外反する口縁に弱く肥厚する端部を持ち、甕は外面ハケ調整。時期不明。

溝228は幅0.3～0.7m、深さ3～12cm。埋土D類。須恵器甕片が1点出土するのみ。時期不明。

溝229は幅0.2m、深さ3～7cm。埋土D類。出土遺物はない。

溝230は幅0.3～0.6m、深さ4～17cm。埋土D類。出土遺物はいずれも破片で、須恵器甕1点、土師器3点。時期不明。

溝231は幅0.4～0.5m、深さ5～9cm。埋土D類。出土遺物はいずれも破片で、須恵器4点（坏H・坏B・甕・壺）、土師器5点（甕・坏）。うち1点が図化でき（図39）、271は須恵器坏B蓋。8世紀中頃。

溝232は幅0.2～0.7m、深さ5～10cm。埋土D類。出土遺物は土師器片16点（坏A・甕）。うち1点が図化でき（図39）、240は土師器坏A。内面には暗文が見られる。8世紀中頃。

溝233は幅0.3～0.4m、深さ2～4cm。埋土D類。出土遺物はない。

溝234は幅0.5m、深さ3～7cm。埋土D類。出土遺物はない。

溝235は幅0.4m、深さ5～7cm。埋土D類。出土遺物は土師器片2点（甕）。1点は外面ハケ。時期不明。

溝236は幅0.4～0.5m、深さ6～16cm。埋土D類。出土遺物はいずれも破片で、須恵器2点（甕）、土師器6点。土師器は坏Aの他、胎土が精良な破片（坏か）とやや粗い破片（甕か）がある。坏A片はやや強く外反する端部で、内面に沈線をめぐらす摩滅した破片。8世紀後半か。

溝237は幅0.5～0.7m、深さ13～17cm。埋土D類。出土遺物はいずれも破片で、須恵器1点（甕）、土師器10点（坏他）。土師器のうち1点は口縁部が弱く外反し、内側に沈線が見られる。8世紀後半か。溝238・239は東側では同一の溝として検出された。溝238は幅0.3m、深さ9cm、溝239は幅0.4m、深さ5cm。いずれも埋土D類。溝238からは土師器片6点（坏・甕）が出土。時期不明。

溝240は幅0.3m、深さ4cm。埋土D類。出土遺物はない。

溝241は幅0.7m、深さ4～5cm。埋土D類。出土遺物はいずれも破片で、須恵器1点（甕）、土師器4点（甕）。土師器のうち1点は、体部外面に指頭圧痕が残り、口縁部は横ナデを施すが、外面頸部下の稜線は不明瞭な破片。9世紀初頭か。

溝242は幅0.4～0.5m、深さ4～6cm。埋土D類。出土遺物はない。

溝243は幅0.3m、深さ6～7cm。埋土D類。土師器片5点が出土したのみ。時期不明。

溝244は幅0.2～0.4m、深さ3～5cm。埋土D類。土師器片1点が出土したのみ。時期不明。

溝245は幅0.5m、深さ7～11cm。埋土D類。須恵器片1点と土師器片5点のみ出土。時期不明。

溝227～245の各溝が検出された箇所は、Y=-37,280ライン以西については密度が粗となるものの、東西方向を基調とする溝が多く検出された。この部分は、第4面で高まりが確認された部分と一致する部分が多く、第4面でも多くの溝が検出された。これらの溝も耕作痕跡である可能性が考えられる。

溝246は幅0.5m、深さ4～6cm。埋土D類。出土遺物はない。

溝247は幅0.5m、深さ3～13cm。埋土C類。出土遺物はない。

溝248は幅0.5m、深さ4～5cm。埋土C類。出土遺物はない。

溝249は幅0.4m、深さ3～5cm。埋土C類。出土遺物は製塩土器片2点のみ。8世紀頃か。

溝250は幅0.5m、深さ6cm。埋土C類。須恵器片1点と土師器片6点が出土。時期不明。

溝442は南北方向の溝で、幅0.4～0.6m、深さ7cm。埋土A類。出土遺物はいずれも破片で、黒色土器A類1点、須恵器3点（坏・甕）、土師器9点（坏A他）。うち1点が図化でき（図39）、274は須恵器坏Aか。

溝888は南北方向の溝で、幅0.2m、深さ3～5cm。溝195に切られる。埋土C類。出土遺物はない。

溝についてのまとめ 以上の溝は、ほとんどが類似した規模であり、際立って深い溝や大きく蛇行する溝は見られなかった。文中でも記したが、溝はいくつかの群に区分できる。東から、溝184などの東西方向のやや広目の溝が検出された箇所①。これと同じ部分で①の溝に切れ、以西～溝211以西の



写真55 第4b層中検出耕作痕跡（南から）



写真56 第4b面動物歯出土状況（東から）

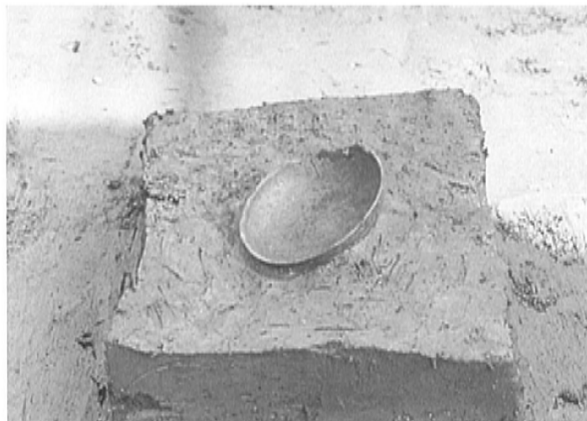


写真57 第4b層中土師器出土状況（南から）



写真58 第4b層中須恵器出土状況（南から）



写真59 第5面直上須恵器出土状況（南から）

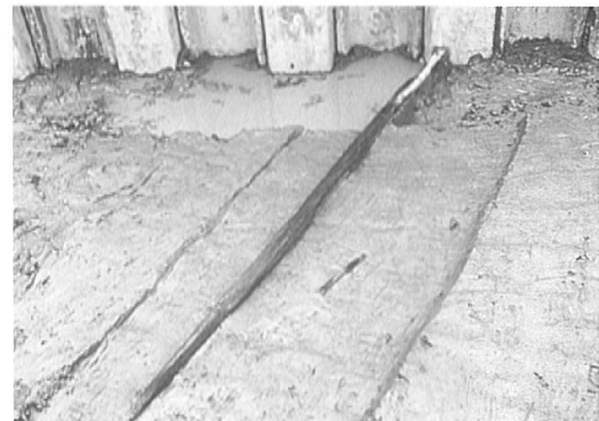


写真60 第4b層中木製品出土状況（南東から）

南北方向を基調とする溝が多く検出された箇所(②)。溝227などの東西方向を基調とする溝が検出された箇所(③)。掘立柱建物周辺の溝(④)、溝224周辺(⑤)。①部分は、上面で高畠が検出された箇所である。断面観察の誤認の可能性が全くないわけではないが、第4面では特に高まりは検出されなかった。また、その分布も土坑252以北に限られ、第3面段階同様の高まりはなかったものと考えられる。なお、この部分は第4b層掘削中にも耕作痕跡が見つかった(写真55)。③部分は文中でも記したように、第4面で高まりが検出された箇所にあたり、この高まりと関連があるものと考えられる。

これらのほとんどは文中でも記したように、耕作に伴う溝であると考えられる。また、微高地に位置し、上面で検出された箇所から畦畔の検出もなされなかったことから、畠作に伴う溝を多く含むものと

推定される。条里制は水田を基本とするが、微高地で水田には適さなかったのであろう。耕作土を除去したb層上面検出であることから、耕作痕と考えられるが、その認定条件〔佐藤2000〕にそぐわぬ部分もある。時期差も存在するものと考えられるが、出土遺物からは明確な時期差は判別できなかった。

なお、第4面検出溝との関係においては、③部分で一部重複が見られるものの、溝が密に分布する域は第4b面の東側から第4面の西側へ移動しているように見られる。

土坑・ピット 土坑は計43基、ピットは計42基検出された。土坑とピットは直径からの区分であり、その性格からの区分ではないため一括して報告する。なお、土坑およびピットの一部は、複数で掘立柱建物を形成するが、それらについては別に記すこととする。

土坑251は北側を攪乱で切られ、南辺がやや斜めであるが、隅丸方形と考えられる。深さは8cmと浅い。埋土は、付近の溝に類似する、褐灰色～黒褐色の砂混じり粘質シルト。出土遺物はない。

土坑252 (図35、写真61・62)は長辺2m、短辺1.5m、深さ0.9mの隅丸方形。土坑は砂層を掘り抜き、そこに桶枠1段を若干埋め込んでおり、溜め井の可能性が考えられる。土坑埋土は上層の土坑埋め戻し土(1～4層)、桶枠内の埋め戻し土(5層)、桶附設時の埋土(6～8層)に分けられる。5層が8層上面に一部で見られることから、この土坑機能時の土坑内の地表面は8層上面と考えられる。また、桶枠は1段のみの検出であるが、その埋め戻し土である5層は桶枠幅の延長上方に逆ハの字状に見られ、8層直上に連続して見られることから、桶枠はもともと1段であり、その上層は素掘り状態であったと考えられる。つまり、まず土坑を掘削し、桶を附設した後、周囲を一部埋め戻し、土坑周辺より一段下がった面が土坑内の地表面、作業面として機能していたと考えられる。

その桶枠埋土直上部分の、5層中では底部外面に「村主」と記された墨書土器が出土した(図39-250)。これは土師器焼で、9世紀前半と考えられる。なお、ここで若干墨書の「村主」について整理しておく。まず、815年に完成したとされる『新撰姓氏録』には、攝津國諸蕃や和泉國諸蕃、未定雑姓・山城國、未定雑姓・大和國に「村主」が見られるが、河内國では見られず、本例を適合させようとする積極的な根拠に乏しい。ただし、「高向村主」など村主の前に地名などがつく例はいくつか見られ、もっとも当遺跡に近接する地域では、「錦織村主」(右京諸蕃上)が見られる。この「錦織」はここでは若江郡錦部郷への適応であるが、他に山城國愛宕郡錦部郷も『和名類聚抄』に見られるとあり、この錦織が彼の地に対応する可能性をも示唆されている〔神道体系編纂会編1981:P715〕。また、『新撰姓氏録』河内國諸蕃には「上村主同祖」とされる「河内蔵人」「河内畫師」や「下村主同祖」とされる「春井連」も見られる。この「上村主」「下村主」は河内國諸蕃には見られないが、「右京諸蕃上」や「和泉國諸蕃」には見られる。なお、府下で集成された奈良・平安時代文字資料中〔駒井2000a〕に「村主」は見られないものの「上村主」は大野寺から刻書平瓦の出土が見られる。そもそも、墨書には官職や人名などを記すようであり、今回の村主が官職名なのか氏族名、個人名なのか俄かには決しがたい。なお、個人名では、『続日本紀』養老4(720)年6月27日条に「河内國若江郡人正八位上河内手人刀子作廣麻呂。改賜下村主姓。免雑戸号。」〔黑板ほか編1972a:81〕とあり、同一人物が『寧楽遺文』天平13(741)年7月18日には大般若波羅蜜多經書写の壇越ともある〔竹内編1977:618〕。さらに平城京左京二条二坊の二条大路濠状遺構からは「家令下村主廣万呂」「書吏河内画師屋万呂」と両面に書かれた木簡が出土している〔奈良国立文化財研究所1991:19〕。時期的には100年ほど古いのが、若江郡内に下村主姓の個人がいたようである。さらに、『続日本後紀』仁明天皇承和3(836)年閏5月癸巳(25日)条に「河内國人美濃國少目下村主氏成。散位同姓三仲等賜姓春瀧宿禰。其先「遠祖」出自後漢光武帝之後者成。」〔黑板ほか編1972b:55〕ともあり、い

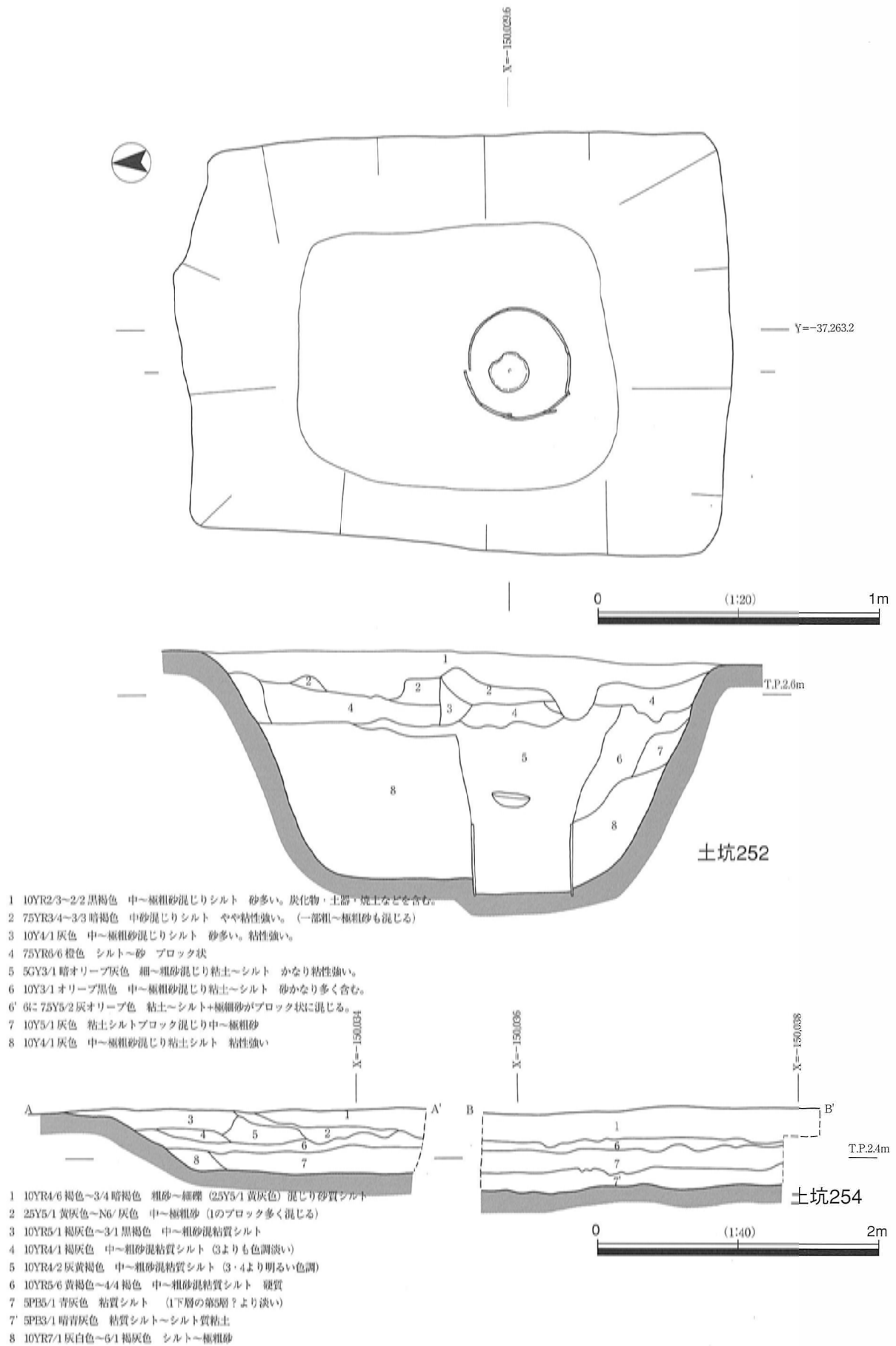


図35 土坑252 平・断面図 (S=1/20)、土坑254 断面図 (S=1/40)



写真61 土坑252断面（西から）



写真62 土坑252（西から）

れの郡かは不明ながら河内国内出身の下村主姓の人物がいたようである。この史料は墨書土器の時期に近く興味深い。美濃国の役人であり、この個人との因果関係は低いものと考えられる。これらから、河内國のいずれかの郡に下村主姓は8世紀初め以来存在していたものとは考えられる。これら掲げた各史料の因果関係、すなわち「下村主」と「錦織村主」の直接の関係などは浅学ゆえ不明であるが、今回出土した墨書である「村主」は、それらとの関連で捉えておきたい。なお、当時の村（集落遺跡）における墨書土器について、「記載の目的は、一定の祭祀や儀礼行為などの際に土器になかば記号として意識された文字を記すことにあり、それは時に集団の表示記号として使用されることもあるという」[山中2002]。推論ではあるが、『新撰姓氏録』河内國諸蕃に「上村主同祖」とされる「河内藏人」「河内畫師」が見られることを積極的に評価すれば、それらの氏族の祖先に関する祭祀の可能性も考えられる。

今回は、土坑廃絶段階におかれたものであるが、墨書土器土坑出土状況の多くは多数の墨書土器が土坑底部から出土するものが多い。今回の出土状況を簡単に整理すると、まず土坑の性格は「溜め井」であり、他の破片の出土は見られるものの、「埋土の途中から墨書土器は単体」で出土している。同様の出土状況、類例は、管見の及ぶ範囲では不明である。なお、遺構が「溜め井」であることから農耕との関係も考えられ、そのような段階もあったものと考えられるが、墨書土器が出土したことから、西側の掘立柱建物との関係が強かったと考えられる。

また、溜め井を構成する桶（図40-291）であるが、直径0.38mの円形曲物で、樹種はヒノキ。下部には釘穴が見られることから、本来は底板がある曲物の転用材と思われる。樺皮綴じは一例であるが、部分的な残存に留まり、詳細な技法は不明である。内面には曲物加工の際の工具による斜格子状の加工が見られ、一部には円形の加工も見られる。円形の加工痕は類例を知らないが、神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡の成果[市川1987]に拠れば、斜め方向格子状の加工は10世紀には見られず、9世紀も少なく、当遺跡の資料にも整合性が見られる。

この他、土師器坏（242）、土師器碗（262）が出土した。いずれも上層の土坑埋め戻し土中からの出土。詳細な時期は不明だが、8世紀後半～9世紀初頭頃の所産と考えられる。図化以外にも、須恵器、土師器、ホルンフェルス製の石、製塩土器が出土した。また、墨書土器が出土したため、土坑内の埋土を洗浄したが、植物遺体（第6章第1節表2参照）が出土したのみで金属製品等の出土は見られなかった。これらの植物遺体も特に祭祀的な様相は見られず、農耕との関連で捉えるのが妥当であろう。

土坑253は調査区南東端で検出され、西側以外を側溝で切られる。全体像については知りえないが、検出範囲で東西約1.5m、南北約2.5m、深さ0.14mの不整円形。出土遺物はいずれも破片で、須恵器6点

(甕・壺など)、土師器7点で、土師器には製塩土器とも思われる破片を含む。いずれも時期不明。

土坑254(図35)は一部および南側を側溝に切られるが比較的大規模な落ち込み状を呈する。出土遺物はいずれも破片で、須恵器14点、土師器71点、土師質の瓦1点、黒色土器B類1点。うち8点が図化できた(図39)。238は土師器羽釜。10世紀頃か。249は黒色土器B類。内外面とも密なミガキ。端部内面には沈線が見られる。11世紀後半頃。252は土師器碗A。9世紀前半。254は土師器碗。比較的小型で口縁が開く。259は土師器甕。全体的に分厚く、口縁端部は下方にやや丸く拡張する。10世紀頃。263は土師器碗。9世紀頃か。281は須恵器壺。285は平瓦。このように、この土坑から出土した遺物は他の遺構よりも新しい時代のものが多い。

ピット255は直径0.4m、深さ8cm。埋土C類。溝201・203間で検出された。出土遺物はない。

ピット256は直径0.45m、深さ0.1m。埋土C類。溝194・201を切る。出土遺物はない。

ピット257は直径0.3m、深さ9cm。埋土C類。溝206・207間で検出された。出土遺物はない。

ピット258は直径0.3m、深さ6cm。埋土C類。溝208に切られる。出土遺物はない。

ピット259は直径0.4~0.45m、深さ0.29m。埋土B類。溝227を切る。出土遺物は須恵器片2点、土師器片10点。時期不明。

土坑260は楕円形の土坑で深さ5cm。埋土B類。溝227・228間で検出された。出土遺物は須恵器片2点(甕・坏)、土師器片3点。時期不明。

土坑261は直径0.45~0.5m、深さ0.14m。埋土D類。溝234・236間で検出された。須恵器甕片1点、土師器坏片4点、製塩土器片1点が出土した。時期は不明。

ピット262・263はいずれも溝236を切る。直径0.2~0.3m、深さ7~10cm。出土遺物はない。

土坑264は直径0.5m、深さ6cm。埋土A類。溝234を切る。土坑265は長軸1.1m、短軸0.4mの楕円形で、深さ0.11m。埋土B類。土坑895に切られ、溝238・239を切る。土坑266は直径0.7~0.9mの不整円形で、深さ0.12m。埋土B類。溝241を切る。土坑267は楕円形で深さ5cm。埋土B類。ピット268に切られ、いずれも溝216を切る。ピット268は直径0.3m、深さはほとんどなく、痕跡程度の検出。埋土B類。いずれからも出土遺物はない。

ピット269・270・271はいずれも溝233南側で検出された。ピット269は痕跡での検出で、直径0.45m。ピット270は直径0.3m、深さ0.11m。ピット271は直径0.3m、深さ8cm。いずれも埋土C類。ピット271からは須恵器片1点、土師器片4点が出土したが、時期不明。それ以外のピットからの出土遺物はない。

ピット272・273・274は近接して検出された。ピット272・273は直径0.2m、深さ5~8cm。ピット274は直径0.3~0.4m、深さ0.17m。溝245を切る。いずれも埋土C類。いずれからも出土遺物はない。

土坑275は直径0.5~0.6m、深さ0.19m。埋土C類。土師器片3点が出土したのみ。時期は不明。遺構番号276は欠番。ピット277は直径0.4m、深さ9cm。埋土C類。南側を側溝に切られる。ピット278は直径0.2m、深さ6cm。埋土B類。溝218を切る。いずれからも出土遺物はない。

ピット279・土坑280は溝220を切る。ピット279は直径0.2~0.3m、深さ0.11m。埋土B類。土坑280は直径0.45~0.65m、深さ5cm。埋土C類。いずれからも出土遺物はない。

土坑281は直径0.75~1.0m、深さ0.12m。埋土C類。土師器片4点(坏他)が出土したのみ。時期は不明。土坑282は直径0.4~0.5m、深さ0.17m。埋土C類。出土遺物はない。

土坑283は直径0.95mの円形か。深さ9cm。埋土C類。北側を側溝に切られる。出土遺物はない。

ピット295は直径0.2m、深さ5cm。埋土C類。土坑287に切られる。検出箇所は掘立柱建物が検出

された箇所にあたるが、それ以前の掘削であり、極めて小規模なものであり、関連するピットも見られず、掘立柱建物との関連はないものと考えられる。出土遺物はない。

ピット297は直径0.3～0.4m、深さ7cm。埋土C類。土坑288の南側で検出された。掘立柱建物東側列の土坑群の軸から西にややずれ、掘立柱建物との関係はないものと考えられる。土師器片が3点出土したのみ。時期は不明。

ピット306は直径0.25m、深さ5cm。埋土C類。土坑307の北端で、土坑を切る形で検出された。後述するように、土坑307は掘立柱建物以降の遺構であり、このピットも掘立柱建物との関連はない。出土遺物はいずれも破片で、瓦器2点、黒色土器A類2点、須恵器6点、土師器26点、弥生土器1点（V様式）であり、土坑との切りあいが妥当であることを裏付ける。

遺構番号309～314までの遺構は掘立柱建物西側で検出されたものであるが、特に切りあいはなく、これらに規則性はない。ピット309は直径0.15～0.25m、深さ6cm。埋土D類。律令土師器片が1点出土したのみ。小片で時期不明。ピット310は直径0.15～0.3m、深さ6cm。埋土D類。出土遺物はない。ピット311は直径0.4m、深さ0.22m。埋土D類。土師器片3点（坏）が出土したのみ。素口縁の小片1点含むが、時期不明。ピット312は直径0.3m、深さ0.12m。埋土D類。出土遺物はない。ピット313は直径0.2m、深さ0.13m。埋土D類。土師器片、製塩土器片それぞれ1点が出土したのみ。土坑314は直径0.65～0.75m、深さ0.18m。埋土D類。須恵器片1点、土師器片2点が出土。時期不明。

遺構番号315～318までの遺構は掘立柱建物南側で検出されたものであるが、特に切りあいはなく、これらに規則性はない。ピット315は直径0.2m、深さ6cm。埋土A類。端部が内側に肥厚する土師器碗口縁部片1点が出土したのみ。9世紀前半代か。土坑316は直径0.55m、深さ0.13m。埋土B類。ピット317は直径0.3m、深さ8cm。埋土A類。土坑318は南側を側溝に切られる。深さ7cm。いずれからも出土遺物はない。

土坑319、ピット320は溝246を切る。土坑319は南側を側溝に切られる。深さ5cm。埋土D類。ピット320は直径0.2m、深さ7cm。埋土C類。いずれからも出土遺物はない。

土坑319、ピット320を含め、遺構番号321～323・326～330はややまとまって検出された。土坑321は直径0.5～0.75m、深さ0.13m。埋土D類。須恵器片1点、土師器片11点が出土。いずれも時期不明の小片。ピット326からは須恵器片1点、土師器片4点が出土。小片で時期不明。ピット329からは土師器片が1点出土。素口縁の坏もしくは碗と思われるが時期不明。ピット322・323・327・328・330からの出土遺物はない。ピットはいずれも直径0.1～0.35m、深さ3～8cm。埋土はC類。

土坑324は直径0.8～1.1m、深さ4cm。埋土C類。溝247を切る。出土遺物はない。

土坑325は直径0.7m、深さ0.11m。埋土B類。須恵器片4点（甕・坏）、土師器片8点、瓦片2点が出土。土師器片には口縁端部を弱く外反させ、口縁部内面に沈線をめぐらす破片が見られる。8世紀代か。図40-284は平瓦。掘立柱建物以西でまとまった遺物の出土が見られたのはこの遺構のみである。

土坑331は北と西を攪乱に切られる。出土遺物は土師器片4点。土坑332からは須恵器片3点、土師器片7点が出土。いずれも小片で時期不明。

ピット333は直径0.3m、深さ0.11m。埋土C類。出土遺物はない。

ピット334は直径0.2m、深さ0.13m。埋土C類。出土遺物はない。

ピット895は直径0.45～0.5m。痕跡での検出。埋土B類。土坑267、溝239を切る。

ピット896は直径0.1～0.12m。痕跡での検出。埋土C類。溝225を切る。

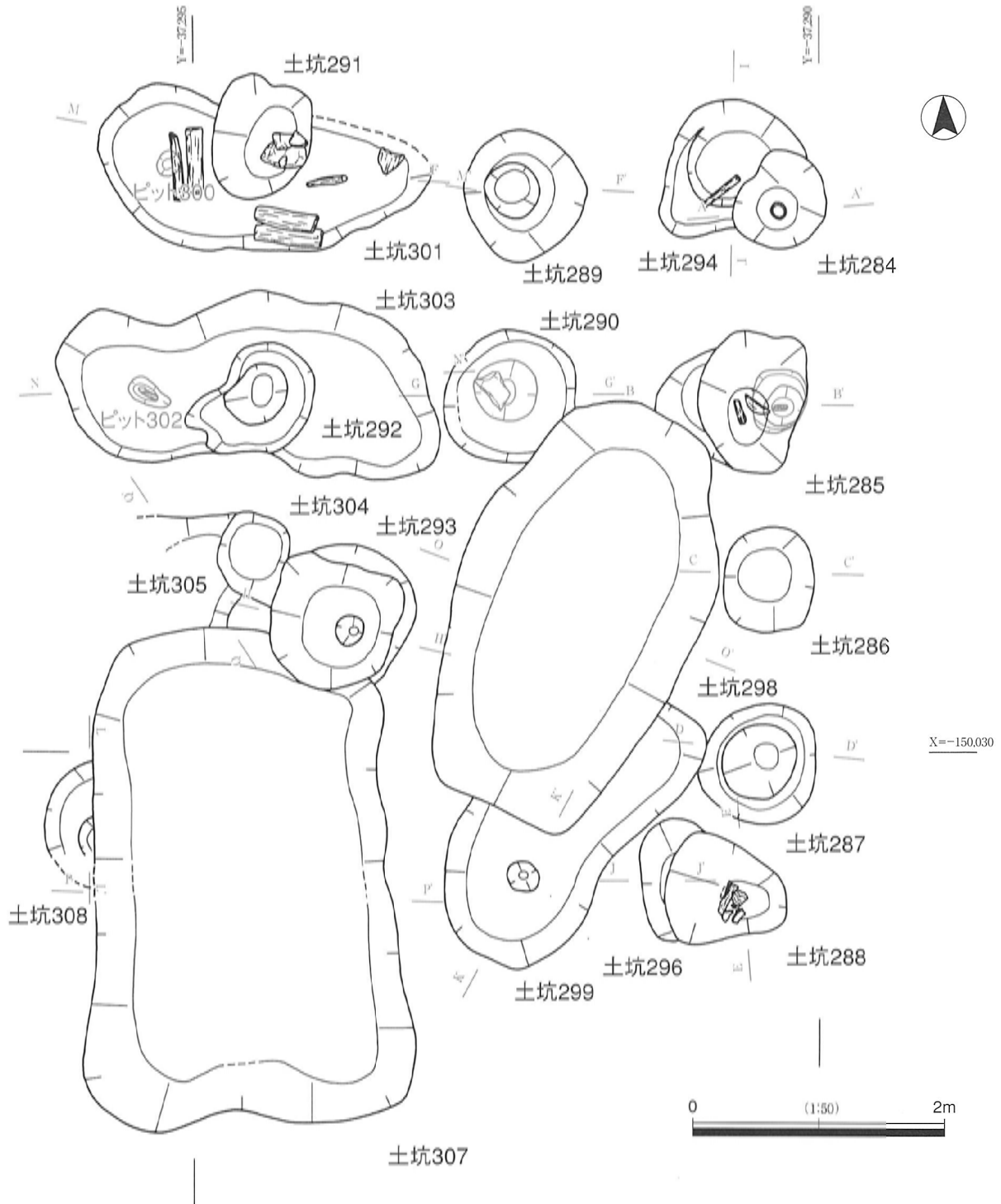


図36 第4b面 掘立柱建物 平面図 (S=1/50)

土坑・ピットについてのまとめ 以上の、掘立柱建物を除く土坑、ピットは、その多くが溝以降の掘削であった。ほとんどの性格が判然とせず、単体で浅い落ち込みであったものが多い。今回検出のピットのうち、いくつかは自然の浅い落ち込みを誤認したものも含むと思われる。ただし、やや群をなしているものもあり、一定の範囲内にまとまってピットを掘る行為が行われた可能性も考えられる。また、いずれからも遺物の出土は少なかった中で、土坑254からは比較的まとまって土器が出土した。これは、時期的にやや新しい、11世紀後半頃の廃棄土坑であったと考えられる。他に、土坑253も時期は不明な

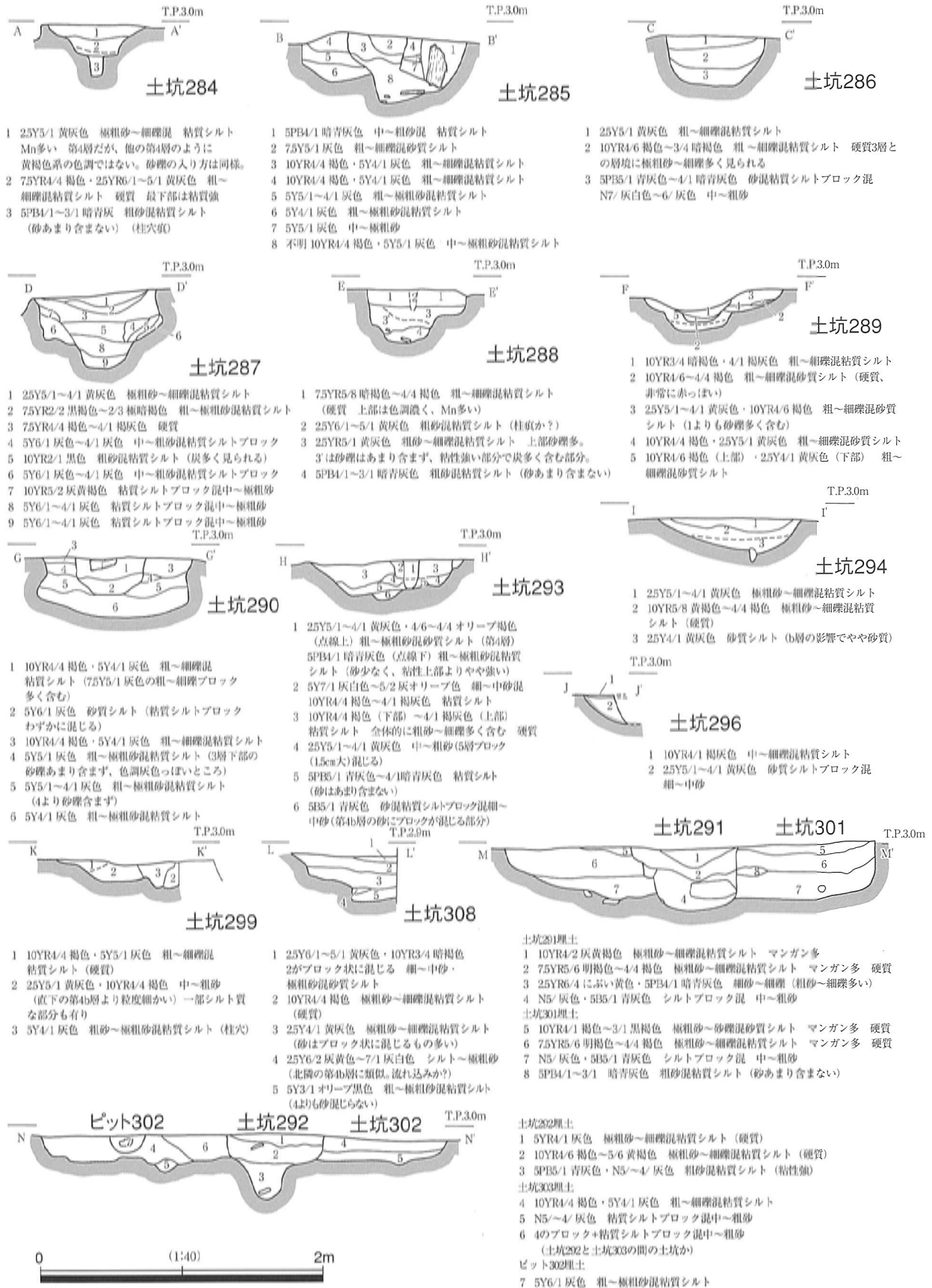
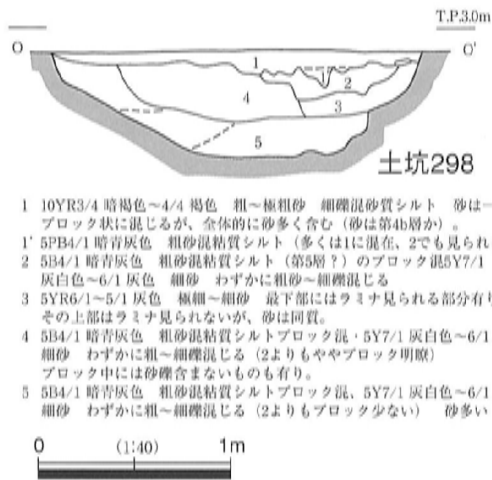
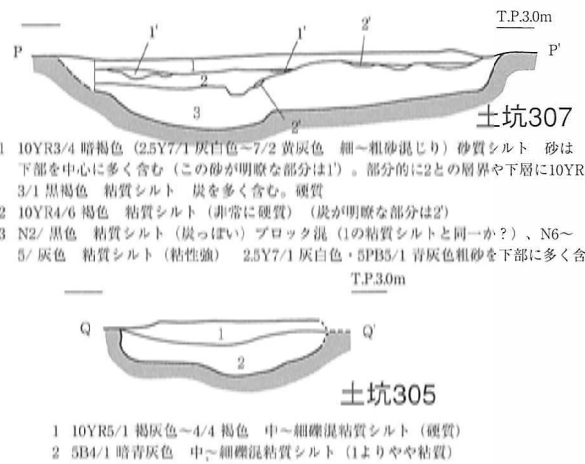


図37 土坑284・285・286・287・288・289・290・291・292・293・294・296・299・301・303・308、ピット302 断面図 (S=1/40)



- 1 10YR3/4 暗褐色～4/4 褐色 粗～極粗砂 細礫混砂質シルト 砂は一部ブロック状に混じるが、全体的に砂多く含む(砂は第4b層か)。
- 1' 5PB4/1 暗青灰色 粗砂混粘質シルト(多くは1に混在、2でも見られる)
- 2 5B4/1 暗青灰色 粗砂混粘質シルト(第5層?)のブロック混5Y7/1 灰白色～6/1 灰色 細砂 わずかに粗砂～細礫混じる
- 3 5YR6/1～5/1 灰色 極細～細砂 最下部にはクミナ見られる部分有り その上部はクミナ見られないが、砂は同質。
- 4 5B4/1 暗青灰色 粗砂混粘質シルトブロック混・5Y7/1 灰白色～6/1 灰色 細砂 わずかに粗～細礫混じる(2よりもややブロック明瞭) ブロック中には砂礫含まないものもあり。
- 5 5B4/1 暗青灰色 粗砂混粘質シルトブロック混・5Y7/1 灰白色～6/1 灰色 細砂 わずかに粗～細礫混じる(2よりもブロック少ない) 砂多い



- 1 10YR3/4 暗褐色(2.5Y7/1 灰白色～7/2 黄灰色 細～粗砂混じり) 砂質シルト 砂は下部を中心に多く含む(この砂が明瞭な部分は1')。部分的に2との層界や下層に10YR3/1 黒褐色 粘質シルト 炭を多く含む。硬質
 - 2 10YR4/6 褐色 粘質シルト(非常に硬質)(炭が明瞭な部分は2')
 - 3 N2/ 黒色 粘質シルト(炭っ(黒い)) ブロック混(1の粘質シルトと同一か?)、N6～5/ 灰色 粘質シルト(粘性強) 2.5Y7/1 灰白色・5PB5/1 青灰色粗砂を下部に多く含む
- 1 10YR5/1 褐灰色～4/4 褐色 中～細礫混粘質シルト(硬質)
 - 2 5B4/1 暗青灰色 中～細礫混粘質シルト(1よりもやや粘質)

図38 土坑298・307・305 断面図 (S=1/40)

がら、類似した性格を持つものである。また土坑のいくつかは、耕作の際に出土したものをまとめて捨てるための廃棄土坑であったものと考えられる。今回の調査区では東側への展開が不明であるものの、西側はその縁辺を確認されたと考えられ、西端付近にある土坑は耕作域のはずれに掘削された小規模な廃棄土坑の可能性も考えられる。西側では耕作痕跡と考えられる溝の検出も希薄であり、今回は明確には認識されなかったのだが、土坑325などはその可能性がある。

掘立柱建物(図36・37・38) 微高地の西端で検出された。東西2間(約3.8m)×南北4間(約5.9m)の推定床面積22.42㎡の総柱建物と推定され、磁北から2°～5°東に傾く。一部大型の楕円形～隅丸方形の土坑に切られる。ここでは掘立柱建物部分で検出された遺構として、建物以外の遺構もこの項にて報告する。以下、図37・38の断面図の順に遺構の概略を記述し、のちに簡単に検討を加える。

土坑284(写真図版8-7)は土坑294を切る、南北0.7m、東西0.6m、深さ0.36mの隅丸方形。掘方は2段で下段の中央部に柱痕と思われる径10cm程度の円柱形の掘り込みが確認された。上層の埋土は柱抜き取り後の埋め戻し土であろう。出土遺物はいずれも破片で、須恵器1点(坏H)、土師器8点、黒色土器A類1点。9世紀頃か。土坑294から東・南へそれぞれ30cmずつ移動している。

土坑285(写真図版7-1・2)は南北1.1m、東西0.9m、深さ0.49mの隅丸方形。断面の観察から柱の建て替えが想定される。当初は西側最下層の礎板を基礎とし、埋土8・9・10を柱設置後の掘り方埋土とする2段の柱穴であり、その後、柱が抜き取り後に、埋め戻されたのが、埋土5・6・7と考えられ、7は機能時の埋土がそのまま埋め戻されたのだろう。さらに、当初の柱位置より東に約80cmずれて、小規模な規模の土坑が掘削、埋土1部分の柱が設置され、埋土2・3・4が掘り方部分に埋め戻されたものと考えられる。出土遺物は、土師器製の破片1点のほか礎板、若干の木片が出土している(図40)。289は礎板。樹種はスギで、円板状底板の転用と推定される。埋土1部分の柱材およびそれ以外に出土した未図化の資料も、いずれも樹種はスギ。

土坑286(写真図版8-3)は円形で直径0.7m、深さ0.36m。柱痕や抜き取り痕などは確認されなかった。埋土は水平な堆積でいずれも埋め戻し土であろう。出土遺物は、いずれも破片で土師器13点、須恵器1点、砥石1点。うち2点が図化でき(図39・40)、253は土師器碗Aで、9世紀前半。288は流紋岩製の砥石片。

土坑287は南北0.8m、東西0.6m、深さ0.55mの円形。掘方は2段である。埋土6・7は柱据え付け時の掘り方埋土と思われる。中央部の埋土3～5・8・9は柱抜き取り後の埋め戻し土と考えられる

が、その最上部埋土3は硬質であった。このこと、および埋土1・2の堆積は、埋土3以降かなり時期差を持つものと考えられ、柱抜き取り後、放置された後の埋土と考えられる。出土遺物はいずれも破片で、土師器19点（うち甕片1点他）、須恵器2点、弥生土器1点。うち1点が図化でき（図39）、246は土師器坏Aで、9世紀前半と思われる。

土坑288（写真図版7-3・4）は直径0.9m、深さ0.38m不整円形。埋土上部中央に柱痕とも思われる埋土2が確認されたが、貧弱であり異なるものと考えられる。これ以外に、断面で柱痕跡は見られなかった。ただし、埋土4を中心に土器・木片などが出土し、土坑285底部に見られたような細長い板状の破片も見られることから、礎板の可能性が考えられ、機能時の埋土がそのまま埋め戻されたものとも考えられる。出土遺物はいずれも破片ながら埋土4から土師器18点（羽釜2点・坏5点他）、須恵器1点、製塩土器3点、木1点。うち2点が図化でき（図39）、236・237は土師器羽釜。いずれも8～9世紀前半。なお、木（写真図版8-8）は未図化だが、樹種はこれのみヒノキ。

土坑289（写真図版8-8）は長軸0.9m、短軸0.8m、深さ約0.26mの不整円形。中央部は第4面の土坑133により攪乱を受け、埋土1は掘り残し。断面では柱穴の様相は見られなかった。出土遺物はいずれも破片で、須恵器1点、土師器3点。うち1点が図化でき（図39）251は土師器碗Aで、9世紀前半。

土坑290（写真図版8-4）は円形で直径1.1m、深さ0.42mの円形。中央部に根石と考えられる人頭大の扁平な石を置いた部分が見られ、この部分が柱抜き取り時の掘削痕跡、もしくは再度この部分に柱を建てた後の埋め戻し土の可能性が考えられる。出土遺物は、時期不明の土師器小片5点（坏他）、自然石2点。

土坑293（写真図版8-5）は南北1.1m、東西1.0m、深さ0.29mの隅丸方形。中央やや東寄りに埋土1の柱痕跡がある。この柱痕跡とややずれて西側に埋土6の窪みが見られる。この窪みは、柱建て替えに関連する遺構や柱付設時の痕跡などの可能性が考えられる。ただし、この土坑は東西列・南北列とも軸からずれており、堀立柱建物との関連性は低いと考えられる。出土遺物は、須恵器坏1点、土師器小片4点（坏・甕）。時期は不明。

土坑294（写真図版7-8）は南北1.45m、東西1.15m、深さ0.25mの楕円形。断面では柱痕跡は見られなかった。埋土中層付近から炭化した木片、底部中央から木製品が出土している。木製品は棒状だが、土坑底部中央から出土しており、礎板の可能性もある。しかし、埋土は平坦な堆積をしており、柱穴の様相は見られなかったことから、柱抜き取り段階に流れ込んだ可能性も考えられる。出土遺物は、土師器小片3点、須恵器小片1点。うち2点が図化でき（図40）、287は流紋岩の砥石の破片。290は先述の棒状の木製品である。樹種はヒノキ。

土坑296は土坑288に切られる楕円形の土坑。埋土は極めて砂質で、堆積は皿状。出土遺物はない。

土坑299は土坑298に切られる長楕円形の土坑。北東-南西方向に主軸を持ち、長軸2.5m、短軸1.3m、深さ0.21m。南西部に柱痕跡の可能性のある掘り込みが確認された。検出段階では輪郭が不鮮明であったため柱痕跡は平面では確認できなかった。平面形が他の土坑と大きく異なることや大型であること、埋土中から瓦器が1点出土していることから掘立柱建物に関連する土坑と判断することは難しい。しかし、埋土は他と大きな差異はなく掘削方位は異なるが、土坑301・302と類似した形態であり、柱穴の位置が南北軸でやや東にずれるものの、概ね妥当であり、また複数の土坑を誤認してしまった可能性も考えられる。以上から、建物と同時期の遺構と考え、瓦器を土坑298からの混入と見ることも可能であろう。出土遺物は、瓦器の他須恵器小片3点、土師器小片8点。

土坑308は土留め支保工用中間杭と、土坑307に切られ全容を明らかにしえないが、直径1.0m、深さ0.34mの円形と推定される。掘方は2段で、埋土はいずれもほぼ水平に堆積していた。ピット300・302の柱抜き取り後の埋め戻しの可能性もあるが、位置的には他の土坑と若干軸を違えており関連性は薄いように見える。出土遺物はない。

土坑291は土坑301を切る。これら二つは土坑291が301のほぼ中央部に位置することや南側の土坑292が土坑303の中央部にほぼ同様な関係で存在していることから、同時期の関連する遺構の可能性や、東列の土坑同様、建て替えの可能性も考えられる。土坑291（写真図版7-7）は長軸1.0m、短軸0.95m、深さ0.45m不整形円形。最下部からやや浮いて根石と考えられる人頭大の扁平な石と、それより小振りの石3点が出土した。出土遺物は、土師器小片17点、須恵器小片4点で、2点が図化できた（図39）。245は土師器皿A。9世紀か。260は甕。8世紀末～9世紀代のものであろう。

土坑301（写真図版7-5・6）は長軸2.6m、短軸1.4m、深さ0.37mの楕円形。底部付近から板状の木材が出土したため、建て替え以前の礎板などの可能性も考えたが、底部数ヶ所から検出されたことも考えると、木材の貯蔵などの役割を担ったものの可能性も考えられる。出土遺物は、須恵器小片4点（うち甕1点）、土師器小片28点（羽釜・甕・杯など）、瓦1点、自然木片（樹種スギ）5点、自然石1点。うち2点が図化でき（図39・40）、243は土師器坏A。内面に連弧が見られる。8世紀前半頃。280は須恵器壺の口縁部片。ピット300が土坑301埋没後に掘削されたもので、直径0.2m、深さ0.18m。出土遺物はない。底部はほぼ土坑301底とほぼ同様になり、東にそれるものの、木材が出土している。ピット300周辺には、これに伴うような一回り大きいような掘り方は確認されなかったため、この木材はピットとの関係はないものと考えられるが、土坑301埋没後に時期をおかず、この木材を意図して掘削された可能性もある。なお、掘立柱建物との関係では、北辺軸にのるものの、貧弱であり柱穴間の距離も狭いため、建物を構成する柱ではないと考えられるが、何らかの関連がある可能性も考えられる。

土坑292とピット302、土坑303（写真図版8-6）は先述の土坑291・300・301の関係と類似した形態を持つ土坑で、東西に主軸を持つ不整形円形の土坑301のほぼ中央部にこれを切った形で土坑292が位置している。両者の関係は前述の土坑291と301の関係に類似している。また、この土坑303の西半にはピット302が埋没後に掘削されている。土坑292は直径0.8～1.0m、深さ0.28m。出土遺物は、須恵器小片4点、土師器杯12点、甕片1点。図39-256は土師器碗である。時期は、9世紀頃か。また、ピット302は直径0.1～0.2m、深さ12cm。樹種がスギの自然木1点が出土しているが、杭には貧弱である。これ以外の出土はない。なおこのピットの評価は先述のピット300と同様。土坑303は、東西3.0m、南北1.3m、深さ0.5m。出土遺物はない。

土坑298（写真図版8-2）は北東-南西に主軸を持つ楕円形の土坑で、先述の土坑299を切っている。規模は、長軸3.6m、短軸2.0m、深さ0.57m。埋土には第4b・5層と考えられるブロックが多く含まれており、掘削後あまり時間を経ず埋め戻されたものと考えられ、第4面検出の土坑127・128などと類似する。出土遺物は、瓦器2点、黒色土器A類2点、須恵器小片6点（甕・壺・坏など）、土師器小片17点、瓦片1点。うち3点が図化でき（図39・40）、248は和泉型の瓦器碗で13世紀。275は須恵器壺の底部。279は須恵器壺の口縁部片。

土坑307（写真図版8-1）は南北に主軸を持つ隅丸方形の大型土坑で、南北3.8m、東西2.3m、深さ0.42m。土坑293に切られ、また土坑308を切っているが、前者の切りあいについては誤認した可能性もある。土坑埋土は、先述の土坑298と同様に下層と考えられるブロックを多量に含み、規模・形態共々、

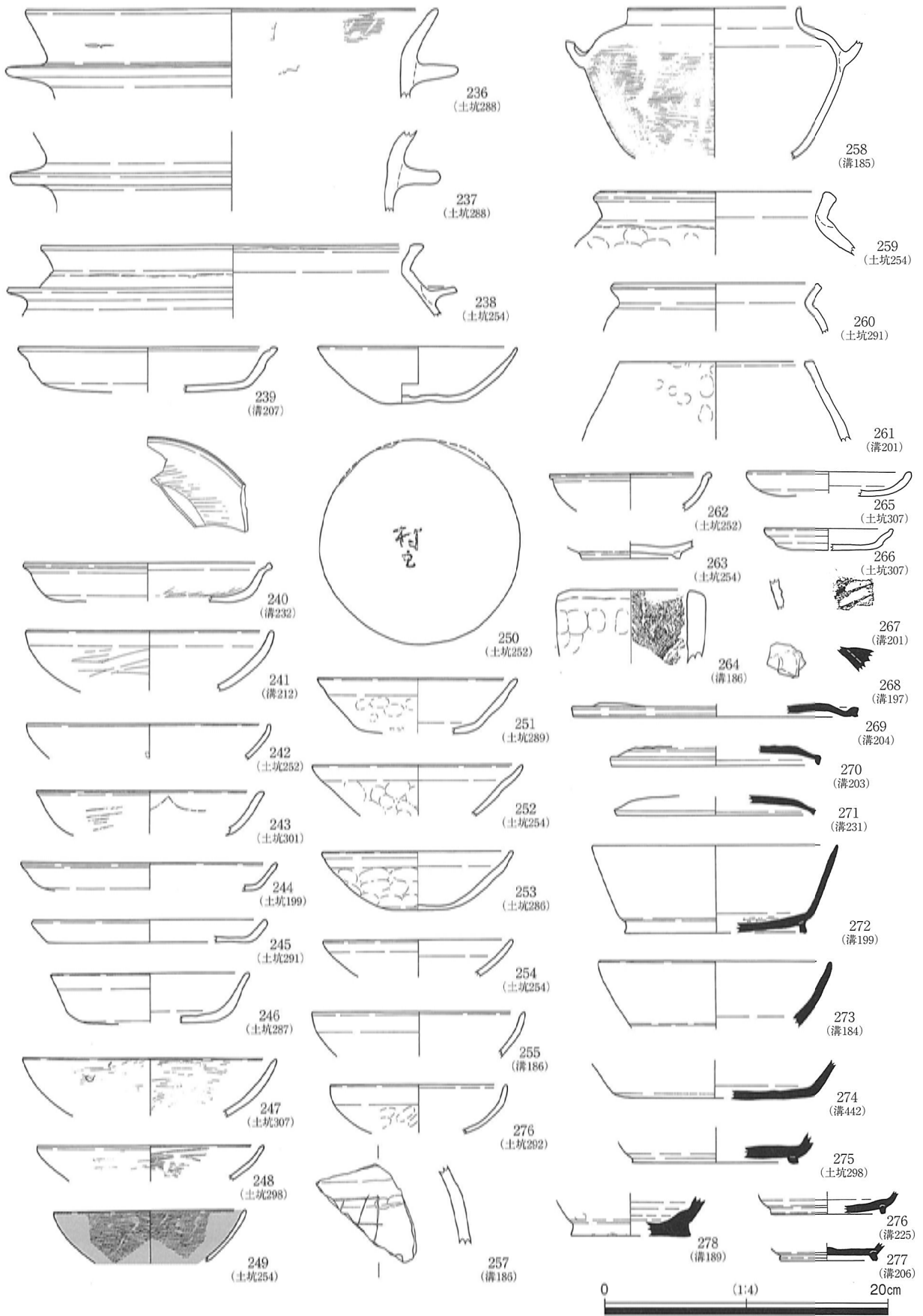


图39 第4 b面 出土遺物 (1)

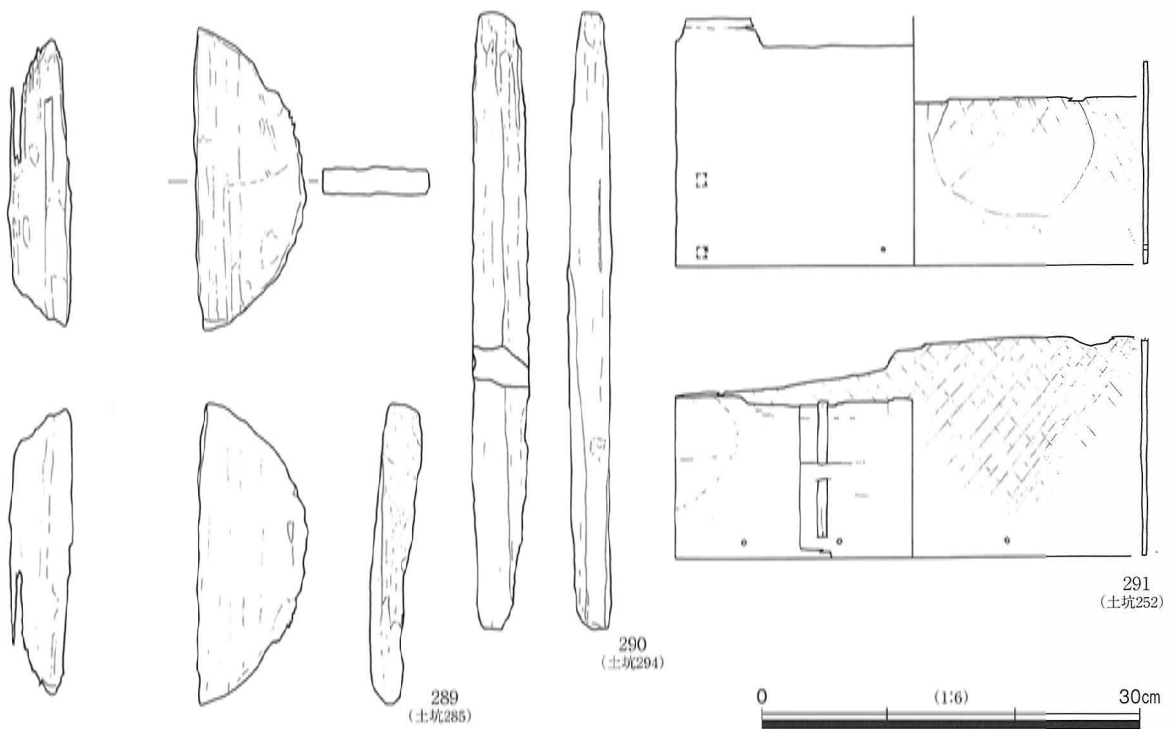
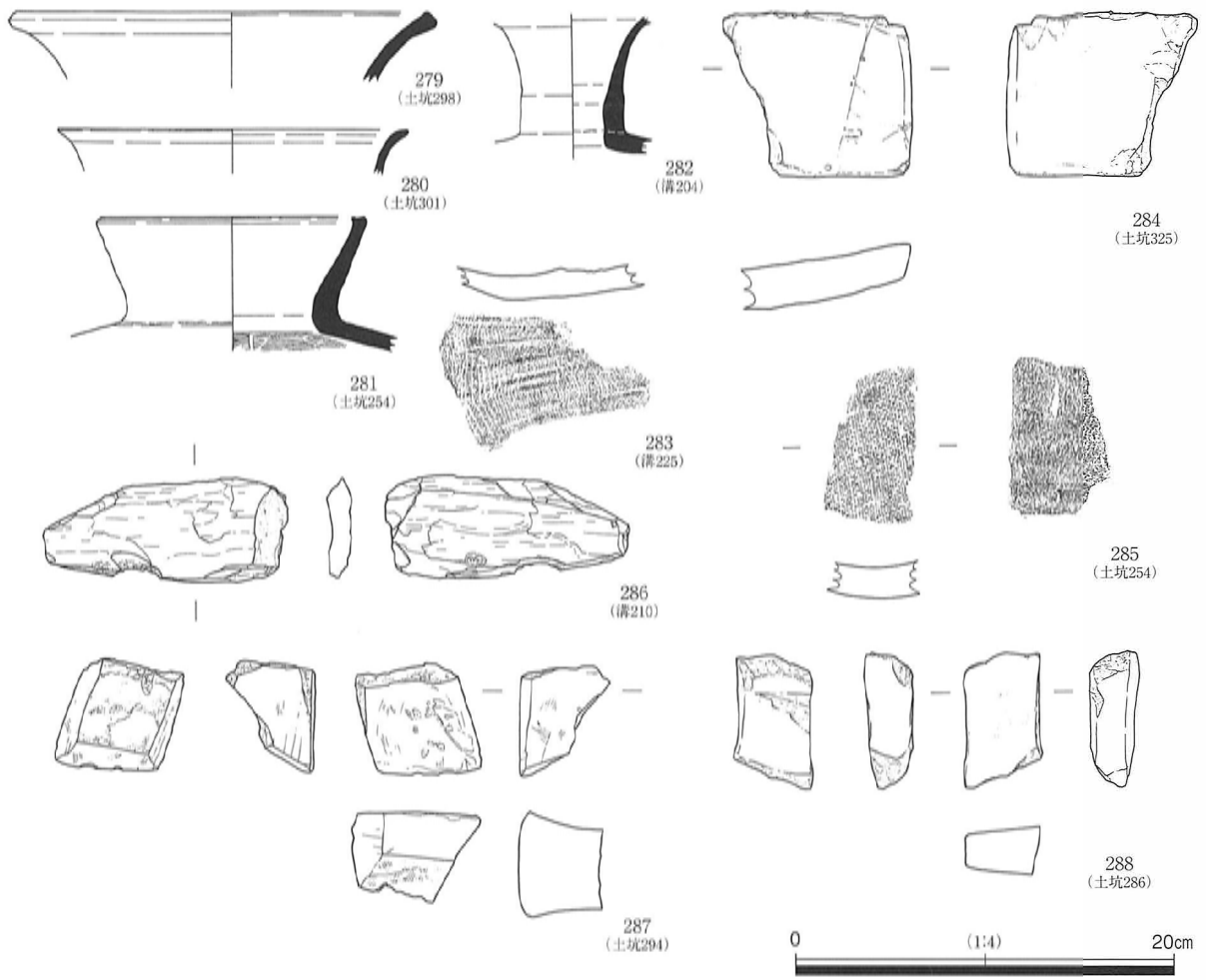


图40 第4b面 出土遺物 (2)

土坑127・128・298などと類似する。出土遺物は、瓦器1点、黒色土器A類1点、須恵器6点（甕・壺・坏など）、土師器60点、製塩土器3点、弥生土器1点。うち3点が図化でき（図39）、247は和泉型瓦器塊。12世紀後半。265・266は土師器皿。いずれも12世紀。これらの遺構は、掘立柱建物に伴う土坑を切り、出土遺物に瓦器を含むことから、建物以降の遺構と考えられる。なお、埋土の特徴から、土取り用の土坑と考えられる。

ピット304は直径40cmで、痕跡程度の検出だが、埋土を誤認した可能性もある。埋土は砂を多く含む粘質シルトで、皿状の堆積で埋め戻し土だろう。柱穴の様相は見られなかった。出土遺物はない。

土坑305は不整円形で、長軸1.75m、短軸1.25m、深さ0.33m。東側を土坑304に切られる。b層上面の粗砂が鉄分・マンガンなどと凝固したような埋土を当初認識できず、以西についてはb層と誤認したため正確な規模は不明。

掘立柱建物についてのまとめ 以上の各柱間距離（推定柱中心間距離）は1.1m～2.2mである。東列の土坑287-288間は1.1mと短く建物とは別の遺構の可能性も考えられるが、他の土坑同様建て替えが見られることや軸が一致することから、同一群として認識した。南側の東西3列は後世の攪乱で柱穴の残りが悪く、4間×2間の推定が妥当か若干疑問だが、東列の柱穴群からそのように推定した。また、ピット300・302から西側にもう1間のびる可能性もあるが、先述のようにその可能性は低いと判断し除外した。ただし庇の可能性もある。出土遺物は、埋め戻し土から9世紀代の遺物が出土することを基本とし、これが掘立柱建物廃絶の時期を示すものであろう。なお、建立時期は包含層出土遺物に8世紀前半資料が希薄であることから8世紀後半と考えられる。明らかに柱穴と考えられるのは土坑284、285、287、290、291、292があげられる。これらのうち土坑285では礎板と推定される板材が、土坑290・291では根石と推定される人頭大の平坦面を持つ石が出土した。

この建物は、ほぼ同一の箇所建て替えが行われたものと考えられる。東列の遺構では比較的明瞭だが、他の列では不明瞭である。土坑294→284の建て替えの際には柱穴位置が南東に移動し、他の東列の土坑は東へ移動する。その際の移動が文中でも記したように約30cmを基準とすることから、基準尺として約30cmが使用された可能性が考えられる。当時の尺度は1尺=29.71cmと推定されており〔岩田1994〕、南北4間は20尺（594.2cm）、東西2間は13尺（386.2cm）の可能性も考えられる。ただし、東西は比較的等間隔ながら、部材に影響されたのか、柱間は従来言われている〔広瀬1989〕より等間隔ではない。また、土坑301・291や土坑303・292が建て替えかは不明であるが、同様の変遷ながら、新しい土坑（291・292）の古い土坑における位置が異なる。これを建て替えの際の柱位置の移動と考えれば、意図は不明ながら、北辺の軸がほぼ真東向きであったものが南側に大きく傾きを変える。なお、土坑290部分が東柱式なのか通柱式なのかであるが〔宮本2002〕、周辺の柱同様の根石が見られることから、通柱式であったものと考えられ、倉庫以外の可能性が高いと考えておく。

出土遺物（図41・42）第4b層からは、破片の概数で陶器4点、瓦器5点、黒色土器3点、須恵器183点、土師器754点、弥生土器2点、製塩土器16点、瓦9点、石5点、木6点の計約987点の遺物が出土した。第4面同様、西半での遺構検出はなく、遺構が検出されなかった西半出土遺物点数の総数に対する割合は1割弱である。

292・293は緑釉陶器。292は塊。一部底部内側に釉がかかるが、その範囲はほぼ内・外面全体に及ぶ。内面には重ね焼きの際の目積み痕が見られ、底部は糸切り底である。釉の色調は濃い緑色。底部露胎部

分は、赤味を帯びるが、破断面は灰色の暗い色調。近江系。平尾氏の4段階（平安Ⅱ新～Ⅲ新）頃、930年頃～1010年頃と思われる。293は小型の碗もしくは皿か。内外面に薄緑色の釉が若干残存する程度。素地は硬質で須恵質。10世紀前半か。なお、これらの緑釉陶器は、微高地上からの出土であり、第4層からの混入で、自然堆積層中に含まれるものではないと考えられる。

294～308は土師器。294は土師器坏C。口縁端部は内面に若干の段をもち、弱く内傾する面をもつ。また、外面に若干摘み出す。内面は横ナデののちに、密で細かな暗文が見られる。外面は口縁部が横ナデで、以下は指頭圧痕が残る。7世紀後半か。なお、この土器は第4層掘削中に細粒の堆積層中から出土したものである（写真57）。295は碗Aか。全体的に摩滅著しく調整は不明瞭だが、内面には横ミガキの痕跡が見られる。外面は凸凹しており、指頭圧痕であろう。296は坏。底部付近に指頭圧痕が見られるのを除き、内外面ともナデで、外面には3段ほどのナデが見られる。口縁端部はやや外方に摘む。いずれも、8～9世紀前半か。297は碗。全体的に摩滅著しく調整は不明瞭だが、外面には指頭圧痕が見られる。9世紀前半～中頃。298は碗。口縁部から内面にかけてはナデ、外面は指頭圧痕が見られるが、大部分が剥落している。二次焼成を受けているものと思われる。9世紀前半頃。299・300は甕。299は口縁部外面がナデで、内面には横ハケが僅かに見られ、端部を若干摘む。体部外面は縦ハケ、内面はナデで、頸部下に指頭圧痕が見られる。300は全体的に摩滅著しいが、口縁部外面が横ナデ、内面は短い単位の横・斜めハケ。口縁端部を摘み上げ、外面は凹線状を呈する。体部外面は縦ハケ、内面は横ハケ。いずれのハケも深い。いずれも8世紀後半頃。301は土師器羽釜。8世紀～9世紀前半。302・303は甕。302は二次焼成を受け全体的に赤味を帯びる。口縁部はナデで、端部は外面に面をもつ。体部外面には指頭圧痕が残り、内面は板ナデか。時期は不明確ながら10世紀後半か。303は口縁端部をやや外方に摘む。口縁部外面から内面は横ナデ。体部外面は指頭圧痕が見られる。8世紀後半。304は坏A。内面見込み部分にはミガキが僅かに見られる。8世紀後半。305・306は布留式高坏。305は外面坏部脚柱部接合部分以下脚柱部上半まで縦ハケ。裾部には斜めハケが見られる。内面脚柱部にはシボリ目が残りに、裾部は横～斜めハケ。306は脚部片で、外面はメントリ気味、内面にはシボリ目が見られる。いずれも、布留式前半新相～後半古相頃。307は高坏。外面はメントリが施され、多角形状を呈し、内面は縦ケズリ。布留式前半。308は把手。端部がやや欠損する。

309～329は須恵器。309～313は坏蓋。309は稜が退化し、口縁部が大きく開く。310も稜が退化するが、口縁部は309より内湾する。なお、破断面は灰色であるが、外面は茶色を呈し、やや焼成不良である。311（写真58）は弱く稜が残存するものの、310に類似する。312（写真59）は小型。これらはいずれも、MT85頃と考えられ、6世紀後半。313は小型で、口縁端部が段状。稜は摩滅気味で本来はよりシャープであったものと考えられる。TK47頃と考えられ、6世紀初頭。314は坏身。焼成不良で白っぽい。TK43頃で6世紀後半か。315は坏AもしくはB。8世紀後半か。316は坏A。底部外面は無調整気味。8世紀後半。317～319は坏B。318はやや小振り、外面から脚部へほぼ屈曲がなく連続する。いずれも8世紀後半か。320は坏B蓋。焼歪が見られる。8世紀後半～9世紀前半。321は坏B蓋。摘み部分のみだが、320よりしっかりした摘み。322～324は壺。322は体部外面横ケズリ、底部はナデ。内面は回転ナデ。323は内面がやや剥落気味だが、自然釉が見られる。325は壺か。焼成不良気味で、淡い灰色味を帯びる。326は壺もしくは鉢の底部。327は壺底部。いずれも、詳細な時期は不明だが、8～9世紀か。328・329は壺Mか。329底部外面には糸切り痕が残る。8世紀後半か。

330～333は製塩土器。330・331は外面指頭圧痕、内面布目。積山分類6類。8世紀。332は外面指頭

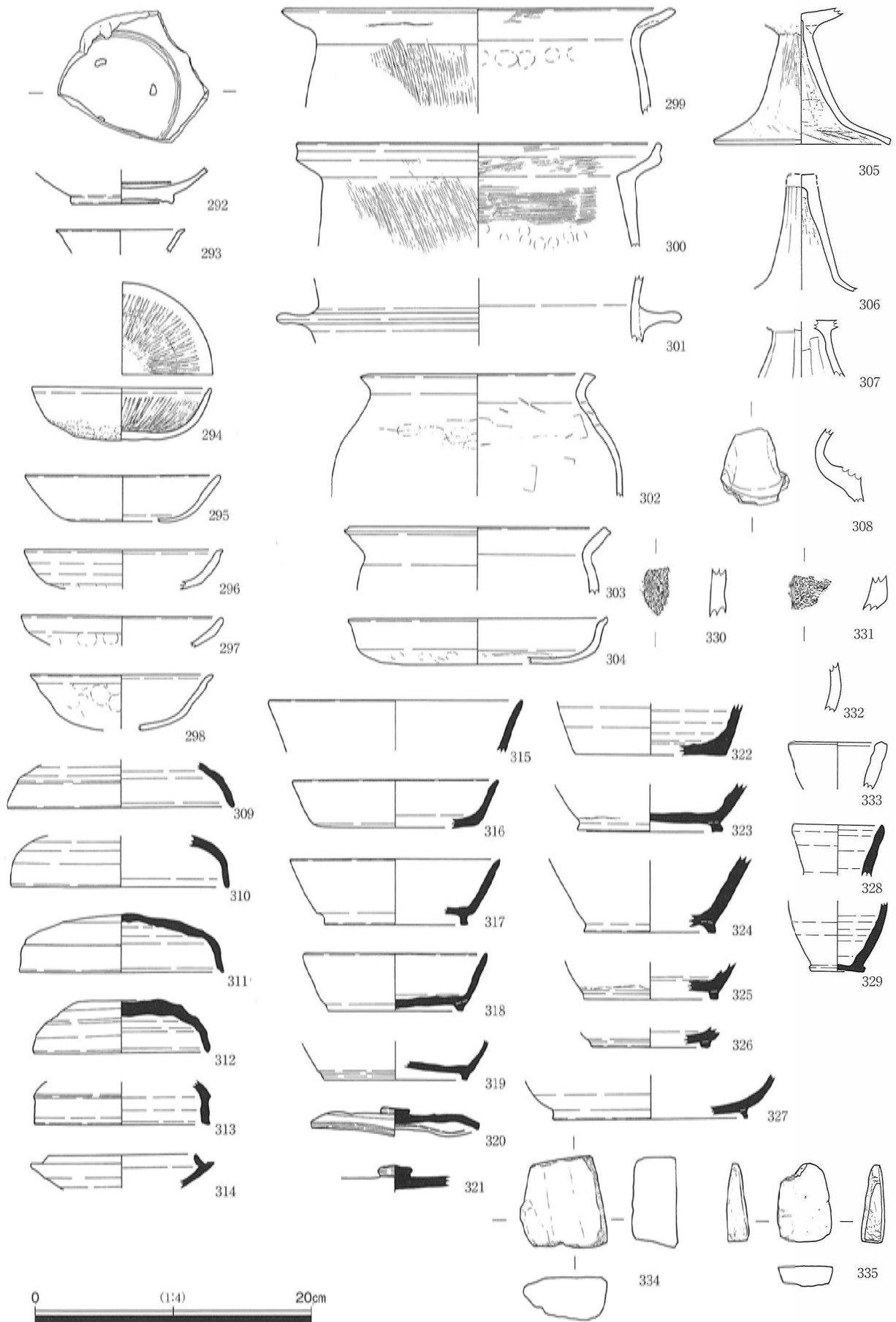
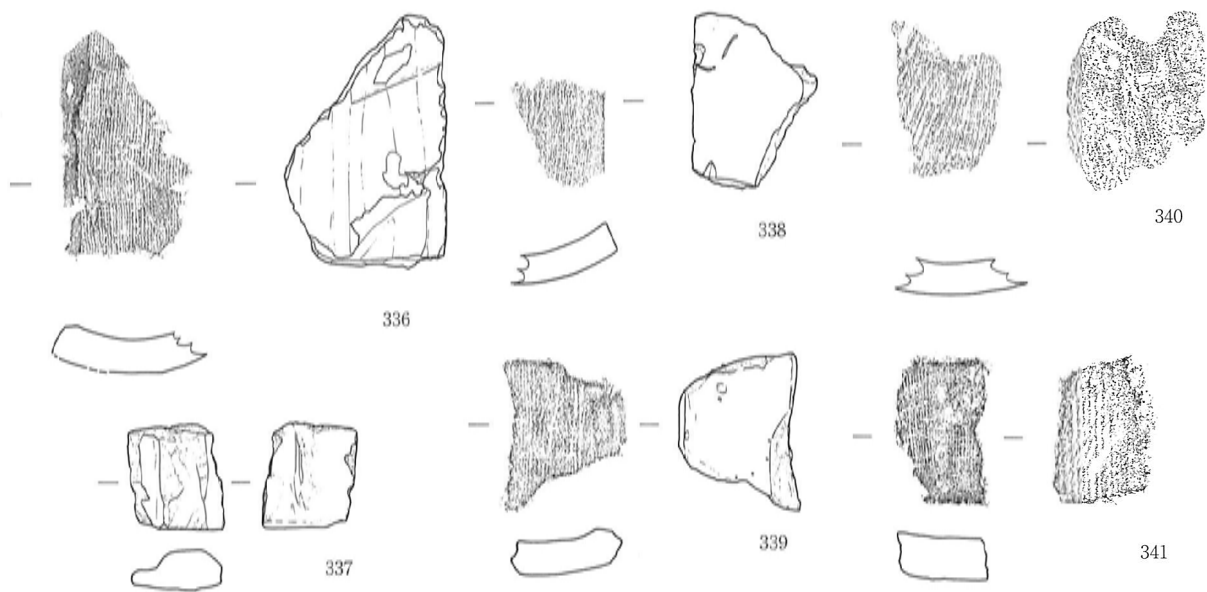
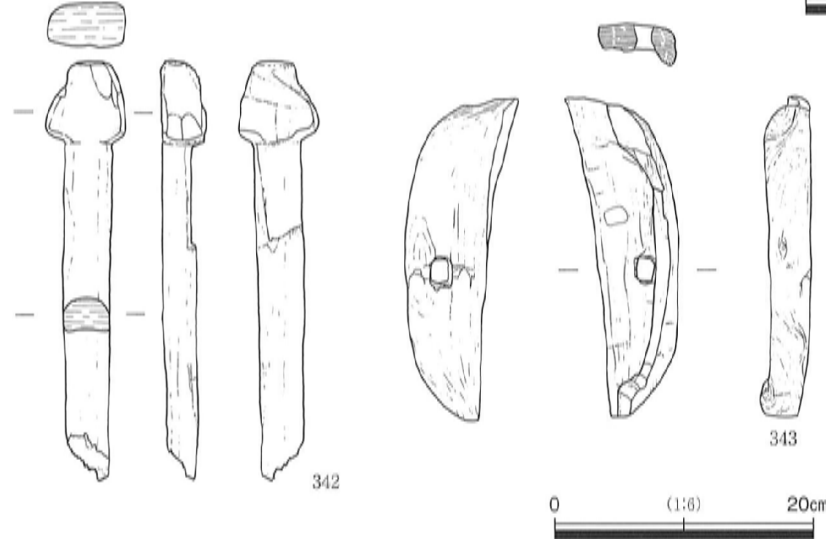


图41 第4b層 出土遺物 (1)



0 (1:4) 20cm



0 (1:6) 20cm

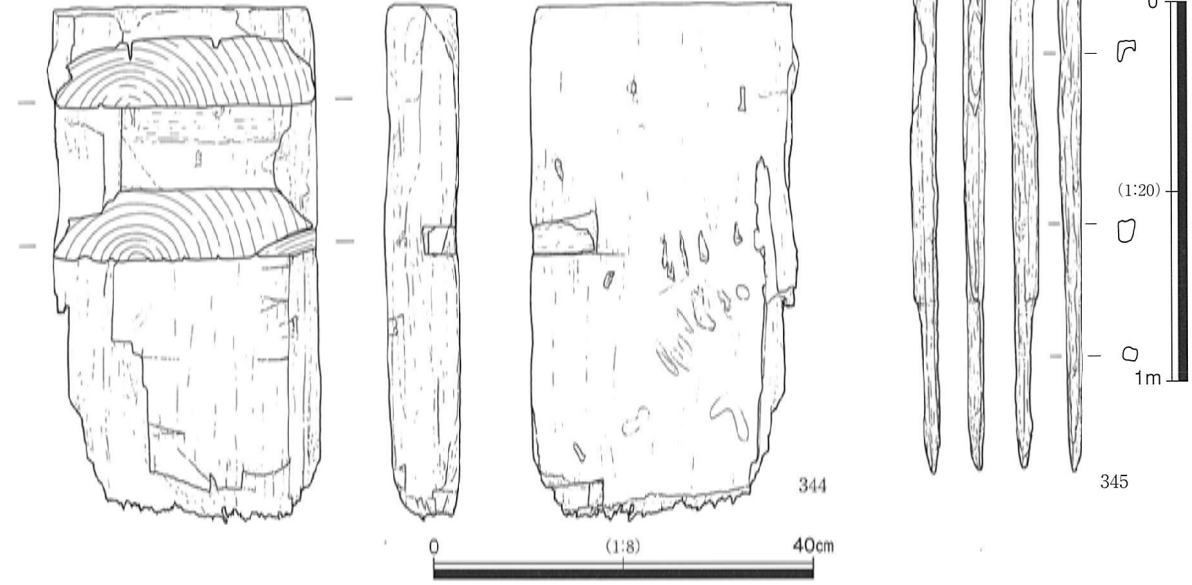


图42 第4b层 出土遗物 (2)

圧痕、内面ナデ。胎土は白っぽい。333は積山分類5類か。8世紀。

334・335は砥石。334は1面に研磨痕が見られる。雲母片岩製。335は1面に研磨痕が見られ、両側面が平坦面である。流紋岩製。

336・338～341は平瓦。336は凹面布目、凸面縦方向のケズリ。338・339・340は凹面に布目が残るが、凸面は不明瞭だがナデか。なお、340は内面に煤化が見られ、339も赤色化している。341は凹面布目、凸面縄目。

337は竈の破片か。竈であれば、焚き口下部片と思われるが、胎土がやや異なるように見受けられる。

342～345は木製品。342は農耕具の柄か。上端部が大きく膨らみ、棒部分は断面半円形。なお、棒部分上部は新欠。樹種はスギ。343は履物。半分ほどの残存。側面が立ち上がり、底面には穿孔が見られる。爪先方向の上部覆い部分は欠損し、踵側で側面の立ち上がりがなくなるが、これが欠損なのか否かは判然としない。樹種はヒノキ。類例は長原遺跡95-14次調査SX701の7世紀土器との共伴例〔田中2000：図52-241・242〕や、難波宮第7a層（7世紀中葉）出土例〔佐藤2000：fig.72-588〕が見られるが、いずれとも穿孔の大きさが異なる。この中では長原遺跡の一例〔田中2000：図52-241〕に類似するが、立ち上がりの長さが異なり、本例はこの部分がやや摩滅気味であるのかもしれない。また、類例の時期は7世紀であり、本例出土層からも同時期の資料は見られるが、出土遺物の中心はそれよりもやや新しい時期を中心とする。この遺物が出土したのは、遺構が検出されなかった西半の第4b層上部であり、東半の遺構群との関係は考えにくい。本例は、一連の履物の中でやや新しい時期の資料の可能性も考えられるが、図41-294のような7世紀代の資料が同層の類似箇所から出土していることを考えると、7世紀代の資料と考えた方が妥当と思われる。ただ、これが東半第4b面の8～9世紀代の遺構群と直接関係がないにしても、近接地にこれに符合しうるような遺跡が存在する可能性が高く、周辺調査に期待が持てる。344は厚手の板状製品。中央部端に別の本を継いでおり、他の部材と接合して使用するものと考えられる。両面とも多少の加工痕が見られるが、腐食のため鈍くなっており、誤認しているものもあると思われる。多くの加工痕が見られる面には墨書も見られるが、字句は不明。樹種はスギ。345は細長い棒状の木製品（写真60）。片方（実測図下部）は矢板打設時に破損を受けているが、全体の形状からはさほど大きな破損ではないであろう。残存する先端はやや尖らせる。基本的に断面方形に加工した上で、複数箇所に平坦面を作った「欠き込み」が見られ、建築部材と考えられるが、いずれのものかは不明。樹種はスギ。

以上の遺物のうち、緑釉陶器（292・293）は第4b層精査中の出土であり、本来第4層に伴う遺物である。また、瓦（336～341）は同様に第4b層精査中の出土であり、第4b面で検出された掘立柱建物との関連が考えられる遺物である。また、比較的まとまって製塩土器（330～333）が見られるのはこの層までである。他の、律令須恵器については第4層に含まれる遺物と大きな時期差は見られず、その多くも第4層からの混入の可能性が高い。

時期 古墳時代の土師器・須恵器は第4b層の堆積時期を窺う上で重要な資料と考えられるが、その須恵器の最新の時期は、後述する第5-0層出土須恵器（346）に近い時期である。また、当遺跡で見られる最も古い律令土師器（294）は、確実に第4b層中からの出土であり、これが第4b層の時期の一点を表しているものと考えられる。すなわち、第4b層の堆積は7世紀後半の可能性が考えられることになる。資料の時期判断が妥当でない可能性があるという、報告者自身の責も多分にあるが、当遺跡資料には8世紀前半の資料が不明瞭である。この時期が第4b層に当てべき時期なのか、第4面が機

能していた時期なのか、現状では判然としないが、現状では第4層に含まれる時期の可能性が高いと考えておく。この点は、今後の調査で修正していくべき点の一つである。

小結

古代の当調査区においては、この時期以降に連なる耕作に関する遺構に加え、僅かではあるが8世紀後半から9世紀前半にかけて特異な遺構、遺物が見られる。これらは、律令体制段階の当地域を考えるうえで貴重な資料であるといえる。ここでは、特に掘立柱建物、軒丸瓦、埴を中心に整理を行う。

今回、掘立柱建物、軒丸瓦、埴などの遺構・遺物が確認されたのは調査区の制約もあるが、東西40m・南北10m程度の範囲である。まず、掘立柱建物が検出された箇所は、この西端である。他に比べ最も高い地点ではないが、東側には高まりが存在し、西側では溝の掘削状況から高まりが存在した可能性も考えられる。西側の高まりは遺構として検出されたのではなく、他の箇所との関係性から考えられた状況証拠であり不明確だが、西側はそのまま低地部となり区画はなされていたといえる。このように、掘立柱建物はやや微高地上で東西を区画された部分に建てられていたものと考えられる。次に、軒丸瓦や埴が出土したのもこの地区であるが、「村主」銘の墨書土器が出土したのは古墳時代以来の微高地部分である。なお、遺物において、軒丸瓦にしても、埴、墨書土器いずれも、一点ずつのみの出土であり、貧弱である。包含層から出土した瓦片をもってしても、総瓦葺の建物が存在した可能性は考えられないし、瓦の全てが掘立柱建物近辺から出土したわけではない。

遺物の記述でも記したように、駒井氏の整理〔駒井2000a〕に拠れば、当遺跡周辺には瓦が単体で出土する地点が多く見られる。今回出土したのは青谷式軒丸瓦だが、古閑氏の整理〔古閑2000〕に拠れば、青谷式軒瓦は南河内に分布するという。しかし、出土量が1点である当遺跡は、特にこの成果に積極的な貢献ができるものではない。なお、船橋遺跡〔若林1998〕、土師の里遺跡〔松村1983〕では当遺跡同様、軒丸瓦のみの出土が見られる。このような、少量の軒瓦のみが出土することについては、時期は異なるが12世紀頃の絵巻物（伴大納言絵巻や信貴山縁起絵巻など）でも、棟部分のみが瓦葺でそれ以外は桧皮葺といった建物が見られる。当遺跡での軒瓦以外の瓦の出土量から見ても、棟部分に瓦を葺いた程度の建物が存在した可能性はあるものと考えられる。しかし、当遺跡の建物は掘立柱建物であり、礎石建物ではない。類例については調べきれておらず、掘立柱建物の一部分にでも瓦を葺く行為が行われたのか否かについては不明ではあるが、瓦普及の周縁の一様相として捉えられるのではないかという可能性を指摘しておきたい。また、耐久性に難が見られる土師質の埴を根石として使用したのかもやや疑問ではあるが、類例からはその可能性を指摘しておく。

この掘立柱建物の性格であるが、瓦の出土から、まず公的施設や仏教関連施設の可能性が考えられる。しかし、瓦以外に積極的な仏教的な遺物はもとより状況証拠的な遺物、例えば鉄鉢型の須恵器のような遺物も、当遺跡において見られない。図39-258のような蔵骨器にも使用される土器をそれに該当させるにしても、少ないといえる。当該期中河内における仏教の普及状況については、調べきれておらず積極的な言及は適わないのだが、駒井氏〔駒井2000a〕に拠れば、奈良・平安時代前期の若江郡内の村落は「複数の小ブロックからなり、最も有力と考えられる小ブロックに飛鳥・白鳳寺院が建立されたが、」〔その他の小ブロックにも瓦葺きの小規模な仏教施設が作れたらしい〕〔：233〕と関東地方の成果を援用し言及されており、当遺跡の掘立柱建物もその一例として位置づけられる可能性がある。なお、当調査区で条里制に伴う遺構が見られるのは、掘立柱建物が見られる面以降である。一部の溝は掘立柱建物以前に遡る可能性も考えられるが、その多くは、掘立柱建物併行期以降である。なお、当調査区部分は

当該期の水田は見られないものの、水田遺跡で見られる条里開発に伴うとされる、土器埋納ピットと思しき遺構（溝207中検出）もあり、その時期は掘立柱建物の時期とほぼ同時期である。このことから、条里制開発に伴い建設された施設の可能性も考えられる。当時の政策は仏教的側面を多く有していたであろうから、これらの可能性には因果関係があるものと考えられる。また、当遺跡は若江郡錦織郷に属すると考えられるが、図39-250の「村主」銘墨書土器は、そのような中でのみ丸瓦や埴と共に招来された可能性が考えられる。なお条里制と掘立柱建物の前後関係の妥当性については、周辺の調査成果を持って再論したい。なお、掘立柱建物は9世紀頃に廃絶したと推定したが、第4面埋土D類溝からは10世紀頃でもこの空間に対する意識があった可能性が考えられ、それが払拭されるのが12世紀後半以降であろう。

それでは郡内にこのような掘立柱建物がどの程度あったのだろうか。先述の駒井氏に拠れば、錦織郷には「若江寺跡と西郡廃寺という2つの古代寺院が存在」し、「若江郡衙の存在も想定」されることから、「若江郡の中心的ブロックであったことがうかがえる」〔：233〕という。郷内はさらに3つの小ブロックに区分されている。概ね各ブロックには現状で、2箇所程度ずつの掘立柱建物が存在したようである。当遺跡はこの小ブロックのうちのcブロック（瓜生堂遺跡一帯）に位置すると考えられるが、調査があまり行われなかった地域でもあり、そのブロックに一例を加えることになろう。なお、各調査地での掘立柱建物の棟数であるが、瓜生堂遺跡Bトレンチでは8世紀（中頃か）の掘立柱建物が7棟検出され、うち1棟が総柱であり、Cトレンチからは瓦の出土がある〔藤沢ほか1980〕。時期がやや古く、正方位でもないが、建物の密集度を考える上では参考になる。この他、瓜生堂上層遺跡では、8世紀末～10世紀頃の掘立柱建物が5棟検出され、うち1棟は総柱であるが、やはり正方位ではない。当遺跡と土器様相は類似するが瓦は見られず、逆に土馬や銭貨が見られる〔芋本1979〕。また萱振遺跡では8世紀後半の掘立柱建物10棟が検出され、単独で検出されたものが一棟以外は群になって検出され、うち1棟が総柱である。概ね正方位であるものが多いが、軸方向から3群に区分されている〔広瀬編1992〕。当遺跡の建物は9世紀前半であり、建て替えはあるものの総柱ではほぼ正方位を志向し、瓦や埴が見られ、やや離れて墨書土器も見られる。性格として倉以外の可能性を考えたが、単独での検出であり断定はできない。他遺跡の成果からは複数棟で構成されることが多く、北や南に建物群が展開する可能性が考えられる。その成果を待って、この掘立柱建物の性格、村落内における掘立柱建物の位置や遺物の分布域などを明らかにし、他遺跡との構成要素の比較などを行いたい。なお、現状では、駒井氏の成果を援用し、この掘立柱建物を小規模な仏教施設としての可能性を考えておく。また、その村落内における空間的位置は、今回の検出箇所が微高地の末端であったことから、村はずれだった可能性を考えておきたい。また、掘立柱建物付近で耕作痕と思われる溝が多く検出されていることから、この掘立柱建物は隔絶した存在ではなかったと思われる。それは、水溜め状遺構（土坑252）が使用段階においては一般的な遺構であったと考えられることから窺い知れる。

このように、第4面およびそのベース面の調査から、当調査区における条里開発が8世紀後半頃であり、11世紀の様相が不明瞭ながら13世紀まで長期間にわたり地表面であったと思われる。また、古代の掘立柱建物が9世紀段階で廃絶し、以降に継続しないという点では、古代の集落は10世紀には廃絶するという従来どおり〔広瀬1989〕の調査成果であったといえるが、集落の規模や掘立柱建物の性格、建物と条里制の前後関係、条里制のより正確な施工時期などについては今後の検討課題である。

第3節 古墳時代

古墳時代の面は、西半の一部で確認された第5-0面、および第5-0層の土壌化層を除去し検出される第5-0b面と、第5面、および第5層の土壌化層を除去し検出される第5b面である。遺構は、微高地上に位置する東半東側でもっとも密に検出され、その時期は後述するように、前期後半を中心とする。ただし、これ以外にも少ないながら、古墳時代各時期の遺物の出土が見られることから、概ね古墳時代全般にわたり当地において様々な活動がなされたと考えられる。

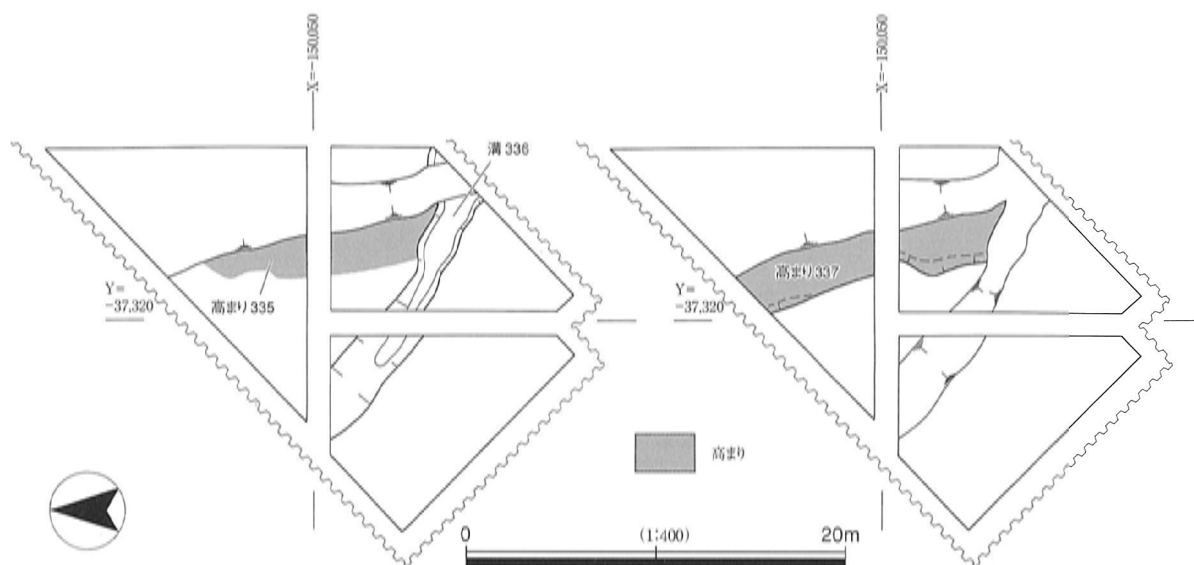


図43 第5-0面・第5-0b面 平面図 (S=1/400)

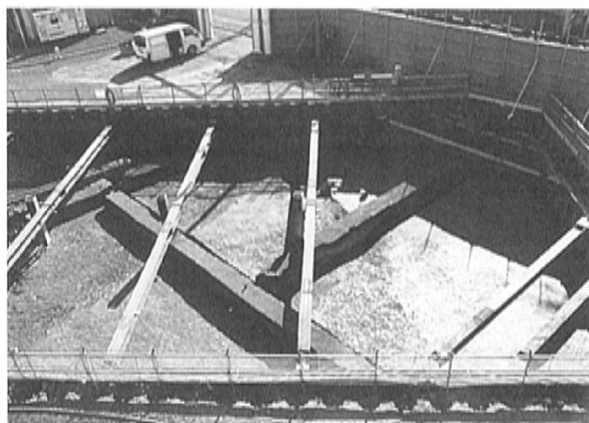


写真63 第5-0面 (北西から)



写真64 第5-0b面 (南東から)

第5-0面 (図43、写真63) 西半西側の一部で、第4b層を除去し検出された面である。当面を構成する第5-0層は暗青灰色の粘土～シルトであるが、全体的に土壌化は弱い。調査区南端でのみ、攪拌を受けたやや土壌化の強い部分が見られた。面の高さはT.P.2.03～2.23mで、南側が若干高く、北へ向かい下る地形である。検出された遺構は第5-0面検出範囲が狭いこともあり、高まりおよび溝のみである。

高まり 高まり335は明瞭な高まりとしては確認されなかったものの、第5-0層直上に、同層土壌化層に細砂が混じり、砂質ながら粘性の強く、鉄分等の沈着が斑紋状に見られる、盛土と考えられる層が見られた。ただし、図5の断面図部分では見られない。なお、高まり東側は第4b層により削平され

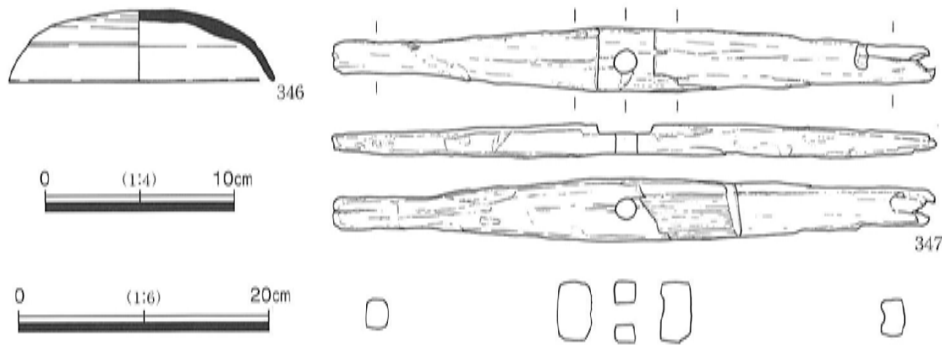


図44 第5-0層・第5-0b層出土遺物

ており、この高まりは本来、東側へ延長していたと考えられる。なお、南側に関しては後述する溝336が検出されており、高まりの南端部分にあたると思われる。

溝 溝336は弱く窪んでいる部分であり、埋土は第4b層の粗粒の堆積物で、溝底では第5-0層が削平されている箇所が多かったものの、第5-0層が落ち込んでいたため、この部分が溝であるとの判断をした。溝底のレベルは北が高く南が低いため、北から南への流れが想定される。溝というにはやや浅い感もあるが、この部分が低かったために第4b層でも粗粒の堆積物がこの部分を襲ったと考えられる。出土遺物はない。

出土遺物 (図44) 第5-0層から出土した遺物は極めて少なく、時期不明の土師器2片と図化した須恵器1点が出土しているのみである。346は、調査区南端の第5-0層の土壌化が強い部分で、第5-0面精査中に出土した須恵器坏蓋である。稜が退化しており、TK209頃と考えられ、7世紀前半。

時期 出土遺物が上述の一点のみであるが、下層出土遺物が概ねTK209以前であることから、この遺物を積極的に評価し、当面の時期を7世紀前半と想定しておく。

第5-0b面 (図43、写真64) 先述の土壌化層である第5-0層を除去し検出されるのが、第5-0b面である。面を構成する第5-0層は南側では砂質だが、北側では粘質。検出された遺構は高まりのみである。

高まり 高まり337部分は赤褐色のマンガンの斑紋が多く見られ、全体的に酸化している。当面では、上面に比べ、高まりの輪郭がはっきりと検出されたが、第5b層が盛り上がり、自然地形と考えられる。第5-0面ではこの地形を利用して盛土を施したのだろう。

出土遺物 (図44) 347は第5-0b層から出土した唯一の遺物で、木製品である。片方の端部が若干欠損するが、長さ47.6cm、幅48cm。中央部分が窪み、穿孔が見られ、紡織具の「^か棹の腕」もしくは「糸巻きの支え」と考えられる。樹種はヒノキ。同様の大きさの棹は山形県西沼田遺跡の6世紀の例[奈良国立文化財研究所 1993: fig93-11]が見られるが、本資料に比べ丸みを帯び、中央部の形態が異なる。扁平気味で中央部に窪み、穿孔が見られる点では糸巻きの支えの可能性が高く、中央部の幅が類似する資料は兵庫県播磨長越遺跡で見られるが、時期が古く(弥生時代末~4世紀)、長く、中央部の加工がシャープであり、穿孔が端部方向に見られる点で異なる。また、6世紀の布留遺跡例[同: PL96-09605]も中央部の形状が異なる。

時期 出土遺物もほとんどなく、時期の判断は困難だが、先述の第5-0層の遺物および、後述する下層の遺物から第5-0b層の堆積は7世紀初頭と考えられ、直後に小規模な活動が行われた(第5-0面段階)ものの、再び湿地化し、最終的に粗粒の堆積物が襲ったものと考えられる。

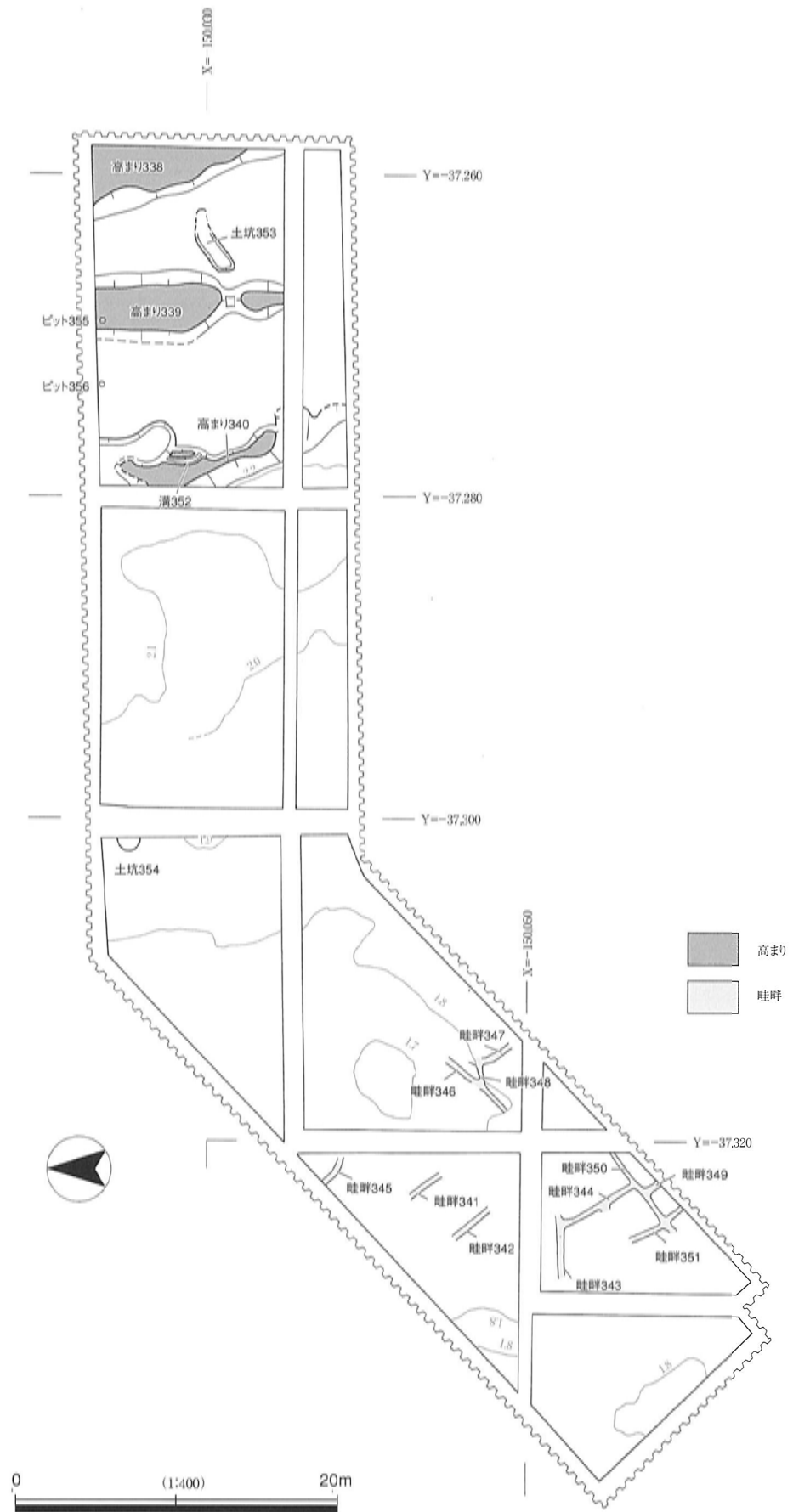


図45 第5面 平面図 (S=1/400)

第5面 (図45) 先述の第5-0層・第5-0b層が存在する箇所を除くと、第4b層を除去し検出されるのが第5面である。調査区の大部分は厚い氾濫堆積層に覆われていた。遺構が密に検出されたのは、調査区東半東側で、この部分には後述する第5b層の厚い堆積が見られる。この遺構は、居住に伴うものと考えられ、時期の詳細は後述するが、大まかには古墳時代前期を中心とする。なお、この東半東側以外では、生産に関する遺構の検出が見られた。以下では、東半東側の「微高地上の遺構」とそれ以外の「低まり部分の遺構」に分けて、記す。

低まり部分の遺構 低まり部分は、微高地すぐ西側では比較的傾斜が急であり、顕著な遺構は見られないが、さらに西側の傾斜が緩やかな部分では畦畔が検出されており、これ以外にも土坑も見られる。

畦畔 畦畔は西半で確認されたが、いずれも高まりとしての検出はできず、擬似畦畔としての検出である(写真65・66)。また、畦畔が検出された箇所の一部では、第5層がいずれもシルトながらも、上からやや粘質な層(第5①層、この上面が第5面)、やや砂質な層(第5②層)、やや粘質な層(第5③層)の3層に細分されたため、各層ごとの掘削を行った。その結果、第5②層上面でも擬似畦畔が検出された。各畦畔のうち、畦畔341～344は第5①層直上での検出、それ以外の畦畔345～351は第5②層直上での検出である。ただし、図45では、それらを一括して掲載している。各畦畔に囲まれた水田は一部不定形なものも見られ、複数時期の畦畔が擬似畦畔として検出されているものと考えられる。畦畔の方位には、畦畔343・348のような東西の方位にほぼ沿うものとそれ以外の45°振るものの2種類が見られた。仮に前者を除けば、方形の水田が推定され、志紀遺跡で検出されている古墳時代水田[本間・鹿野編2002]と「方形」である点で類似する。ただし、水田が推定復元できる、畦畔344・350・351で囲まれる区画は約2.0m×3.0m四方であり、極めて小規模である。このことから、45°振る畦畔も簡単に全てが同時期とは考えがたく、これらの畦畔もやはり複数の時期を含むものと考えられる。

なお、この第5層の細分は西半で見られたのみであり、東半では確認されなかった。これは、東半東側の微高地から急激に地形が下り、徐々に西に向かって低まる地形に起因するものと考えられ、その低まり部分には複数回の堆積があったものと思われる。この水田域は西側に展開することが予想され、今後調査区西側で調査が行われることがあれば、この時期の複数の水田遺構面が検出されるだろう。

土坑 先述の畦畔検出部分から東側の低まり部分ではほとんど遺構は見られなかったものの、ちょうど高まり部分と畦畔検出部分の中間で土坑354(図46、写真67)が検出された。東側を筋堀に切られているが、直径約1.2mの円形と考えられる。埋土はシルトブロックが多く混じる粗砂であり、埋土の状況は第3-4面や第4面で検出された、土取り用の土坑に類似し、この土坑の底部も第5b層の砂層に



写真65 第5面擬似畦畔検出状況（北から）

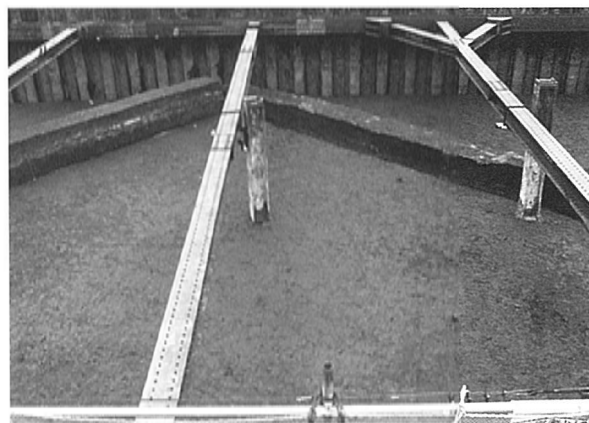


写真66 第5面擬似畦畔検出状況（北西から）

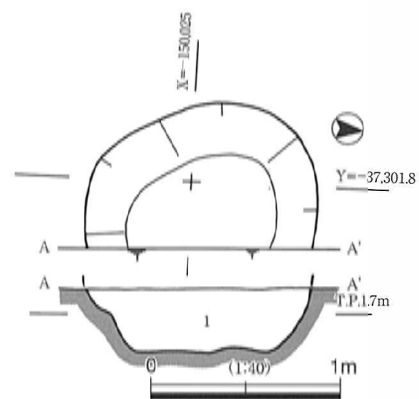
至っていることから、同様の性格の遺構と考えられる。ただし、当面の上層には分厚いb層が見られ、上述の土坑と同時期の掘削の可能性は考えられない。しかし、当面に伴うものと考えても、この遺構に対応する遺構の検出も見られず、やや違和感のある遺構となる。この土坑は直上が砂層で覆われるものの、周辺の第5面直上にはシルトの堆積が見られる部分もあり、本来堆積していたシルトが砂層により抉られた可能性が考えられる。また、第5-0面が部分的ながら見られることから第5面と第4面の間にも何らかの活動が行われていた可能性が高い。これらから、第5面廃絶後の氾濫堆積物が当地を襲い湿地化した段階に、土壌回復を狙って掘削された、第5-0面段階掘削の土坑であるが、その後、粗粒の第4b層の堆積により掘削面が抉られてしまい第5面で検出されたと推定しておく。なお、遺物の出土はない。

微高地上の遺構 調査区東半東側の微高地上では高まり、溝、土坑、ピットが検出された。この微高地は第5b層により形成されたものであり、その粒度が粗い部分が多いことから、この部分の第5層は砂質である。なお、この微高地を形成した第5b層の砂層は、調査区東端でも比較的分厚く堆積しており(図9)、この微高地はさらに東へと延びているものと考えられる。

高まり 微高地上では3つの高まりが検出された。いずれもさほど大規模なものではないが、高まりを境に比較的明瞭なレベル差が見られる。なお、これらの高まりは、各高まりの詳細な断面観察を怠ったことや、第5層が強く黒色を呈することから、明確な盛土層は確認されなかったものの、土壌化層を除去した第5b層でこの部分が高まっていたこともなく、自然地形の反映ではないことから盛土による高まりと考えておく。**高まり338**は東側を側溝に切られ全体像はうかがえないが、北西-南東の軸を持つ。**高まり339**は2つの島状の高まりにより形成され、中間部分が低まる。以下では、高まり339北・南とそれぞれ称する。高まり339北はその北側が側溝に切られるが、北側へすぐに収束するような状況は看取されなかった。また、高まり339南は筋堀に切られるが、南側への収束傾向が見られ、筋堀以南では見られないことから、高まりの南端は筋堀以北であると推定される。高まり339北を境にした東西では、0.1m程のレベル差が見られ、西側が高く東側が低い。高まり339南でも、境にして同様のレベル差が見られるが、高まり339以南ではさほど明瞭なレベル差は見られない。高まり339南側から西側にかけては、明瞭なレベル差はなく、同東側では南から北への傾斜が見られる。**高まり340**は微高地の西縁辺に見られるが、調査区南側では見られない。ちょうど高まり340南端では、肩部が一部東側へ突出した形状となっている。これは、もともとやや東に突出気味ではあったものが、洪水によりさらに抉られたもので、同箇所以南も洪水により肩部の削平が見られた(図45点線部分)。このことから、本来は



写真67 土坑354断面(東から)



1 5Y6/2 灰オリーブ色 粗砂 (7.5Y3/1 オリーブ黒色のこぼし大シルトブロック混じり)

図46 土坑354 平・断面図 (S=1/40)

この高まりは一部で途切れるものの、南側まで延長していたものと考えられ、この高まり340は西側低まり部分への水流出防止の機能を有していたと考えられる。なお、この高まり中からは、図47-372の高坏が出土している。遺物については後述する。

これらの高まりは水周りを規制するための施設と考えられるが、それぞれ一部が検出されたのみであり、微高地の広がりも不明である。この想定どおりであったとしても、結果その水が何に使用されたのかは水の行く先が不明であり、高まりの性格づけは難しい。しかし、居住域に関する高まりと考えるよりは、耕作に関すると考えたほうが妥当であるように思える。僅かながらに見られるレベル差から南から北への水の流れが想定され、微高地が北西端でやや北東への収束傾向が見られるが、北側に何らかの耕作に関する遺構がある可能性が考えられる。また、検出されなかったものの、調査区内にも畦畔等の地形を小さく区分する施設があったのかもしれない。

溝 高まり340上では溝352が検出された。検出範囲が狭いこともあるが、溝底では明確なレベル差は見られなかったものの、溝の行方から南から北への流れが想定される。埋土は粗砂混じり粘質シルトで、第4b層とも考えられそうだが、それよりもやや暗い色調であることや、掘削箇所などから当面に伴う遺構と考えられる。なお、この溝は上述の高まり340上の掘削であり、この高まり以東で必要以上の水が供給された際の排水用の溝としての機能を有していたと考えられる。出土遺物はない。

土坑 高まり338・339間では土坑353が検出された。東側の一部を第4b面の土坑252に切られるが、概ね全体の形状を推定できる。ただし、第4層を埋土とする下面遺構であり、本来は上面で検出すべき遺構であったが、当面での検出となった。本来の帰属は第4面である。この土坑からは、須恵器坏蓋片1点、布留式甕片を含む土師器片9点が出土した。いずれも図化は不可能だった。

ピット 高まり339上ではピット355が検出された。また、高まり339西側ではピット356が検出された。いずれも、土坑353同様の第4層下面遺構であり、本来の帰属は第4面段階である。なお、ピット356からは須恵器片7点、土師器片1点が出土し、須恵器にはTK43（6世紀後半）の坏蓋を含むが混入であろう。

第5面を簡単に整理しておく。低まり西側の比較的平坦地では、擬似ながら畦畔が検出され、少なくとも第5面のある段階には水田が営まれていたことが明らかである。一方東側微高地上では、直接的に水田と想定される遺構の検出はないが、水周りを規制すると推定される高まりの検出から水田域が近在する可能性が示唆できる。以上から想定される第5面の最終景観は、斜面地を除く微高地上と低まりの生産域としての利用というものである。

出土遺物（図47） 第5層からは、破片の概数で計約1266点の遺物が出土した。若干黒色土器2点や律令須恵器1点などの混入が見られたものの、そのほとんどは土師器であり1121点出土した。なお、そのほとんどは布留式、少なくとも律令土師器以前の範疇に収まるものである。他に、弥生土器が92点、須恵器が48点、石が2点である。出土地区では、総破片数のうち、7割にあたる896点が調査区東半東側の微高地部分からの出土であり、そのうちの9割が律令土師器以前の土師器である。概括的には、東側ほど遺物が多く、その時期幅は弥生土器V様式から布留式新相であり、西側では遺物の総数が少ないものの、弥生土器II様式が比較的まとまって見られた。この西側の遺物は、後述する下層の反映と考えられ、その巻き上げられた遺物であろう。このうち図化したのが図47の33点である。

348～352は須恵器坏蓋。いずれも稜が退化している。348・349は比較的口径が大きく、MT15～TK10で、6世紀前半。350はTK43頃で6世紀後半、351はTK209頃で7世紀前半。352は小振り稜が残存

し、TK47頃で6世紀初頭。**353**は須恵器坏身。TK47頃で6世紀初頭。これらの須恵器は、西半の低まり部分出土の352以外は微高地上からの出土で、微高地の第5面の最も新しい時期を示すと考えられる。

354~380は、土師器もしくは弥生土器。**354**は布留式甕。端部は口縁部内面のナメハケ調整で若干肥厚するが顕著ではない。口縁部は直口気味であり、新しい様相が窺える。内面は頸部まで削り上げない左回りケズリ。布留式後半。**355**は布留式甕。内外面ともに接合痕が見られる粗雑な作りである。調整は不明瞭だが、内面にケズリ調整は見られない。布留式後半。**356**は布留式甕。端部の肥厚方法は354と同様にハケ調整による。頸部のナデは弱く、頸部直上の明瞭な屈曲は見られない。内面の削りは右回り。比較的古相である。**357**は甕。口縁部外面に縦方向のハケが見られ、結果的に端部が外方に摘み出すような形態となる。口縁部は外反気味で、内面には横方向のハケが見られ、体部内面は左回りのケズリで、頸部まで削り上げる。布留式後半。**358**は複合口縁甕。1次口縁と2次口縁の境目に強い横ナデを施し窪む。布留式後半。**359**は複合口縁甕。口縁部外面にはおそらく2条一単位の縦方向の貼り付け突帯が見られる。**360**は布留式有段屈曲鉢。やや小振りだが浅く、口縁が大きく開く新相。布留式前半(新相)。**361**は粗製小型丸底壺。口縁内面のハケは粗い。**362**は弥生土器V様式壺。全体的に摩滅著しい。**363**は弥生土器V様式甕。**364**は台付き鉢。**365**は弥生土器中期甕で混入。**366**~**379**は布留式高杯。**366**~**369**は坏部。**366**は無稜直口高杯で、内面に横ミガキが見られるが、全体的に摩滅著しい。**367**は厚手の粗製無稜直口高杯。内面に横ハケが残り、下部には指頭圧痕が見られる。外面は擬口縁部分に接合用ハケが見られる。**366**・**367**とも辻編年2段階(布留式後半、TG232併行段階)[辻1999、以下文中の辻編年表記は同文献に拠る]。**368**は無稜外反高杯。**369**は**367**より粗製な無稜外反高杯。坏部下半に指頭圧痕が残存する。**368**・**369**とも辻編年1か2段階。**370**~**379**は脚部。**370**は比較的シャープな作りで、脚柱部はメントリ気味である。同内面は下半の一部にケズリが見られる。**371**は**370**同様、外面はメントリを施すが一部には横ミガキと思われる調整も見られる。内面はケズリ。**370**・**371**とも辻編年3段階(TK73・TK216併行段階)と思われるが、**370**のほう若干古相を呈する。**372**は全体的に鈍い作りであり、内面にはシボリ目が残存。辻編年4段階(TK208~47併行段階)か。**373**は外面縦方向の粗い板ナデ、脚柱部内面は全面ケズリ。**374**は外面ハケ、脚柱部内面は上半シボリ目で全面ケズリ。**375**は外面脚柱部縦ハケ、裾部は横ハケ、内面脚柱部は全面ケズリ。**373**~**375**は辻編年2~3段階か。**376**は外面メントリ後横ミガキ、内面はケズリで上端にはシボリ目。**377**は外面縦ハケ後横ミガキ、内面はナデ。いずれも布留式前半。**378**は外面縦ハケ、内面ケズリだが最上部まで至らない。辻編年3段階か。**379**は外面ややメントリ気味で、内面シボリ目。辻編年4段階か。これらの高杯のうち、**366**・**367**・**368**・**374**・**375**はほぼ同一箇所から集中して出土したもので、後述する第5b面溝**376**付近に位置する。これらが溝に伴うものか否かについては後述するが、これら以外の高杯も**372**・**376**・**377**を除き、比較的近接して出土している。なお、以上の高杯は**376**・**377**の布留式前半資料を除き、布留式後半に属するが、ややバリエーションが見られる。**380**は脚台Ⅳ式[広瀬1978]の製塩土器か。外面にタタキ調整は見られず指頭圧痕が見られ、内面は板状工具痕が残る。

以上の遺物は、一部弥生土器を含むものの、主要な遺物の時期は布留式新相であり、その後少ないながらも7世紀前半までの遺物が見られる。図化遺物のうち、**352**・**355**・**363**・**377**以外は全て微高地上からの出土であるが、その多くは本来、第5b面の遺構に伴うものであろう。その中で**372**の高杯は盛土の時期を示すものであると言える。また、上限を示す遺物として、**362**・**363**の弥生V様式土器が挙げられる。第5b層からも同時期および庄内期の遺物は出土するが、いずれも微高地上に限定される。この

ことから、これらの資料は上限をあらわす資料として考えることができる。

また、布留式新相の遺物は須恵器出現以降のそれであるが、併行段階の須恵器は見られない。概ね、土師器がなくなる頃に初めて、須恵器が見られるようになる。これは一般的な現象で、当遺跡において布留式の見られる最終段階が、辻編年4段階の「須恵器の供膳具が急速に普及するものの、供膳形態の土師器が数多く存在する段階」で、同5段階の「土師器の高杯の急激な減少」[辻1999]に符合するものといえる。

時期 以上の出土遺物および、下層の第5b層および同面遺構出土遺物の時期から、当面は弥生時代後期以降7世紀前半まで地表面であったと考えられる。ただし、弥生時代後期から庄内式にかけての遺物はほとんど見られず、安定的な利用は布留式以降であり、この時期は第5b面の遺構が該当する。それらの遺構廃絶後、第5面東端の景観に現れる盛土が6世紀初頭前後に築かれ、以後100年ほど比較的安定した時期が続いたのであろう。

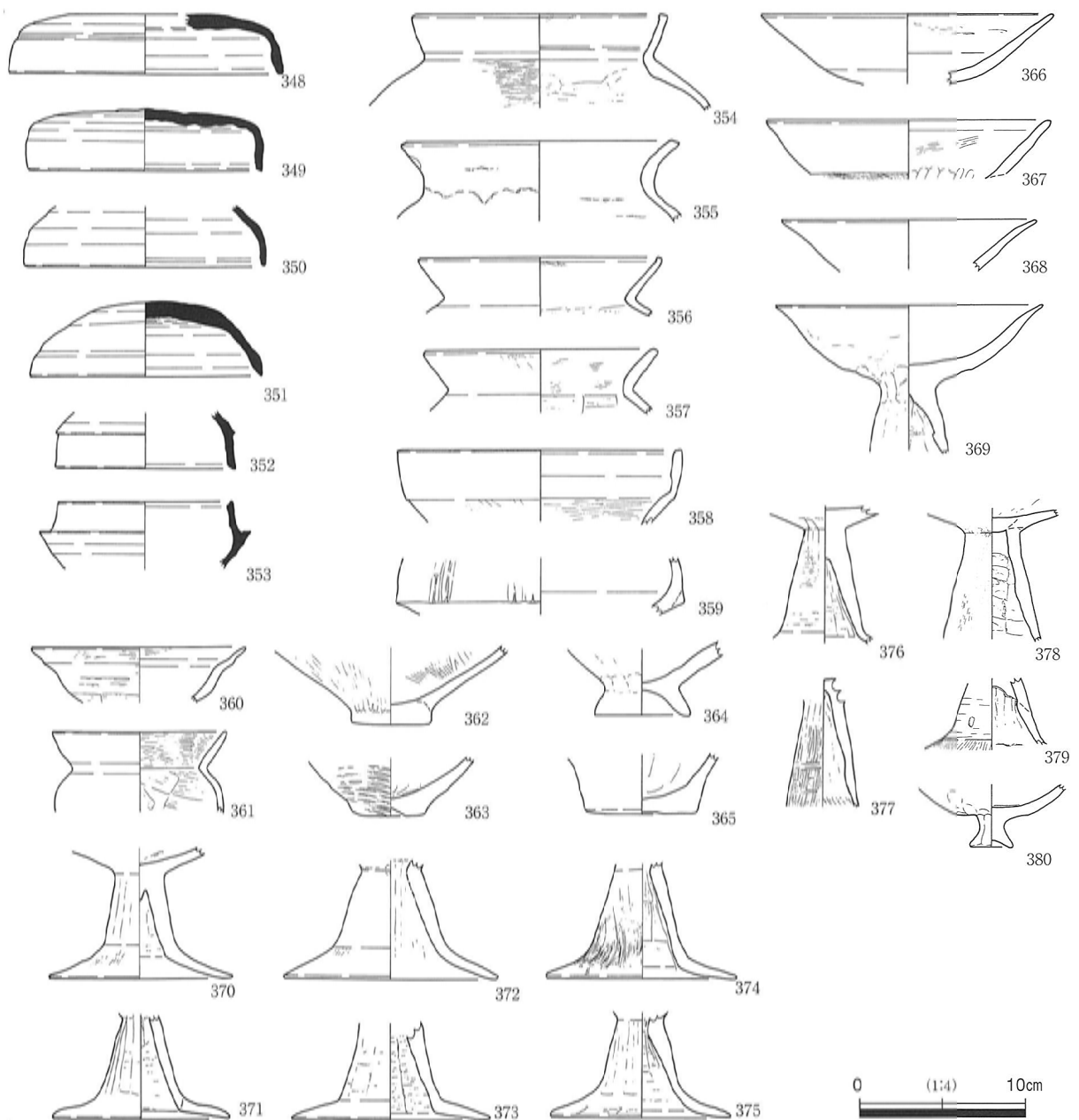


図47 第5層 出土遺物

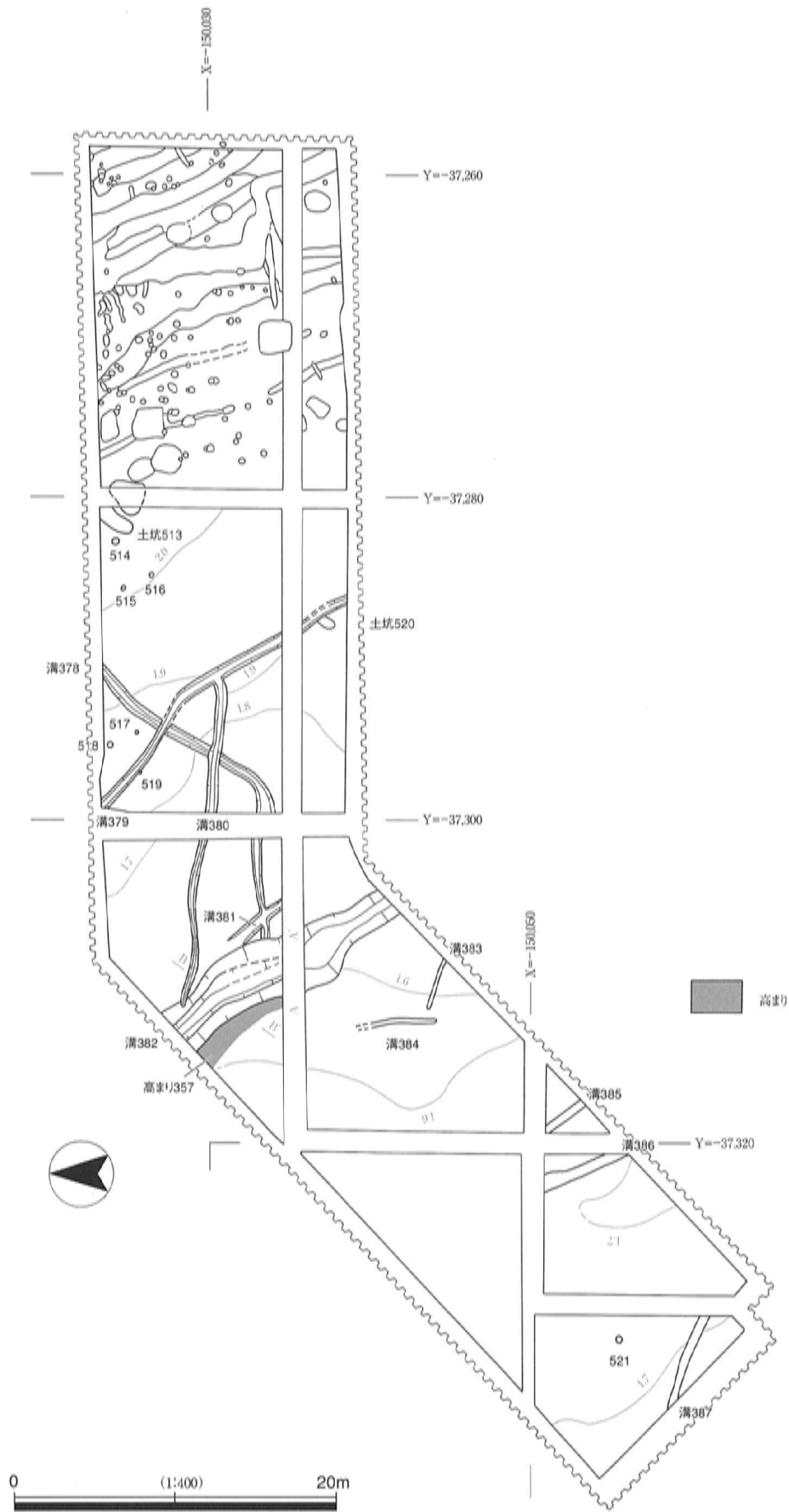


图48 第5 b面 平面图 (S=1/400)

第5 b面 (図48) 第5層の土壤化層を除去し検出されるのが、第5 b面である。調査区東半東側は、第5面でも記したように微高地にあたり、溝、土坑、ピットなどの遺構が密に検出された。一方微高地以西では、耕作に伴うと考えられる溝やピット、高まりなどが検出された。ここでは、第5面同様、「低まり部分の遺構」と「微高地上の遺構」に分けて報告する。

低まり部分の遺構 低まり部分では、第5面で擬似畦畔が検出されたが、それらに関すると考えられる溝が数条検出された。比較的大規模なものは溝382の1条のみであるが、これに接続する溝やそれ以外の溝が検出された。

溝 調査区西半の東側では溝382 (図50、写真68) が検出された。この溝は、幅1.9~3.8m、深さ0.45mで、埋土は粘土~極細砂。溝底のレベルは中央部がやや低いが、概ね北から南へ低まる。ただし、南側は埋没の際挟れた可能性もあり、溝全体が検出されなかったことから、これが妥当か否かは不明である。なお、この溝は調査区内で最も低い場所での検出であり、この溝に接続する溝も見られることから、当調査区内では排水路の機能を有していたと考えられる。なお、溝382からは布留式と思われる破片1点、弥生土器破片31点が出土し、弥生土器のほとんどは後期のものである。図49-381は、そのうちの一点で、V様式甕。口縁叩き出し手法を用い、口縁は大きく外反する。出土遺物に布留式と思われる破片が見られることから、溝の時期は布留式前半と考えられる。



図49 溝382 出土遺物

溝378は、地形に直交して掘削されている溝で、幅0.5~1.1m、深さ4~16cm。埋土は第5層の緑灰色の粘土~シルトだが、この部分の第5層は全体的に土壤化が弱い。北東が調査区外にあたるが、延長が微高地にあたりと考えられ、微高地からの排水用の溝であろう。遺物の出土はない。溝379は、地形に平行する溝で、幅0.3~0.8m、深さ0.15m。埋土は溝378同様。遺物の出土はない。溝380 (図50) は溝379から派生する溝で、地形に斜交し、溝382に接続する。幅0.4~0.7m、深さ0.24m。出土遺

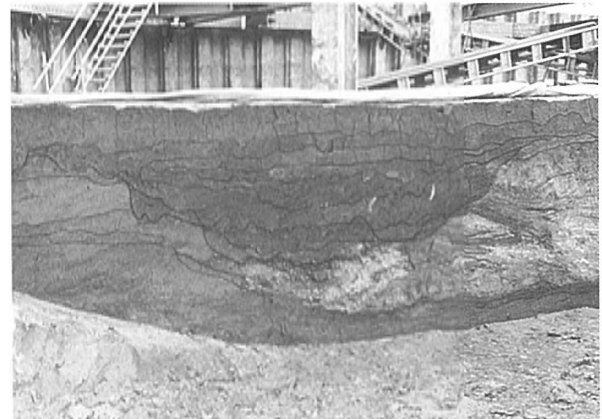


写真68 溝382断面 (南から)

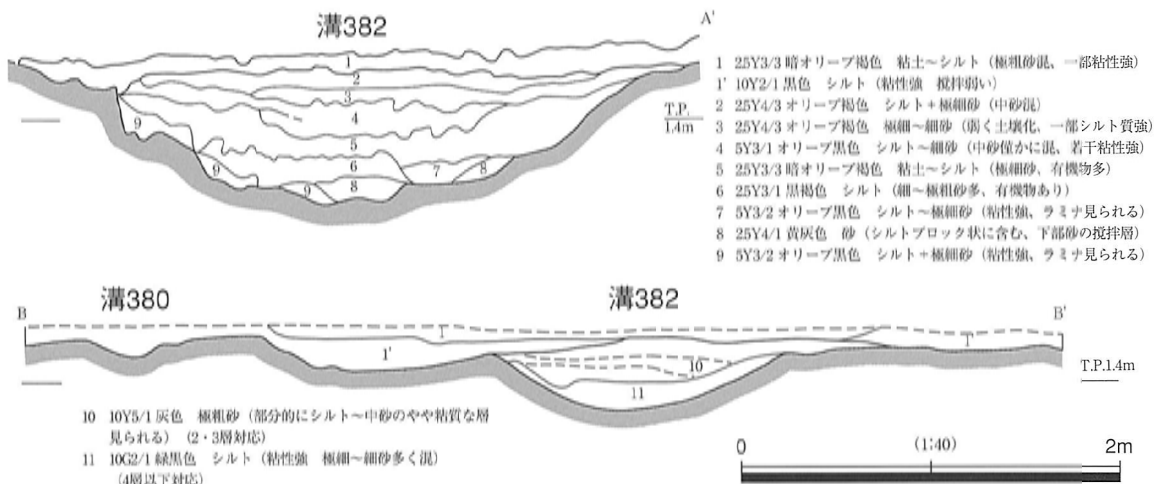


図50 溝380・382 断面図 (S=1/40)

物はない。なお、溝379・380は溝378を切る。溝381は溝378に交差し、溝382とほぼ平行に検出されたがX=-150.035以南では見られず、溝378との切りあいも埋土が類似することから、その有無も含めて不明である。ただし、溝381のほうが浅く、新しい段階の掘削の可能性も考えられる。遺物の出土はない。これら、溝382以東の各溝は、後述する溝382以西の各溝よりも明確に検出された。また、この部分は地形からは耕作が不可能とも言い切れないが、上面で耕作に関する遺構もなく、溝381を除き、これらの溝を耕作に直接関係する溝とするよりも、微高地との関連で、微高地からの排水溝と考えておきたい。また、その想定が可能であれば、微高地はさらに北と南に延長して存在することが想定される。

溝383・384は、痕跡程度で検出された溝で、耕作痕跡と考えられる。なお、溝384付近は特に低まっている箇所である。この溝は北へ向かい不明瞭になるが、延長部分には高まりが存在し、本来溝382と平行して掘削されていた可能性が考えられる。溝385はその掘削箇所が下面以降の高まり部分にあたり、この面においても若干微高地状を呈する。高まりに平行する溝である。この部分は微高地にあたることから、第5面でも畦畔の検出はなく、第5面畦畔350が取り付く先にあたる。現状では、何らかの耕作に関する溝と考えておく。遺物は、土師器片が1点出土しているが、時期不明。溝386はその高まりの縁辺に掘削されている溝である。この溝も、溝385同様の耕作に関する溝と考えられる。溝384～386はいずれも北へ向かい不明瞭になる。溝387は地形にやや斜交する溝。性格は不明。出土遺物はない。

高まり 溝382の西側では高まり357が検出された。高まりは痕跡での検出であり、高さはほとんどない。この部分は暗緑色を呈していた。この高まりは、西側からの水の流入防止機能があったものと考えられる。溝382西側全域で見られたわけではないが、高まりが検出された箇所はやや低まった部分の北延長にあたり、特に必要であったのだろう。高まり357南東の高まりが見られない部分はもともとやや高まった部分にあたり、高まりを構築する必要がなかったのかもしれない。

ピット・土坑 ピット517・518は溝378・379間で検出された。ピット519、土坑520は溝379に切られる。土坑521は溝387北側で検出された。ピット519で布留式甕と思われる小片が1点出土した以外は、いずれの遺構からも遺物の出土はない。また、いずれのピット、土坑とも埋土は第5層であり、第5層下面遺構である。遺構の掘削意図は遺物の出土もほとんどなく、さほどの群もなさないことから不明である。しかし、これらの遺構の分布が調査区の東半に限られ、僅かに出土する遺物が布留式であることから、東半東側の遺構密集域に関する遺構の可能性が高いと考えられる。なお、T.P.2.0m以上に位置する、土坑513およびその付近に見られる土坑514、ピット515・516は微高地上の遺構として後述する。

微高地上の遺構 微高地部分の第5層は強く土壌化し、明瞭に黒色を呈し、比較的分厚い堆積であった。以下の遺構は、この黒色土壌化層を除去し、検出されたものである。遺構は、溝、土坑、ピットであり、微高地上にまんべんなく見られるものの、溝は東側にピットは北西側に集中する傾向が若干見られた。また、南側は若干遺構の密度が粗となる。

遺構の埋土は下面遺構であることから、いずれも第5層に類似するものとなるが、若干の差異が見られ、大きく4種類に区分された。なお、色調はいずれも強く黒色を呈する。

A類：粗～極粗砂混じりの粘質シルトで、粘性が強いもの。

B類：A類と類似するものの、第5層のブロックが明瞭に混じるもの。

C類：A類と類似するものの、砂がほとんど混じらないもの。

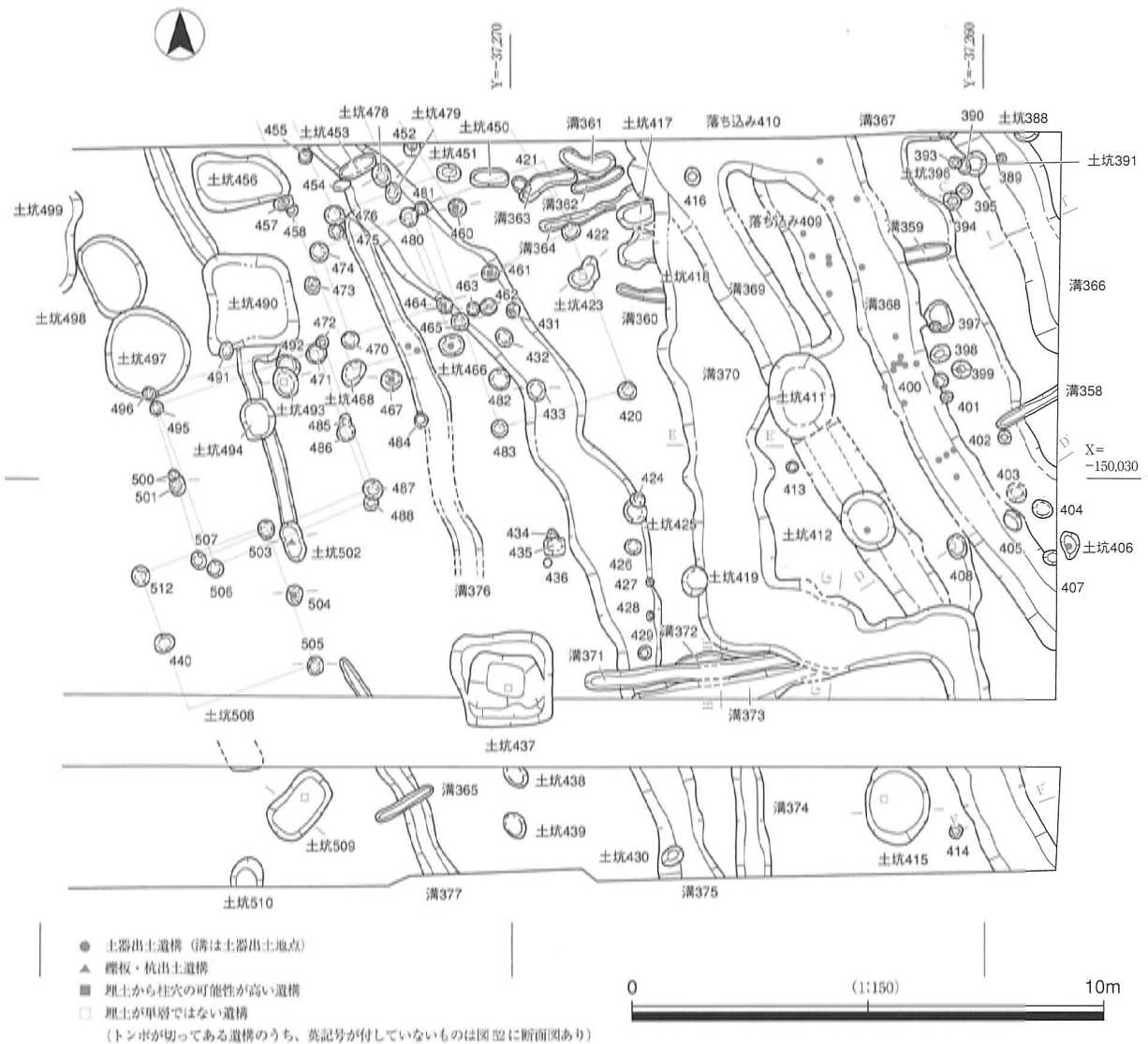


図51 第5 b面 東端遺構集中部分 平面拡大図 (S=1/150)

D類：色調がやや淡く、褐色気味であり、粗砂混じりの砂質シルト。

以下では、以上の区分により記載する。なお、浅いながらも複数層の埋土で構成される遺構や、深度が深く多くの層で構成される遺構は別箇に記してある。

溝 溝の多くは、北西-南東方向の掘削であり、平行して見られる。先述のように、東側に集中する傾向が見られるが、それらは幅広の溝であり、西側では幅の細い溝が数条検出された。**溝358**は幅0.2m、深さ4cm。埋土D類。東側を側溝に切られ、溝367を切る。時期不明の土師器片が2点出土しているのみ。溝359は幅0.35m、深さ7cm。埋土A類。溝367を切る。溝368に接続するように検出されたが、埋土の差異が認識できず切りあいは不明。いずれも小片ながら土師器片10点が出土し、布留式小型器台や庄内式甕の破片を含むが巻き上げの可能性が高い。切りあいは布留式後半か。**溝360**は幅0.2m、深さ3cm。埋土D類。溝370に切られる。埋土は砂質シルト。遺物の出土はない。切りあいは布留式前半か。**溝361・362・363**はいずれも細長い土坑状で、幅0.2~0.4m、深さ2~7cm。埋土D類。いずれからも出土遺物はない。**溝364**は幅0.2m、深さ2~4cm。埋土D類。東側を溝370に切られる。遺物は布留式前半甕口縁部と思われる小片が一点出土しているのみ。**溝365**は幅0.2m、深さ4cm。埋土D類。溝377を切る。遺物は布留式前半甕を含む2点の土師器小片が出土しているのみ。

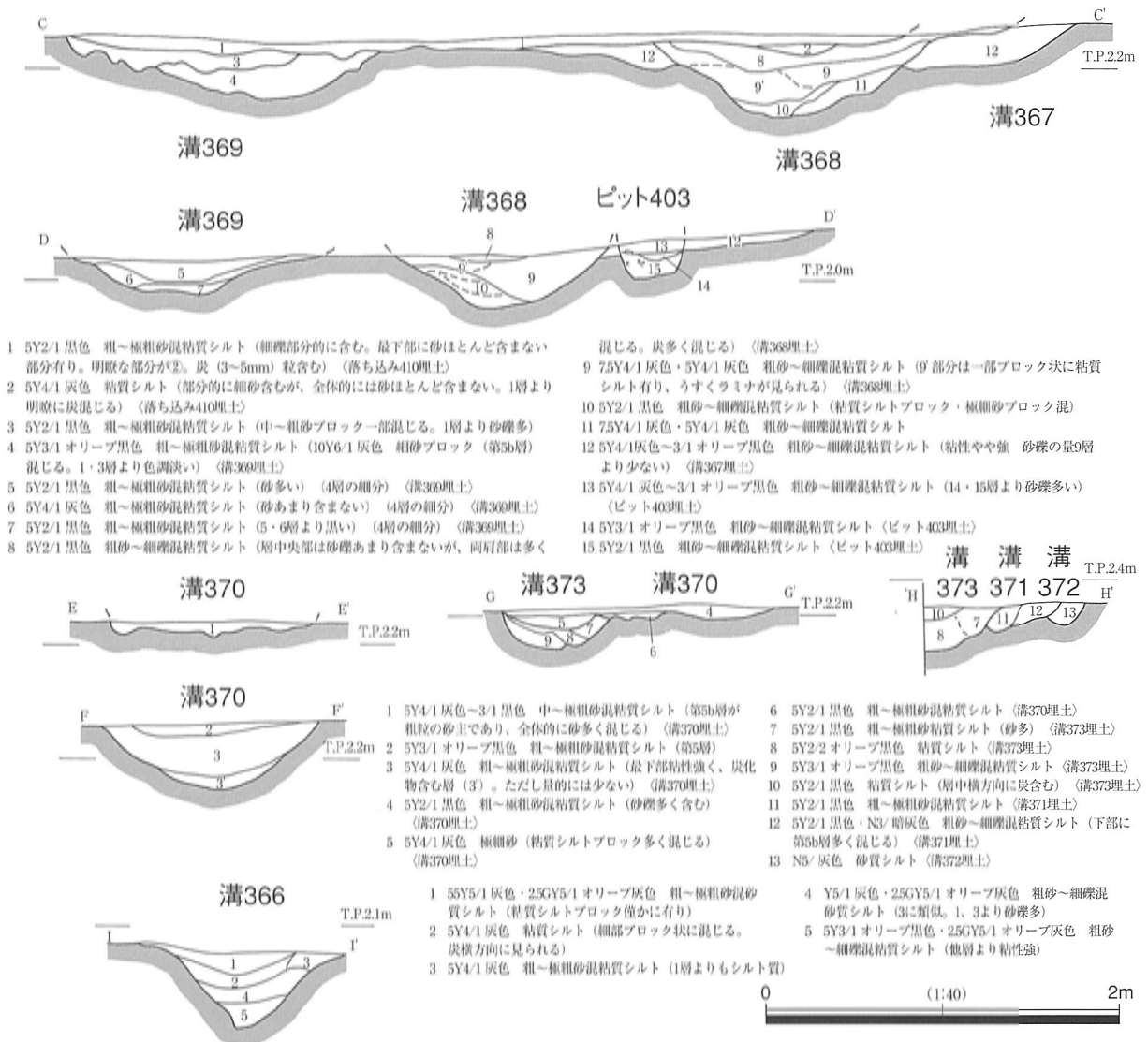


図52 溝366・367・368・369・370・371・372・373、落ち込み410、ピット403 断面図（S=1/40）

溝366（図52、写真76）は調査区北東端で検出された。埋土はいずれも色調は類似する砂質シルト～粘質シルト。検出範囲は狭いものの、溝底のレベルから南から北への流れが想定される。出土遺物は無い。溝367（図52、写真70）は溝368に切られる浅い落ち込みである。調査区北端で肩が東に広がり、この部分が落ち込み410である。埋土は、強く黒色を呈し、粘性が強い。溝底のレベル差から、南から北への流れが想定される。溝368（図52、写真70・72）は当面で最も明瞭な溝であり、溝367同様北で落ち込み410に接続する。埋土は、強く黒色を呈する粘質シルトで、第5b層の砂が混じる。溝底のレベル差から、南から北への流れが想定される。溝367と368、および後述する落ち込み409は遺構面の検出段階で同一の遺構と考えていたが、掘削を進め、断面を検討した結果、それぞれ別の遺構と判断された。そのため、当初遺物の取り上げにおいて両者が混在する結果になった。しかし、遺物の出土位置の検討と比較的残りが良い遺物の出土位置（図53）などから、遺物の多くは溝368に伴う可能性が高い。

溝367・368、落ち込み409出土遺物（図54） これらの遺構からは、破片の概数で計1194点の遺物が出土した。このうち、確実に溝367に伴う資料は159点、溝368に伴う資料は593点、落ち込み409に伴う資料は240点であり、溝368出土遺物が最も多い。総数の内訳は、須恵器が1点、土師器が1162点、弥生土器28点、石3点だが、須恵器は摩滅した破片であり、遺構廃絶後の混入と考えられる。また、

土師器のうち時期が大まかに判断できる遺物のほとんどが布留式の土器であり、弥生土器のそれは後期であるが図化できたものはない。

382は土師器鉢。口縁部形態は山陰で古墳時代初頭に見られるものに類似するが、山陰的要素が定着した段階以降の資料。体部外面には部分的に横ナデが残存するが、摩滅著しく不明瞭。内面は頸部やや下までケズリ。布留式後半。**383**～**387**は甕。**383**は布留系甕。外面は粗いハケ。体部は下部の斜めのち上部の縦ハケ。頸部には横ナデを施し、布留式に特有のやや屈曲する口縁下部形態を作り出している。口縁部外面にも縦ハケが見られる。内面は口縁部がやや左上がりの粗いハケ、体部は左回りのケズリ。ケズリは一部が頸部まで至るが、体部が完存しないため削り上げが目的であったかは不明。ただし、頸部下で止めようという意図は感じられない。なお、口縁部の横ハケが体部のケズリより後である。布留式前半か。**384**～**386**は典型的な布留式甕だが、口縁部にパリエーションが見られる。いずれも摩滅が著しいものの、肩部には横ハケが見られ、体部内面は頸部下までケズリ。**384**の口縁部は内湾し、端部がやや外方に摘みながら肥厚し、上部に面を持つ。内面はケズリと思われるが、砂粒の動きがほとんど見られない平滑な仕上げである。**385**は口縁部が内湾し、端部が肥厚するがやや摩滅気味。内面は右上がりにケズリ上げる。胎土が赤味を帯びる。**386**は口縁端部に強いナデを施し、屈曲が見られる。内面の削りは、胎土が精良なこともあり細かい。いずれも布留式前半古相。**387**は庄内系甕。口縁端部は僅かに摘み上げるが顕著ではないが、強い横ナデにより凹線状の窪みが見られる。口縁部は外面がナデで、2段に屈曲し、内面は横・斜めハケ。図71-439に類似。胎土は非生駒西麓の白色。布留式前半。**388**は小型器台。X字状を呈するもので、外面は上部に細かいケズリで、以下は縦ナデのち横ミガキだが、密度が粗。全体的に剥落著しい。内面は横ナデ。布留式前半。**389**～**392**は小型丸底壺で、いずれも布留式前半。**389**はやや大振りで、口縁部が有段屈曲状。体部外面は縦ハケで、内面は横ハケのちケズリだが、頸部下までに留まる。**390**は口縁部横ナデで、口縁下部形態は布留式に特有のもの。外面は肩部まで横ナデで、以下は右上がりのハケ。体部内面は頸部下がナデで指頭圧痕が見られ、以下はケズリ。外面口縁部と体部中位は煤化が見られる。**391**は内湾気味の口縁で、体部外面最大径より上は横ナデ、同下は斜めハケ。同内面は左回りのケズリで、頸部下までに留まる。**392**は粗製。口縁部外面はナデ、内面は左上がりのハケ。体部外面上半は縦ハケ、以下は摩滅するがナデか。同内面はケズリだが、頸部直下は口縁部のハケののちで、以下はのちナデ。**393**～**395**は高坏坏部。**393**は無稜直口高坏。口縁部はナデで、外面は以下上半が縦ハケ。他は摩滅で不明。脚部との接合部には刺突が見られる。布留式後半、辻編年2段階。**394**は外面上部横ミガキ、下部ケズリ。内面上部は左上がりのハケのちミガキだが、ハケが多く残存する。下部は上部との境目部分にミガキを施すがそれ以外は不明。布留式前半。**395**は内外面とも横方向の調整だが、摩滅のためミガキは見られない。やや外反する口縁でやや稜を持つタイプと思われる。布留式前半新相。**396**は長頸直口壺。口縁部は横ナデで、外面にはのち円形浮文を付す。以下は縦ハケのち縦ミガキ。両者の切りあいは摩滅のため不明。内面は左上がり気味の板ナデ。頸部直上はカキトリが見られ窪む。装飾具合から庄内式の産物とも思われるが類例を知らない。**397**は無頸壺か。口縁端部を横ナデし、やや外方に摘み、それ以降外面に縦ミガキ。内面は横方向の板ナデ。胎土が赤味を帯びる白色であり、東海系のワイングラス形高坏の可能性はあるが、やや口径が大きいか。庄内式併行か。**398**は広口壺。口縁部は外反し、内外面ともナデ。内面は頸部下までケズリのちナデ。体部外面は左上がりのハケ、ナデ。庄内式後半。**399**は広口壺。頸部の屈曲は明瞭。口縁端部は外傾する面をもち、強い横ナデでやや凹線状を呈する。外面頸部上部は横ナデで、以下は縦ハケ、体部はそれ以後の縦ミガ

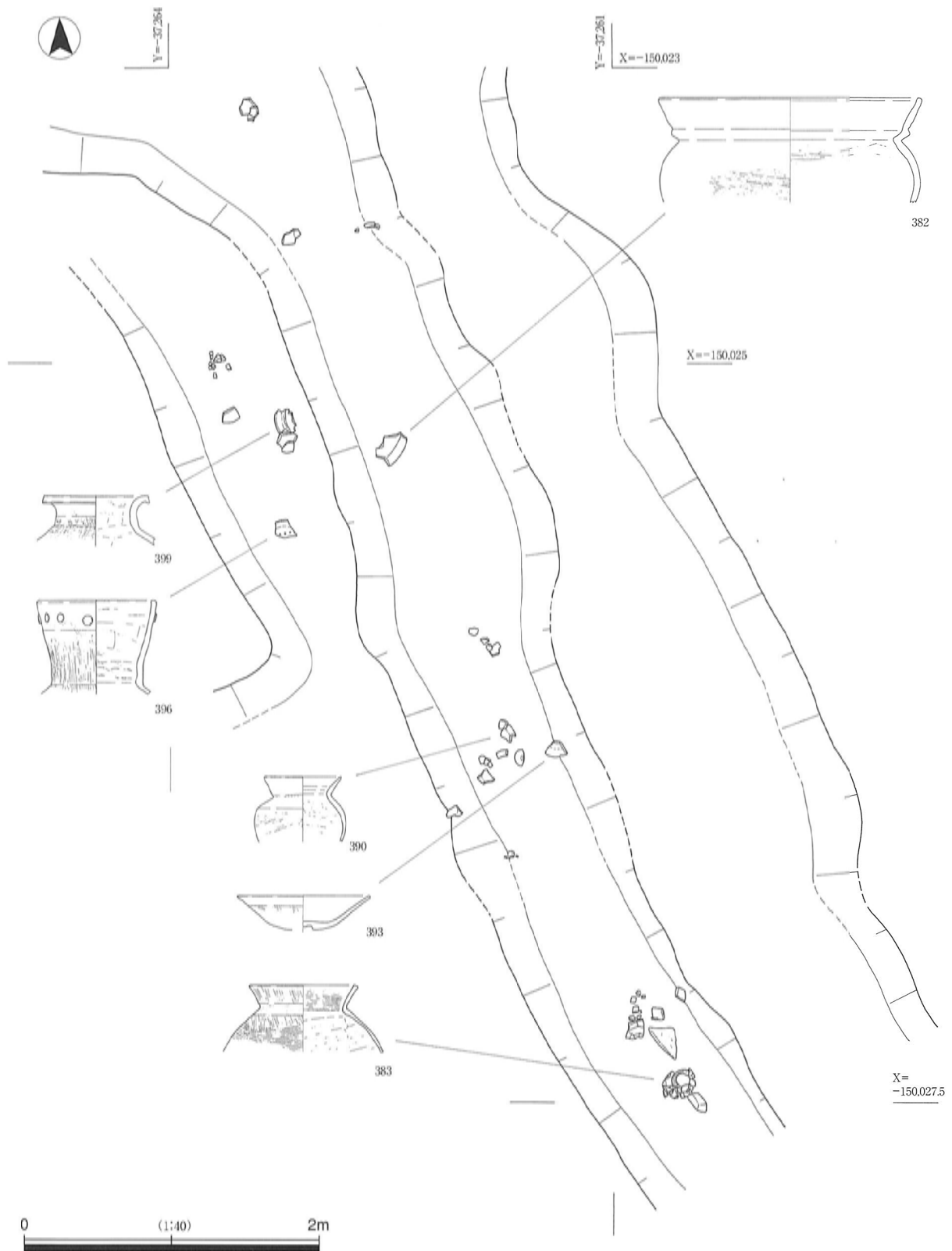


図53 溝368付近上層遺物出土状況図 (S=1/40)

キ。内面は摩滅するが、ハケが見られ、頸部下部は横ハケの痕跡が明瞭。以下はケズリのちナデ。400は器種不明。口縁端部は受け口状で、外面には凸帯を貼り、刻み目を施す。内外面とも横ナデで、外面

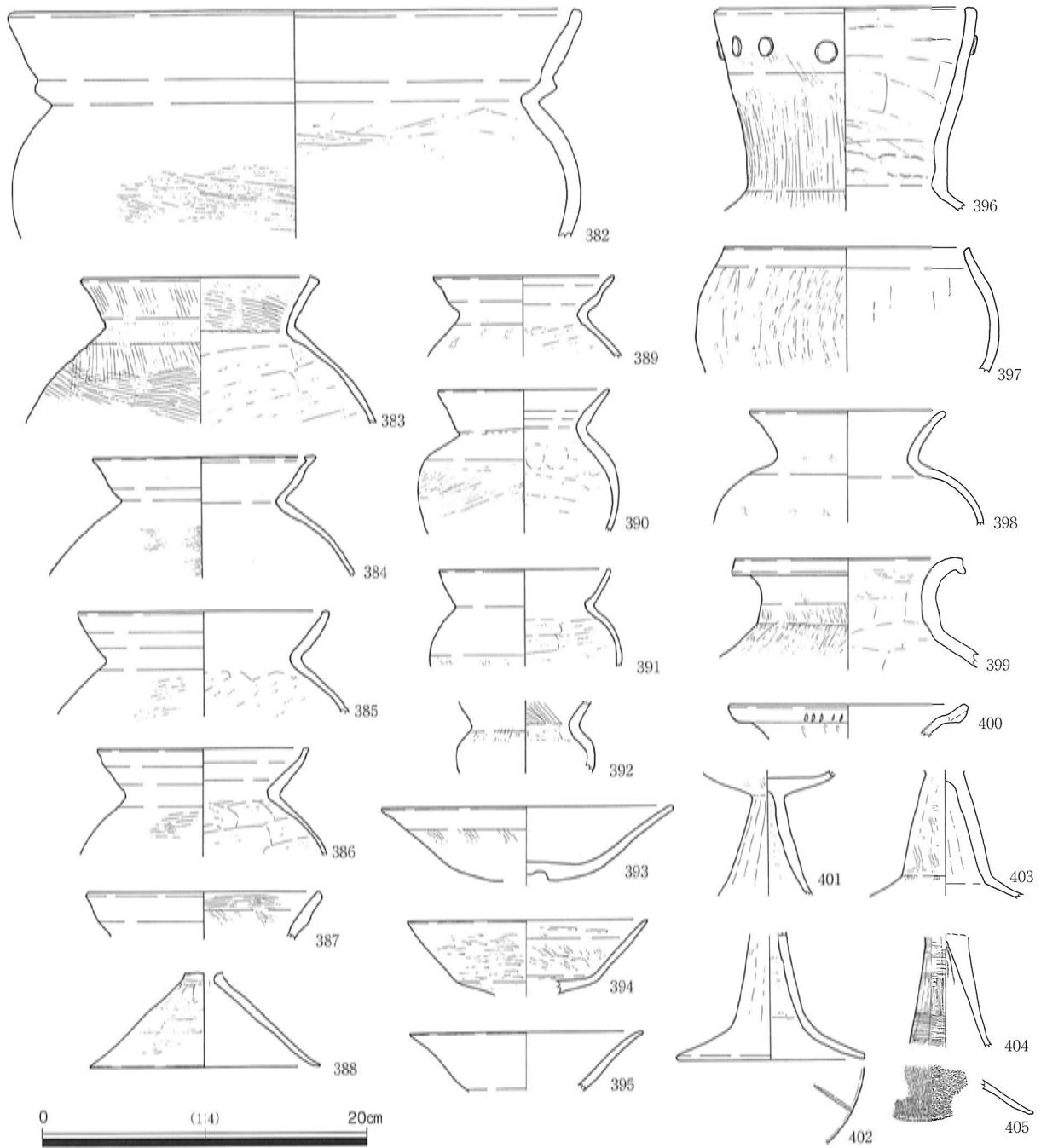


図54 溝367・368、落ち込み409 出土遺物

にはミガキが粗い密度で施される。401～405は高坏脚部。401は脚柱部外面メントリ気味だが、横ミガキは見られない。同内面はケズリ。坏部は摩滅著しく調整不明。坏部と脚部の接合部には刺突が見られる。布留式。402は外面ややメントリ気味であるが不明瞭。脚柱部内面は全面ケズリで、裾部にはヘラ記号が見られる。内外面とも、脚柱部から裾部への変化点は鈍い。胎土は暗めの黄褐色。辻編年2段階。布留式後半新相。403は外面縦ハケのち横ミガキだが、ミガキは痕跡状に残るのみ。ややメントリ気味。脚柱部内面はナデ。布留式前半新相。404は外面縦ハケのち横ミガキ。内面上部にはシボリ目が残るが、下部はナデ。布留式前半。405は高坏。脚部裾端部片で、内面には布目痕が見られる。辻編年の1段階、布留式後半古相。なお、図化していないが、図53-408の甕北側で出土した三角形の木板の樹種はスギである。

以上の遺物のうち、層位が明らかなものを挙げると、382・383・390・393・403は溝368上層からの出土、385・388・392・395・396・399・401・402は落ち込み409上層、398・400は落ち込み409下層からの出土である。下層出土遺物は数量が少なく詳細な時期が不明なものが多いものの、398以外にも、庄内式の可能性がある口縁部がやや拡張し、波状文を施す加飾気味の壺口縁部片も見られ、掘削の時期は庄内式後半頃まで遡る可能性はある。ただし、布留式前半の資料は後半の資料と共にではあるが、一定量見られ、布留式段階にはこれらの遺構が存在し、遺構の最終埋没は布留式後半であろう。

溝369（図52、写真69・71）は溝368に平行し、同様に北側で落ち込み410に至る。溝370、土坑411・412に切られる。溝底のレベルから、南から北への流れが復元できる。埋土は溝368に似る。溝369からは、布留式を中心とする土師器片が84点、弥生後期土器片が2点出土しているが、遺構検出段階の不備で、これらが確実にこの遺構に伴うかはやや危うい。基本的に遺物の出土は少ない。後述する土坑412に切られることから、布留式前半の可能性が考えられる。

溝370（図52、写真73・74）は土坑412を迂回するように屈曲する溝。南側が深く北側が浅いため、溝369との南側の切りあいは比較的明瞭であったが、北側はやや不明瞭であった。北で落ち込み410部分に接続するが、この部分の溝370延長は不明瞭。溝370からは破片で19点の遺物が出土しているが、内面を削る布留式と思われる破片や、弥生後期甕と思われる破片が若干見られるのみで、多くは時期不明である。遺物からは切りあいに見られる時期差は不明であるが、溝369埋没後その機能を継承したものと考えられる。土坑412に対する意識が看取され、同時並存の可能性が考えられる。布留式後半か。

溝371（図52、写真75）は幅0.4m、深さ6cm。東側を溝370に、南側を溝372に切られ、溝373を切る。この部分は細い溝が切りあう部分であるが、各溝の掘削意図は不明。埋土は粘質シルトだが、第5b層の砂が多く混じる。遺物は布留式土器片が20点出土しているのみ。時期は布留式だが、詳細な時期は不明。**溝372**（図52、写真75）は幅0.2m以上、深さ2cm。南側を溝371に切られる。埋土は砂質シルト。出土遺物はない。**溝373**（図52、写真75）は幅0.4m以上、深さ0.25m。溝371を切り、溝370に切られる。埋土は、溝371より黒色を呈する粘質シルト。遺物は布留式を中心とする土師器片18点が出土しているのみ。うち、2点が図化でき（図57）、409は粗製の小型丸底壺。口縁部はナデ、体部外面はナデで、一部にケズリが見られる。内面は上半がケズリ、下半がナデ。なお、外面上部にヘラ状工具による円形の文様が見られるが、いずれも浅い。410は高坏。坏部下半片で、外面はハケ、内面はミガキが見られる。いずれも布留式後半。

溝374は幅0.55～0.7m、深さ0.12m。埋土C類で炭が混じる。筋堀以南で検出され、北延長は溝373部分だが、溝373が南に屈曲する様子は看取されず、別の溝と判断した。出土遺物はない。

溝375は幅0.9～1.7m、深さ7～19cm。埋土A類。東側の各溝にほぼ平行する。溝は全体的に浅く、溝底のレベルはほぼ同じである。遺物は、詳細な時期は不明だが、弥生時代後期から布留式と思われる小片が17点出土したのみ。ピット、土坑はいずれも溝埋没後の掘削と考えられる。

溝376は幅0.4～0.75m、深さ0.39m。埋土A類。北側を溝375に切られ、南に向かい浅くなる。全体的に浅い落ち込みである。溝の北側は多くのピットが検出されたのだが、この部分では高坏がまとまって出土した（図55）。また、第5層中から高坏がまとまって出土したのも概ねこの溝付近である。しかし、図64からも明らかなように遺物は溝底から浮いて出土しており、この溝に伴うとは安直には言えない。

溝376出土遺物（図56） 溝376からは破片の概数で18点の土師器が出土し、完形に近い破片も多

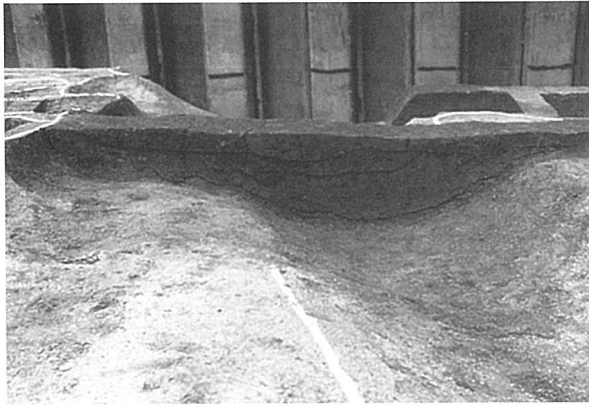


写真69 溝369 北セクション断面 (南から)



写真70 溝368 北セクション断面 (南から)



写真71 溝369 中央セクション断面 (南東から)



写真72 溝368 中央セクション断面 (南東から)

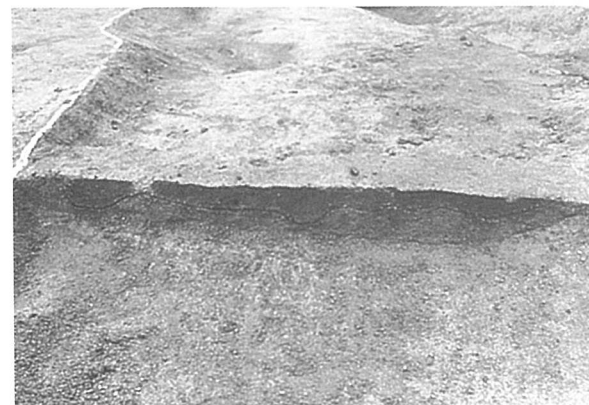


写真73 溝370 中央セクション断面 (南から)



写真74 溝370 中央セクション断面 (南東から)



写真75 溝371・372・373断面 (東から)



写真76 溝366断面 (南から)

くその全てが布留式の高坏であった。406は図55の高坏集中部から南に約3mの地点で、地面に坏部が突き刺さって出土した直口高坏。やや稜を持ち、それより上は横ナデ、以下は縦ケズリ。内面は上部が右上がりのハケ、以下がナデ。全体的に粗雑な作り。407は外反高坏。やや稜を持ち、それより上は縦ハケのち横ナデ、以下は特に調整は見られない。内面も上部が横ナデで、下部はナデが僅かに見えるのみ。脚部との接合技法が古い様相である。いずれも布留式前半新相だが、407が若干古相を呈する。408は摩滅著しいが外面に横ミガキが残り、内面脚柱部はケズリのち粗いナデ、以下は横ナデ。407と408は同一個体。図化しなかったが、近接し出土したもう一点の破片は、高坏坏部下部の脚部との接合部分で、図化資料よりやや新相である。以上の遺物のうち、出土状況から406は他よりこの溝に伴う可能性が高いといえ、結果的にはいずれも時期差はないのだが、布留式前半新相と考えられる。

溝377は幅0.2～0.6m、深さ2～8cm。埋土A類。中間が一部途切れるものの、やはり他の溝と同様の掘削方位である。溝底は北が高く、南が低い。出土遺物はない。後述する堀立柱建物以前であろう。

落ち込み 溝369東側の若干の高まりより東側および南側で、溝368西側の狭い低まり部分を落ち込み409とした(図53)。一部溝367と重複する部分があるが、溝とするには不定形な低まりであったために、調査時に別遺構名を付したものである。遺物については、既述のため省略する。

落ち込み410は溝368・369・370が合流する地点以北の落ち込み。溝368延長部分が、溝369・370延長部分よりやや深かった。溝369と370が時期を違えているにもかかわらず、この部分への掘削であることから、この箇所以北には何らかの意味合いがあるものと考えられる。なお、確実にこの遺構に伴う遺物はない。

土坑・ピット 土坑とピットは単純に径からの区分であり、特に分けず番号順に報告する。なお、ピット、土坑のいくつかは掘立柱建物を構成する。これらについては詳述するが、掘立柱建物の呼称は、それを構成する各遺構のうちの最も若い番号を掘立柱建物の遺構番号として報告する。

土坑388は径0.55mで北側を側溝に切られ、溝366を切る。出土遺物はない。ピット389は径0.2m。溝366底部で、完掘後に検出された。溝掘削時の痕跡の可能性はある。出土遺物はない。ピット390は径0.35mで北側を側溝に切られ、溝366・367を切る。出土遺物はない。いずれも痕跡程度の検出で、埋土A類。土坑391、ピット392・393は、393→392→391の順の掘削で、土坑391は溝366を切る。いずれも痕跡程度の検出で、埋土A類、いずれからも出土遺物はない。ピット394・395は溝366・367間で近接して検出された。埋土A類。ピット394からは時期不明の土師器片が4点出土した。

上記の各遺構は、密集して検出されているが、ピット394が複数層の埋土(図67)である以外はいずれも単層で、またいずれも0.1m以下の浅い皿状の落ち込みであり、規則性も見られず掘削意図は不明である。ピット389を除けば、いずれも溝埋没後の掘削の可能性が考えられ、遺物の出土が見られないものがほとんどではある。上面で高まり338が検出されている箇所にあたり、この高まりに伴う遺構と考えられ、耕作域で散見されるピットの類であろう。

土坑406を除く、土坑396～ピット408までの各遺構は、溝367もしくは368埋没後に掘削されたものである。土坑396は不整円形で、径0.4～0.7m。深さ0.11m。埋土A類。ピット397に切られる。出土遺物は、土師器片42点。うち1点が図化でき(図57)、411は布留式直口壺。外面は縦ハケ、内面は横ハケ。頸部は布留式特有の形態をとる。布留式前半。ピット397は径0.25m、深さ0.1m。埋土A類。布留式甕と思われる破片が1点出土したのみ。布留式前半。ピット398は径0.35～0.45m。痕跡程度の検出で、埋土A類。布留式と思われる破片が3点出土したのみ。詳細な時期は不明だが、布留式前

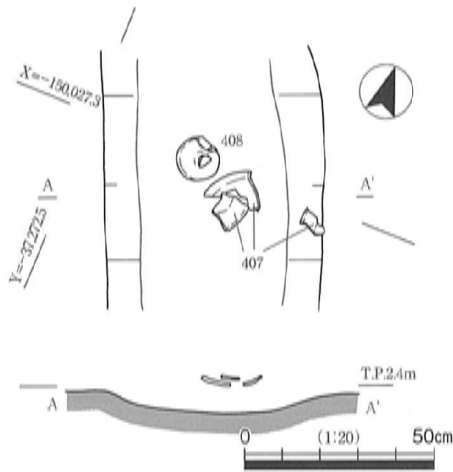


図55 溝376 平・断面図 (S=1/20)

半新相か。ピット399 (図65、写真84) は径0.35~0.4m、深さ6cm。埋土A類。礎板と考えられる木製品が1点出土したのみ。その樹種はアカガシ亜属。ピット400 (図59) は径0.3m、深さ3cm。埋土A類。土師器片が3点出土した。うち1点が図化でき (図58)、420は布留式高坏。脚部片で、外面縦ハケのち横ミガキ、内面はシボリ目が残る。布留式前半。ピット401は径0.25m、深さ0.11m。埋土B類。土器片が8点出土したのみ。いずれも摩滅した厚手の土器片で、弥生土器の可能性もある。ピット402は径0.3m、深さ5cm。埋土B類。布留式と思われる破片10点が出土。中には、高坏と思われる外反口縁を有する破片や甕などの破片を含む。布留式前半か。ピット403 (図52) は径0.4m、深さ0.15m。埋土は基本的にA類。布留式を主体とする土師器片9点が出土。中には甕、高坏などがあり、布留式前半。ピット404は径0.35~0.4m、深さ5cm。埋土A類。遺物の出土はない。ピット405は径0.33~0.45m、深さ0.22m。埋土A類。時期不明の土師器片が1点出土したのみ。ピット407は径0.3m、深さ5cm。埋土A類。遺物の出土はない。

以上の各遺構のうち、ピット399からは礎板と考えられる板の出土も見られ、この部分に掘立柱建物が存在した可能性も考えられたが、調査時にこのピットに関連しうのような遺構は検出されなかった。ただしこれらの遺構は、溝368に平行し、布留式前半に同時存在していた柵列に伴う可能性が考えられる。溝368からは、先述のように遺物がまとまって出土しており、居住域縁辺の廃棄用も兼ねた溝と考えれば、この部分が後述する西側の建物を中心とした居住域の東限と考えられる。

土坑406 (図60、写真77) は側溝掘削中に検出された遺構であり、第5b面検出後の検討から、当面に伴う遺構と判断した。

土坑406出土遺物 (図58) 計99点の土師器片がまとまって出土した。417は布留系甕。口縁部は横ナデで、内面は横ハケ。体部外面は乱雑なハケで、内面はケズリ。底部には指頭圧痕が見られ、頸部までは削り上げない。口縁端部は布留式でも前半の形態。418は布留系甕。口縁部は直線的だがやや外反し、内外面とも横ナデ。体部外面はハケだが、煤化で調整は見にくい。内面は頸部下までケズリだが、上部はケズリが不明瞭。419は布留式甕。口縁端部の肥厚や肩部の横ハケ、ケズリの範囲など典型的な

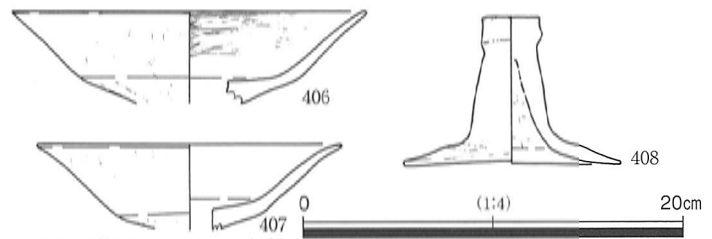


図56 溝376 出土遺物

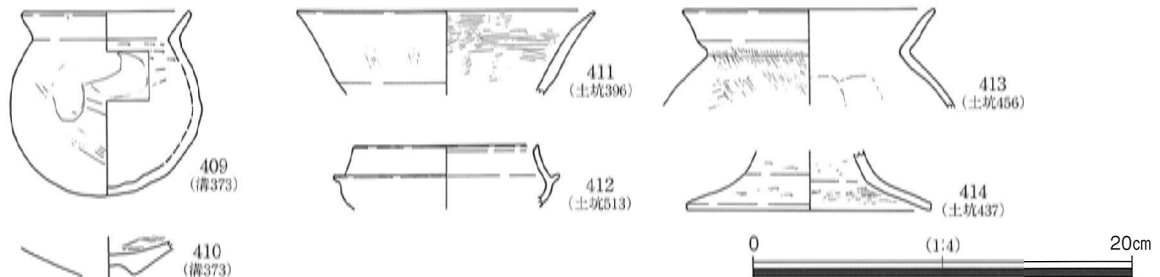


図57 溝373、土坑396・437・456・513 出土遺物

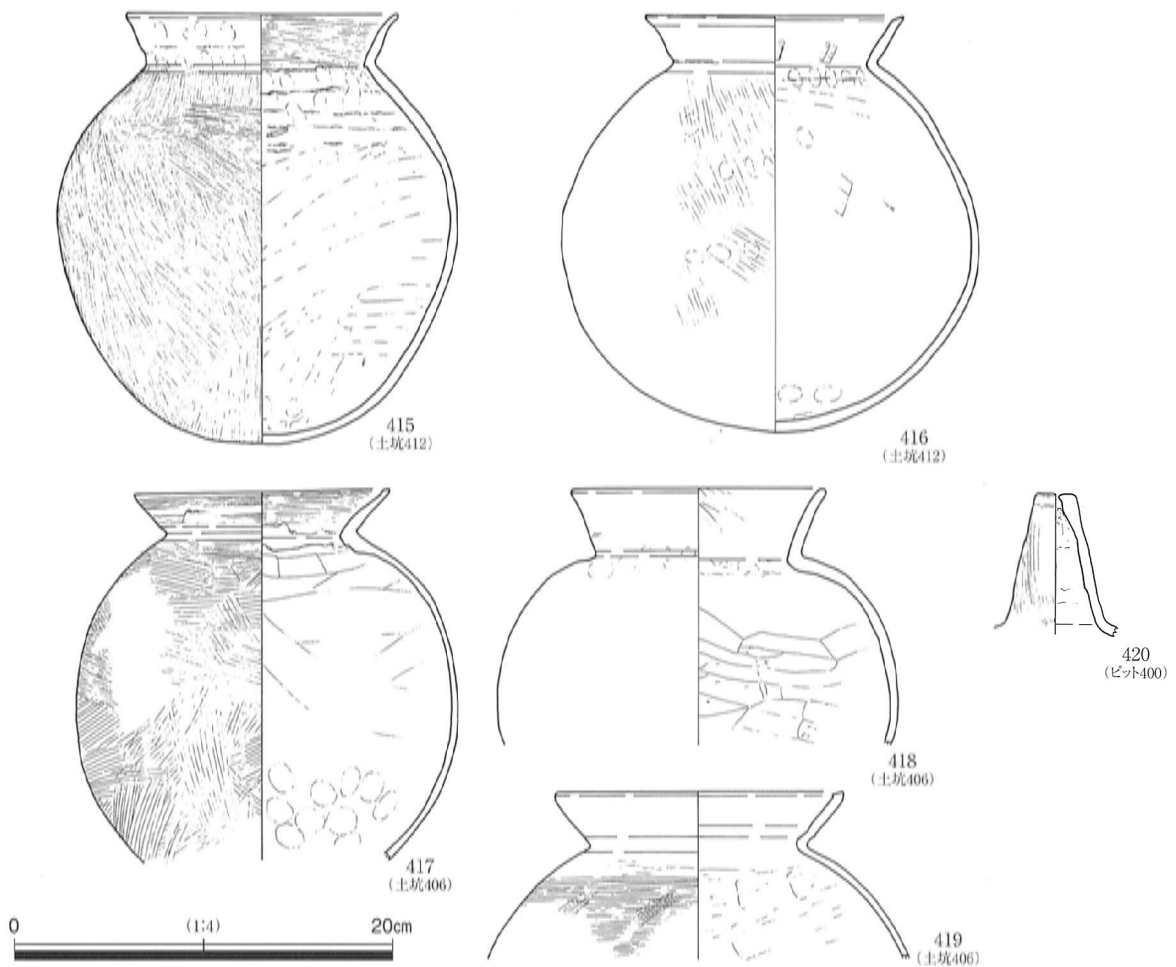


図58 ピット400、土坑406・412 出土遺物

ものであり、口縁部と体部中位が煤化している。419から土坑の時期は布留式前半新相と考えられる。

ピット408 (図67) は径0.45m、深さ0.18m。埋土は基本的にA類。溝367・369間で検出された。出土遺物はいずれも破片で、土師器22点、弥生土器1点、石1点。甕などの破片が見られ、典型的な布留式のほか、端部が肥厚しない布留系とされる甕片も見られた。布留式前半。東側の遺構群と関連があるのかもしれないが、ピットが並ぶ様子は看取されなかった。

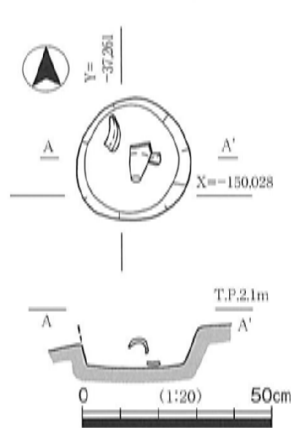


図59 ピット400
平・断面図 (S=1/20)

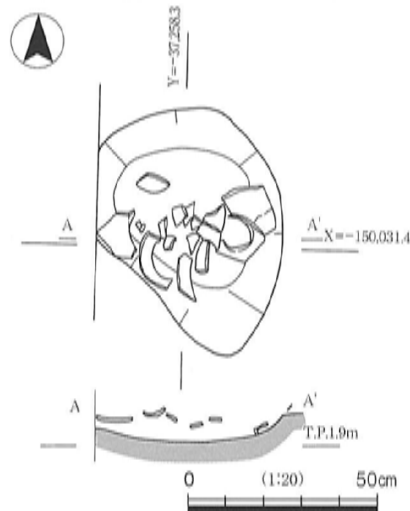


図60 土坑406 平・断面図 (S=1/20)



写真77 土坑406 (南から)



写真78 土坑412断面上半(南から)

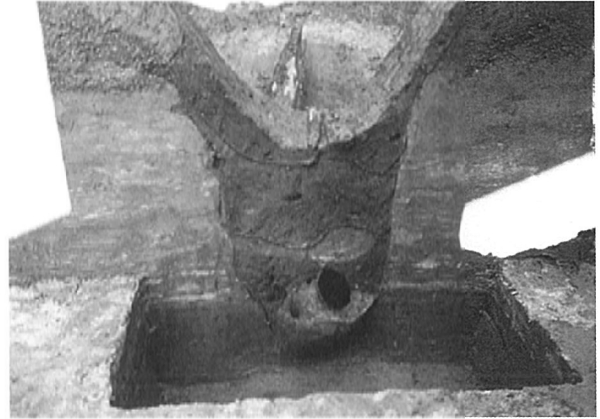
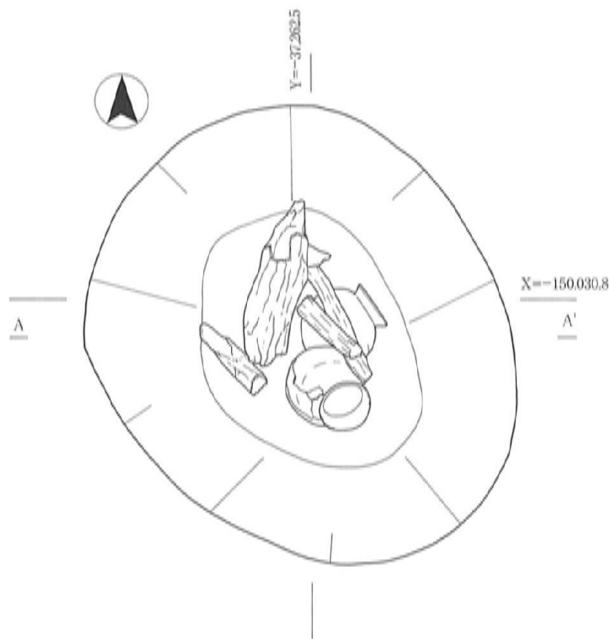


写真79 土坑412断面下半(南から)



- 1 5Y2/1 黒色 粗～極粗砂混粘質シルト
- 2 5Y2/1 黒色 粘質シルト(粗～極粗砂僅かに混じる。炭多く含む)
- 3 N5/ 灰色 粗砂～極粗砂混粘質シルト(1に類似するが、色調淡く黒くない)
- 4 5Y5/1～4/1 灰色 粗砂～細礫混粘質シルト(砂礫多く、全体的に攪拌受ける)
- 5 5Y3/1 オリーブ黒色～2/1 黒色 粘質シルト(炭を横方向に多く含む) 下部は 5Y5/1 灰色・2.5GY5/1 オリーブ灰色で同質
- 6 5Y5/1 灰色 層中には5と同質の部分有り
- 7 5Y2/1 黒色～3/1 オリーブ黒色 粘質シルト(炭を横方向に多く含む) 下部は 5Y5/1 灰色・2.5GY5/1 オリーブ灰色で同質
- 8 5Y6/1～4/1 灰色 粘質シルト 粘性強
- 9 5Y2/1 黒色 粗～極粗砂混粘質シルト 粘性強 炭混じる
- 10 2.5Y3/1 黒褐色 粘質シルト 粘性強 炭混じる(8に似る)
- 11 2.5Y4/1 黄灰色 粘質シルト 粘性強 有機物全体的に多く混じる。粗砂を部分的に多く含む部分有り。
- 12 2.5Y3/1 黒褐色 粗砂～細礫混粘質シルト
- 13 2.5Y3/1 黒褐色 粗砂～細礫混粘質シルト(12ほど砂混じらない)

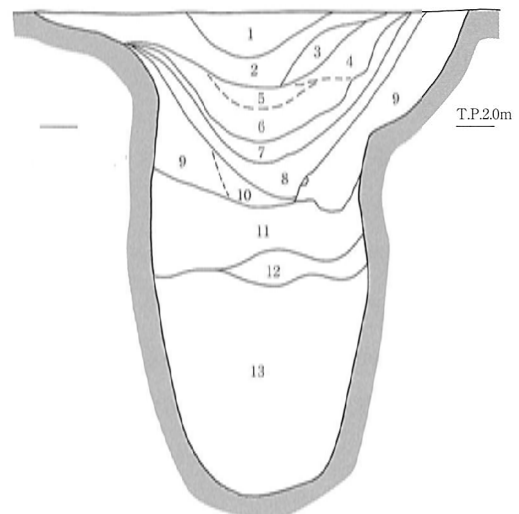
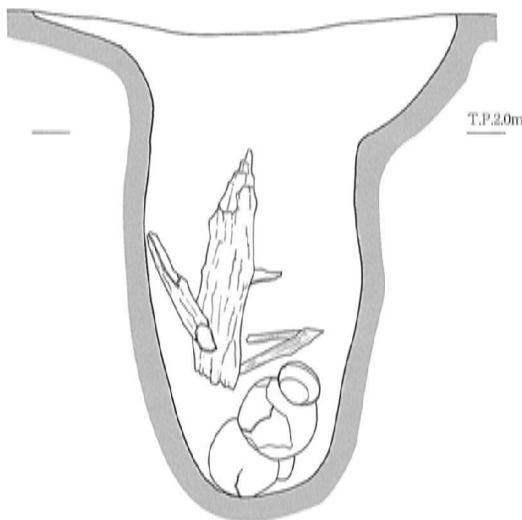
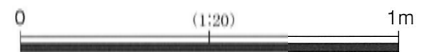


図61 土坑412 平面・見通し断面図 (S=1/20)



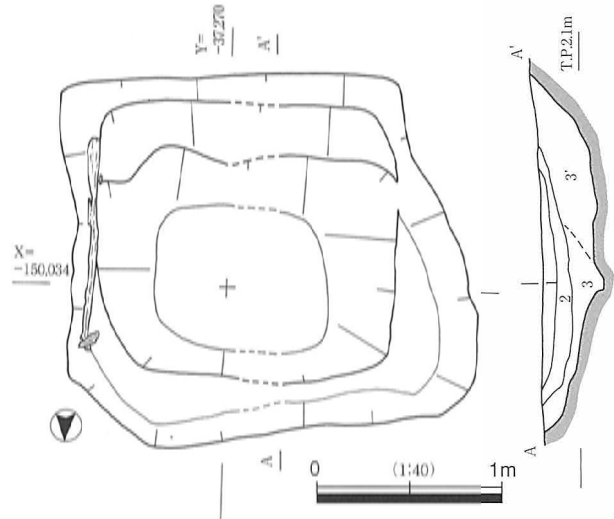
写真80 土坑437 (北から)

土坑411は径1.3～1.7m、深さ0.11m。埋土C類。溝369を切る浅い落ち込みである。出土土器はいずれも破片で、土師器12点、弥生土器4点。厚手のものが多く、土師器としたものの中にも弥生土器を含む可能性がある。弥生土器にはV様式のタタキ甕片があり、土師器にはおそらく布留式と考えられる高坏片が見られる。溝369・370を切ることから布留式後半と考えられる。

土坑412 (図61、写真78・79) は円形の土坑。溝369を切る。底部に向かい狭くなり、最下部から布留式と思われる甕が完形で2点 (図58) と、木が出土した。なお、図58の415が上、416が下になって出土した。

土坑412出土遺物 (図58) 破片の概数で布留式土器56点、弥生土器19点が出土した。このうち、弥生土器は調査の際の第5b層からの混入の可能性が高い。また、図化した以外にも複合口縁を呈する布留式甕の破片も見られた。415は布留式の甕。口縁端部は肥厚せず、外反する。口縁部外面には指頭圧痕が見られ、内面には左回りの横ハケが見られ、溢れた粘土が頸部下に垂れ下がる。頸部には横ナデを施し、口縁下部の弱い屈曲を生み出している。体部外面は縦ハケを基本とするが、肩部には僅かに不明瞭な横ハケが見られる。内面は底部付近に指頭圧痕が見られ、底部から体部上半までケズリを施すが、頸部直下までは至らず、この部分には接合痕と指頭圧痕が見られる。器形は定型化した布留式のそれと同様である。416も布留式の甕。415同様口縁端部は肥厚せず、外反する。口縁部内面には横ハケを施すが、後にナデ消す。体部外面は縦ハケ、内面は底部に指頭圧痕が見られ、頸部やや下までケズリ上げた後、丁寧にナデ調整を施す。なお、頸部直下には接合痕と指頭圧痕が見られる。器形は非常に球形を呈し、やや古相を思わせる。いずれも、船橋遺跡0-IV甕C1 [田辺ほか1972] や小若江南遺跡出土例と器形が類似するが、調整が異なる。なお、図化していないが、図61に示した杭状の木の樹種はコナラ亜属である。

この土坑は砂層を掘りぬいており、井戸の可能性も考えられる。そうであれば、土器2点は廃絶に伴う祭祀的な意味あいを持つ可能性も考えられるが、井戸として使用した際の釣瓶の可能性も考えられる。いずれの土器も煤化を受けているが、煤化を受けた土器の釣瓶としての使用は、時期が大きく異なるものの、羽曳野市駒ヶ谷遺跡井戸424 [本田1999] でも見られ、煤化しているからといって釣瓶として使用しないという消極的な証拠にはならない。また、釣瓶という意識で再度土器を観察したところ、416の頸部に若干ながら植物繊維質のこびりつきが見られ、いずれの土器も頸部の煤が若干薄くなっているよ



- 1 5Y2/1 黒色 粘質シルト (下部横方向に炭多く含む)
- 2 5G5/1 緑灰色・5Y6/1 灰色 粘質シルト (最上部) (1と同質だが色調異なる) ～シルトブロック混じり極細～細砂 (一部3のブロック混じる)
- 3 5Y3/1 オリーブ黒色 粗砂～細礫混じり粘質シルト (砂礫非常に多い)
- 3' 5Y6/6 オリーブ色～3/1 オリーブ黒色 細砂～細礫の互層 (弱く土壌化)

図62 土坑437 平・断面図 (S=1/40)

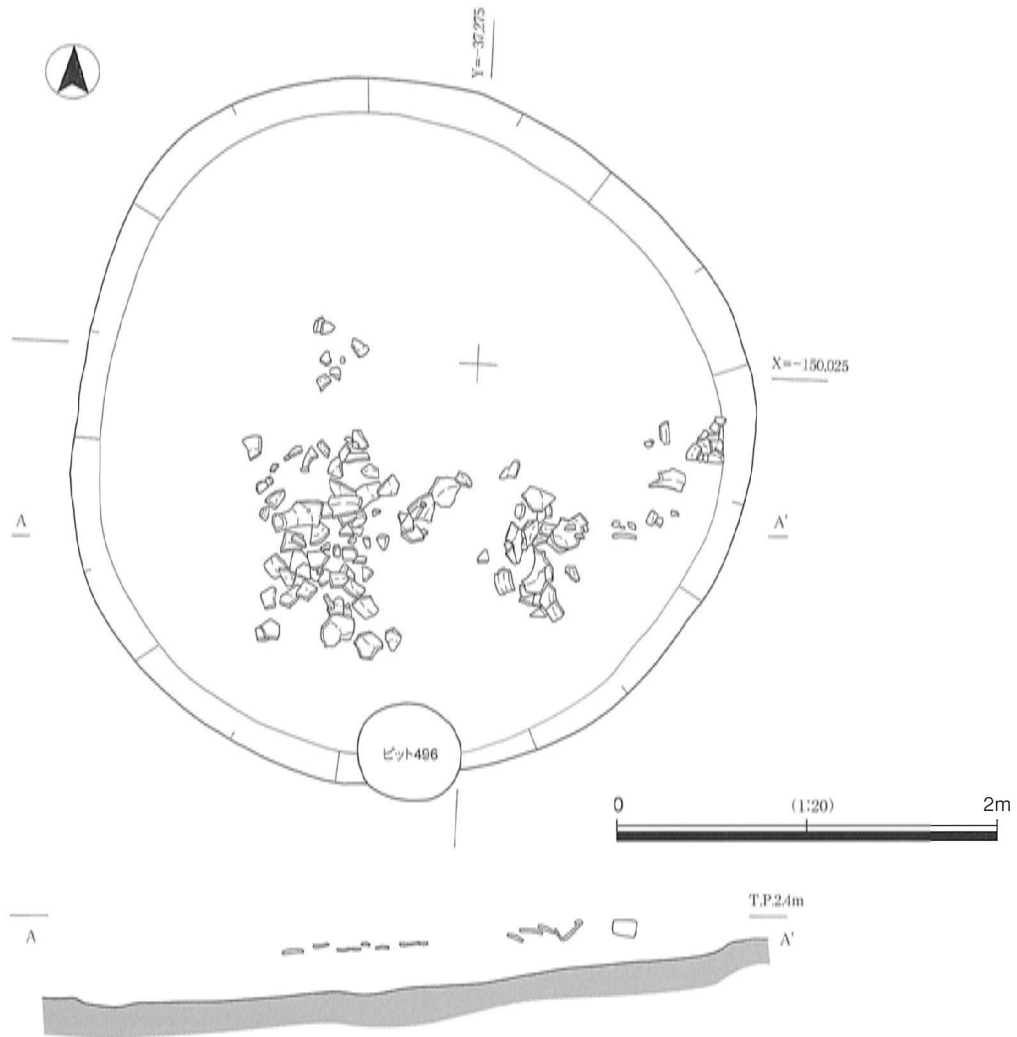


図63 土坑497 平・断面図 (S=1/20)

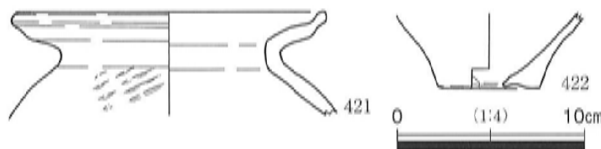


図64 土坑497 出土遺物

うに見える。このことから、これらの土器は釣瓶であった可能性が高いと考えられる。

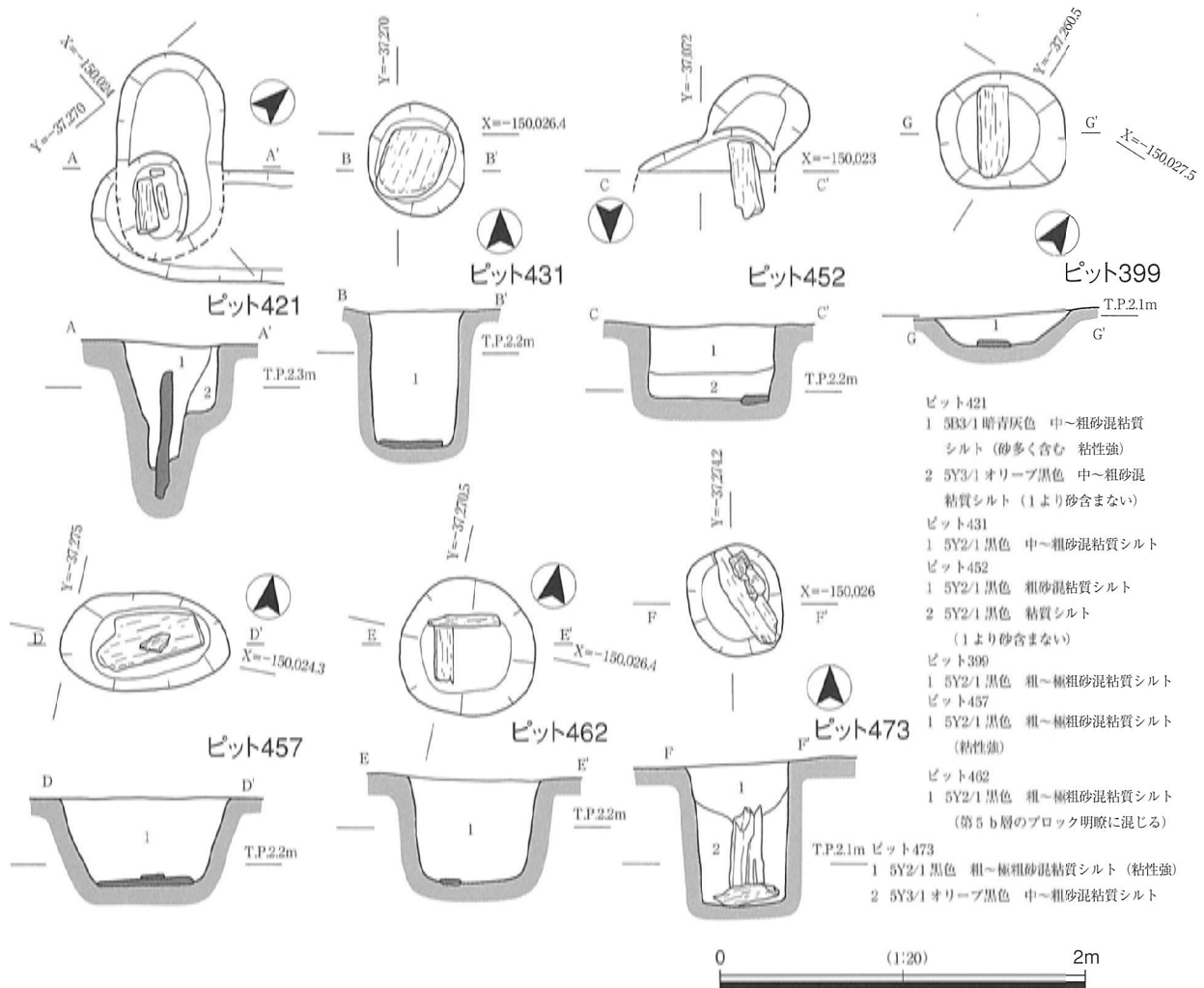
以上から、土坑412は井戸と考えられ、この2点の土器は普通の甕として煮炊きに使用されたのち、

釣瓶として転用され、井戸廃絶と共に埋められたと考えられる。

ピット413は径0.25m。痕跡程度の検出。溝369・370間で検出された。ピット414は径0.3m、深さ3cm。溝370、土坑415間で検出された。いずれからも出土遺物はない。

土坑415 (図67、写真88) は西側を上面の遺構に切られる。出土遺物はいずれも破片で、須恵器1点、布留式を主とする土師器片が224点、弥生土器 (V様式) 1点。なお、須恵器はおそらく混入であろう。

土坑415出土遺物 (図68) 424は有段屈曲鉢。ただし口縁の屈曲が顕著に見られないから、小型丸底壺としたほうが良いのかもしれない。口縁部はナデ、体部はミガキ。425は布留式の小型器台。受部の破片だが、おそらくX字状を呈する器形。内外面とも横ミガキで、外面下部には布留式に特有の屈曲が僅かに見られる。426は小型器台脚部。外面は非常に細かい横ミガキ。内面は下部横ハケ、上部には指頭圧痕が見られる。425・426はいずれも布留式の精製器種に見られる赤っぽく、精製された胎土である。427は布留式甕口縁部。口縁部は横ナデで、端部の肥厚は古いタイプ。頸部下までのケズリ上げで、



- ピット421
 1 5R3/1 暗青灰色 中～粗砂混結質シルト (砂多く含む 粘性強)
 2 5Y3/1 オリーブ黒色 中～粗砂混結質シルト (1より砂含まない)
- ピット431
 1 5Y2/1 黒色 中～粗砂混結質シルト
- ピット452
 1 5Y2/1 黒色 粗砂混結質シルト
 2 5Y2/1 黒色 粘質シルト (1より砂含まない)
- ピット399
 1 5Y2/1 黒色 粗～極粗砂混結質シルト
 ピット457
 1 5Y2/1 黒色 粗～極粗砂混結質シルト (粘性強)
- ピット462
 1 5Y2/1 黒色 粗～極粗砂混結質シルト (第5b層のブロック明瞭に混じる)
- ピット473
 1 5Y2/1 黒色 粗～極粗砂混結質シルト (粘性強)
 2 5Y3/1 オリーブ黒色 中～粗砂混結質シルト

図65 ピット399・421・431・452・457・462・473 平・断面図 (S=1/20)

外面には僅かにハケ目が見られる。摩滅するが、薄手で精緻な作りである。428は小型丸底壺。口縁は丁寧な横ナデ。体部外面上半は横ミガキ、下部はケズリ。内面はケズリのちナデ。以上の図化した破片はいずれも丁寧な作りであり、図化以外の出土遺物も同様な破片である。これらの遺物から土坑415の時期は布留式前半古相と考えられる。

ピット416は径0.3～0.35m、深さ5cm。埋土A類。溝369完掘後に検出された。出土遺物はない。ピット389同様、溝掘削時の痕跡かもしれない。

土坑417は径0.45～0.8m、深さ2cm。埋土D類。溝370に切られる。出土遺物はない。土坑418は径0.7～0.9m、深さ8cm。埋土D類。溝370に切られる。出土遺物は、布留式と思われる小片2点のみ。詳細な時期は不明。

土坑419は径0.5～0.6m、深さ0.11m。埋土D類。溝370を切る。被熱した細粒砂岩(シルト質岩)が出土したのみ。

掘立柱建物420 この掘立柱建物はピット420・465・481・483、土坑423で構成され、北東隅の柱穴が検出されなかったが、2間(4.8m)×1間(2.75m)(13.2㎡)の可能性が考えられる。1間の幅は約2.3～2.8mだが、ピット420～483間は0.3m程広い。ピット

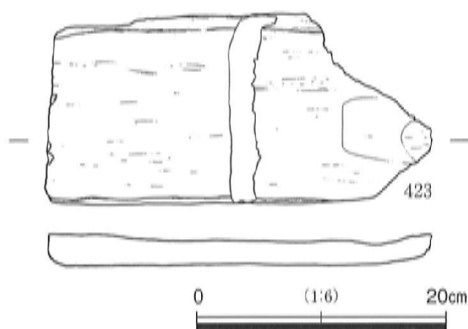


図66 ピット457 出土木製品



写真81 ピット421 (南東から)

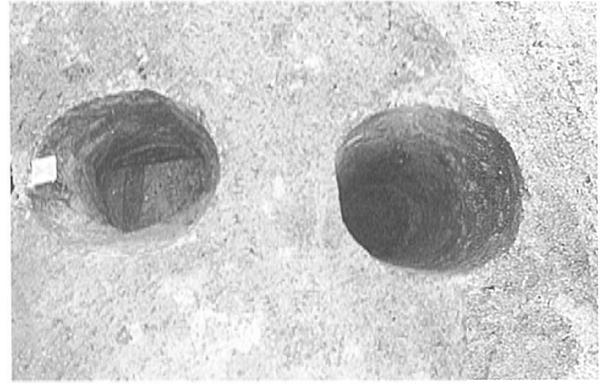


写真82 ピット462・431 (南から)



写真83 ピット452 (西から)

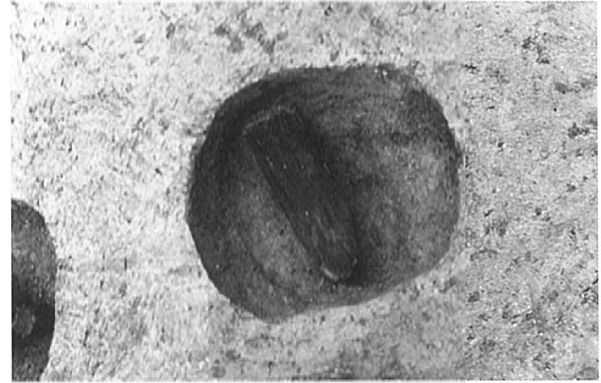


写真84 ピット399 (南から)



写真85 ピット457 (南から)



写真86 ピット473 (南から)

420・483の埋土は単層だが、土坑423・465(図67)は埋土から柱穴と考えられる。ピット481(図67)の埋土は単層ではないが、柱穴といえる埋没状況にはない。ただし、ピット483-465間(約2.3m)と、ピット465-481間(約2.5m)の距離が概ね同じで、一列をなすことから、一連の遺構と判断した。ピット底のレベルはいずれも概ね同様である。なお、埋土はピット420がD類である以外は、基本的にA類。いずれからも出土遺物はないため、時期は不明。

ピット421(図65、写真81)は埋土A類。溝363に切られる。ピット421からは柱材がb層にめり込み確認されており、関連する遺構を探索したが、確認するには至らなかった。本来は掘立柱建物を構成する可能性があるピットである。出土遺物は、先述の杭のみ。樹種はスギ。

掘立柱建物422 この掘立柱建物はピット422・452・460・461で構成され、東側の柱穴が検出されなかったが、2間以上(3.1m以上)×1間(2.75m)の可能性が考えられる。1間の幅は1.55~1.85m程度だが、ピット422-461間は0.3m程広い。ただし、少なくともピット452・460・461が一列をなすこと

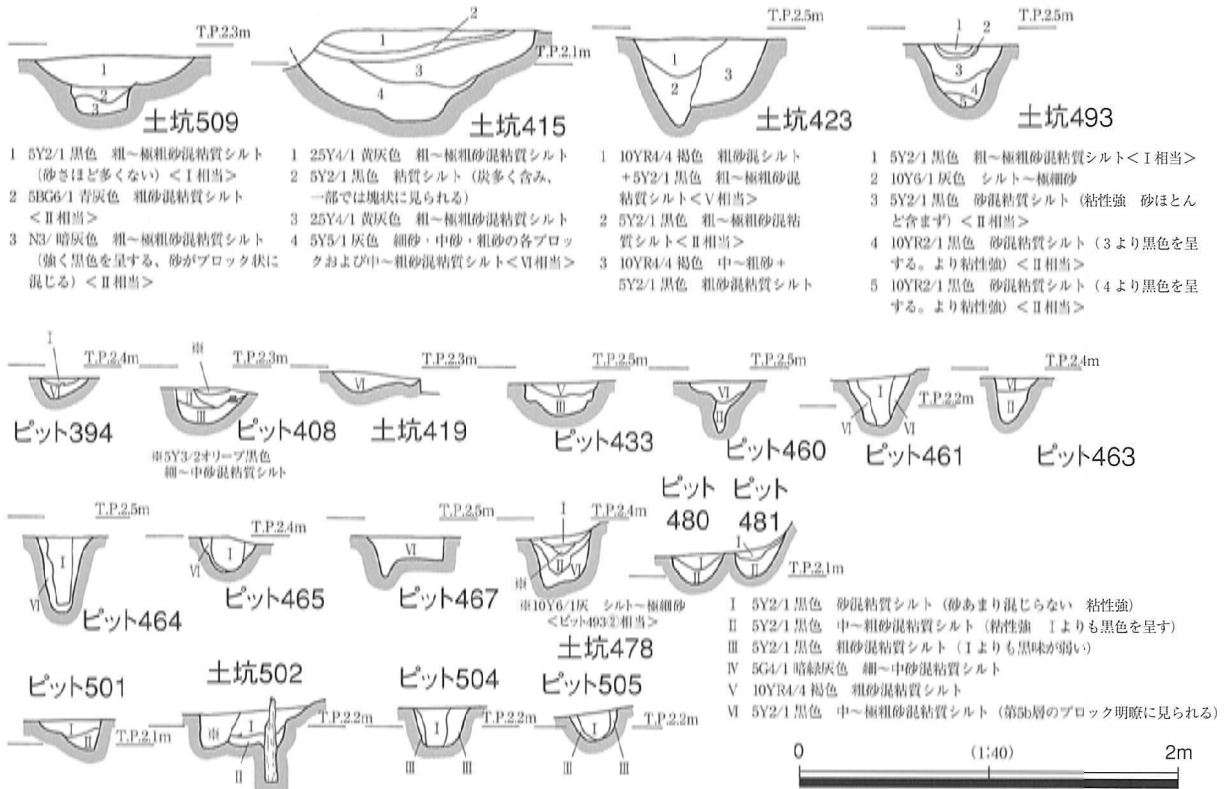


図67 土坑415・419・423・478・493・502・509、ビット394・408・433・460・461・463・464・465・467・480・481・501・504・505 断面図 (S=1/40)

は確実であるが、他の建物とは軸を異にする (N31° W)。なお、先述のビット421はやや内側 (西側) にそれるため、掘立柱建物を構成するビットとは考えていない。ビット422は単層で浅い落ち込みであるが、ビット452 (図65、写真83) では底部より礎板が検出された。樹種は分析しておらず不明。また、ビット460・461 (図67、写真94) はいずれも柱穴を思わせる断面である。礎板以外の遺物は、ビット452から布留式の小片が1点出土したのみ。詳細な時期は不明。切りあいは不明ながら、他の建物と軸を異にすることから、時期差が考えられるが、遺物の少なさから判断は困難である。なお、埋土はビット422がD類、452がA類、460・461がA+B類。

ビット424、土坑425、ビット426・427・428・429はいずれも溝375を切る。ビット425から時期不明の土師器小片4点が出土したのを除き、いずれからも出土遺物はない。なお、ビット425出土土器片のうちには外面にタタキ調整が見られるものがあり、弥生土器V様式の可能性が考えられるが、小片ゆえ断定は避ける。なお、これらのビットは若干列状に検出されたが、規模もまちまちであり、間隔にも規則性は看取されなかった。いずれも6cm以下の浅い落ち込み。埋土は425・429がA類、425～428がD類。これら上面の高まり339に伴う遺構の可能性が考えられる。土坑430は径0.4～0.5m、深さ0.12m。埋土D類。溝375を切る。出土遺物はない。

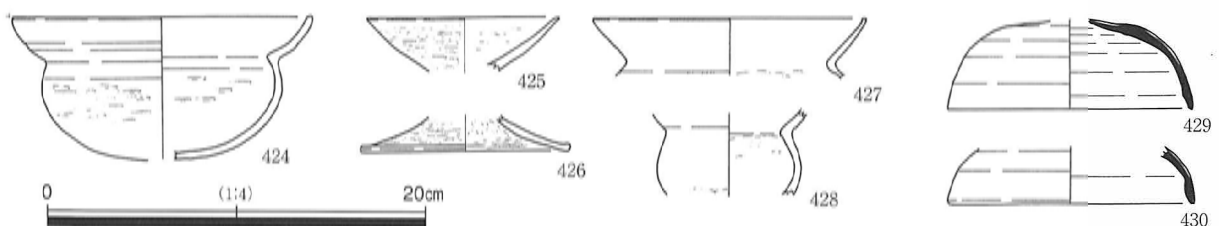


図68 土坑415、ビット433 出土遺物



写真87 土坑509 (南西から)

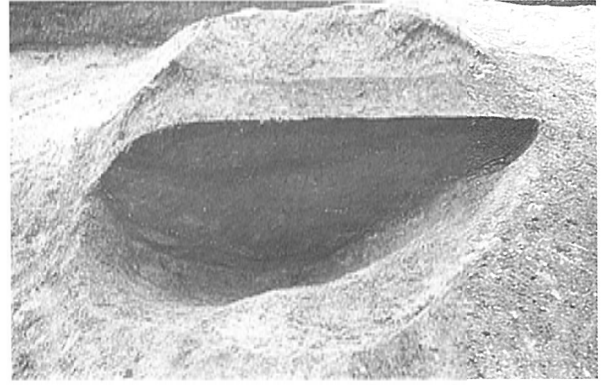


写真88 土坑415 (南から)

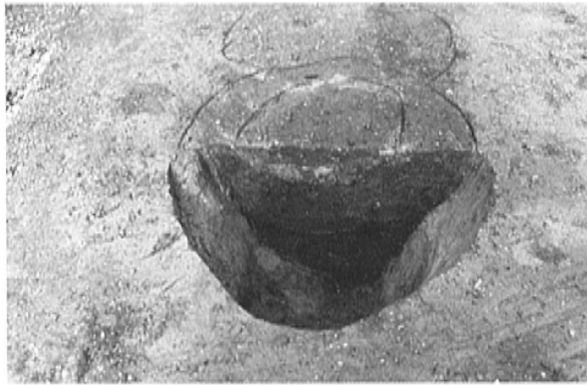


写真89 土坑493 (南東から)

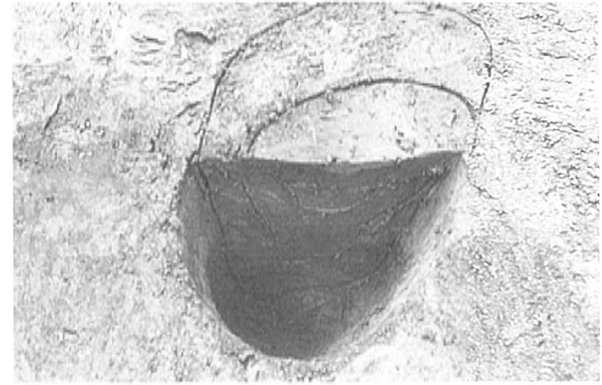


写真90 土坑478 (南東から)



写真91 土坑502 (南から)

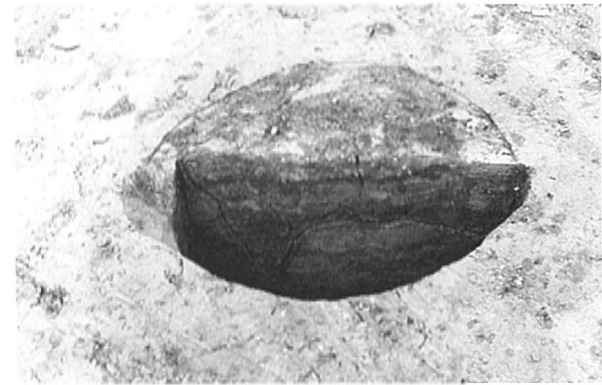


写真92 ピット467 (南から)

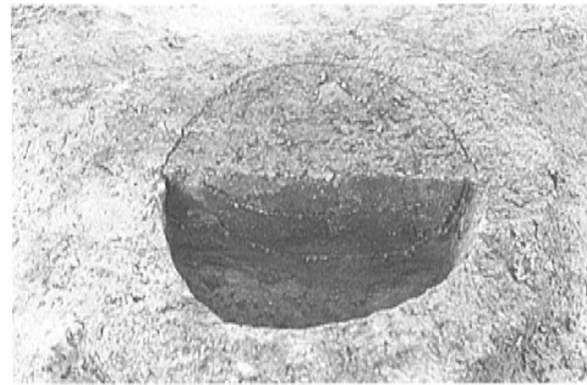


写真93 ピット433 (南から)



写真94 ピット461 (南東から)

ピット431（図65）は径約0.3m前後、深さ0.14m。埋土A類。溝375完掘後の検出である。ピット底からは礎板と考えられる板材が検出された。樹種は分析しておらず不明。他に出土遺物はない。先述の掘立柱建物422西側ピット列（452・460・461）の延長上に位置するが、ピット間の距離が明らかに狭く、一連の遺構とは判断しなかった。礎板と考えられる板材の検出から、本来は掘立柱建物を構成する可能性が考えられるが、確認には至らなかった。

ピット432は径0.3～0.4m、深さ0.16m。埋土B類。溝375完掘後の検出。出土遺物はない。

ピット433（図67、写真93）は溝375完掘後の検出であるが、出土遺物からは、本来は溝完掘前に検出すべき遺構である。埋土は2層に細分されたが、柱穴と積極的に考えられる様子ではない。

ピット433出土遺物（図68）出土遺物は、須恵器片4点、土師器片18点、弥生土器（中期か）1点。429・430はいずれも須恵器坏蓋。いずれも稜が退化しており、MT85～TK43頃と考えられる。6世紀後半。周辺の遺構で、須恵器が見られるものはなく、微高地上の最も新しい時期を示すものといえる。ただし、関連する遺構の検出はなく、この段階には掘立柱建物は存在しなかったようである。上面の高まり339に伴う遺構であろう。

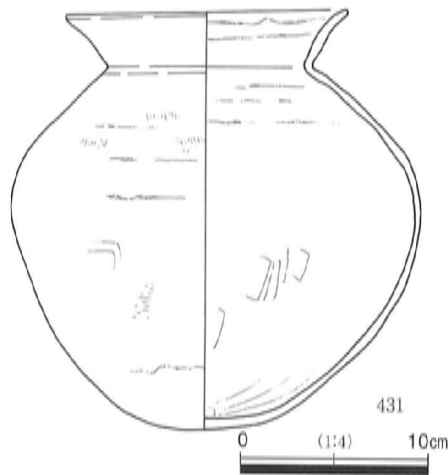


図69 土坑466 出土遺物

ピット434はピット435に切られる。いずれからも出土遺物はない。ピット436からも出土遺物はない。いずれも埋土B類。

土坑437は東西2.0m、南北2.15mの方形の土坑（図62、写真80）で、土坑の東肩部には板が敷設されていた。その板の北隅には補強用であろうか、細い杭状の木製品が見られたが、打設されていたというよりも置かれているという状態だった。その意図は不明だが、本来は方形に廻らせていた可能性も考えられる。なお、いずれも検出段階で既に軟弱な状態であり、取り上げて樹種などの分析に供することは不可能だった。出土遺物はいずれも破片で、須恵器1点、土師器（布留式主）66点。うち1点を図化した（図57）。414は布留式高坏。坏部片で、外面は横ミガキ、内面は脚柱部がケズリ、裾部が横ハケ。布留式前半新相～後半古相頃。須恵器は混入か。

土坑438は径0.4～0.5m、深さ7cm。埋土B類。北側を筋堀に切られる。出土遺物は土師器片10点。庄内式甕や布留式甕などを含む。詳細な時期は不明だが、布留式前半であろう。

土坑439は径0.4～0.55m、深さ6cm。埋土B類。土坑438の南側で検出された。出土遺物はない。

掘立柱建物440 この掘立柱建物はピット440・503・504・505・512で構成される。南東側が断面観察用のセクションと筋堀にあたり、ピットの検出はなされていないが、2間（3.0m）×1間（2.85m）（8.55m²）に復元できる。1間は1.5m前後。ピット503と512間にピット507が見られるが対になるとピットが見られず、別の掘立柱建物に伴うと考え、こ

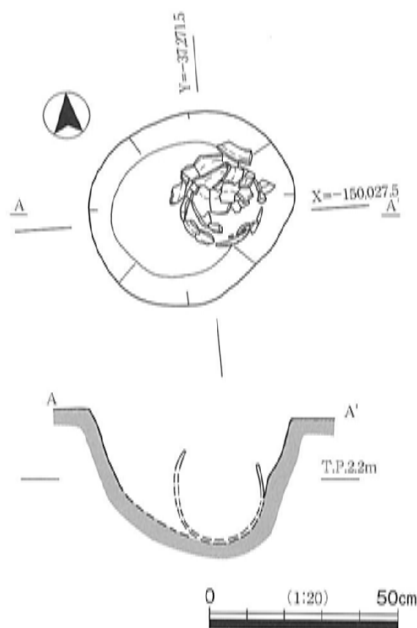


図70 土坑466 平・断面図（S=1/20）

こでは除外する。柱痕はピット440・503・507・512では確認さ

れなかったが、ピット504では確認され、505もその可能性がある（図67）。いずれのピットも類似する掘削深度を持つが浅い。各ピットからの出土遺物であるが、ピット440から布留式甕の小片2点、ピット512から庄内式甕の小片1点が見られるのみ。いずれも埋土A類。なお、遺構番号441は欠番。同442は第4b面の遺構。同443は第7b面の遺構。同444～450は欠番。

土坑450は埋土A類。出土遺物はない。

掘立柱建物451 この掘立柱建物は土坑451、ピット455・476・479で構成される。調査区北端にあたり、本来は北側に展開するものと推定される。南辺が2間であることから、2間（2.55m）×2間以上（1.58m以上）の可能性が考えられる。なお、1間の幅は約1.3m。いずれも埋土は単層で、476がB類である以外はA類。いずれからも出土遺物はない。

土坑453は長楕円形の土坑で、深さ3cm。埋土A類。溝375を切る。布留式かと思われる小片が1点出土するのみ。詳細な時期は不明。

ピット454は土坑453に近接して検出。痕跡程度で、埋土はA類。溝375を切る。出土遺物はない。

土坑456は長楕円形の土坑で、深さ0.15m。埋土B類。出土遺物は、土師器片が15点のみ。うち1点が図化でき（図57）、413は布留系甕。口縁端部は肥厚しないものの、口縁部形態は布留式に特徴的なものである。体部外面はハケで、頸部に特に顕著だが、部分的にハケ以前の右上がりのタタキが見られる。同内面はケズリだが、工具の痕跡が見られる程度で砂粒の動きはほとんど見られない。布留系とはしたが、必ずしも妥当な呼称とは考えられないものの、今回は全体的な形態から布留系とした。

掘立柱建物457 この掘立柱建物はピット457・473、土坑466・468・478で構成され、2間以上×1間（10.8㎡以上）の可能性が考えられる。ピット473に対応する東側のピットがないものの、他の柱が比較的等間隔であることからこの掘立柱建物を復元した。なお、1間の幅は1.8～2.15mだが、東西幅が0.25m前後長い。ピット457・473には礎板と考えられる板材の検出があった（図65・66、写真85・86）が、礎板以外の出土遺物はない。いずれも樹種は分析しておらず不明。土坑468からは布留式と思われる土師器小片が1点出土したのみ。詳細な時期は不明。唯一、土坑466からは完形に復元される土師器片が出土した。（図70）この土坑は、推定掘立柱建物の南西隅にあたり、柱抜き取り後に、何らかの行為がなされた可能性が考えられる。埋土は、土坑468がB類である以外は、基本的にA類。

土坑466出土遺物（図69） 土坑466から出土した多くの土師器片は、全て接合できなかったが、同一個体の甕に復元できる。甕以外の破片は見られなかった。431がその土器であり、布留系の甕。口縁部は外反し、端部は素口縁でやや外方に摘む。外面はナデ、内面は板ナデで接合痕が明瞭に残る。頸部を境に破片となっており、その部分にはナデが施され、布留式に特徴的な口縁下部の形状を呈する。体部は上部が縦もしくは斜めナデ、中位は横ナデ、下部は縦方向に板状工具によりナデ上げ、接合痕と指頭圧痕が見られる。ナデ調整は上部→中部→下部の順。内面は、左回り板ナデで痕跡が随所に見られる。胴部はやや張り、底部はやや平底風ではあるが、それを目的としたような、例えば内面の押し出しなどの調整は見られず、成形の際にへしゃげたものと考えられる。また、それに呼応するかのように、接合痕が残る粗雑な作りである。なお、体部外面中位が特に煤化し、底部は赤変している。胎土は白色。おそらく布留式後半。

ピット458は径0.25m、深さ3cm。埋土A類。ピット457に切られる。ピット457が掘立柱建物457を構成することから、同建物のほぼ同一箇所での建て替えの可能性を考えたが、他のピットに近接するピットや最掘削の痕跡は認められず、他のピットが同一でこのピットのみ位置がややずれるため、単独

のピットと判断した。出土遺物はない。遺構番号459は欠番。

ピット462（図53、写真82）は径0.4m、深さ0.16m。埋土B類。底部から礎板の可能性も考えられる板材が出土した。ただし、他のよりやや貧弱ではある。礎板を有するピットの可能性が考えられたため、掘立柱建物を構成するような関連する遺構の検出を模索したが、検出はなされなかった。出土遺物はない。なお、板材の樹種は分析しておらず不明。

ピット463は径0.25～0.3m、深さ0.25m。埋土A類。ピット462に近接し検出された。ピットの断面形状が柱穴状ではあるが、埋土は皿状の堆積である。柱抜き取り後の埋め戻しとも考えられる。出土遺物はない。

掘立柱建物464 この掘立柱建物はピット464・470・474・480で構成され、1間×1間（4.16m²）。1間の幅は約2m前後だが、南北辺が長い。ピット464（図67）では、柱痕が確認された。ピット470・474の埋土は単層、ピット480（図67）は埋土複数層ながら皿状の堆積である。出土遺物は、ピット474から外面を磨く布留式壺かと思われる土師器細片1点が出土したのみ。詳細な時期は不明。他のピットからの出土遺物はない。埋土は464・480がA類、470・474がB類。

ピット467（図67、写真92）は径0.4～0.45m、深さ0.21m。埋土B類。単層ながら底部の一部が窪み、柱穴の可能性が考えられる。埋土は柱抜き取り後の埋め戻し土であろう。出土遺物はない。

遺構番号469は欠番。

掘立柱建物471 この掘立柱建物はピット471・486・488・495・501・506、土坑502で構成され、2間（3.6m）×2間（3.3m）（11.88m²）。土坑502はやや細長い、南側は溝377を掘り間違えた可能性も考えられ、北側が深まることからこの掘立柱建物へ該当させておく。なお、これに対応する北西辺のピットが見られないが、ピット491はやや北側に外れ、独立棟持柱を有するような規模でもないと考えられるので該当するとは考えないでおく。これらの遺構のうち、土坑502（図67、写真91）では杭が見られる。樹種はスギ。ピット501（図67）は埋土が細分された。一部が落ち込んでおり、抜き取り痕跡かもしれない。各ピットからの出土遺物は、ピット495から布留式と思われる精製土器小片1点、土坑502から布留式甕小片3点が出土しているのみ。いずれも布留式前半と思われる。ピット502は柱が残存し、出土遺物はこの柱設置時のものと考えられることから、この建物の建立時期は布留式前半と考えられる。埋土は、471・486がB類、これら以外はA類。

掘立柱建物472 この掘立柱建物はピット472・485・487・496・500・507で構成される。2間（3.95m）×2間（3.3m）（13.04m²）。1間の幅は1.52～19.7m程。いずれも先述の掘立柱建物471各ピットに近接しながらやや南側にずれて検出された。掘立柱建物471のピット502部分には該当する遺構は見られない。いずれの遺構も埋土は単層であり、柱穴の痕跡が見られたものはない。各ピットからの出土遺物は487から布留式甕小片1点、496から時期不明の土師器小片が1点出土するのみ。埋土は496・500がA類、472・487がB類、485・507がC類。

なお、掘立柱建物471と472の切りあいであるが、一部の重なるピットが瓢箪状に検出されてしまっているものの、掘立柱建物471（古）→472（新）の順であろう。ただし、遺物は量が少なく、いずれも同時期と考えられ、あまり時期差はないものと考えられる。また、掘立柱建物440との前後関係であるが、やはり遺物が少なく、ピットの切りあいもなく根拠は薄弱であるが、掘立柱建物440出土遺物には布留式を含むものの庄内式甕と考えられる破片が見られること、471から472に規模が拡大していることから掘立柱建物440（最古）→471（古）の順を想定しておく。遺構番号477は欠番。

ピット482は径0.4m、深さ6cm。出土遺物はない。ピット484は径0.25～0.3m、深さ3cm。埋土C類。溝376を切る。出土遺物はない。遺構番号489は欠番。

土坑490は径1.8～1.9m、深さ0.16m。埋土C類。溝377を切る。出土遺物はない。ピット491は径0.25～0.35m。痕跡程度の検出。埋土A類。土坑490を切る。布留式甕1点のみ。

ピット492は土坑493に切られる。ピット492は痕跡程度の検出で、埋土A類。出土遺物はない。土坑493は径0.5～0.65m、深さ0.33m。土師器片15点が出土。高坏片や甕片を含む。布留式前半。

土坑494は径0.6～0.8m、深さ8cm。埋土C類。溝377を切る。土師器片が5点出土したのみ。詳細な時期は不明。

土坑497（図63）は微高地の西隅近くで検出された径1.8mの円形の土坑。深さはほとんどない浅い落ち込みであるが、破片ながらも多くの土器が出土した。なお、埋土はC類。

土坑497出土遺物（図64） 出土土器はいずれも弥生土器と思われる厚手の破片で107点。図化土器は図63平面図の中央やや東よりの一群であり、それ以外の破片は脆く、図化は不可能だった。421は弥生土器V様式甕。422は同底部で、焼成前の穿孔がなされる。いわゆる伝統的のV様式の範疇に含まれる土器であろう。併行する時期の土器が共伴して見られないことから、正確な時期は不明だが、微高地上の遺構の中でも最も古い遺構と考えられる。

土坑498は土坑497同様の浅い落ち込みで、埋土も同様。生駒西麓産胎土の可能性が考えられる摩滅した土師器小片が1点出土したのみ。土坑499は西側を側溝に切られるが、側溝を挟んだ西側でもその延長が検出された。遺物出土はない。

土坑508は北側を側溝で切られるが、側溝北側の断面で確認され北端がそのセクション中である。埋土はA類。北西－南東を軸とするが、これは地形に沿ったものである。出土遺物はない。

土坑509は底部の形態が瓢箪型を呈し、2つの遺構を同時に掘ってしまった可能性がある（図67、写真87）。出土遺物は布留式甕と考えられる破片が5点出土したのみ。布留式前半。

土坑510は径0.6m、深さ8cm。埋土A類。南側を側溝で切られる。土師器の細片が1点出土したのみ。詳細な時期は不明。遺構番号511は欠番。

土坑513は微高地から下った部分での掘削である。北側を側溝に切られる細長い土坑。埋土C類。出土遺物はいずれも破片で、須恵器2点、土師器19点。うち1点が図化でき（図57）、412は須恵器坏身。MT15頃で6世紀前半。

土坑514、ピット515・516も微高地から下った部分での掘削である。いずれも、埋土A類で、出土遺物はない。

出土遺物（図71・72） 第5b層からは、破片の概数で計約525点の遺物が出土した。内訳は須恵器4点、土師器82点、弥生土器440点。弥生土器で時期が分かっているもののほとんどが中期、特にⅡ～Ⅲ様式である。なお、須恵器の一部と土師器は微高地上からの出土であり、上層からの混入の可能性が高い。また、低まりから出土した須恵器も混入の可能性が考えられる。

432は無文の広口壺。頸部はやや太頸で、口縁端部は若干面をもつ。外面は頸部に縦ハケが見られ、体部上部には横ミガキが見られるが、以下は不明瞭ながら器面が平滑でありミガキと思われる。内面は頸部に斜めハケが見られるが、体部内面は左上がり斜めハケの痕跡が僅かに見られるのみ。Ⅱ-2様式。第6面に近い層位からの出土。433は、有段口縁の広口壺。口縁が内湾する傾向が見られ、外面には11条の廉状文が施される。廉状文の単位は0.6～1.2cmピッチで等間隔ではなく雑な施文。頸部には8条の櫛描

直線文が4段施されるが、いずれも直線文の最下部は不明瞭。各直線文間には幅5mm程のカキトリ状のミガキ調整が蛇行しながら1条ずつ見られる。内面は、上位に横ハケ痕跡が見られ、中位は横ナデ、下位は縦ハケのち横ナデで、指頭圧痕も多く見られる。生駒西麓産。口縁部の内湾傾向からⅢ-2様式と思われる。第5b層砂層中からの出土。434は長頸の広口壺。体部上部の破片で、9条の櫛描直線文が5段見られ、最下段もおそらく9条であろう。各櫛描文間にはケズリ状のミガキが見られる。内面は横ミガキのち縦ミガキ。頸部との境目は明瞭に屈曲しないものと思われる。なお、この破片は接合された小片ごとに煤化の様相や色調が異なり(写真図版24)、破片となった後に二次焼成を受けたものと思われる。Ⅲ-1様式か。出土層位は若干不明確だが、破片ごとに色調が異なる特徴から掲げておいた。435は甕。外面口縁部は横ナデで、一部に横ミガキが見られる。体部は縦ハケのち砂粒の移動を伴う縦ケズリ状のミガキ。砂粒の移動は上から下もその逆もあり、調整の際、工具を器面上で往復させたと思われる。なお、体部下部には右下がりのタタキ調整と思われる4条程度の浅い凸凹が見られた。やや古い例ではあるが、若江北遺跡第5次13Cトレンチ第9b面土坑14・15出土の前期甕[三好・市本1996:図121-4・124-9]には右下がりのタタキと思われる調整が見られるが、当遺跡例より明瞭である。これがタタキ調整であれば、若江北遺跡例に後出する資料として位置付けられ、注意を要する。内面は細かい横ハケ。口縁端部はやや面をもつが、特に拡張はしない。外面の頸部付近と体部中位、および内面の下部は煤化が顕著である。体部には焼成後の穿孔が見られるが、遺構からの出土でもなく、甕は使いこまれた状況であるので、安直に祭祀的とは言えず、廃棄の際の穿孔の可能性も考えられる。ただし、この土器は側溝中からの遺物も含むが第6面に近い層位からの出土であり(写真98)、さらにこの部分の第6面は後述するように高まりから水田域に相当する。水田祭祀の詳細類例については未調査であるが、使いこまれた甕が祭祀に使用されることもあるのであれば、これもその一例として、高まり際もしくは水田域の祭祀に伴う遺物と考えられる。Ⅱ-2様式か。436は甕。外面は縦ハケで口縁部分のち横ナデ、内面は口縁部が横ハケで、体部は横ナデ。口縁部が大きく外反するが、頸部の屈曲は鈍い。外面頸部には煤化が見られる。いわゆる撰津型aで、胴部がやや張ることから撰津Ⅱ-2様式か[森田1990以下の撰津型同書に拠る]。ただし、胎土は茶褐色系で生駒西麓の胎土に類似する。437は壺。外面は板ナデのち縦ミガキ、内面はナデのち斜めミガキ。Ⅱ様式。438は壺。8条の櫛描文が2段見られ、最上段も同様であろう。櫛描文の上から2段目と3段目には赤彩の痕跡が円状に見られる。Ⅱ様式。439は庄内甕。端部は微妙に摘み上げるが顕著ではない。内外面とも横ナデ。生駒西麓産。440は小型器台。脚部外面はメントリ、内面はナデでシボリ目が見られる。庄内式後半。441はV様式甕。外面横から左上がりのタタキ、内面ハケで、板状工具の痕跡が残る。底部は若干上げ底気味であるが、顕著ではない。439~441は微高地上からの出土であり、低まり部分の第5b層からは後期以降の土器は見られないことから、第5層からの混入と考えられる。442~444は壺で、いずれも底部片。442は全体的に摩滅が著しいが、外面には太い単位の縦ミガキが見られる。内面には指頭圧痕、ナデが見られる。暗い色調。443・444は内外面ともミガキ。明るい色調。445~447は甕で、いずれも底部片。445は摩滅著しく、調整は不明。一部煤化している。胎土は生駒西麓産か。446は内・外面とも縦ミガキで、外面は一部横ミガキ。447は内外面、底部外面ともミガキ。445~447はミガキを基調とする調整で、河内形甕であろう。いずれもⅡ様式。

448~450は剥片・打製石器。いずれもサヌカイト製である。448は剥片。打面に自然面が残る。449は二次加工のある剥片。下端部は折れ、両側縁から剥離がなされている。450は不明石器。大型の剥片の両側縁を平行になるように敲打して形を整えており、両面の下部、両側縁に研磨痕が見られる。下端

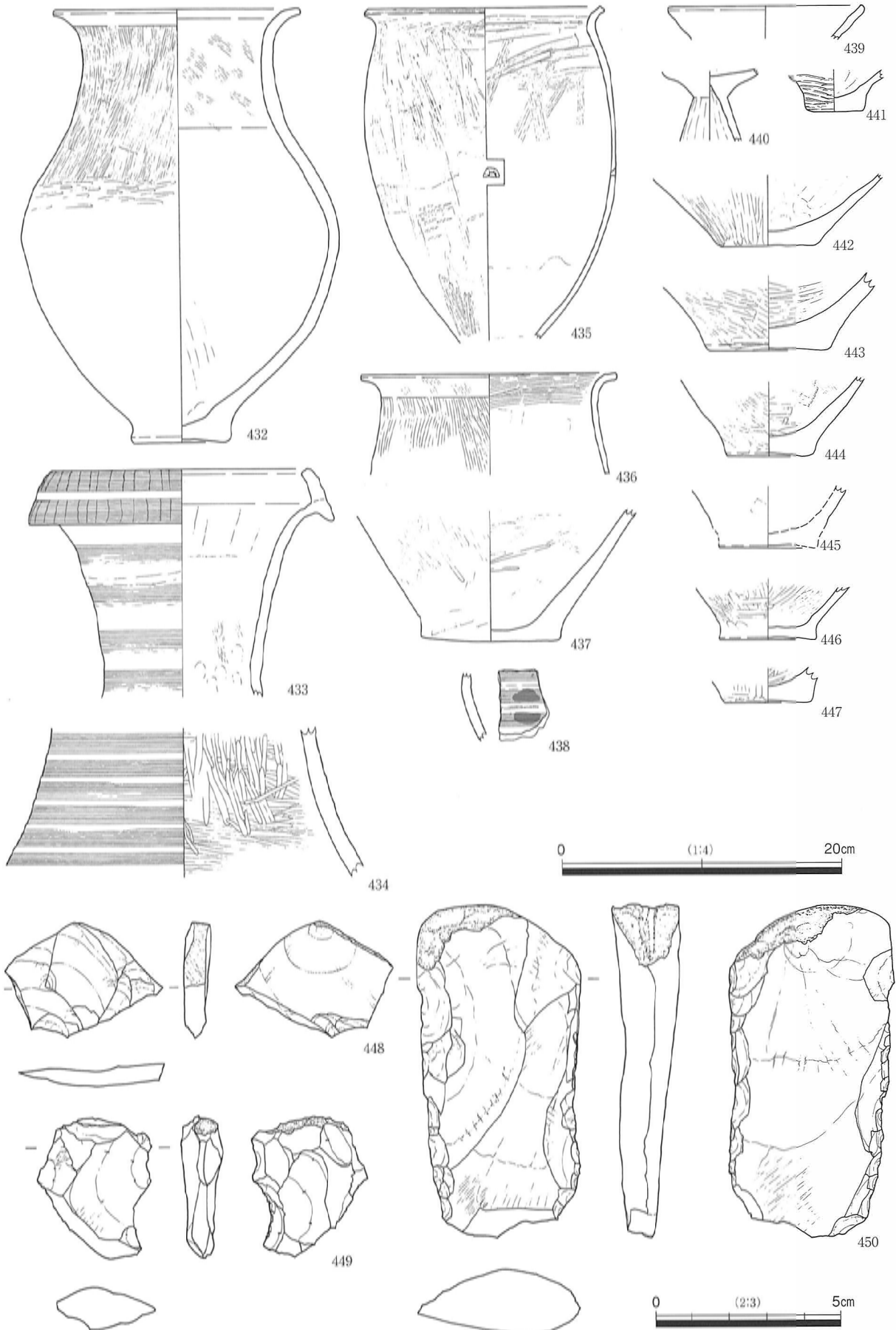


图71 第5b層 出土遺物(1)

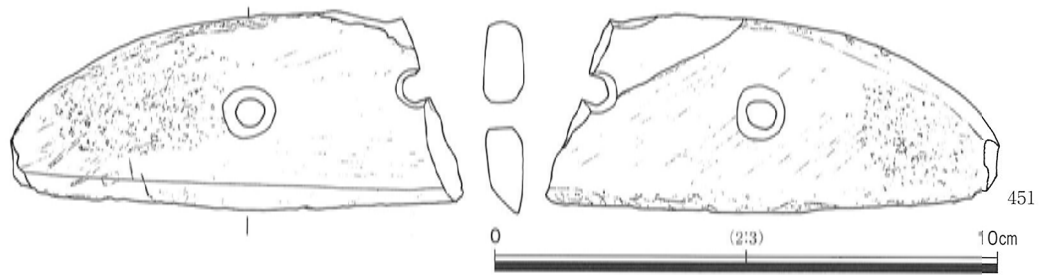


図72 第5b層 出土遺物(2)

面は折れているが、両端面に自然面を残すことから石器未製品の可能性が高い。

451は石庖丁。低まり部分からの出土である。片刃でA面の左上、B面の右端に敲打痕がある。敲打痕の真下にあたる刃部に刃潰れと縦方向の摩滅が見られること、B面の背部付近に光沢がみられることから、使用痕ではないかと思われる。石英片岩製。

時期 以上のように、第5b層から出土した遺物はほとんどが弥生時代中期前半(Ⅲ様式初頭以前)に収まる。一部弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺物も含むが、これらは微高地からのみの出土であり、第5層からの混入と、第5b層の堆積は後期以前と考えられる。第5b層から出土したそれ以外で最新の資料は図71-433のⅢ-2様式である。これ以降のⅢ-3様式~Ⅳ様式は、現状では資料が確認できず不明である。しかし、第5b層に含まれる遺物から、堆積時期をⅢ様式前半頃と考え、それ以降はしばらく使用されず、後期から再び使用され始めるのであろう。なお、以上の遺物のうち、432・435は出土層位から、第6面廃絶段階を示す資料であろう。詳細は、第6層出土遺物も含めて後述する。

小結

当遺跡の古墳時代の遺構は前期を中心とする。先述のとおり、弥生時代後期についてはやや流動的ではあり、後期資料が庄内式段階に下る可能性が皆無ではないが、弥生時代後期の遺物だけで構成される遺構も見られ、後期には地表面化していた可能性が高い。庄内式については、第5層からの混入と考えた第5b層出土資料(図71-439)程度しかなく、この段階の様相も不明である。その後、布留式になると多くの遺構が見られるようになる。微高地の東側には溝、西側には掘立柱建物が重複して見られた。これらの並存関係については、掘立柱建物を構成する遺構からの出土遺物が脆弱であるために不明確であるが、両者の遺物の時期幅が概ね一致することから並存していたものと考えられる。なお、建物部分の溝は建物以前と考えられる。掘立柱建物群は微高地の西側に位置し、さらに北へ展開すると考えられ、当調査区では概ねその南限が確認されたと思われる。また、東側の溝が掘立柱建物囲郭の為に掘削されたのかは、やや疑問である。これらの遺構群が廃絶した布留式後半以後、非居住域化する。6世紀中頃に微高地西端に弱い高まりが築かれ、さらに、土器埋納ピットの可能性もあるピット433が6世紀後半に掘削される。第5層の遺物からはその後、7世紀前半頃までは農業生産を中心とする何らかの活動が行われたのであろう。以下では、微高地の遺構、主に掘立柱建物について整理する。

掘立柱建物は、大きく西側の正方形に近い2間×2(1)間の一群(掘立柱建物440・471・472)と、東側の多くの切りあいが見られる一群に大きく分けられ、両者の切りあいはない。なお、いずれも北西・南東辺の長さが北東・南西辺のそれより長い傾向が見られる。前者の群は文中でも記したように、440→471→472の順の建て替えが考えられ、時期を追うごとの1間幅と床面積の拡大が見られる。なお、当時の1尺が25.1~26.2cmと推定されており[岩田1994]、440から471への拡大規模は、1間幅が1尺程度拡大されたと考えられる(1間平均1.48m(約6尺)→1.73m(約7尺))。後者の群は、軸から考え

ると422のみイレギュラーである。その422は420と切りあいがあり、前後関係は、422の全容は明らかではないものの、明らかに420より小規模であるから422→420の順を想定し、1間平均が440（1.48m）と471（1.73m）の中間（1.61m）であることから440と同時並存の可能性を考えておく。420は471・472の南辺と軸がほぼ一致し、このうち420と472は床面積が類似する（13.2㎡と13.04㎡）ことから同時の可能性を考えておく。また、掘立柱建物451・464は、それぞれ前者は422・457と後者は457との切りあいがある。451と422の前後関係だが、1間の規模からは前者から後者の順が考えられるが、他の建物との軸や配置などから422→451の順を想定しておく。451と457の前後関係は457に布留式後半の遺物が見られることから451→457の順を、457と464についても布留式後半の遺物が見られること、規模の拡大が見られることから464→457の順を想定しておく。464は小規模なものであり、掘立柱建物と考えてよいかも、やや疑問があるが、464の南辺と、471・472の北辺とがほぼ一致することからそれらに並存する可能性が考えられる。なお、457は近接しすぎている感もあるが、420・472間に収まるように検出されており、並存の可能性が考えられる。以上から、簡単に掘立柱建物の変遷を想定しておく。

A	B	C
440	→ 471	→ 472
422	→ 451	→ 420
	464	→ 457

まずA期は庄内式に遡る可能性がある。440と422の並存は不明だが、1間幅が1.5m前後と類似することからほぼ同時であったと考えておく。以降は布留式でB期は前半と思われる。471は前段階より規模を拡大するが、422から451へは1間幅規模の縮小が見られる（1間幅平均1.61m→1.3m）が、全体長は拡大する。新たに464が出現したと考えられるが、422から451と464に分化した可能性もある。なお、451・464とも457（C期）以前であるのみで、どれだけ同時並存かは不明。この段階には464の南東の空閑地で高坏を用いた祭祀的な行為が行われていたものと考えられる。C期は457の1間幅がB期464と類似することから、踏襲、拡大されたものと考えられ、420もB期451と同様の関係であったと考えられる。前段階同様高坏を用いた行為が連続的に行われていたものと考えられるが、一部建物内に入るような出土である。457を構成するピットから廃絶に伴うと考えられる布留式後半の甕が出土しており、C期はそれ以前であろう。これらの並存の推定は西側の一群で見られた時期を追うごとの拡大傾向の敷衍、建物軸や1間幅の類似性を同時期と判断しての復元であり、掘立柱建物の復元も含めて恣意的との誇りは間違えず、妥当ではない可能性もある。なお、この掘立柱建物の性格であるが、同時期の2棟もしくは3棟が性格を異にするか、それぞれが1世帯かも不明である。ただし、遺物にそれぞれの大きな差は見られず、面積も同様であり建物どうしに大きな差はなかったものと考えられる。

なお、溝の多くには顕著な遺物が見られなかったが、その中で溝368からまとまって遺物が見られたことから、この溝に対し何らかの意識があったものと考えられる。また、溝368より掘立柱建物よりの溝369埋没後に掘削された土坑412は井戸の可能性を指摘したが、西側の掘立柱建物に関わる遺構と思われる。溝367部分ではピットが列状に検出されたが、これを柵列と考えれば、当調査区検出掘立柱建物群による居住域の東限がここにある可能性もある。微高地はさらに東側への展開が予想され、調査区東端でも溝が検出されていることから、溝を挟んだ東側でも別の居住域が展開する可能性も考えられる。現状では微高地上居住域のうち一群が検出されたものと考えておき、微高地の広がりも加えて近接する東側での調査が期待される。

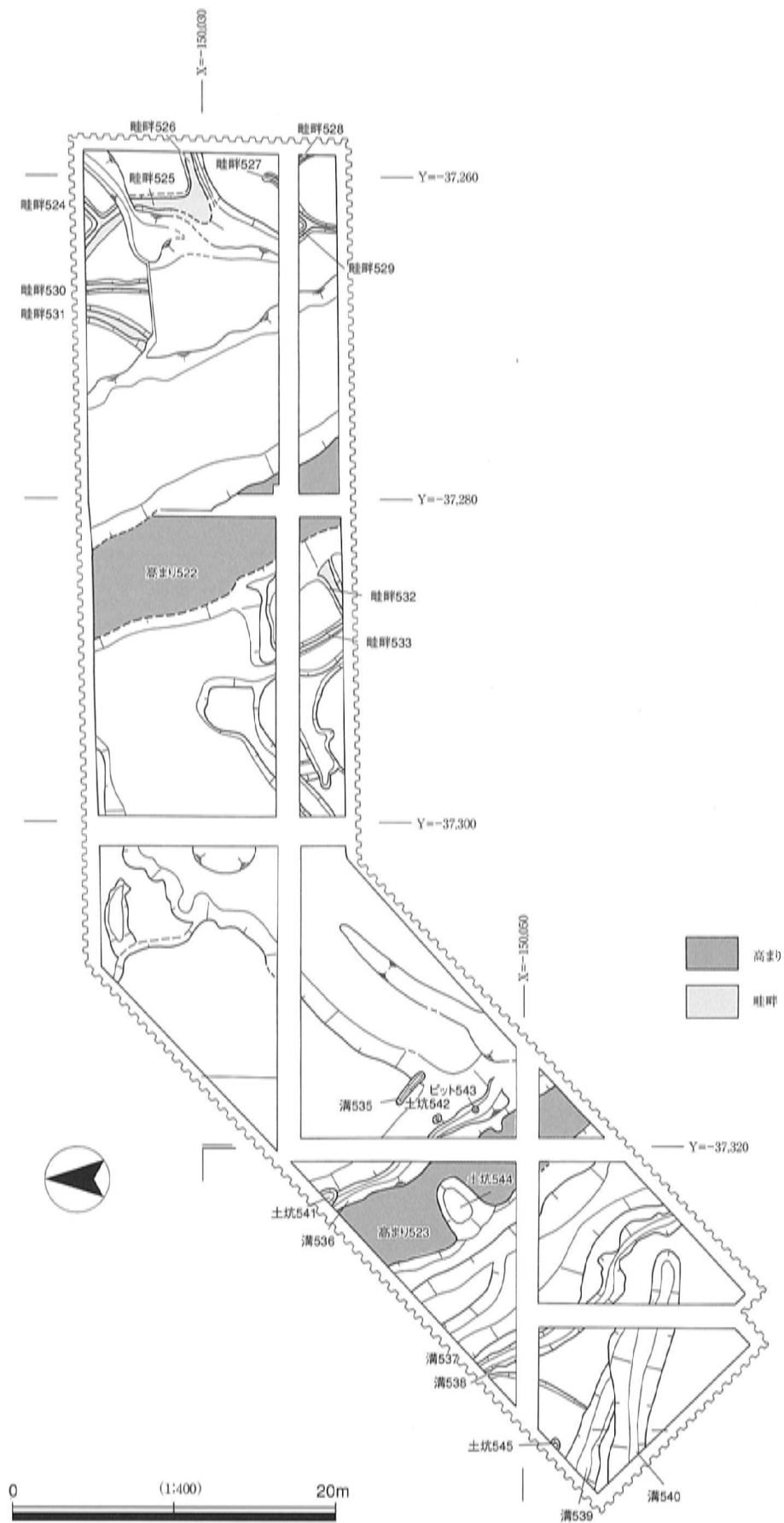


图73 第6面 平面图 (S=1/400)